國防科學研究會譯編

現代國防研究叢書 Ⅱ

ナチスの戰爭論 上卷

——戰爭・戰略・政治——

東京 育生社

譯　序

盟邦ドイツは、その果敢なるヴエルサイユ條約の軍備制限破棄以來、再軍備計畫に乘り出し、今や往年の大軍國の面影を確立しつゝある。

由來ドイツ民族は、尙武を以て鳴り、しば〳〵軍事的大天才を生んだ。フリードリツヒ、シヤルンホルスト、ブリユツヘル、グナイゼナウ、クラウゼヴイツ、モルトケ、シユリーフエン、ヒンデンブルグ等々、………數へ來れば、その不朽の盛名を戰史および兵學史にとどむる大將帥は屈指に遑なきほどである。

今やヒツトラー統下の盟邦ドイツは、その再軍備進行の壯觀に應ずるが如く、新しいナチズムの精神を以て武裝せる戰爭・兵術の理論と研究を生み出しつゝある。

就中、最近、ヘルマン・フランケ少將總編輯のもとに多くの專門家を動員して刊行されつゝある「現代國防科學提要」(Handbuch der neuzeitlichen Wehrwissenschaften) 四卷は、實にその總括をなす偉業である。本書は此の「提要」第1卷「國防政策と戰爭指導」(Wehrpolitik und Kriegführung) 中より、適宜のテーマを選んで譯編したものである。(因みに第二卷陸軍、第三卷海軍と空軍、第四卷國防經濟と國防技術、となつて居り、目下第二卷まで刊行されてゐる。)

最初第一卷全譯を企てたのであるが、菊倍判七〇〇餘頁、細字でギツシリ組れてゐる尨大なるものであり、到底短日月の譯出は不可能であり、加ふるに、刊行書店の都合もあつて、この企ては中止を餘儀なくされた。

そこで、同書中から、比較的一般の讀者にもむくと思はれる項目を選んで、(原書はＡＢＣ………順に百科辭典式に編

れてゐる。）譯編することにした。それでも全體を二冊にわけざるを得なかつた。（此の第一分冊に次ぎ、第二分冊は、七年戰爭から世界大戰に到る戰史に關するものを譯編する豫定である。因みに本書の標題、篇別、篇名など、譯者が、便宜上附したものであることを斷つて置く。）

今や我國は、盟邦獨伊との血盟愈々固く、更に長くも大本營設置せられ、愈々本格的戰時體制を以て、對支問題の解決と東洋永遠の平和確立に邁進する事になつた。

此秋、盟邦ドイツ兵學界が心血をかたむけた理論的偉業の一端を、我國に紹介するを我々は光榮に感ずるものである。我々は、讀者が、本書から現代に於ける最新且つ最高の國防知識を、汲み出されるであらう事を確信し、期待するものである。

尙ほ、本書の飜譯は數人を以つてあたつたのであるが、急いだために、譯語の統一や充分なる推敲をなす餘猶がなかつた事を遺憾としてゐる。この點、將來の機會を待ちたい。

昭和十二年十二月上旬

國防科學研究會

目次

第一篇 戰爭

第二篇 戰略

第三篇 國防政策

ナチスの戰爭論　上巻

—戰爭・戰略・政治—

第一篇　戰　爭

戰爭に就て

戰爭は國家、民族、乃至國家內の政黨間に於ける暴力的鬪爭の狀態を言ふ。

Krieg(戰爭)なる語源は明かではない。この言葉はドイツ語にもあり、オランダ語にもあるが、以前は、Feindseligkeit(敵愾心)又 Streit(戰ひ)と言つた普通の意義をもつてゐたにすぎなかつた。しかし現在使用されてゐる語義は後期の中世高地獨逸語時代(十四世紀から十五世紀)に由來し、新語として、古い、ゲルマニヤ的表現である urliuge (又ハ urlüge) を驅逐するに至つたものである……。

(イ)　戰爭の本質と目的及び目標　自然は爭鬪であり、又淘汰である。强き者、優越する者が自己を貫徹するのに引きかへ、生活力の薄弱なる者は下敷にされ、又押しつぶされるのは自然の理である。この永久不變の鐵則に對しては、人類も、又家族、同族、系族、民族の結合體における各個人も亦同樣に服從させられる。

國家の本能的爭鬪は、種族、生活地域、及び生活條件を維持、改善することを目的とするものである。その鬪爭の最後の、決定的形態が戰爭なのである。

戰爭は人類と共に在つた。人類はその時々刻々の事情に自己を適應させて來た。戰爭の外的形態は種々樣々であるが、

その内的法則性については常に一致してゐる。人類にその自然的天賦、優越乃至劣等の差があり、又本能的、意識的努力が人類と共にある限り戰爭も亦繼續される。戰爭は自然に對する矛盾ではなくして、むしろその最後の、運命的成就者なのである。如何なる民族も戰爭から逃避することは出來ぬ。

戰爭は破壞し、殲滅する。戰爭は變化を來らせ、老衰者、生活無能力者を滅亡せしめる。しかし、戰爭は同時に强力なる者、强健なる者の發展を促進させ、彼等の夢から生れ出た新生活への道を淸める。かくて、戰爭はその全體的構成乃至國家組織を決定的に左右する世界の形成者なのである。戰爭は又同時に、その價値と生命力に對する偉大な、英雄的な、且又公平なる試驗である。力强き、犧牲的な、常に準備せる國家、戰爭の凡ゆる脅威に拘らず、その種族の維持と發展に對し、最高の道德的義務である名譽と自由の保持のために、最後のものを投ずる國家、かゝる國家のみが自己を維持することが出來る。（註）

（註）ビンダー著『戰爭の道德的權利と永久平和の理想』（Binder' J: "Die sittliche Berechtigung des Krieges u. d. Idee des ewigen Friedens" 193J）

宇宙に制約され、地球に條件付けられた壓力が應々にして人類に對して天災を持ち來す如く、飽滿し、膨脹を求めて止まぬ民族相互の矛盾に基因し、權力的、經濟的利害の對立から生れ、或は國家生活における壓迫又は抵抗から惹起された種々の摩擦が緩和され得なかつた場合、それは常に暴力的爆發、即ち戰爭へ發展して來たのであるが、これは未來に於いても變りはないであらう。同樣に、決定的要因としての摩擦を排除し、或は少くともその恐怖を和らげやうとする一切の努力は未來に於いても續けられるであらう。後者はその表現を平和主義のうちに見出してゐる。平和主義は種々な色合ひに於いて、特に長期の困難な戰爭の後に於いて擴まるのが通例であるが、大體において戰爭を以て單なる消耗、或は衰頽

と見なし、單に戰爭の消極的、破壞的、恐怖的一面のみを見てゐる。この見地は人生、又は世俗的愉安、更に又平和に搔き集めた精神的、物質的財產の所有に對する利己的過重評價から生れ、又同時にそれは女々しい人生の把握――即ち民族の永續のために最後の犧牲を以て戰はんとする犧牲奉公と强烈なる意志に對して高き道德的價値を感じもせず、又理解もせずして立てられた人生觀――に根ざしてゐる。

かゝる危險なる誤謬のうちに平和主義は理解され、認識されてゐる、さもなければ、その平和主義者は、鬪爭による自己主張の無氣力なる放棄が、今も尙、道德的、或は道義的精神の崩壞へ、その柔弱化へ、又墮落へ導かれてゐることを認めることを肯んじないのである。安全主義は如何に努力しても、遂には下向、沒落、乃至は自由の喪失に終らねばならぬ、けだしそれは種族保存の自然律に違反してゐるが故である。（註）

（註） ブロイスト著『世界平和は可能であるか』(Breust, R: „Ist Weltfrieden Möglich ?" 1922)
ホルネフエン著『平和主義―哲學的一研究』(Horneffen, E: „Pazifismus. Eine philosophische Untersuchung" 1929)
ロツゲ著『民族平和政策』(Rogge, H: „Nationale Friedenspolitik" 1934)

戰爭を人間的に行はんとする努力――例へば、Uボートや航空機等々の特殊の機能を有する武器の使用を制限することによつて實際上の効果を擧げんとするが如き――には大して期待は持たれない。かゝる努力は却つて生死を賭けた民族と民族との間に戰はれる戰爭の本然の姿を見誤るものである。自己の生死を賭けて戰ふ一國家が、科學と技術によつて產み出された有効なる武器の使用を何時かは自發的に放棄するだらうなどと言ふ如き思想は、單に甘い空想として表示されねばならぬ。自己の位置を更に强化するためには、益々、これらの武器は用ひられるであらう。

條約を通じて、すでに戰爭に發展せんとする兩國間の觸發的狀態（よく有勝ちな）を取り除き、それによつて戰爭の可

能性を食ひ止め、少くとも、唯、最後的逼迫に立ち到つた時にのみ、政治の最後的方法、即ち戰爭の最後手段を採ることを約束せんとする國家の努力はこれとは別に評價さるべきである。かゝる努力が誠實であり、何かのためにするものでない限り、人類にとつてそれは祝福すべきことであらねばならぬ。就中、進歩的技術をもつてその活動力と行動範圍を絕えず擴大してゐる武器により、更に又大衆動員と航空機によつてその廣さと深さにおいて益々擴大して來てゐる戰場のために、戰爭の脅威は益々增加せざるを得ない今日の事情においては尙更である。

併乍、一國家の無軍備と戰爭嫌惡は、他國家に對して該國との戰爭が「冒險なき散步」として考へられる限り、絕へずその他國家に對する强烈なる慾望刺戟であつたと同樣に、强大なる軍備、乃至相手國の强烈なる戰鬪意志に對する顧慮は、凡ゆる協定、條約と同じく、他國の好戰心を有效に牽制することが出來る。併乍、平和を愛し、英雄的に思慮し、犧牲奉公に燃ゆる國家にとつては、戰爭に對して與へられるこれらの恐怖も、一國の生存と名譽と自由が危機に立つ時、それは解消するであらう。

戰爭の目的――は我が意志を貫徹し、敵を粉碎するにある。戰爭においては、平和時に於ける通常の政治的手段に「武力」が附加される。それは戰爭の意義に對應する。國家は、全力を擧げ、一切の與へられた武器を把つて敵の武裝解除を强行する。然らざれば、何の顧慮なき、躊躇なき敵は却つて彼等の意志を貫徹するであらう。從つて、戰爭においては、全國家の凡ゆる宗教的、思想的、肉體的、物的諸力を斷乎たる戰鬪決意の下に、組織的に、根本的に、整備し、最低から最高度に發展した暴力を以て望むことは自己保存のための嚴然たる命令である。中途半端な決意と不充分な武力を以て、優柔不斷に行はれる戰爭は、その目的を見失ひ、共自身すでに敗北の萠芽を持つてゐる。戰爭の目的を達成するために必要とされる全國家の戰鬪意志を激勵し、絕えずこれを保持するために戰爭の目標（限界）が必要である。戰爭の目標たる

や、その目的の內容に價値があると同樣に、戰爭にまで發展せざるを得なかつた過程に對する重大なる釋明が、全分野において是認されねばならぬ。戰爭の目標は、政治的或は經濟的性質であり得るし、又同時に兩者である場合があり、更に又積極的性質を帶びる場合があり、又消極的な時もあり得る。その目標次第で、國土の擴大乃至確保を克ち得る。七年戰爭（一七五六年——一七六三年）が言葉通りの勝利者も敗北者も生まずに、全體的疲弊のうちに有耶無耶に終つた時、小さきプロシヤ國は敵國の破壞的意志を効果的に打ち破つて、事實上の勝利者として、自己權利の確保と言ふ戰爭の目標を達成した。世界戰爭が七年戰爭と同樣な終結を見せたならば、恐らく世界の輿論は、武力的優勢に對抗して生死を賭して戰つた中歐諸國に月桂樹を與へたであらう。

戰爭の目標は戰爭を勃發せしめた直接の理由を以て常に覆はれる必要はない。戰爭の理由はただ爆發せざるを得ない緊迫によつてすでに長い間不可避的であつたものを單に最後的に刺戟したにすぎない場合もあるし、或は單に全く口實の類であることも屢々であるからである。一九一四年におけるイギリスの本來の戰爭の目標は、特に邪魔になつて來た商業的競爭者としてのドイツを倒すことにあつたし、又絕えず脅威として考へられたドイツの海上勢力を破壞することにあつた。かくて、經濟的羨望、露骨な獨占的慾望から生れたこの戰爭目標は、自己の輿論のため、且又世界を忠實に代表してゐるとは斷じて言へない世論に對してドイツ軍の「哀れなる、弱きベルギー」への侵入行動を表面的な戰爭理由として大衆煽動の具に用ひねばならなかつた。ベルギーと英佛の間にはすでに長い間祕密に取交された軍事同盟——これはベルギーの局外中立性から言へば參加すべきものではなかつた。——は全く祕密にされてゐたのである。然して、吾々は道德的に考へれば、單に都合のよい戰爭理由の公表を通じて、その國家の戰鬪意志を燃え上らさんとする凡ゆる努力に對して、その背後をなすものを追求せざるを得ない。吾々はこの是非を市民の道德的觀點から判決することが出來るであらうが、

これを、現在の世界から創造することは出來ないであらう。政治と戰爭はかゝる見地からすれば何等共通のものを有つてはゐない。それどころか、兩者は――非道徳的と言ふより、むしろ道徳とは無關聯に――かゝる觀念界の外に立つてゐる。戰爭の道徳性は一切の俗物的思慮の中にあるのではない、むしろ英雄的な精神のうちに、又一旦緩急に際會すれば、名譽のため、自由のため、生存のために最後のものを全民族のために投げ出す一死奉公の精神のうちに存在する。

他方、若し、戰爭の最も深い原因と目標が道徳的に基礎付けられてゐるならば、その有意義な戰爭はその國家に對し遂には祝福をもたらすものであると言ふ古來の敎訓を見落すべきではない。然らざれば、遲かれ早かれ、運命の振子は反對に振るであらう危險を自身に引き入れるに至るだらう。ダモクレスの劍は凡ての國家に對し――勝利せるそれに對しても――それが皮相な理由や、下劣なる目標の爲に戰爭が挑發されてゐる限り、神の復讐を威嚇しながら吊されてゐるのだ。その道徳的義務を意識した國家は、その天惠に値する限り、如何なる困難な事情においても遂には、祝福、發展、新らしき生活が與へられ得るのである。

この關聯において豫防戰爭（Präventivkrieg）の問題を簡單に論ずるであらう。豫防戰爭は敵に對して優勢を保持すべく、又敵との不可避的鬪爭に最も好適の時期を與ふべく、その壓迫の下においても最も有利な條件を以て解決するために、一國が他國に對し益々抗爭を強化すべく決心した場合に起るのである。更に、その原因が他の原因よりも先づ政治的、軍事的原因に求めねばならぬのは豫防戰爭の本質、其ものに由來してゐる。かくて、例へば或る特に好ましき政治的狀勢、或は有力なる軍事技術の優先、或は又果敢なる國家的指導による攻擊的戰鬪力の一時的優越、これらは早晩不可避的と見られる開戰に對して開戰の機會を與へ得るであらう。フリードリッヒ大王が一七五六年の夏の終りに至り、疑ふ餘地のない情報――オーストリヤ、フランス、ロシヤは來春を期し、若き、邪魔なプロシヤの勢力に對して全面的殲滅戰を決意し

たと言ふ――に基いて戰爭に先手を打つた。フリードリッヒは、彼等を打倒するために敵が凡ゆる協定を結び、現在の不充分な軍備が完備し、戰備全く成れるまで彼は辛棒強く待つべきであつたらうか。迫り來る脅威を明白に認識し、現在における優勢なる自己の戰鬪力を知り、彼は强き責任の下に、この不可避的となつた戰爭を彼にとつて最も好時期に始めるべく開戰した。世界歷史は彼を正しとした。古來、豫防戰爭は稀れである。多くの國は、この問題に對し、彼の態度に倣ふて、彼の如き思慮を以て對處すべき場合、最後の決意の前に、常に躊躇するだけである。彼等は、これが失敗する場合、全世界がこの憎むべき「平和の破壞者」に向つて恰も獵犬の如き憤激の中に陷入るであらうことを知つてゐる。豫防戰爭の重大なる危險は、從つて、ある無謀な投機者が輕々にこれを引き受けるか、さもなければ、偉大なる英雄的政治指導者が深刻な、內的苦惱を經て、全體的責任感を以て、この決心に邁進するか、否かに依るものである。豫防戰爭は何れにしても、決して政治に屢々見受けられる平衡主義によつて片付けられる事項ではない。

（ロ）戰爭の種類　近代戰爭は單に武器によつてでなく、國家の全體によつて戰はれる。凡ての戰鬪能力者は兵士に召集され、勞働能力者はその性別の如何を問はず、肉體的勞働により、或は頭腦により戰爭の目的に協力し、一切の國家生活は、この戰爭の目的に向つて、單に政治上、軍事上だけでなく、經濟上、財政上、商業政策上、宣傳上――に於いて整備される。

その結果、近代における廣汎な破壞手段は何人に對しても――たとひ僻遠の地においても――容赦しない。何人もその活動は安全を保ち得ない。全領土は戰場に化する。戰爭は全體的戰爭となり、その本來の野蠻な原始的形態を採り、全體に對する全體の顧慮なき鬪爭の性質を帶びるに至るであらう。かくて戰爭は絕對的戰爭の概念に接近して來る、その限りにおいて、戰爭には間斷なき、暴力的な、一切を包含する爭鬪手段が採用され、かゝる手段が最高度に使用される場合、

相手國は悲劇的な崩壞と沒落がもたらされるであらう。かゝる戰爭はその過程において敵國家に對して何等の寛容をも知らない。唯、捕虜、負傷者、降服せるもののみがこれから除外されるだけである。

孤立的に、武士的に戰ふた戰爭の時代は、中世紀の末葉から近代まで續いたが、絕對主義の時代が特に產んだ政府戰爭(Kabinets-Krieg)(譯註、國民の意志に無關係に政府間で行へる戰爭を言ふ)と共に今や最後的に過ぎ去つた。戰爭が尙、色々な意味で種族、名譽、自由の保持のために戰はれたとすれば、その原動力の多くは、例へば、王朝權力の無謀なる伸張、世襲家系の襲續、王室の特殊野心の達成、權力的野望等々の如く、比較的に暢氣な動機にすぎないことが屢々であつた。國家は彼等の生活の必須性と殆んど關係を有しないか、或は全く共通する利害を有たぬところのかゝる戰爭に對して、心中屢々冷酷に對立したことは何等不思議なことではない。彼等は王國の命令には從順に從つた。しかし感激的思想への飛躍を缺いでゐた、——唯、フリードリツヒのプロシヤのみはこれから除外されるであらう。軍事思想の擔當者は封建制度や傭兵制度から發展した職業的兵士であつた。彼等は武裝を解いた國民に代つて、戰爭のための特殊階級として獨特の生活を送つた、彼等は多少とも方法的に組立てられた戰鬪法則に從ひ、且又、費用をかけて、漸く募集した人材を出來るだけ大事にしながら戰爭を行つた。戰鬪決定に對して屢々意識的に約束されるこの種戰爭は一つの人爲的操作(戰爭)であつて、その根本的性質から判斷すれば自然法からの脫離と言ふことができやう。革命を通じて解放されたフランスの土地に强力なる指導者が甦つた時、從來の戰爭型は無用となり、意義を失はねばならなかつた。融通の利かぬ制限を破棄した後には全大衆は感激に滿ちた權力と同行することを、理解した。しかし、戰爭時において、かく一丸となつた大衆の力を絕えず汲收すると言ふ感想が最後的に實現されるまでには百年以上の年月が經過した。世界大戰に於いても尙、これが凡ての場合において充分に行はれたとは言へなかつた。先づ、それ以後における技術の物凄い發展の結果は近代的に軍備を完了

した諸國家にとつて、戰爭は全體的な、國民戰爭たるより以外の形態を考へることは出來なくなつた。戰爭の目標は——すでに吾々が見た如く——敵軍隊だけでなく、全國民であり、單なる敵の陣地だけでなく、敵國の領土全部である。從つて、奮戰に値する戰爭の目標こそは、その國民の生ける精神となり、それは祖國擁護に全體的戰爭意志を如何に強く結びつけ、且融和せしめるかを大戰の經驗は如實に敎へた。士氣沮喪し、戰鬪に疲れた國民は、武器が有り餘つてゐても、他の多くの重要な資料の缺乏に困窮する時は、果敢な、献身的な、一丸となつた國民と雖も武器を横たへるであらう。かゝる種類の破壞的作用は、燒夷彈、爆彈、或はガス彈による遠距離射撃、空中爆撃によつてだけでなく、經濟戰爭や、十字軍戰爭乃至大陸封鎖において遂行された、商業戰爭によつて行はれる。その目標は經濟、商業の破壞にあつた。海上に行はれる商業戰爭が、世界市場、原料市場其他における敵を壓迫する時、經濟戰爭は一切の考へ得べき陸上、海上の經濟地域における敵を直接に、或は特殊の場合には中立國に對する牽制を通じてそれに損害を與へる。經濟戰爭の鬪爭手段は、一切の敵の財産の押收、廢棄、敵國人への支拂停止、敵國の商業の妨害、敵國と取引する中立國の商業の監視又は阻害、爲替相場への壓迫、その特許權の廢止と消費、——等々にある。微妙なこれらの即物的作用の外に、この鬪爭方法は敵國民の精神と健康に對し、破壞的影響を與へる。世界戰爭において全般的に遂行されたこの顧慮なき飢餓封鎖——それは就中、中歐諸國の青少年に數へきれぬ犧牲を要求し、戰爭遂行の意志を決定的に弱めた——は獨特の役割を果した。經濟戰爭の作用は思想戰によつて高揚せられ、宣傳を通じて抗爭意志に燃ゆる敵國民を軟化させ、新らしき同盟者を獲得し、中立國家をして、煽動により敵國に對立せしめる。近代戰爭において、宣傳はかくの如く危險なるものとなつたが、ドイツはその生存鬪爭において、徹底的にこれを學ばねばならなかつた。

その形態においては非常に異つてゐるが、その内的法則性において、同一種類であるところの全體戰の及ぼすこれら凡

ての精神的、物質的作用に對し、國民は堪へ得るであらう。從つて、一方において同一手段に對應する敵の攻擊面を正確に認識し、他方、全國民が忍耐强く、理解を持ち、自ら進んで凡ゆる困難——國民戰爭がその種々なる外的形態において持ち來すところの——を引き受くべく訓練されねばならぬ。

多數の國家が一つの目的のために同盟を結び、一乃至それ以上の敵國に對し共同鬪爭を以て打ち負さんとする場合、聯合戰爭（Koalitionskrieg）が成り立つ。一八一三年——一八一五年の解放戰爭において同盟せるヨーロッパ諸國はナポレオン一世を倒した。一九一四年——一九一八年の世界戰爭においては二つの同盟が互ひに鬪つた。

聯合をなすの利益は、一般的に見て、同盟した國の資材及び兵員における優越性に存在する。又その微妙な弱點は、同盟した利害乃至その戰爭の目的が緊密に且永續的に平行して行くことは非常に稀れである點にある、又同盟せる國は各自勝手に動き、或はたちまちにして對立するに至る點にある。和合、統一の缺如に對する兩國民の邪推、軍事指導者の意見の不一致は、政治地理的關係によつて條件づけられた多くの國難を、時と所を問はず、屢々もたらすに至る。聯合することによつて得られる優越性は豫期しない摩擦や衝突によつて全く帳消しにされることが屢々である。兩同盟國は國力に差異がない場合お互にその風下に立つ事を喜ばず、又差異がある場合、同盟に加はる弱少國にとつては、彼等の利益は所謂「ライオンの社會」に於ける危險に曝らされるわけである。聯合戰爭の目的、目標は嚴密に決定されない場合、統一ある戰爭遂行、戰鬪指導に對する明確、且緊密なる協定が必要である。

同盟する隣接の敵國に對し、一國が戰爭を始めた場合、多邊的戰爭（Mehrfrontenkrieg）の問題が生れる。聯合側における優越が左程に期待出來ないとすれば、それだけ一方は早く勝利を得るであらう。より固く團結し、より强く決意し、より緊張して戰爭を始め得れば得る程、同盟國の共同行動は廣汎に過ぎる緊張のため、或はルーズな結合のため益々困難

に陥入るであらう。空間と時間を巧妙に利用し、相互に分裂せる敵に集中せる武力を以て應じ、敵軍において未だ決戰が禁ぜられてゐる時期に、決戰的に之と戰ふべく戰場に作戰するならば、各方面の國境線に向つて進出する敵軍を臨機に食ひ止めることは左程の困難ではない。この最高度の兵術は常にフリードリッヒ大王に勝利をもたらしたが、ナポレオン一世は最後にこの問題について失敗した。彼の標語は、現代に於ける如く、武器、輸送機關、通信機關が發達した場合、その意義を輕減するであらう。

戰爭の種類は、孰れにしろ、その原因によつて決定される。

攻撃戰爭(Angriffskrieg)、又侵略戰爭(Eroberungskrieg)において、例へば、强力、果敢、精力的なる國民でありながら、政治的制限によつて押しつめられた國民は、不足する生活地域(領土)を開發すべく、又老廢、腐朽せる國家を領有すべく努力する。

しかし現在これを實現し、利用することは不可能である。經濟的機能を停止した西ローマ帝國は若きゲルマン民族の來襲によつて崩壞した。東ローマ帝國はその緊張せる國家形態、國防組織によつて長い間自己の位置を維持することが出來たが、自然の膨脹的壓力乃至イスラムの凝り固つた精力に對して遂に敗北した。ルドウキッヒ十四世、ナポレオン一世の軍隊はヨーロッパを戰場として敢行した掠奪戰爭によつて齎らされた自然的膨脹の壓力だけでなく、權力慾は遂に過度の逼迫を生み、沒落に終つてしまつた。

防禦戰爭(Verteidigungskrieg)においては一國家は他國の權力慾、掠奪慾に對して防衛する。一八七〇年におけるドイツ及び世界大戰における中歐諸國がそうであつた。獨立戰爭、解放戰爭において國民は憎むべき敵國の支配からまぬがれ統一戰爭は十九世紀におけるイタリー及びドイツの如く、分裂せる國民を排他的國家に對し一體に結合させる。

宗敎戰爭は新らしく生れた信仰運動、或は傳統の宗敎に反對して新らしい宗敎形態を實現せんとする場合、そこに必ず勃發する。これ迄、この戰爭は、これら宗敎紛爭に特徵的である凡ゆる偏狹と憤激を以て戰はれた。これには又政治性が混入して來る。三十年戰役においてスキスの武器がドイツに向つて持ち込まれたのは單に宗敎的壓迫だけでなく、東海（バルト海）の支配確立と言ふ權力的目的を持つてゐた。法皇から破門された、自由なスチデンゲルの農民に對する十字軍は敎會的支配でなく、何よりも、權力慾に燃えたブレーメンのビショツプの意志の下に、その政治的支配に重點が置かれてゐた。

今日に於ては、キリスト敎間に於ける信仰對立による戰時的對立――嘗つてはそれを狂信的改宗、特に雜多な宗派からキリスト敎的寬容に至る激しい闘爭を通じて理解したのであるが――は最早問題ではない。十字章と半月旗の間において一世紀に亘つての信仰的、政治的問題を繞つて激烈に戰はれた時代はすでに過ぎ去つた。それ以後、イスラム敎の彈力及び野蠻な狂信主義は衰微するに至つた。宗敎戰爭の最高の表現形態はすでに「神聖戰爭」に見出された。カリフ（イスラム敎主宰）は神聖戰爭に對し一切の敎徒を「豫言者の綠の旗」の下に召集した。世界戰爭においては、トルコのサルタンの乾坤一擲は彼を聯合國の武力に對戰すべく、カリフとして――いかにも戰闘的な――地位に踏止まらしめた。淸敎的、狂信的ワハビツト（回々敎の一派）は、國民的基礎に立脚した大アラビヤ團結への强烈なる希望を以て、その宗敎思想を何時かは救濟力として要求するであらうことは確かである。他の非キリスト敎的信仰は第一に宗敎戰爭への憤起をなすだけの精神的彈力を缺いでゐた。

戰爭に於て最も脅威的なものは國內戰である。內亂は外敵に對して戰はれずして一國內に對立する政黨間に戰はれる。これは主として特別な對立から生れ、國內の反對派を外敵として徹底的に憎惡する。その動機をなすものは、自然發生的

に生れた種族の自己保存本能に根本的目的をおいてゐる。國民の共同一致に反對し、外敵に對する擧國一致を危殆に曝らすごとき一切の障害を艾除せんとするは、正に純粹に民族本能に立脚するものである。

戰爭の軍事的形態については、兵術論、海戰論、空中戰論を參照されたい。（譯者註、本譯書第二篇參照）

フォン・クール著『ドイツ參謀本部』(von Kuhl:,,Der deutsche Generalstab")
ルーデンドルフ著『戰爭指導と政治』(Ludendorff: ,,Kriegführung und Politik")
フォン・ファルケンハイン著『最高軍隊指揮』(von Falkenhayn: ,,Die oberste Heeresleitung")
ユンゲル著『戰爭と兵士』(Jünger, E: ,,Krieg und Krieger")
レオフレエンケル著『戰爭の本義』(Leow-Fränkel, G: ,,Vom tieferen Sinen des Krieges" 1930)
シエラー著『戰爭の天才』(Scheler, M; ,,Der Genius des Krieges" 1917)
ウオルフ著『戰爭の意義について』(Wolf, W. v. ,,Vom Sinn des Krieges." 1926)

タイゼン

戰爭理論

理論とは語源的に言へば、考察、知的直觀を意味する。今日では理論又は理論的と言ふ言葉は主として廣狹二義に用ひられてゐる。理論又は理論的なる言葉は廣義の意味では、行動乃至實踐の對照をなす知的なるもの、又現象に對するその認識關係を意味する。これに對して、狹義の意味では、體系的な事實的、感覺的、或は目的々諸關係の、學的、統一的、法則的解釋を意味する。狹義においては理論は行動の反對物であるばかりでなく、理論的なるものゝ內部における反對物をも示す。體系的統一性、完全性を目標とする概念乃至原理から出發する認識は、經驗的諸事象を規定するために、素朴なる經驗に立脚した、從つて、全體的、統一的でない、それ自身局限された認識と對立する。

戰爭を取扱ふ理論的方法においては廣狹二義の理論を區別すべきである。廣義における戰爭理論は、戰爭又は戰爭問題を知的に把握せんとする凡ゆる企圖を意味する。從つて單に綜合的な兵學だけでなく戰爭乃至用兵に關する論文——「戰爭論」から「戰爭入門書」に至るまで——更に授業、講演、實習、演習、實習旅行等々は凡てこれに屬する。狹義における戰爭理論は、之に反し、用兵に對し、それが提起する戰爭、又は戰爭自身が提起する諸課題を、一原則から學的に統一的＝法則的に解釋せんとする一切の勞作を意味する。本論で事實上取扱ふものは、ロイド（Lloyd）、ベレンホルスト（Eerenhorst）、ビュロウ（Bülow）、ジョミニー（Jomini）カール太公（Erzherzog Karl）、クラウゼウイツ（Clausewitz）、ウイリゼン（Willisen）、アスター（Aster）、シエルフ（Scherff）、ワグナー（Wagner）等の兵學者である。

凡ての學的方法における如くこゝでも三つの學派が區別される。即ち、獨斷主義、懷疑主義、批判主義がそれである。

獨斷主義兵學派（ロイド、ビユロウ、ジヨミニー、カール太公、ウイリゼン）は戰爭の法則體系、或は行動への直接命令としての絕對的公理とも言ふべき兵學體系が可能なりと主張する。懷疑主義兵學派（ベレンホルスト）は一つの有用なる理論は不可能なりと主張する。批判主義兵學派——その唯一の代表者はクラウゼウイツである——は戰爭理論は一般理論における如き理想には到達し得ないこと、法則乃至絕對的規則による理論構成はこれを放棄せねばならぬことを主張する。蓋、戰爭の本質は一原則からの統一的＝法則的解釋を許さぬからである。それにも拘らず、有用な、言ひ換へれば「理論と實踐の間における無意義なる衝突」を惹起せざる戰爭論は如何にして可能であるかの問題を取上げる。これに對し次の如き解決を彼は見出してゐる。

（一）、法則の單なる組立てを放棄し、素朴なる原理、乃至原則の形において戰爭理論の眞理を把握することを以て滿足する。

（二）、理論を本源的意味——即ち考察と批判的研究——における「理論」、即ち專一に對象の精通に導く如き「理論」に局限する。

（三）、戰爭の可變性、その支配的傾向たる多樣性、（戰爭における本來的暴力性、その豫測し得ざる性質、政治手段としての性質、）のために、不定の重量による三つの重心間における如く、戰爭理論は上述の三つの性質の間に絕えず動搖する。

（四）、彼の戰爭理論は單に素朴なる經驗に一方的に基礎を置かない、又概念的認識のみに基づかない。この二つの方法を緊密に結びつけて、相互に保證し、同時に概念的認識を常に經驗（戰爭）によつて實驗する。

（五）、彼の戰爭理論は最も極端な場合においても戰爭現象が原則に動かされることを會得するために、概念的には戰爭

現象における無限なる多樣性を追求する。

（六）、彼の戰爭理論は、戰爭理論を保證するための要請を充分評價し、說明の形式においても戰爭理論の眞理を全體的體系を通じて相互に補足し、約束する言葉を以て表現する。

かくして生れたる戰爭理論も、クラウゼウィツに依れば、根本においては「事實の基礎的說明の間に於ける單なる遊歷」にすぎない。それは「課題の解決に對して何等の定理を與へ得ず、又敵、味方の兩側に於いて通用する原則を以て、狹い必然的過程の上に立つてその論理を展開することは不可能である。」戰爭理論の効果はその知的訓練にある。その遊歷によつて捉へた光明にある。又、他を論證すべく、且又、基本的ならざるあれこれの議論を避ける際、それによつて作り出された明確な說明又は事實の內的關係に於ける洞察を補助となし得る可能性にある。この戰爭理論については次のことは本質的に考慮さるべきである。即ちそれは「戰爭現象の本質」を追究し、「それによつて成り立つ戰爭の性質と戰爭との關係を、個々の對象から明確に擧示すべく、換言すれば、必然性を以て一定の關係において還元された概念」を得るために、「戰爭行動の多樣性」を體系的に、即ち「明確に、全體的に把握し、必然的根據に基く活動を絕えず（一定の原則に）還元すべく」努力する。この兵學派はある特定の場合における眞理に停止せずに、普遍的に價値ある眞理に到達すべく努力する。この學派は「全體の本質」について先づ考察する。何故なれば、戰爭においては「他の何處においてよりも、部分を以て全體が絕えず反省されねばならぬ」から、即ち用兵の理論は一定の戰爭理論の上に建設されねばならぬからである。

クラウゼウィツの戰爭理論は體系的統一を缺いでゐると言ふ一般通有の見解に對しては次のことが言はれるであらう。即ち、人は「カント的意味における體系、即ち一つの觀念の下に――言はば戰爭の槪念の下に――多樣なる認識の統一」を考へてゐる。その戰爭の槪念たるや、それについて戰爭理論が論ずる全體を確定せず、又その範圍を規定しない。のみ

ならず、却つてその立場は各部分を相互に規定する。戰爭の科學的概念(「戰爭は自己の意志——政治的——を實現すべく敵に强制する暴力行動である」)は戰爭全體の目的と形態を包含する。それは「目的の一元性」を確立するが、その確立の上に凡ゆる部分は關係し、又その確立を通じて相互に關係してゐる。それは「戰爭は單に政治的交渉の一部分であつて、決して獨立的交渉ではないと言ふ概念」をそれ自身のうちに含んでゐる。戰爭の科學的概念は戰爭理論が取扱ふ全體を更に大なる現實的關係——戰爭はこの一部でしかない——のうちに、即ち政治のうちに(戰鬪ではない)に組入れる。然して「立脚點の統一」をそれによつて確保する。かくて凡ての戰爭は、根源において異つたものであるかも知れないが、同一の種類としてこれを考察することが出來る。蓋、カント的意味においては、四肢における全體の輪廓乃至區分は唯一最高の、最も根本的な目的から規定される如く、戰爭も亦一つの有機的全體として考察されるからである。「若し個々の活動は全體に結びつくと言ふ、この觀念から全體が生れねばならぬとすれば、個々の肢體(活動)は有機的全體から自らを分離させせない」。クラウゼウィッツの戰爭理論の最も本質的な、最も重要な特徴として擧げらるべきものを簡單に示せば次の如きものである。彼の戰爭理論は戰爭の論理と用兵の理論である。それは「戰爭全體」を取扱つてゐる。しかし、彼の理論はこの全體を何か獨立したものとして把握しない、又孤立的事實として考察しない、彼の理論はより大なる全體としての政治との一定の關係においてそれを考察し、更にこの一定の關係を立證し、同時に、戰爭の根本的概念においてすでにそれを取り上げてゐる。それと共に目的の統一性を確證し、戰爭を一つの有機的全體として考察し得るに至らしめた。

彼は法則科學の模型を追求する理論を放棄し、それによつて素材的意味における「理論」に限界を與へてゐる、換言すれば、單に考察することを局限することによつて戰爭理論の唯一の可能性を見てゐる。彼は一方に戰爭の概念を、他方に經驗を擁護してゐる。彼は、自分の理論が未決定の場合、實踐を以てその矛盾を取除きながら、戰爭の可變性、その支配的

傾向たる多樣性に對して斟酌する。

こゝにクラウゼウイツの戰爭理論の驚嘆すべき果實と優越性が見出される。彼の理論は今日に於いても、その戰爭理論に對應して唯一の科學たることを主張する權利とその實際的有用性の要求を保留してゐる。他の凡ての戰爭理論は本質において唯歷史的意義を有するに過ぎない。そのうちに就れも用兵理論の基礎條件として缺ぐべからざる戰爭理論を含んでゐない。アスター、ラインホルト・ワグナーを始め、アスターから借用された凡ての理論は、これを用兵論に局限してゐる。彼等は「戰爭の全體」に着目せずに、戰爭を他から分離された行動として觀察し、クラウゼウイツの如く政治との一定の關係において戰爭を見なかつた。ジョミニーが若し戰爭に及ぼす政治の影響を取扱ふたならば、彼の理論は嚴然として殘つたであらう。何故なれば彼の理論においては政治と戰爭の有機的關係が見られて居らなかつた。ワグナーはこの關係の意義を見落した。そのため政治は他の客觀的諸事情と共に、例へば晴雨、寒暖の如き季節を戰鬪要素の一つとして取扱つた。クラウゼウイツ以外の戰爭理論は凡て有用なる戰爭理論に實在する科學的理論の困難性を見ないし、そこから發生する危險に對して戰爭理論を防衛することが出來ないために蹉躓してゐる。戰爭理論の價値と意義に對する感情と理解はドイツ哲學の低下と共に失はれた。兵學の分野においては哲學的唯物主義と經驗主義に對して、それ自身有用な必要缺くべからざる應用法の重視、又經驗、就中、戰爭史は兵士への唯一の敎師であると言ふ考へが、それに對應してゐる。世界大戰後に、「戰爭の理解のために考へられる多くの要因のうちの一つを取扱ふ」心理學に對する過重評價は色々な形で行はれたが、眞理の理論的把握までには到らなかつた。最近において始めて、理論の價値に對する理解がその生成において把握される傾向が窺はれる。

參考書

ロイド著『軍事雜記』(Lloyd: „Military memoirs" 1781)

ビユロウ著『新戰爭體系の精神』(D.H. Bülow: „Geist des neueren Kriegssystems„)

ジョミニー『戰爭の原則的連繫についての分析』(Jomini: "Tableau analytique des principales combinaisons de la guerre" 1830)

同『兵術概要』(„Precis de l'art de la guerre" 1835)

エルンスト・ルドウイツヒ・アスター著『戰爭理論について』(Ernst Ludwig v. Aster: Zur Kriegstheorie 1856)

ウイリゼン著『大戰爭論』(W. v. Willisen: „Theorie des Grossen Krieges, 1840)

シエルフ著『近代的現象を基礎とする戰爭敎訓』(W. v. Scherff: „Die Lehre vom Kriege auf der Grundlage seiner neuzeitlichen Erscheinungsformen, 1897)

ラインホルト・ワグナー著『戰爭論の基礎、戰爭の全般的敎訓の基礎としての戰鬪及び戰爭要素』(Reinhold Wagner: „Grundlagen der Kriegstheorie, Theorie des Kampfes und der Kriegselemente als Fundament der gesamten Lehre vom Krieg, 1912)

クラウゼウイツ著『戰爭論』(K. v. Clausewitz: „Vom Krieg" 1832—34)

リンネバッハ

戰爭哲學

哲學も、軍事科學も今日迄、一般に承認された特殊原理としての「戰爭哲學」、或は——これと同じことであるが——「戰爭の哲學」を持つてゐない。書名に現はれる戰爭哲學なる言葉は、實際に於いては、哲學辭典にも、軍事科學辭典にも又其他の科學大辭書にも發見することは出來ない。「戰爭哲學」が取扱はれてゐる書に——他は內容的に重要ではない——H・ゴムペルツ著「戰爭哲學概要」(„Philosophie des Krieges in umrissen" Von H. Gomperz) がある。戰爭哲學の思想に關する最も重要な、價値ある著作は實際は他の書名の下に取扱はれてゐる。例へば、

マルチン・ルーテル『軍人は至福の立場に立ち得るか』(Martin Luther: „Ob Kriegslente auch in seligem Stande sein konnen?)

カント著『永久平和論』(I. Kant „Zum ewigen Frieden")

フイヒテ『眞の戰爭の概念について』(J. G. Fichre; „Über den Begriff des Wahrhaften Kriegs";)

ラツソン『文化理想と戰爭』(A. Lasson, Das Kulturideal und Krieg")

シエラー『戰爭の天才及びドイツ戰爭』(M. Schler; Der Geneus des Krieges und der Deutschen Krieg")

等である。又それは宗敎的、哲學的思想家、詩人、政治家、將軍、歷史家、國際法學者、……等の著作に取扱はれてゐる。戰爭哲學の諸問題に對する重要な、獨創的論文、隨筆（これには平和主義的著書の論文が編入されてゐるが、大局的に見ればこれは有用である）の有用な論集に次の如きものがある。アイスラー『哲學辭書』のうち戰爭の項 (R. Easler—„

Wörterbuchs der philosophischen Begriffe,,)（第四版）

戰爭哲學に關する本質的內容はその戰爭の本質、意義、權利に關する問題として表はれる。絕えず生活を脅威し、國家或は國民を最も尖銳な生存の試練の中に投げ入れる暴力的、歷史的現象である戰爭は、吾々の理性、吾々の世界觀、哲學、宗敎的、道德的、法律的信念と感情に對し如何に調和するか、又戰爭は人類の負債であるか、運命であるか、避け得られるものか、避け得ざるものか、或は戰爭は人類にとつて有益であるか否か、人類の發展に對して必要缺くべからざるものか否か、或は何等明朗性を伴はない全く有害な災害であるか否か、これらの問題に對する解答として表はれる。この解答はその出發點において與へられてゐる。それはその世界觀や人格に應じ、又問題の精神的、具體的發展に對應して種々に答へられる。それは又、戰爭の「解消」に對する平和的要求と戰爭の盲目的讃美との間に考へ得られる凡ゆる可能な解答を分有してゐる。この極端に對立する立場の中間に、かゝる困難な、しかし、克服し得べき運命に對して男らしく、「戰爭も敢へて辭せぬ」立場が存在する。

上述の問題に對する解答は戰爭哲學の主題をなす。その解答に更に發せらる課題についての見解は又その哲學的立場に應じて夫々決定される。

戰爭哲學の任務は戰爭に關する科學に對して、戰爭の理論を普遍的、學的基礎として創り出すことであるか否か、又創り出し得るか否かであると言ふことは特に論爭の中心をなしてゐる。各科學が哲學から奪つてしまつた陣地から出來るだけ多くを哲學のために奪還せんとする人はこの問題を肯定するであらう。しかし、形而上學を見放した哲學は認識の形式だけを問題にすべきであつて、認識の內容には觸れるべきではなかつたと言ふ見解の人は、戰爭の理論を各科學の課題として見、戰爭の理論も他の凡ての理論と同じく一つの哲學的に、言はば科學的に訓練された頭腦によつて創造されると言

ふことを主張することをしない。同樣な問題で、クラウゼウイツの著作「戰爭論」は戰爭の理論であるか、或は哲學であるかと言ふことはその根本的立場の相異に從つて種々答へられるであらう。クラウゼウイツ自身はこの著書の內容は常に戰爭及び戰爭指導の理論として示し、その形式を哲學として示した。國防倫理の一班としての戰爭倫理は哲學が戰爭に對し又戰爭科學に對して課する任務であり、戰爭哲學の領域ではなくてむしろ倫理學の領域に屬する。

上述のゴムペルツ及びアイスラーの外に、

ブリンデル『國家活動の基礎としての法と權力』(J. Blinder: „Recht und Macht als grundlagen der Staatswirksamkeit" 1921.)

同氏『戰爭の道德的權利と永久平和の理想』(: „Die sittliche Berechtigung des Krieges und der Idee des ewigen Friedens" 1930)

ホルネフエン　平和主義、その哲學的一硏究』(E. (Horneffen: „Pazifizismus. Eine philosophische Untersuchung" 1929)

エルンスト・ユンゲル『戰爭と戰士』(Ernst Jünger: „Krieg und Krieger 1930)

コーヘンハウゼン『現代國防科學―戰爭哲學の章』(Cohenhausen: „Die Wehrwissenschaften der Gegenwart"—Abschnitt Kriegsphilosophie 1934)

シエリング『クラウゼウイツの戰爭哲學』(Schering. W: „Die Kriegsphilosophie von Clausewitz" 1935)

リンネバツハ

戰爭社會學

戰爭社會學は、比較的に若い科學であつて、部分的には尙疑問とさるべき問題を伴ふてゐる。戰爭社會學の戰爭に對する科學的方法乃至科學的目的を變更せしめた。それは戰爭を社會現象として研究し、批判する。戰爭社會學は、社會學の國民・國家及び社會の發展乃至共生活に於ける形成・或は影響を各方面から規定し、戰爭の機能と價値を批判し、更に武裝平和の結果を各方面から檢討する。それは戰爭の間接的乃至直接的利害、目的的乃至偶然的利害、精神的、經濟的利害を明瞭にし、更に戰時乃至平和時に於ける軍事狀態に依つてもたらされると言ふ社會的退步を研究し、戰爭の本質は、果して政治的反動と社會的束縛とに結合するものか否かと究明し、更に又、戰爭收獲は勝利者にとつては、常に損失だけであるか否かを、歷史的事實によつて檢討し、又一國民の富、其國民の世界に於ける地位、乃至その文化的意義は、戰爭を通過せずして達成し得らるゝか否かを決定するものである。それは、又、勝利の凡ての普遍的條件を追求し、凡ゆる場合に共通する戰爭の機能を明かにし、如何にして戰爭は勃發するか、戰爭は今日に於いても尙、利益を持ち來す事が出來るか、どうかと言ふ如き社會心理學的問題を追求するものである。それは近代戰爭の特質を推定し、人類の平和的努力は、仲裁裁判所、國際聯盟、平和主義等の間に如何に實現されてゐるかを檢討する。それは常に戰爭が提示する集團的自然淘汰の意義を研究し、戰爭に於ける個人的自然淘汰による損失の故にそのもたらす利益は輕減されるか否かを追求する。それは戰費及び軍備問題を追求し、同時に人類の戰鬪的精神の縮少乃至增大を檢討する。それはこれら凡ての考察、研究から決定的に實踐的結論を引き出し、文化時代に於ける國家乃至其社會の爲に戰爭は價値を有するや否や、又それは文化力

なりや、又純粹に惡なりや否やを明かにするであらう。戰爭社會學が、精神的、政治的基礎に最も緊密に結びついてゐることは、明瞭である。科學的考察の實際的結果を見て、若し戰爭が文化力として尙今日においても認識されるならば、その結論は戰爭に對して肯定的となり、若しそれを否定するならば、戰爭に對して否定的とならう。ナチスの世界觀を以てすれば、戰爭は、人類生活の基礎的條件として與へられた運命である。國民共同社會の防衞としての戰爭は、それが不可避である限り肯定され、而も尊嚴なる價値を持つものである。それは今日においても尙斯かる戰爭が可能なることを暗示する。ナチスの世界觀は、戰爭が單に可能性に止まる限り、戰爭を出來るだけ避け、それを縮少することを强調する。

以下、戰爭社會學的研究の本質的結果に對して、簡單に一瞥しやう。

戰爭は今日迄、社會發展の最も大なる文化推進力であつた。それは創生において人類を作り上げ、集團、群族、强固なる家族形成の大きな刺戟となつた。又個人を「全體に通ずる同情」の感情、强烈なる動力であつた。戰爭は人類の本質である。制と分業に結びつけ、戰爭の影響の下に發展する國家形成に對して、即ち人類的意識にまで引き上げた。それは奴隷戰爭は運命であり、又人類の偉大なる敎育者であつた。このうちに戰鬪精神は生きて來たし、現に生きてゐる。それは各戰爭の核細胞を成して來た。戰爭を生む爲には、種々の力が集り、大衆の本能において——敵愾心、冒險心、勇猛心、支配慾、所有慾、缺乏、恐怖、安全感、慘酷、破壞心等が國民を戰爭に立ち向はせる。政府はその目的に適應せしめる爲に、他面において國民大衆の感情、民族心、信念、自尊心、國民感情、樂天主義を增大せしめてゐる。斯かる大衆的感情に拘らず、戰爭は指導的人格、政治家、及び軍人の影響を受けざるを得ない。これに加ふるに、物質的準備、軍事的、經濟的武裝、戰鬪力の形成並びにその量、國防力の强さ弱さは戰爭の一般的前提として考慮される。斯くして達成された戰鬪精神は、過去において國民生活の根本的要素であり、又その形成過程であつたが、現在も又同樣である。一方に於ける理想

主義的平和主義的國民と、他方に於ける軍國主義的國民との分離は、戰鬪精神の除去に對する誤つた信念と同樣に、正しい方向ではない。近代的文化は今日まで戰爭を不可能たらしめず、有効なる武器と共に戰鬪的精神を排除せしめなかつた。戰爭の犧牲及び損害は、第一に直接それに伴はれる死者の損害である。人類の最下層に對しては、鬪爭は左程慘忍ではなかつた。然し、中流と上流の未開民族の時代においては、それは最も慘忍な形態を採つた。一般的に言へば、敵民族全體を剿滅する事が目的とされた斯かる野蠻な損失は、種々の基礎から發展する文化と共に、漸次除去される。唯斯かる損失は事實上消滅しないであらうが、人口數は巨大な量に增大する。その結果として相對的損失は絕えず高まつたが、然し、その相對的損失は減少した。即ち「戰爭損害の遞減法則」(“Gesetz der relativen abnahme der Kriegsverluste”)が行はれて來てゐる。かゝる死者の直接的損失に對して、間接的人間犧牲は、病氣がもたらした。その數は昔は非常に多かつた。近代に於いてもその數は戰場に於ける戰死者數よりも四倍乃至五倍の數に達した。最近年に於ける病沒者數は、減少して其關係は逆になつた。世界戰爭において、戰死者の病沒者に對する比は、ドイツ側において、二〇對四、フランス側において一・三對〇・五、イギリス、アイルランド側において九・三對二・五、オーストリー、ハンガリ側において八對二であつた。此損失に加ふるに、不慮の犧牲と悲慘が伴ふ。それが不安乃至恐怖として存在する限り、その一部は不可避であらうが、他の一部は文明社會においては粗野、慘忍、乃至傳染病を避け得る如く、これらを避け得るであらう。更に廣大なる損失は、經濟的損失である。それは唯一回だけの損失であることもあるし、又規則的且週期的に來るものもある。不可避乃至回避し得られる破壞、狹義に於ける戰費、恒常軍事費、これ等は戰爭を通じてもたらされる經濟的損失と變革、國民及び軍隊に於ける道德的頽廢、乃至惡意の軍國主義に對する國家的退步などがこれに屬する。是等の損失に對して戰爭の利益も亦存在する。今日に於ても、國家は戰鬪意志を通じてその國民大衆の生存權を維持する。今日に於ても

祖國愛は、人類最高の道德であつて、此道德は、各個人を超越して共同社會に導くものである。戰爭は今日に於いても尙、一國民の最高の共同努力であり、各國家を秤り得る決定的標準である。それは國家の自由と獨立、國家の統一性と完全性且又、國力の增加に奉仕する。更に又、戰爭の刺戟を通じて、正義と社會平和の意味における社會的、經濟的變革、經濟的飛躍、技術的、文化的發展に對する間接的貢献がなされる。戰爭は依然として世界を裁判廷とする裁判所である。それは全國民の價値を秤り、凡ゆる强者と弱者、又、過去と現代を秤量する。その決定に對して控訴は出來ない。戰爭は屢々改革者であつたし、又時代の解放者でもあつた。而して時代の發展を促進した。或は敗北によつて、國民の開花を遲れさせた。戰爭が持つ獨特の意義は、團體的自然淘汰としての戰爭の役割であつたが、今日でもそれは同樣である。强き民族乃至國民は、發展するが、弱きものは沒落する。勿論戰爭は個人的逆淘汰（Kontraselektion）として現はれる。そこには善良なるもの、勇敢なるものが沒落し、惡意ある者、臆病者が生き殘る。然しその作用たるや決定的ではない。國民にとつて、確かに逆淘汰は重要である。然しそれは勝利者にとつては、更に重要關心でなければならぬ。唯、人類にとつて、個人的逆淘汰の損失は、團體的自然淘汰によつて差引淸算しても、尙餘りあるであらう。重要な研究分野として殘されたものに「未來戰の性質」（兵術論參照）「及び聯合戰爭の意義」の問題がある。

參考書

・ルドルフ、シユタインメツツ『戰爭社會學』（Rudolf Steinmetz: "Soziologie des Krieges"）
・パウル・シユミツテーナー『世界史の變遷期における戰爭及び用兵』（Paul Schmitthenner, "Krieg und Kriegführung im Wandel der Weltgeschichte"）
・フロベニウス『戰爭の世界史』（O. Frobenius: "Weltgeschichte des Krieges"）
・フイアカント『社會學』（Vierkandt „Gesellschaftslehre"）

・ウイゼ『一般社會學』（Wiese "Allgemeine Soziologie"）

・パウル・シユミツテーナー『大衆國防知識』（Volkstümliche Wehrkunde, Berlin Langensalza 1934）

〃『ヨーロツパ史と傭兵』（"Europäische Geschichte und Söldnertum" Berlin 1933）

〃『軍國主義』（"Militarismus" 1934）

パウル・シユミツテナー

國防科學

國防科學なる名稱と其概念は、大戰後始めて生れた。この言葉を作つた人は、誰であるか明瞭ではない。既に一九一九年創刊された雜誌に「知識と國防」(Wissen und Wehr”) と言ふ表題が現はれた。更に一九二八年夏、「ドイツ軍事叢書」が、「國防科學に關する帝國叢書」と言ふ傍題を付せられて出版されたのが、公式に使用された最初である。この言葉はドイツ帝國だけでなく、ドイツ語を使用する各地において急速に擴まつた。

此言葉の下に理解さるべき範圍は擴大され、その意味は非常に區々である。大戰以前に於いて用ひられた「兵學乃至軍事(軍事的)科學」と言ふ概念を以てしては、その意味が不充分であることに何人も異存はない。兵學乃至軍事科學の概念は、明瞭な制限も區別もなく、何れも其場當りに使用されてゐる。その本來的意味は、「軍事的戰爭」として示される戰爭の綜合現象の各部分に對して準備し、それを遂行することである。その困難は、國防力の準備と其使用から生れる諸問題の研究にある。之は又屢々全く關係のない他の意味にまで使はれた。人的關係から見れば、それは專門家に對して軍事專門家によつて追求される本來的科學の意味であつた。他の科學及びその代表者との、狹義の、不可分の關係は、戰爭史の領域において明示されてゐる。

此意味の範圍は事實的並びに人的側面から見れば、非常に狹小なることを世界戰爭は實證した。綜合戰爭の指導に對して最も重大なる意義を有する學問の全領域は、――例へば、政治(最も廣範圍に於ける)、技術及び經濟の如き――全然又は不充分にしか顧慮されなかつたこと、又科學擔當者の集團化及び、科學適用範圍が全く不充分であつたことを、世界戰

爭は實證した。

軍事專門家、技術家、又、經濟學、國家學の代表者、其他を同時に啓發せしめた此認識は、戰爭後に、戰爭の全體的現象及び戰爭指導、又其準備を科學的に把握すべく努力させた。同時に凡ゆる領域——其間にあつては、ドイツ帝國の生存權主張及びドイツ國民の戰鬪力が、最も重要なる關心の對象であつた——に於いて、ゴルツ將軍は、戰前に於いて「戰爭の性質に對する理解は……國民の戰鬪力にとつては、何等必要としない」といふ言葉に表現された見解が擴まつた。

是等凡ての主張は、種々なる出發點から次の如き目標に向つて進む。

一、從來の兵學の範圍を擴充し、更に之を完成し、且、從來等閑視された分野にまで兵學を擴張さんとする實利的意圖の下に。

二、國防科學に對して從來全く外部的關係にあるか、又はルーズな偶然的關係をしか持たなかつた、諸科學の擔當者の活動範圍を國家の戰鬪力保持に關係する軍事科學代表者にまで擴大せんとする人的顧慮の下に。

三、同時に全國民に對する人的顧慮、特に、凡ゆる分野に於ける國民の未來の指導者に對し「武器乃至戰爭の性質に對する理解——ゴルツ將軍が事實上の國民的防禦力に歸せしめた——を仲介」すべき大多數の靑年學生大衆に對する人的顧慮の下に。

是等凡ての思潮は、國防科學なる名稱を獲得した。然し此名稱には種々なる概念が結びつけられてゐる。國防科學を以て、從來戰爭、乃至戰爭指導の綜合的現象にまで擴大されたところの從來の兵學を意味するものもある。又兵學を以て、別の、例へば、政治地理學の如き特殊な國防科學であるとなすものもある。又國防科學の基礎は、國防技術にありとなすものもある。又兵學は、國防力の建設と整備とに關するものとなし、國防科學は國內の國防力即ち軍事的防禦力以外の一

切の獲得及び維持となし、國防科學を軍事的問題と何等關係を持たぬ市民的防禦力として把握するものもある。又國防科學を高等學校に於て教授さるゝ如き教授科目と見做すものもある。又「國防科學なる概念は、何等存在理由を持たぬ」とか、こゝに取扱はれてゐる如き學に對する正當なる名稱は、單に「兵學」(Kriegswissenschaft) に過ぎぬとか、それは從來の兵學を包括的に完成することで充分であるとか、それが防禦に對し、戰鬪行爲の側からのみ規定されるならば、「國防科學」なる名稱は、無駄な間違つた名稱として、取除くべきであるとか、意見は騷然と區々に別れてゐる。

名稱は兎に角、國防科學は生れねばならぬし、兵學の概念を、その外延と內包に從つて擴大することも可能であるし、又それはこゝに明確に規定されるであらう如く、國防科學の概念と完全に一致してゐることには、異論ないであらう。然し、國防科學の名稱及び概念の許容、乃至合目的性に對しては、以上のことは何事も語つてゐない。それどころか結局においては、その名稱に關する議論と合目的性だけが殘されてゐることが明かにされた。十八世紀における國家の「戰鬪力」乃至「戰時法」が十九世紀及び二十世紀國家においては「國防力」乃至「國防法」に變つたのが、當時偶然であつた如く國防科學なる名稱の選擇は確かに偶然である。大戰の遙か以前既に「戰時制度」(Kriegswesen) の狹義なる概念が、更に包括的な「國防制度」(Wehrwesen) にまで發展したと同じ理由から「兵學」から「國防科學」への推移は、この科學において問題とされてゐるその範圍と內容によつて、合目的に、然り、合目的に實現されてゐる。

國家の最高任務としての國防は、平時、戰時を問はず、國家及び國民の生存權の要求に向けられた一切の行動の總和として、戰爭及び用兵を包含するものであつて、戰爭や用兵に盡きるものではない。「國防科學」において、一切がその構成部分乃至その戰鬪行爲、即ち防禦に對して斯く呼ばれるといふのは、言葉として誤られた前提から出發してゐる。國防は純粹なる防衛ではない。むしろ防衛以上のものである。國防は中世においては屢々攻撃を意味した。「武器」は防衛（守

護）だけでなく、襲撃（攻撃）の武器であつた。フランス、イギリスの國防委員會は、純粹防衛だけでなく、綜合的國防組織を取扱つてゐる。この場合におけるフランス、イギリスの防衛は、吾々が意味する「國防」と同樣に、廣汎且つ全般的な意味を有してゐる。(防禦と國防との意味するところのものを比較せよ)

國防科學が、國家防禦の科學であり、簡單に云へば―― 國防組織（戰鬪組織も含めた）の科學であるといふ見地に立つならば、兵學に基礎を置く防禦學としての國防科學は、自ら軍事的防禦科學と分離さるべきだと言ふ如き見解は消滅する。かゝる把握は、「物理學」と「自然科學」とを對照せんとするある種の試みと同樣に、根據が少ない。科學はその對象によつて規定されるのであつて、兵學の目的に關聯するある對象によつてゞはない。從つて國防科學は、國防組織に對する理解を學生青年に導入するために、高等學校において課せられる課目の如きものであるといふ見解も亦、論議するに價値なきものとして排除される。從つて又地理學も其他の特定科學も、國防科學の基礎たり得ずと言ふごとき論は取上げる必要はない。

國防科學は諸科學の綜合體系であつて、その對象は、國家的「防禦」以外の何物でもあり得ない。それは兵學を包含するが、それを飽く迄超越するものである。

國防科學の一分野である兵學は、その對象即ち戰爭によつて規定される。國防科學を兵學として示さんとする實利的立場は、科學的には維持されない。眞の科學は、凡てその對象によつて規定され、限定されるが、決してそれが常に立ち又その任務の遂行のために必要とされるその立場によつてゞはない。實利的根據から科學を、その任務に應じて分類することは出來るし、又その必要がある。例へば林學、藥學、商業學……等と分類されるが如きである。然しそれは、科學的構成とは何等關聯してゐない。むしろ實利的根據は齎らされた本來的科學の數種の結合――例へば林學は植物學、動物學、

生物學、地質學、國民經濟學、林業經濟學等々の結合であるの――を取扱つてゐるのであつて、その結合はそれを處置する精神工具如何にかゝつてゐる。この意味において國防科學は、「軍事科學」(Militärwissenschaft)――就中それは「軍隊」(國防力直屬者たる意味においての)に關係する――と呼び得るであらう。軍事科學なる概念は明確とは言へない。何故なれば、軍事科學のもとには、全般的に、軍事―die militaria―を對象する科學は凡そこれを包含し得るからである。兵學がそうである如く、國防科學も亦多數の諸科學として現はれる。單數の國防科學は、諸自然科學の總稱するのに屢々自然科學なる言葉で言ひ表はすと同樣な意味において言はれねばならぬ。

國防科學は決して諸科學のルーズな、バラバラの束ではない。それは內的に結び合つた全體を構成する。それは、凡て「國防」に關係する對象によつて凝結される。

國防科學の組織的建設を形式的な滿足を得るやうに打ち立てやうとする場合、障害に出會ふ所以は、凡ゆる科學における如く、國防科學も歷史的に成長するものであつて、前以て豫定された圖式によつて成立するものでないといふ事實である。然してかゝる意圖は、他の科學に見られる如き如何なる圖式――そのうちに於いて、凡ての國防諸科學が完全に又、何の混雜もなく結合される如き――を生み出すことは出來ない。國防科學を有機的に組織せんとする次の如き試みは、單に應急措置に過ぎぬのであつて、凡ゆる要求を滿たすことは不可能であらう。

それに國防は、戰爭指導と共に、目的關係を形成し、その目的によつて規定された行動を呈示し、各行動はその目的、手段及び方法に從つて配置さるべきであるといふ思想から出發する。かくて國防科學の組織は、次の如き三つの部分から成立する。

一、國防目的論、二、國防手段論、三、國防方法論

國家的防禦の目的、及び國防乃至戰爭遂行の最も尖銳なる形態は、戰爭における國家、及び國民の衝突の性質、又その戰爭の最も尖銳なる形態からのみ推論し得られる。國防目的論は、國防の本質論からその目的論にまで擴大される、との敷衍は亦必要である。何故なれば、クラウゼウイツが戰爭について規定したところのものは、大體において國防に對しても然かりと言へるからである。人は、「全體」の本質に對する見透しから始めねばならぬ。「何故なれば、此處においては何處にも増して、部分によつて全體が考察されねばならぬからである」。國防の本質を認識する爲には例へば歷史、國民等の如くそれ自身國防科學でない、從つて次の表式には組入れる必要はないが、尙、他の科學、——國家乃至國民の生活に關係するところの——の援助を受けねばならぬ。

特定の國防科學——例へば、國防政策——政治地理學——は一題目として現はれるだけでなく、二つの題目として現はれる。體系的全體性を要求する國防科學——それは尙實在してゐないが——例へば、「國防哲學」はカツコの中に置かれる。

かゝる假定乃至前提の下に立てば、次の如き「國防科學の構成」試案が生れるであらう。

(一) 國防の本質及び目的論

一、〔國防哲學〕

二、戰爭哲學

三、戰爭理論

四、國際法と戰時法

五、國防政策

六、國防政治地理學

（二）國防の手段論

A、生ける國防力

一、人

國防倫理、國防心理（國防教育）

二、動物

――獸醫組織

三、組　織

國防政策、國防法、軍の組織及び經理、國防軍事教育制度、國防裁判所制、國防衛生制度

B、物質的國防手段

一、國防物理學

二、國防氣象學

三、國防技術學

四、國防交通組織

五、國防化學

六、國防經濟學

C、空間的國防力

一、國防政治地理學

二、國防地理——地圖作成、測量組織を含む。

(三)、國防方法論

A、國防政策

B、用兵の方法（用兵論）

一、綜合戰爭の指導（政治的、軍事的、經濟的、思想的）

二、陸軍、海軍、空軍の指導——戰略、戰術

この體系的國防科學に對して、歷史的科學としての國防史が追加されねばならぬ。これは前述の表式の中に入らない。何故なれば、これはこの表式の何れの部分にとつても、等しく重要であるからである。一般的國防史、又戰爭史として、それは國防の本質及び目的論を論ずるための、最も重要なる基礎の一つである。それは國防制度史、陸軍制度（陸軍史）、國防技術史、又戰爭史として戰爭の手段及び方法論に對して缺くべからざるものである。最後にそれは國防科學の歷史形成において重大なる意義をもつものである。

斯かる表式が缺點あるに拘らず、尙、國防科學の體系的建設を把握するに役立ち、それが表面的な補助科學の結合を表示するばかりでなく、獨立的科學として他の科學によつては解決し得ない獨自の課題を對象とするところの國防科學全體を取扱ふてゐる。形式的には國防科學の科學としての存在權は、右によつて證明さるが、その大部分は唯科學的實踐を通じて確保されねばならぬ。

リンネバツハ

第二篇　戰　略

兵術（戰略）論

第一章　根本概念

兵術（Kriegskunst）とは、大抵の場合、戰略（Strategie）と同一に解される。すなはち徹頭徹尾戰爭遂行の軍事的方面であり、從つてそれは、爾餘の凡べてに卓越するものとして重きを置かれるのである。この意味において、フリードリヒ大王は、七年戰爭終結後に次の如く書いてゐる――『兵術は、もしそれが適當なる人物によつて行使される場合には、最も美はしく且つ最も有用なる術である。尊むべき祖國防衞者の守護の下に、農民は彼等の土地を耕し、法律は裁判所によつて確立され、商業は榮え、一切の職業は平和的に營まれるのである。』

クラウゼヴィッツはいふ――『本來の意味における兵術とは、所與の手段をば、鬪爭において、用ふる術である、そして我々は、それをば、用兵（Kriegführung）の名をもつてするより以上に適切に表示しえない。』と。そしてまた更に『兵術は、その最高の立脚點においては政治となる。だが、もちろん、それは、外交文書を書く代りに、會戰を行ふところの政治である。この見解に從へば、大きな軍事的事件或はかゝるものに對する計畫は、純粹に軍事的な判斷に委ぬべきであるといふ考へは、許し難きものであるばかりでなく、有害でさへある。』

かくてクラウゼヴィッツは、兵術の概念を既に幾分廣く解してゐる。何故なら、用兵は、常に全戰爭遂行上の唯一の、もちろん最も強力な手段たるものであるからだ。だが彼はまた、用兵は、術の領域に屬するものか、それとも學或は手工業の領域に屬するものかといふ問題、すなはち兵術に就いてそれともまた兵學乃至は戰爭手工業に就いて論ずべきであるかといふ問題を提起してゐる。この最後のもの（戰爭手工業）は、當然彼の拒否するところとなつてゐる。それは精々前世

紀のコンドツチエリの場合に當てはまるにすぎない。だが、術といふべきか或は學といふべきかは、實踐的に働きかける方面か、或は探究し認識する方面か、そのいづれの方面を考察するかに依存してゐる。恰も醫術と醫學とが互に並立し且つ相關聯してゐる如く、兵術と兵學も然るのである。だが、クラウゼヴィッツは、最後に、用兵とは『人類交通の一行爲』であるといふ確かに適切なる斷定に到達してゐる。こゝでは最早やこれ以上この問題に觸れまい。何故ならばそれは實踐的に無意味だからだ。

用兵は、ギリシヤ語の „Strategos" (將帥) から來た戰略 (Strategie) ―― Feldherrnkunst (將帥術) とでも譯すべきか――と戰術 (Taktik) とに分たれる。

從來は、戰略の概念は、殆んど專ら陸戰にのみ適用され『陸上戰略』と考へられてゐた。そしてこれと並んで『海上戰略』が論ぜられた。然らば今日は更に『空中戰略』が論ぜられなければならぬであらう。『戰略』そのものゝ概念は、それ故に、今日では從來よりもより廣く解しなければならない。すなはち戰略とは、陸、海および空軍ならびにそれらの個々の部分の作戰的協同活動と解されねばならぬ。以下に說くところは、先づ第一に陸上戰略 (軍隊指揮 Heerführung) すなはち陸軍およびこれとの直接的な協同活動に編成されてゐる空軍の使用に關してゐる。だが、それは――用兵の概念規定および根本法則が問題たる限り――海上戰略および空中戰略にも當てはまるものである。

戰略は、かくて、その大なる關聯における用兵の全領域、特に全軍および諸部隊の交互的な、そしてまた戰爭の軍事的目標の達成に關する運動 (作戰) を包括するものである。かくの如き、そして同時に一般に承認されたる概念規定を確定することは、これまで何人によつても爲しえられなかつたところである。クラウゼヴィッツは、戰略をば『戰爭の目的のために戰鬪を使用する敎へ (Lehre)』と呼んで居り、グナイゼナウにとつては、戰略は『空間と時間との計測』であり、ジ

オミニに從へば、『大衆を戰場』に動かす術であつた。モルトケは、戰略をば、『手段（Aushilfe）の一體系』と呼んだ。——それは、科學であるよりは寧ろ『知識の實際生活への轉用であり、常に變動する諸關係に適應しつゝ最初の指導的思想を繼續的に形成することであり、最も困難なる諸條件の重壓下における行動の術である。』

かくの如く、その時々に、たゞ所與の關係において特に重要な乃至は支配的に見える戰略方面のみが明示されてはゐるが、しかし完全に盡くした概念の説明は一つも與へられてゐないのである。だが、それはまた缺くべからざるものゝ如く思へる。

戰略と相並び同樣の重要性をもつ用兵上の一部門として戰術（部隊指導）がある。戰略を大集團、空間、時間の分野だとするならば、戰術は、これと對立する側にある——とクラウゼヴイツはいつてゐる。戰術とは、彼に從へば、『戰鬪における戰鬪力使用の敎へ』である。この場合、それは、個々の武器の行使ならびにその綜合作用をも含んでゐる。尙ほまた戰術は、戰鬪と直接的關係を有する戰鬪力の一切の活動、特に行軍、宿營、偵察および警戒に携はるものであつて——これに反し、戰鬪力の組織、配備および編成ならびに脱落者の補充による戰鬪力の維持、あらゆる種類の武器、彈藥、軍需品の調達に携はるものではない。

戰略と戰術との間に明瞭なる一線を劃することは、常に困難であつたし、且つ軍隊が、——世界大戰におけるが如く——戰場を全面的に擴大し、連續せる戰線に配置され、しかも同時に、空中および海面下における戰鬪行爲が、敵の戰鬪力によつて保持される線を越え、殆んど無限に擴大される場合には、ます〳〵困難になるであらう。クラウゼヴイツはいふ——『戰略は、地點（何處で）、時間（何時）および戰鬪力（それを以て戰はるべき）を規定する。すなはち戰略は、この三重の規定により、戰鬪の終局の上に甚だ重要なる影響を及ぼすのである。』モルトケはこれを次の如く表現してゐる——

『戰略は、軍隊の指揮および戰場における遭遇によつて、擊破の手段と勝利の蓋然性を、戰術に與へる。』更にクラウゼヴイツはかうもいつてゐる――『戰術は、戰鬪を行へば、そこに結果を生ずる。その結果は勝利か敗北かであらう。戰略は、これをとつて戰爭の目的のために利用する。』かく戰略は、戰術に勝利の手段を與へ且つ同時にその任務を與へる――恰も戰略そのものが政治によつてその兩者を與へられるように。だが他面において、政治は、そのために働く道具たる戰略の結果に依存してゐる如く、戰略も、戰術の結果に依存してゐる。それ故に、理論上においては、戰略は戰術の上位に置かるべきであるといふことは確かであり、また戰略は、戰術の能力に從ふこと、そしてそれ故に個々の場合には――ルーデンドルフが一九一八年、西部戰線における攻擊方向の選擇に當つて表現した如く――逆となり、戰術が戰略の上位に置かるべき場合が實に屢々あることも確かである。戰術的勝利を確信する者は、もし彼が戰略的方面を何等かゆるがせにするならば、敗北するであらう。だが、充分なる確信をもたない者は、兎も角も勝利を獲得するために、戰術的考慮に優位を與へて巧くやるだらう。この點において、個々の場合に、正しい決定を行ふことは、將帥の術である。

フリードリヒ大王は、始終優勢な敵と闘つてゐたので、彼の個々の戰鬪の計畫に際しては、より多く戰術的觀點に支配されなければならなかつた。ナポレオンは、大抵優勢を持してゐたので、より多く戰略的見地から行動することが出來た。モルトケは次のように書いてゐる――『戰術的勝利の前には、戰略の要求は沈默する。それ（戰略の要求）は、新しく創られたる狀態に適應する。』

第二章　戰略上の教訓の源泉

クラウゼヴイツが樹立しようと企てた如き、一の哲學理論、すなはち兵術の體系は、常に、眞面目な、科學的な思惟活動の誇るべき所産であらう。それはまたそれで思索への刺戟となる――實に多くの將帥達は、『戰爭論』の著書から敎訓と知識とを汲み取つたし、今後も依然として汲みとるであらう。我々は、この著作を失つてはならないであらう。しかもそれのみでは、將帥を養成するには尙ほ十分ではない。何故なら、軍事的知識および能力は、理論の上に築かれるのではなくして、――クラウゼヴイツの著作もまたそうである如く――經驗の上に築かれるものだからである。實際に爲されたる經驗ですらも大抵は十分ではないのだから、他者の經驗や、尙ほまた過去の時代の經驗も參考とされなければならない。偉大なる將帥たちが何を考へ、如何にして勝利を獲得したかといふことは、常に高い意義を存してゐるのである。

ナポレオンは、『偉大なる將帥となり、兵術の祕密を把握するための唯一の手段』として、戰史の研究を勸めた。ヨーク伯爵は、彼の著書『將帥としてのナポレオン』の中で、明快且つ適切にも『戰史の知識は、單に模倣すべき適例を見出すためにたゞ覗いて見る必要があるにすぎないところの實例の蒐積では決してない、だが實習によつて獲得された精神の訓練は、正しい目的の認識を不知不識のうちに容易にし、且つ以前には劣弱で、無意識的だつた天賦をば、强化せられ、意識的ならしめられた力とするであらう』と述べてゐる。

だから、兵術の敎師としての戰史の重要性は明瞭である。しかし、人はその限界をも意識してゐなければならぬ――すなはち『戰史は、過去に遡れば遡るほど、ます〳〵不必要となり、同時にます〳〵貧弱に且つ見すぼらしくなるものである。古代諸民族の歷史は最も不必要にして且つ最も貧弱なものに違ひない。』（クラウゼヴイツ）。

とはいへ、そこには、重點形成、豪膽、果斷、それからまた行動における敏速性と奇襲の重要性、等々の如き、古代からもまた最近時の戰爭からも共通に引出しうる有益な――と我々は考へる――用兵上の根本眞理が依然として存在する。

しかし、もちろん、かゝる根本法則が適用される場合には、最早やペルシヤ、ギリシア、ローマの戰爭から始めることはできない。何故なれば、諸關係が餘りに變化しすぎてゐるからだ。上掲のクラウゼヴィツの文章もまたそういふ意味であらう。あらゆる時代の出來事は、その時代の特質を考慮して判斷されなければならぬ――と彼は要求してゐる。『あらゆる些細な事情を極めて注意深く研究するのではなく、その時代に身を置いてみて、大局に妥當なる眼を注ぐことによつてこそ、その時代の將帥を理解し、評價し、且つその行動から學ぶことができるのである。』

戰史が將來の用兵にとつて有益ならんとするならば、――そしてそれこそ戰史に對する軍事的觀點からの最高の要求なのである――それは、英雄詩が描くようなものであつてはならない。英雄詩は別の目的をもち、それにあつては、各個人或ひは個々の部隊の功績が、光彩陸離たる、調子高い言葉をもつて語られ、輝かしい行動についての歡喜、過去の英雄に對する尊敬、自國民および軍隊の能力に對する信頼の念の喚起が、最大の價値となりうるのである。ところが戰史にあつては、むしろ、一切のことがどうして起つたか、如何なる目的が、如何なる手段によつて追求されたか、その目的は達成されたか、或は達成されなかつたか、そしてその場合には、敵軍および味方の軍の適切な或は間違つた意圖、採られた方策の完璧さ或は缺陷、將帥の自信或は小膽が如何なる役割を演じたか、そしてまた――これも同樣に重要なことである――戰鬪者の輝ける行爲或は戰鬪の拒否および最後に――これは個々の場合には屢々勝敗に決定的であるが――幸運が、如何なる程度まで影響を與へたかといふことを、詳細なる事實をもつて基礎づけることが問題である。これら一切のことが明瞭になつて初めて批判を爲しうるのだし、またかくして批判しなければならないのである。そこで、――ジオミニはナポレオンの意見を説明してこういつてゐる――『健全なる批判を伴つてのみ、戰史は、戰爭の眞の學校である』。批判は控え目に爲さなければならぬ。『行動することは、後から批判するよりも、比較にならぬほど難かしい。それだから、事件の

渦中にあつて自ら決斷し且つそれを遂行すべく命ぜられた者にとつては、事件に對する後からの評價は、たゞ單に僭越な行爲だと映じ易い』――とモルトケはいつてゐる。批判は、『常に計畫放棄の性質』をもつてゐると、エールツエン(Oertzen)はいつてゐる――別の行動をとつた方がヨリ効果があつたらう、といふ主張は、常に假定的たるに止まる。何故なら、實驗による唯一の決定的な證明はなし得ないだらうからだ。それを演習によつて證明しようといふ企ても、謬論に陷るであらう。もし既に一方の側に對して異つた行動を認めるならば、その敵に對してもまた、その誤謬を是正することを認めなければならない。だが、それにも拘はらず、かゝる種類の考察や研究は、高い價値のあるものだ。それは、否定的な酷評や知つたか振りに變質しない限り、反省を刺戟し、明快ならしむる作用を有する。

あらゆる戰爭は、新しい現象をもたらし、かくてまた獲得されたばかりの經驗をば將來の場合に有用ならしめる必要をもたらす。それは充分間に合ふようには仲々ならないが、しかし急ぎ過ぎることは、たゞ誤れる結論に到達し勝ちだから戒めなければならぬ。このことは、軍の指揮者が自ら既に經驗濟みと信じてゐるような戰爭の諸經驗にもまた當てはまる。それらの諸經驗は、極めて根本的に考究され且つ理解されない場合には、危險を包藏して居り、自由な眼を曇らし、物事を明瞭ならしめずして、先入見に陷らしめることがある。特に偉大なる成功の後には、しば〳〵性急に、恐らくはそれあつて初めてその成功を可能ならしめたか或は少くとも有利ならしめたような事情を詳細に檢討することなしに、採られた行動をば模範として掲げがちである。それとは反對に、人は、失敗からは、あれやこれやの行動を不可能なりと輕卒に速斷するらしい。ナポレオンに就いて、次のように述べられてゐるのは注目に値ひしよう。――彼は、『熱情に驅り立てられてゐる限りは、その目標を見るのみである――その目的が達せられた時、彼は遭遇したかも知れない諸障碍を檢討した。』獲得した成功に伴ふ自己滿足乃至は失敗の後の絶望的落膽ではなく、この嚴格なる自己檢討の方法こそ、正しい結論に導

くのである。

世界大戰の直後、あらゆる國々の陸軍は、正に經驗されたばかりの資材戰（Materialschlacht）を伴へる陣地戰の影響下に立つた。多くの訓令は、一面的にその影響を受けた。その影響から再び脱することは、徐々にしか行はれなかつた。特殊な場合を一般化することは、極めて愼重に避けなければならぬ。永續的價値のある敎訓は、大抵、多數の個々の場合を蒐集することによつてのみ獲得しうるのである。戰時における偉大な諸經驗のかくの如き注意深い利用の模範は、今尙ほ、クラウゼヴイツの『戰爭論』がこれを示してゐる。ドイツの陸軍訓令——それは、我々も正しく意識してはゐなかつたが、その根本思想においては、彼の思想を土臺としてゐたのであり、今日も尙ほそうである——は、彼を尊敬しつゝ、彼の系統を引き、建設を續けてゐるのである。ドイツ陸軍は、——しば〱主張されてゐたように——南阿戰爭、日露戰爭、バルカン戰爭の諸經驗を充分に利用しなかつたといはれてゐるのも、決して當つてはゐない。用兵上の新現象は、派遣された士官たちにより、時に應じ直ちに報道された。だが、これを中央ヨーロッパの用兵關係に移植しうるや否やの問題は、根本的に檢討されなければならなかつた。そしてそれに應じて、それらの諸經驗もまた利用されたのであつた。あれやこれやの點においては、尙ほ多くのものを引出し得たかも知れないであらう。しかし、世界大戰の際、ドイツ陸軍が西部戰線ならびに東部戰線において得た初期の作戰上および戰術上の成功は、我々が何ものにも、なかんづく上記の戰爭に自身參加し彼等自身の經驗により卓越せる能力を期待されてゐたところの英國人およびロシア人にも、遲れてゐなかつたことを證明してゐる。

そこで——戰爭の經驗といふものは、繰返へし繰返へし新しく爲されるために存在するのだ、といふ皮肉な文句さへもあつたのだ。戰史の研究が不充分な結果、すなはち、精神的準備の不足、知識の不足のため、實に多くの經驗が、戰爭を

行ふ者に全く知られて居らないので、同じことが幾度も新しく繰返へされるといふことは、全く當然なことである。しかしまた、事件の同一性が單に外見的にすぎないことも同樣に屢々ある。それを、多少とも資格のある批評家が、古い法則或は曾つて得られた經驗をば、またしても顧慮しなかつたといふ風に批難することがあるけれども、しかし、現實においては、かゝる經驗は、その狀態の下では利用する可能性が全くないのである。

我々は、行動しなければならなかつたし且つ必要な場合には、あらゆる經驗に反しても、健全な人間理性をもつて、生起せる狀態から最善なものを作り出そうと試みなければならなかつた。

戰爭の出來事は、いつでも、新しく、異つた形姿を示すものである。それは、非常に銳敏な頭腦により考案され且つ十分に基礎づけられた何等かの學說の尺度をもつてしても決して測られ得るものではない。反對に、それは、かくの如き經驗からのみ引き出された智識の正確さを繰返へし檢討し、必要に應じては、これを是正し或は補足するために役立てられねばならないのである。

第三章　諸見解の發展

第一節　根本眞理

戰略の一定の根本法則は、陸戰にせよ海戰にせよ空中戰にせよ或はこの三者をひつくるめたものにせよ、あらゆる時代を通じ、あらゆる狀況に對し、同一である。それは、クラウゼヴイツが、その著書『戰爭論』において、約百年も前に、フリードリヒ大王、ナポレオンおよび解放戰爭に基き、極めて銳い思索の結果、今日に至るまでそれに取つて代はりうる

ものが一つも無いほど立派に樹立してゐる。

豫想外な軍隊の膨脹および技術のあらゆる進歩も、今日に至るまで、彼の著書の根本眞理を搖がすことが出來なかつたし、將來といへども搖がしえないであらう。クラウゼヴィッツの學説の永遠の法則は、たとへその適用の形態が變化しようとも存續し、そして戰爭のあらゆる場合において、彼の特質に從つて觀察され且つ考究されなければならぬ。敵の戰鬪力の殲滅は、最高の、それ故に第一に達成すべく努力しなければならぬ目標であるといふこと、それを達成する爲には、第一に、全般的に、第二に、決定的な場所において、たゞ出來るだけ強力でなければならぬといふこと、そして敵の主力に對する攻擊、しかも側面および背面に對する攻擊は、それが成功する場合には、正面の勝利よりもヨリ決定的な作用を有するといふこと、それは、追擊により、敗者をして、勝者の意志に服從せしめるまで勝利を擴大せしめるに足るといふこと、これらは、あらゆる時代とあらゆる狀態に對し妥當性を有したし、將來もまた妥當性を保持するであらうところの、そしてまた實にクラウゼヴィッツ以前には、何人もかくの如く理路整然と展開したことのない且つかくの如き明快さで論述したことのなかつた眞理なのである。

敵の戰鬪力の殲滅と並んで、クラウゼヴィッツは、勝利のための手段を簡單に要約し、第二に、敵の國土、首都、救援源泉の占領——だがこの目標への途上においては敵の戰鬪力と衝突しなければならぬ——第三に、輿論の獲得(敵の精神的反抗力の壞滅)——これは『大なる勝利により、また首都の占領によつて』達成される——を擧げてゐる。

かくて、敵の主力の殲滅は、依然として、あらゆるものゝ基礎である。戰爭遂行の非軍事的手段——すなはち、政治的には、同盟者を獲得し或は離反せしめることにより、經濟的には、輸入品を遮斷することによる戰爭遂行——は、クラウゼヴィッツの考察においては觸れられてゐない。かゝる手段は遂行せんとする武力的解決が遲延するか或は全く中絕する場

合には、大きな意義を獲得する。

敵の戰鬪力の殲滅といふことを、クラウゼヴイツは、決して單に、武器をもつてする餘すところなき殺戮或は捕獲と解したのではなく、敵をして最早や戰鬪を繼續しえない狀態に陷らしめることを以つて足れりとした。これを達成するために、彼は次のことを要求する――すなはち、最高の努力をもつてする全兵力の傾注、主要打擊のための集結、行動の迅速およびそれによる奇襲、最高の精力をもつてする既得の戰果の利用。そしてこの場合、彼にとつては、第一の要求の充足が、爾余一切のものゝ基礎である。

だが、クラウゼヴイツは、敵の戰鬪力の殲滅による軍事的征服といふ積極的目標が、狀況の如何によつては達成しえない――或は我々をして附言させるなら、極めて大きな犧牲または危險の下にのみ達成し得る――場合をも考察してゐる。この場合には、決戰を避け、戰爭をば、部分的攻擊を結合せる防禦或は最後に純粹な防禦に持久的に導くところの戰略も生じ得る。この場合、ロシアにおけるが如く、待避のための廣大なる土地が存在し且つ戰鬪の繼續を問題とすることなく一時的にそれを放棄しうるならば、かゝる行動は特に効果があるだらう。それは、一八一二年のナポレオンの遠征を挫折せしめたのであつた。かゝる場合には味方の戰鬪力を保持し、敵の戰鬪力を消耗せしめるやうな努力の方向がとられる。しかし、この場合にも、積極的な戰爭遂行に移るための好條件を創り出し、最後に成功を目指しつゝ決戰を試みんとする目標は、依然として存續してゐるのである。だが、大抵の場合、持久的行動は、外部的關係、なかんづく政治的情勢の變化、勢力關係を改善するところの同盟者の獲得或は敵側における同盟者の離反を望みつゝ、一時的勝利をもつて滿足しなければならぬ。もしかゝる希望が無い時には、たゞ單に、敵の目標の達成を妨げるといふ純消極的目的のみが殘り、敵をしてその目標達成を斷念せしめるまで、すなはち戰鬪を放棄するまで、肉體的および精神的に消耗させるだけである。

敵の征服ではなく、その兵力の損耗により敵を困憊せしめんとするところのかゝる用兵をば、ハンス・デルブリユックは、クラウゼヴイツの『殲滅戰略』(Niederwerfungsstrategie) と對稱して『消耗戰略』(Ermattungsstrategie) と呼んだ。この形態においては、先づ第一に、自軍の弱小を意識して、積極的目標を放棄し、敵がその目標を達成するのを妨げるだけに滿足するといふ用兵の消極的方面を見ることによつて、我々は、これを認めうる。だが、『消耗戰略』といふ表現は、封鎖された要塞に對する飢餓戰或は港に停泊せる艦隊の封鎖戰に似てゐる凡べての場合、すなはち敵が政治的、軍事的、および經濟的に外界から遮斷されて居り、これを降服せしめることはたゞ時間の問題だといふような場合にも――もし、かゝる狀態そのものをも既に敵の戰鬪力の『殲滅』と同一視しようとしないならば――適用することができるだらう。だが、かゝる同一視は必らずしも適切ではないであらう。かくて我々は、フリードリヒ大王の敵が採つた如き、或は小モルトケが、一八七〇年にメッツでバゼーヌ(Bazaine)の軍に對したが如き、就中、イギリスがボーア戰爭における第一回の失敗後に採つた如き、また世界大戰においても聯合國の制限の下に中歐諸國に對し用ひ得られたが如き一つの行動を考へるのである。かゝる場合には、時の猶豫が自軍に有利にならずして、寧ろ敵軍に有利になつて、誤算をする危險が常に存在する。要するに、消耗戰略は已むをえぬ手段であり、從つて戰略の變種である。何故なら、それはイニシアテイヴの放棄であるからだ。我々は消耗戰略を餘儀なくされることはあるが、しかし消耗戰略を、殲滅戰略と並べて同價値のものとすることは出來ない。何故ならば、出來るだけ迅速にして且つ完全なる勝利は、――クラウゼヴイツも繰返へし敎へてゐる如く――用兵の最高の、それ故に第一に獲得さるべき目標と見做されねばならないからだ。

クラウゼヴイツにより樹立された戰略的行動の根本法則が適用される形態と、個々の場合に妥當しうる限度とは、時間的に生起する諸關係と共に變化するところの多樣なる狀態に依存する。

それ故に、大抵の偉大なる將師が、當面の必要から生じた一定の教育的目的のためにあらざれば、一般的な戰爭の經驗或は戰爭の學說を書かなかつたのは、決して不思議ではない。戰爭の終結後、後繼者のためにその經驗を教訓的に總括したフリードリヒ大王は、一の例外である。

用兵に關するナポレオンの見解は、ジオミニがこれを概說した。それは彼の敵手たるクラウゼヴィツも概說した。この點では、カール大公のみが自ら筆をとつて書いてゐるだけである。ブリュツヘルおよびグナイゼナウは何も書かなかつた。モルトケもまた、軍隊勤務に必要なる訓令のみに止まつた。彼の根本思想の學的概說は、彼の見解に一致してはゐなかつた。何故なら、彼は、正當にも、若干の普遍妥當なる兵術の原則のみしか信じなかつたからだ。これらの原則を理論的に確立することは、彼にとつては餘計なことゝ考へられたのであつた。何故なら、軍事行動の一般原則は、健全なる人間理性にとつて自明のものであると考へたからである。既に述べたように、戰略とは、彼にとつては、『手段の一體系』であつた。それ故に、彼にとつては、先づ第一に必要なものは、何等かの理論や經驗學說ではなくして、あらゆる個々の場合に有利な武力解決を招來するため、目的に合致したことを爲す術であつた。何故なら、單に戰爭狀況のみならず、各個の場合に使用される手段もまた、その時々に異つてゐるだらうからだ。

『戰爭に對する規準が、あらゆる場合に當てはまるべきならば、それは、數學におけるが如く、等しいものを加へれば等しい、といふ公理に縮小するであらう。もしそれ以上の意味を持たせようとするならば、各個の新しい關係は、それ〴〵一の新しい例外を意味するだらう。』——と、彼は、一八七〇年、部隊指揮に關するベルディ（Berdy）の研究草稿が提出された時に書いた。モルトケの『戰爭論』(„Kriegslehren“)は、彼の死後初めて、彼の軍事に關する遺稿の編纂により出來上つたものである。

シュリーフェンは、彼の根本思想をば、たゞ參謀本部の將校の養成に當つて實際に適用し、その職を辭任して後には、戰史の研究、なかんづく彼の『カンネ』(„Cannae“)に發表したゞけであつた。戰爭の理論を樹立することは、彼にとつても、殆んど全く關心事とならなかつた。

世界大戰の經驗を評價し、利用することは、すべての大軍國によつて着手されてゐる。だが、一八七〇――七一年後におけるが如き爭ふ餘地なき結論は、まだ出てゐない。

第二節　フリードリヒ大王

大王は、彼の戰爭をば、攻擊的に且つ敵の國土において行はうと欲した。豐富なる經驗に基き、彼は、七年戰爭終結の五年後に、次の如く書いた。――

『大規模に仕組まれた戰役計畫は、疑ひもなく、最良のものである。何故ならば、その實行に當つて、不可能な點があれば直ぐに氣が附き、實行可能なるものに限局することになるからだ。かくて人は、小規模の計畫――それは何等大きなことを爲しえない――をもつてするよりも以上のことができるのである。その一例を擧げよう、――我々が一七五七年にベーメンに進入した時、余の計畫は、一切のオーストリア軍隊をば、州の邊境から中央へ追ひ集めることであつた。かゝる情況の下においては、一への會戰は、戰爭全體の運命を決定することができた』。その會戰を勝利に導くならば、『フランス人は、ラインを越えて進むを敢へてしなかつたであらう。ロシア人は、クールランドの境に止まつたであらうし、ウイーン宮廷は、講和を命令せざるを得なかつたであらう。かゝる計畫は、必らずしも常に有効といふわけではない。しかしながら、それが成功するならば、それは戰爭の勝敗を決定する。……かゝる例は、模範としなければならぬ。諸君がかゝる計

畫を立て、そして幸運に惠まれるならば、諸君の凡べての勞力は報はれるであらう。』

大王は、實際上は、かゝる幸運に惠まれることは割合に少かつたに拘はらず、彼の經驗の結果を右の如く書いた。バイエルン及びフランスと同盟し、シュレジイエンおよびバイエルンから集中的にウイーンへ進擊した一七四一年の彼の作戰計畫は、既に、決定的打擊を目標としてゐたが、しかし、政治的情勢が變化したので、それは實行されなかつた。一七五七年、コーリンの戰は、武力的殲滅計畫を終結せしめ、かくて『戰役の正規の第二部』（シュリーフエン）の發端となつた。決戰的な殲滅作戰は、次ぎに續いた七年間の戰鬪關係が最早やこれを許さなくなつた。フリードリヒは、自己が全く防禦的地位に押し込められてゐるのを悟つた。彼は、各個の敵に對し個別的打擊を與へて壞滅せしめんとすることにより、內線において、劣勢の敵に對し、模範的に防禦を行つた。『小さな利益を蓄積せよ、然らばその總量は大きなものになる』――これがその場合の指導思想であつた。彼の目標は餘儀なく限局せられざるを得なかつた。しかも、それは、事情の許す限りの大いさを保持してゐた。かゝる方法で戰爭を解決せんとする見透しは、殆んど認め得られなかつたが、しかし彼は、機會さへあれば、或は西部において、或はシュレジイエンにおいて、或はロシアに對して、各個の戰鬪を、勝利的終結に導かうと努めた。決戰は、彼にとつては、戰爭遂行の第一の決定的手段であつた。彼は、殲滅的勝利をば、最高の、最も努力し甲斐のある目標と見た。しかも彼にとつては、『單に敵を打ち負かすために戰鬪を行ふのではなくして、その決戰を行はずしては妨害されるであらうところの計畫を追究するために戰鬪を行ふ』といふのが原則であつた。

だが、敵の優勢が、用兵に關して抱いてゐた大王の思想の實現を困難ならしめたのみでなく、時代の關係もまた彼の機動の自由に制限を加へたのであつた。大王の戰略を理解するためには、當時の戰爭の條件を明瞭にしなければならない。數的に弱勢の軍隊（ロイテンにおいては、オーストリアの九萬人が既に最高限度に達してゐた）および空間の廣さは、今

日ではヨーロッパにおいて殆んど消滅してゐる作戰可能性を提供した。しかし、それを利用することは、狹く限られた程度において可能であつた。軍隊は、大部分、傭兵から成つてゐて、その中には、勤務を强制されてゐた多數の外國人が居つた。この場合においては、逃亡は、今日では容易に考へ及ばないような役割を演じてゐた。脫走に對する補充を爲すとには、多くの費用を要するし、これを訓練するには長い時間が必要だ。かくて、損害の多さうな戰鬪を敢行し、完全なる決戰を遂行する決斷が困難ならしめられた。それ故に、當時の將帥は、しば〳〵、機動により、敵を一の陣地、一の地方に壓迫することを以つて滿足するにすぎなかつた。將帥たると同時に王だつたフリードリヒは、時代の尖端を切つて、一の例外をなしてゐた。

軍隊は、旣に逃亡を豫防するために、進軍の際には嚴格なる隊伍を組み、陣營における休止の際は緊密に集結されゐてなければならなかつた。敵の近邊においては、不斷の戰鬪準備の必要が當然かゝる處置を强要した。それは、大王にとつては、特に彼が敵地において戰爭を遂行する場合、彼の敵にとつてよりも更に必要であつた。何故なら、彼は、偵察および警戒のために、大抵は敵よりも遙かに輕裝してゐない軍隊を有してゐたからである。當時は——我々の知つてゐる如く——廣大な戰線において殆んど全土に亙り軍隊を布置するのではなく、無限に廣く見える場所において、餘り多數でもない軍勢が密集して敵に對し行動するか、或は對陣したのであつた。側方或は後方には、輕軍隊 (leichte Truppen) の外に、河や山路を遮斷するといつたような特殊の目的をもつ分離された小部隊(枝隊)があつた。だが、それは、要塞にゐるか或は隘路を占領してゐるとかいふのではない限り、自己よりも强力な進軍し來る敵を、一時的にも阻止することは全く出來なかつた。何故なら、遠距離兵器がなかつたからだ。

戰場の性質もまた今日のそれと比較すべくもなかつた。稀薄な人口、比較的少いそして殆んど全く築城された都市、我

々から見たら道らしい道もない非常に貧弱な道路網、山や河を越える手段の不足、山野、河川、池沼の跋渉の困難は、作戰を、一定の、道路交通によつて確定された線上に强要する。

傭兵軍を不斷に充分に給養する必要は、一の特殊な配慮を生ぜしめた。『もし一の軍隊を建設せんと欲するならば、先づ胃袋から始めなければならぬ。』――と大王は書いてゐる。しかし、給養を確立することは、當時においては、たとへ小部隊といへども、困難なことであつた。國外へ出て生くること、なかんづく宿泊給養は、軍隊を常に密集的に集結させて置かなければならぬ拘束によつて、禁斷されてゐた。食糧の多量な貯藏は稀にしか存在しなかつた。集められた多量の食糧品を急速に運搬するためにも、あらゆる前提條件が缺如してゐた。それだから、豫め造られた倉庫を賴りとしたし、その設立のためには、道路並びに水路（大王にとつてはエルベ河およびオーデル河）が決定的であつた。この倉庫からは、餘り遠くへは行けなかつた。既にかゝる事情が、自國を保護するために出來るだけ敵國において戰爭を行はんとしたフリードリヒの意圖に、狹い限界をつけたのであつた。

作戰場（Operationsraum）と軍隊の數との間にかくの如き不釣合が存在する場合には、世界大戰において見られたが如き廣大な戰線における運動は、全く問題にならなかつたし、また適當な行軍路が無かつたことによつても、それは不可能だつたから、迂回は容易であつたし、後方への連絡を確保することは困難であつた。なかんづく、自國の國境を越えて遠く出征するものは、最早や廣大な策源に據ることは出來ず、大抵は、敵に對陣する軍隊とその力の源泉たる倉庫とを結び附けるところの細く切れ易い一本の糸の如き唯一の補給線に據るのみである。この連絡の脅威或は中斷、食糧輸送および倉庫に對する襲擊は、作戰の場合において、しばしば戰鬪そのものと等しく決定的な役割を演じた。それ故に、フリードリヒは、彼の經驗の最後の結論として次の如く確說してゐる――『一般的にいへば、我々が自國の國境から餘りに遠く離れ

たところで行ふ戰爭はすべて何の役にも立たぬ』。ウィーンを目標とせる作戰の思想は、所與の力および空間關係の下とあつては、初めから不可能であつた。ザクセン、ならびにまたベエーメンの首都はこれに反し、到達可能だつた。戰鬪を行ふ軍隊の本質的構成部分たる騎兵團は、給養の困難さを增大させた。『ベエーメン或はメーレンにおいて戰爭を遂行しようと欲するならば、草が生えるか或は騎兵全體が無くなるまで待たなければならない。』

そうでなくとも、四季の變化も、用兵の上に現代よりも遙に大きな影響を及ぼした。冬は休息の時期であり、傭兵軍にあつては二重に必要な兵の訓練の更新および戰鬪能力の再建の時期であつた。大軍を、人口稀薄なところに、忍耐強く宿泊せしむることの困難さは、分離を餘儀なくせしめ、從つて冬期宿營の時期は、弱化の狀態をもたらした。これを奇襲的攻擊のために利用することは容易であつた。それ故に、大王は、敵よりも遲れて冬期宿營に移り、且つ敵よりも速かにこの宿營を去らうと努めた。

フリードリヒは、彼の戰爭をば『短期間に猛烈に』遂行せんと欲した。何故ならば、長期戰は、兵の訓練を破壞し、國の人口を減少させ、兵力を困憊させるからである。彼はかくて攻擊しなければならなかつた。『徹頭徹尾防禦をことゝする計畫は、』——と、彼は、その軍隊の訓練のための指令として書いてゐる——『何の役にも立たぬ。計畫は、汝等に要塞から出ることを强要する。敵が汝等を回避するならば、その時は、戰鬪を敢へてすることなく、後退せよ。……すなはち、余は、むしろ適時に戰鬪を敢行する軍指揮官の大膽さを選ぶ。然らば、彼は、一切の希望をもちうるし、且つ不運な場合においてさへも常に防禦の手段を保持せられるのである』。敵の數的な優勢は、彼には、何等勝利の障碍の理由とは見られなかつた。彼は、明快な考慮から、細心な待機よりも勇敢なる決斷を選んだ。何故なら『勇氣ある者には、幸運の助けがあるといふ諺は、大抵の場合に妥當するからだ。一度戰鬪を決意したら、余は、敵を攻擊せんと企てる。何故なら、それ

が最もよい方法だからだ。』――大王は、これを、他の個所において、すなはち、彼が意識的にそう教育したところの彼の軍隊の本質について、その全强味は攻擊に存すると、基礎づけてゐる。『もし我々が勝手に攻擊を斷念するならば、それは馬鹿げた行動であらう。』戰場が廣大で兵力が少い場合に決戰を行はんとすることは、もし敵がそれを欲しないならば、そう簡單ではなかつた。フリードリヒの敵は、戰を避け或は要塞に立て籠ることによつて、待つことが出來たし、戰爭を長びかすことが出來た。そこで大抵はたゞ迂廻と近接戰線との攻擊とによつてのみ、彼等を決戰に引出すことができた。虛僞の情報を流布し或は陽動(Scheinbewegung)により敵を欺いて自己の意圖を誤信せしめることも、それ故に、大きな役割を演じた。大王は、敵をおびき出し、その弱點を利用するために、防禦をもまた、しば〳〵單に一の策略と見做そうとした。――『プロシア軍隊は、他の軍隊と同樣に、確固たる陣地を占領し、砲兵の利益を利用するために、これを一時使用することができる、と余は信ずる。だが、彼等は、その陣地を一擧に捨てゝ、勇敢な攻擊を行はなければならぬ。これによつて敵は、攻擊者から被攻擊者となり、その一切の計畫は、一擊の下に壞滅される。』

『汝等は、戰鬪を行はんとするならば、出來るだけ多數の軍隊を集結しなければならぬ。人はこれを決してヨリ有効に使用することはできぬ。この規準は、極めて確實なものであつて、これを考慮に入れなかつた將帥たちはすべて殆んど常に後悔しなければならなかつたのだ……汝等が攻勢的に進む時には、決して分離する勿れ。……防禦的になる場合には、しば〳〵分離を餘儀なくされるのである。』

しかし、フリードリヒは、防禦の場合にも、兵力を集結して置こうとした。彼は『防禦線』を拒否した。何故なら、『それは、その占據のために有してゐる軍隊よりも以上の廣大な土地を取るからだ』――『小膽な人物は何でも防禦一點張りにならうとするが、聰明な人物は、たゞ主要點のみを見、大きな打擊をかはし、且つ大なる災禍を避けるために、小なる

災禍を忍ぶ。すべてを防禦せんと欲する者は、何ものをも防禦しない』。『多數の强力なる敵』に對する戰爭の際には、『一州ぐらゐは、敵の犧牲に供し、その間に全力を擧げて他を攻擊し、戰鬪を迫り、これを壞滅するために、あらゆる努力を拂は』なければならぬ。かゝる場合には、これに對し爾餘の枝隊を送遣しなければならぬ。『だがしかし、かゝる戰爭は、軍隊を、過勞によつて破滅せしめ、それが長期に亙る時には、最後に悲慘な結果を見る』。以上は、大王が、一七四八年に書いたものである。七年戰爭においては、彼は、これに從つて行動したのであつた。長期戰の危險に關する彼の見解は、彼が遂にその危險をも支配した時に、確認された。

　フリードリヒの著作は、主として戰術の分野を取扱つてゐる。といふのは、それは大抵、軍隊教育のための訓令たらしめる目的のものだつたからだ。最も重要なるものは、『戰爭の一般原則とその戰術および軍隊敎練への應用』（一七四八年）と名附けられてゐる。それは、兵術に關する次の如き言葉をもつて終つてゐる——『余のさゝやかな戰爭の經驗にして既に、この術は學び終へることができるものではなく、且つ眞面目な研究を行ふならば、常に新しい發見をするものであることを示してゐる。この著作が、我が將校たちにとつて、彼等に功名への輝かしき軌道を開き、その名聲を時代の暗黑から引き離し且つその勞苦を不滅ならしむるところのこの事業に對する考究への刺戟となるならば、余は、余の費した時間が無駄にならなかつたと信ずるのである。』

　その行動と學說とを總括するならば、大王は、戰術の領域において時代を遙かに拔いてゐたが、戰略の分野においては環境が彼の明快なる認識を現實に移すことを妨げてゐたといふ結論が得られる。

フリードリヒ大王の著作中ドイツ語に飜譯されてゐるものは、„Militärische Schriften" 一九一三年。四三三頁。„Anschauungen von Kriege" 一八九九年。一五〇頁。Bernhardi: „Friedrich der Grosse als Feldherr" 二卷、一八八一年。

第三節　ナポレオン

フリードリヒ大王が七年戰爭において、結局はたゞ彼の國土の保持のみを考へ、戰鬪能力をもつて戰場にあつた間は、すべてを成就したに對し、世界征服を目指せるナポレオンも、尙ほ一つの反抗能力ある敵をもつてゐた間は、何事も達成しなかつた。――前者の內的に守勢的な政策は、軍事上の最惡の場合の前に萎縮して、その制限された目標の達成のために不可缺の道具すなはち軍隊が保持されさへするならば、しばしば可能なる成果を逸するかも知れない。後者の全く攻勢的な政策は、將帥に對して、いつでも常にその全體を繰返へし敢行せんことを要求する。何故ならば、この政策は、何處で止まるかについて何等の目標をも有しないからである。――大凡そこんな風に、ヨーク・フォン・ワルテンブルグ侯は、その著『將帥としてのナポレオン』の中で、この二人の偉大な將軍の戰略の相違點の一を區別してゐる。だが、そこには、純軍事的領域において、それ以上の相違が存在してゐる。これらの相違は、用兵に關する他の根本觀念に基づくものではなく、フランス革命によつて變化せる狀態に基づくものであつた。すなはち、それは、國民軍の大衆的徵募を伴つたのである。

フリードリヒが拂はなければならなかつた多くの顧慮は、ナポレオンにとつては、無くなつてゐた。彼は、陣營および進軍における軍隊の集結に就いての危惧を捨てることが出來、かくて、必要とあらば、國外に生活することができた。だが、それは、中歐ヨーロッパにおいて、馬鈴薯の栽培が盛んになり、これは殆んど何處でも、次の月には收穫を得られた爲であつた。食糧貯藏庫は尙ほ使はれたが、全く例外的に使用されたにすぎなかつた。かくて作戰のために、大きな活動の餘地が開かれ、軍隊の數的な强度と空間の擴大の限度が增大した。フリードリヒは、その食糧貯藏庫に縛られて一度も

十萬の兵をその軍隊に結合したことがなかつたのに、ナポレオンの時には、その兵數は四十萬近くまで增大した。

ナポレオン戰略の最高原則は、大衆を形成し、一般的にではなくとも、決定的な場所において、數の優勢を獲得することであつた。この戰爭王にとつては、用兵の術は『劣勢の軍隊を有する場合においても、攻擊を行ふ地點或は攻擊を受ける地點においては、常に、敵よりも多數の兵力を持つ』といふ點に存した。この場合、彼は、數の不足をば、運動の敏速性によつて補足せんとした。何故なら『一軍の兵力は、速度を乘じた兵量に表現されるからである』。他面において、軍隊の大いさは、進軍、宿泊および給養のために、あらゆる兵種から組成され、それ自身團結せる兵團であり、時に六萬人に及ぶ獨立的な軍團に分解されるを餘儀なくされた。かゝる軍團はそれ〴〵その行軍路をもつてゐた。だが、當時尚ほ殆んど發達してゐなかつた道路網――ナポレオンは、これを、軍事的觀點から、大規模に擴大した――は、行軍のために、しば〳〵場所的分離を必要ならしめたので、皇帝は、戰鬪が切迫するや否や、個々の軍團を狹い場所に結合することを要求した。『ひとは、生存するためには分離しなければならぬ――鬪ふためには結束しなければならぬ』。この結束は常に戰鬪の前に行はれなければならないのであつて、戰鬪において初めて行はれるのであつてはならないといふのが、皇帝にとつての原則であつた。――『諸君は、二つの縱隊が、一つ半の縱隊を挾擊することを有利だと考へてゐると、余は思ふ。しかし、それは戰爭においては成功しない。といふのは、二つの縱隊は一致した行動をとらないし、且つ敵は、それを一人また一人と射擊するからである。』――一八〇七年にそう書いてゐる。また一八一二年には、――『余は依然として、戰鬪を行ふ時にはいつでも分割されてはならないといふ余の意見を固執する。ひとは、その兵力を結合し、勢力ある大衆をつくらねばならぬ。』そしてまた一八一三年、彼がライプチツヒの經驗をする以前には、『遠方の機動に參加してゐる一切の敵の部隊は、戰場の外部にあるだらう』と書いてゐる。

フリードリヒは、敵の殲滅を先づ第一に會戰の戰術的設計によつて企圖することに依つてゐたに對し、『普通の戰鬪』において敵を擊退することだけでは當然滿足してゐられなかつたナポレオンは、殲滅の成功を既に作戰によつて準備し、遠方から敵の側面を衝き、然る後最後の進軍と共に、戰鬪の前にその後方連絡を危險ならしめるべき地位にあつた。戰場の廣いこと、また中立國をして彼に通過行進を許容せしめ或は從屬せしめる假借なき行動および運動の敏速さは、一度計畫が確定されるや否や、かゝる行動を容易ならしめたし、またしばしば可能ならしめさへした。一八〇〇年、一八〇五年、一八〇六年、一八〇七年および一八一三年春の戰役は、戰略的迂廻をもつて開始された。だが、それと同時に、皇帝にとつて、戰略的突破が、なかんづく次の場合、すなはち彼が一の聯合軍を敵に廻はし、これを攻擊して潰滅せしめ次いで個々に次々と片附けることができた時に、同等の意義を有した。一七九六年、一八〇八年、一八〇九年および一八一五年の戰役は戰略的突破をもつて始つた。――この戰略によつて一八〇九年に勝利を得た內線の斷乎たる利用は、皇帝をして、その人生行路の終りに、次のような判決を下さしめた。――『余が曾つて行ひ且つ余の最も高く評價してゐるところの最大の軍事的機動は、エツクミユールにおいて實施されたが、それは、マレンゴのそれ及びその以前或は以後に行はれた他の軍事行動より遙かに優越してゐた。』

勝利を最後まで利用することは、ナポレオン戰略の原則に數へられてゐるといふことは、自明のことである。――『諸君、敵を追究せよ、刀を胸に突きつけ、敵のあらゆる連絡を切斷せよ。』――そして『全軍の殲滅といふが如き大目的を達成しうる場合には、騎兵の苦情などを氣遣つてはならぬ』。敵の戰鬪力の殲滅といふことは、あらゆる作戰の抑々の最初から最後の運動に至るまで、皇帝の一切の方策における指導的思想であつた。彼は常に軍の集團を結束して、一の作戰線の上に動かした。その變更、および一の新しい策源への後方連絡の常に困難な移動をば、彼は一の特に巧妙な機動と見た。

彼は、——彼の運星がまだ興隆期にあつた限りは——彼が敵の側面および背面に向つて敢行したあらゆる戰鬪の前に、最悪の結果の生じた場合には、如何にして變換しうるかといふ問題を眞劍に考究した。一八一二年に初めて彼は、かゝる用意を閑却し、餘りに擴大された連絡に失敗した。彼は、方向を轉じて、脅かし來る敵の軍隊を擊破するだけの兵數を有してゐなかつたのである。彼は、彼の勢力圏から餘りに遠く進みすぎ、かくてその兵力の策源から遠ざかつたから、すなはち彼は、既にフリードリヒが危險極まるものとして指摘した一『要點』を敢行したがために、失敗したのである。

だが、一年後、ライプチツヒにおいては、皇帝は、彼自身が常に極端に拒否してゐたところの行動、すなはち、場所的に廣くかけ離れた三つの方向からの戰略的攻擊といふ方法に負けた。兵數の不足を行動の敏速さによつて補足せんとする企ては、役に立たなかつた。何故なら、彼の軍隊の戰鬪價値は最早や往年の如くではなかつたし、且つ下級指揮官は、集團教育に慣れて、今や彼等に必然的に割り當てられ、自ら獨自的に解決しなければならぬ任務に對する豫備教育がなされてゐなかつたからである。

軍隊指揮に關するナポレオンの見解は、極めて種々雜多な記錄の中に、すなはち命令やら指令やらセント・ヘレナの回想錄やら、とりわけまたジオミニの著書の中に散見される。

ナポレオン一世の通信、軍事通信（Correspondance militaire）十卷、一八七五——七七年。ナポレオン三世の勸めにより發行さる。Gourgaud と Montholon がナポレオンの口述により編纂した『セント・ヘレナの思ひ出』(„mémoires de St, Helèna")、八卷、パリ。(獨譯)ベルリン、一八二二——二五年。ヨーク・フオン・ワルテンブルグ伯爵『將帥としてのナポレオン』二卷、ベルリン、一八八五——六八年

第四節　クラウゼヴィツからモルトケへ

クラウゼヴィツは、一八一二年から一八一五年までの戰役に、勝利者の側にあつて參加した。それにも拘はらず、彼は、ナポレオンと同樣に、『外線』作戰を批難した。彼は敎へていつた――『戰略においては（射擊の効力の結果逆になつてゐるところの戰術とは反對に）、敵の間に挾まれてゐる者は、その敵を包圍してゐる者よりも有利である。特に、同等の兵力或は劣勢の兵力の場合においてさへ然りである』。集中的攻擊もまたそれ自身大なる成果を擧ぐる手段であるとするならば、實にそれは、主として戰鬪力の本來的分割からのみ生ずるであらう。』（恰も一八一三年のそれの如く）。自己のために最も短い且つ最も簡單な兵力の進路を放棄して、その行動が正しいといふような場合は殆んどないであらう。かゝる場合として、彼は、最後にたゞ、正にその時にこそ集中的傾向を正當ならしめるところの物的および精神的な大なる優越性のみを認めた。彼は次の如く判定する――集中的形態は、輝かしき成果を招來し、偏心的形態は、その成果をヨリ確實に與へる、と。

場所が廣く、その場所に比較して軍隊が小さく、分割せられたる部分の急速なる意思の疎通がたとへ不可能ではなくとも極めて困難であつた十九世紀の前半においては、この見解は疑ひもなく正當であつた。その後、軍事的作戰の遂行される場合の諸條件が更に發展し、そしてこの發展は、かの行動の上にもまた影響を及ぼさずにはゐなかつた。軍隊は增大したが、場所は擴大されなかつた。ナポレオンの使用できたような少數の道路の代りに、かゝる交通の比較的細い道路網が、次ぎ次ぎに現はれた。この道路網の完全な利用により運動が容易ならしめられ且つそれによつて業績が向上されることは明瞭である。多量の彈丸を必要とする速射砲ならびにまたその他の理由から、乘物の數が、そしてまた行軍縱隊の長さが、今世紀の初頭以來、數倍に增大したといふことは、正に軍隊をば、出來るだけ多くの街道に分割することを餘儀なくせしめた。

プロシアは、兵力の變化するナポレオン的軍團の代りに、二つの師團から成り、兵力においても構成においても互に全く同等な軍團を組織した。その軍隊の大いさに對する規準は、かゝる軍團が通常の一日の行程（六時間に二・二五粁）の後に、その最後尾の部隊も、同じ日に（一日を十二時間と勘定して）戰鬪に參加することができるといふことでなければならなかつた。かゝる顧慮は、もちろん既にナポレオンにも影響を與へてゐた。しかし彼は、軍團の兵力の低下によるよりも、廣大な戰線を横切る行進の適切な配備によつて、かゝる顧慮に適應しようと試みた。もし戰鬪力をヨリよく保持せんがために、それを避けようとするならば、一軍團の數は約三萬人になるだらう。これら軍團の悉くは、出來る限り一つのそれ自身の行軍路を振り當てられた、そしてこのことは、全く自然にも、以前よりも增大した分解と、かくてまた軍隊の擴大化を招來した。

かゝる間に出來た鐵道——それはこの軍團をば、戰爭勃發と共に、國內から國境へ集中せしめねばならぬ——もまた、同一の傾向を促進した。

かくて實現可能となつた・時と兵力との節約の利益を、完全に利用せんと欲するならば、集中の廣さは、國境に至る鐵道線路の數に從はなければならなかつた。かくて、鐵道線路の數は、費用の多くかゝる、從つてまた使用を制限された手段を採ることができない場合には、反對に鐵道線路の建設を集中の必要に適用させるために、著しく增大した。軍團の擴大および屢々顯著な場所的分離の一切の不利益は、今やしかし、電信の實現によつて、本質的にまで、消滅した、ナポレオンならびにクラウゼヴイツをして、集中的作戰を拒否せしむるに至つた最も本質的な理由の一は、これによつて排除された。戰鬪の決定を長びかせたところの武器の射程距離の增大は、軍隊の諸部分が、敵によつて孤立的に包圍され、他の部隊が聯絡をとる前に、壞滅されるといふ危險を除去するために、與つて大きな力があつた。

それだからモルトケは、曾つてナポレオン或はフリードリヒ大王が採つたとは別の行動を採ることができた。

フリードリヒは、常に、戰鬪準備をとゝのへた集結せる軍隊をもつて行軍し、ナポレオンは、兵力をば、既に戰鬪開始前に、集團的に結集することを根本的に要求したが、モルトケは、意識的に決定的な前進をなした――すなはち、彼は、この集結を、戰鬪そのものゝうちにおいて初めて圖らうとするに至つた、もちろん、それは、この處置を、何等か獨自の妥當な原則に高めることなしに、そうしたのであつた。彼は、ある場合には、『内線作戰の爭ふべからざる利益』をも認め、且つ一定の種類の作戰が、それ自身として優位を内包するといふことは決して信じなかつた。彼はむしろ、機に臨み變に應じて、それを應用するために、その利害得失を明瞭にしようと試みた。彼は、理論的見解に影響されることなく、個々の場合に、客觀的判斷に從ひ、目的に合致した行動をとることを要求した。

正にその故に、彼は、時代の進步に促がされて、新しい獨自の道を進んだ。『高級指揮官に對する訓令』において、彼は一八六九年に、次の如く述べた――完全に變化した事情は、最も偉大な將帥によつて樹立された規準すらをも、現今においては使用しえないものと思はしめる。それは、『正しい擧措をもつて、あらゆる瞬間に刻々と變化する情勢を把握し、然る後に、最も簡單にして且つ最も自然なるものを、熟慮斷行すべき』戰略にも妥當する。個々の場合に、彼は、『一點に集中された軍隊は、進軍することも、作戰することもできない。それは、長きに亘つて一般に存在しえない、それは、たゞ戰ふことができるだけだ、……先づ進んで敵に近づかんと欲する者は、集中して一つの道路或は少數の道路を進まんとしてはならない。作戰のためには、何等か可能なる限りは、分離狀態を固執すること、決戰のためには、結集されてあることが、大軍指揮の任務である。』と述べた。個々の場合には、彼は、たゞ存在する道路の數および相互的援助の必要のみが多くの行軍縱隊への分割を制限すると論じてゐる。

軍團は、二つの師團縱隊に分れて行進するのが最もよいであらう。『軍隊が戰鬪前既に集中されて敵に近づかしめられるなら、敵の包圍或は迂回のためのあらゆる新しい分離は、その戰術的な活動範圍における側面行進を條件づける。もし會戰の日に、戰鬪力が、離れたる諸點から戰場に向つて集中されうるならば、もし作戰が、かくして、種々なる方面から、最後の短い行進を、同時に、敵の正面および側面に向つて行ふといふ風に立てられるならば、有利なところや不利なところや、等しからざる諸關係が現はれる。そこで戰略が、その爲しうるところの最善を盡すならば、その結果は偉大なものであるに違ひない。』

この教訓は、一八六六年におけるボヘミヤ戰役の輝やかしき勝利の後に掲げられたものである。だが、當時の集中の異常なる廣さ(十八師團に對し三百キロメートル以上)は、戰略的な合目的性に基づいて選ばれたものではなくして、その根據は、鐵道輸送路によつて條件づけられた集中關係および政治に對する顧慮にあつたのだといふことは、もちろん看過してはならぬ。一八七〇年の集中は、遙かに緊密な集結を示し、先づ第一に、メッツにおいて、またストラスブルグにおいて待ち構へてゐるフランス軍隊に對する内線作戰を目論んでゐる。こゝにおいても亦、極めて敏速なる戰鬪準備と、かくてまた敵に對する優越とを可能ならしめた集中關係が決定的なものであつて、正しいと認められた理論が決定的なのではなかつた。だが、このことは、個々の作戰の進行につれて、直ちに完全に實現されることが判かる。ヴェールトの會戰のための集中ならびにメッツ附近のモーゼル河に向つての及びこれを渡つての集中は、これに對する證據を提供してゐる。そフランス軍の一部をこの要塞に封鎖し、他の部分をセダン附近の平野に包圍したことは、モルトケ戰略の白眉である。それは、ケエーニヒグレッツの戰と同樣、緊密に結集された敵に對し、廣い戰線を敷いて行進することにより、且つあらゆる部分の適切なる旋回をもつて遂に包圍することにより、達成されたのであつた。

用兵に關するモルトケの見解は、彼の戰役想定、作戰の間における指令および訓令ならびに少數の大部な草稿、なかんづく一八六九年の高級指揮官に關する指令および戰略に關する一八七一年の全く短い論稿の中に盛られてゐる。

參謀本部編、戰史、第一編、一八五七年から一八七一年に至るモルトケの戰術＝戰略論。ベルリン、一九〇〇年。モルトケの戰爭論（Kriegslehre）、一――三卷。ベルリン。一九一一年――一二年。

第五節　シユリーフエンから世界大戰へ

モルトケの作戰は、壓倒的な勢ひで實施された。それは、一八七〇年の戰爭勃發の際には殆んど四〇パーセントに達した。それ故に、參謀本部により一九一二年に發行された。モルトケの戰爭論の中には、次の如く述べられてゐる――『全作戰は、いふまでもなく、決定的な數的優越によつて遂行することができた。――數的優越なしには、同時的なメッツの封鎖、ストラスブルグの攻圍およびパリへの進軍は、不可能であつたらう。永續的な成功は、一般に、抑々の最初から數的優勢をもつて戰爭に赴く時にのみ達成することができる。』

シユリーフエン伯爵には、劣勢の、最善の場合においても同數の軍をもつて、勝利を用意するといふ困難な任務が課せられた。しかもこの場合、戰鬪は、西部に對しても東部に對しても同時に遂行されねばならなかつた。既にこの後の理由からしても、戰爭遂行の全般に亘るシユリーフエンの戰略は、內線の有利性の上に、打ち建てられなければならなかつたがしかし、個々の場合においては、彼の目標は、外線の利用の下に、決戰において、包圍により、可能ならば兩側から殲滅することであつた。ハンニバルが優勢の敵に對して啻に勝利を博したのみならず、二方面から包圍して敵を殲滅したカンネの役は、彼の模範となつた。彼は、この際、クラウゼヴィツにより、かゝる場合の前提條件として要求された。ド

イツ軍隊の精神的および肉體的優越性に信頼したのであつた。しかも、シュリーフエンの名を聞けば直ちに思ひ浮かぶその作戦計畫、すなはちフランス軍撃破の計畫は、兩翼包圍の上に立てられたのではなかつた。何故ならば、西部戰線における全狀勢は、かゝる行動を除外してゐたからである。この包圍は、たゞ一翼的であつた、そして深い梯形隊に編成された攻撃集團を敵の側面に配置した點は、ロイテンの場合を大規模にしたのと似てゐた。とはいへその時、戰爭は、タンネンベルグにおけるシュリーフエンの最高要求の充足をば、一の軍隊の範圍内で成熟させてゐた。その上に、シュリーフエンの精神は、ドイツ軍の殆んど全部の指揮に漲つてゐたから、殆んど完全に遂行された企圖にも缺けてゐなかつた。

全戰線における内線の利用に對しては、多岐に亘る、部分的には實に軍事的要求によつて設置された鐵道網は、以前の如何なる戰爭にも見られなかつた如き可能性を提供した。全軍は、戰線から戰線へ、翼から翼へ、敵の適時な聯絡を斷つだけの敏速さをもつて移動することができた。かゝる行動の利益は、距離の増大と共に増加した。集團は、急速、確實、且つ節約された兵力をもつて、單に最初の集中に際してのみならず、繼續的な戰爭において、正にそれが使用される場所へ輸送される。この可能性は、老モルトケが、一八六六年、ケエーニヒグレツの決定的勝利の後、勝ち誇れる軍隊の集團を、鐵道によつてラインへ持つて來ることにより、ドイツの戰爭へのフランスの干渉の危險を防止しようと欲した時に既に最初に認めたところである。それは當時は行はれなかつた。一八七〇年の戰役には、優越せる數と決定的な勝利のため大軍の鐵道による移動の必要は起らなかつた。シュリーフエンの計畫に從ひ、ナポレオン的方法で開始された世界大戰においては、鐵道による移動は、益々大きな役割を演じた。——先づ一の敵、次いでまた他の敵が、全力をもつて攻撃され且つ撃破される筈であつた。シュリーフエンの後繼者は、これが遂行を、既に第一の敵に對して失敗したので、その目標を直ちに制限し、且つフリードリヒ大王が七年戰爭において採つた處置にも比較すべき處置を採るに至つた。だが、これ

によつて、今や鐵道により提供された內線の利用は、ますます大なる重要性を獲得した。內部（Innenraum）の增大する廣さ（戰爭勃發の當初は、西部戰線から東部戰線まで約一千三百、一九一八年には二千キロメートル）は、今日に至るまで比類なきまでの規模と敏速さにおいて、同時に戰鬪力を節約しつゝ、一の戰場より他の戰場への軍隊の移動を成熟せしめた。行進は、殆んど先づ敵に極めて接近した最後の道程においてのみ問題となり、步兵隊は結局こゝでも亦しばしば自動車輸送によつて代へられた。かくて、旣存兵力の利用の增大により――ナポレオンが言つたように――量と速度との積の所產として、その活動力は幾倍にも增大されることになつた。だが、かゝる計算の正當性もまたその限度をもつといふことは、尙ほ論議の餘地があらう。尙ほまた他の點に關しても、作戰の條件は、技術、なかんづく鐵道および通信機關（電信電話）の發展によつて變化した。各個の黨は、それぞれ自國において敵と同樣、確實に動いてゐる交通網を使用しうる程度を異にしてゐるから、敵國における作戰には、以前の戰爭において見られた程度を凌駕する困難が生じた。タンネンベルグの戰は、東プロシアの鐵道および電信網の利用によつて、勝利が得られた。マルヌ作戰に際しては、フランスの優秀な交通が、重大な役割を演じた。

巨人の如く成長した軍隊の兵力は、全く新しいものであつた。フリードリヒ大王は數萬の兵をもつて、ナポレオンは數十萬の兵をもつて戰つたが、シュリーフエンは數百萬の兵をもつて戰はなければならなかつた。かゝる大衆を指導する可能性には、疑ひをもたれたのであつた。それについて彼は答へた――『その事に就いては、軍隊の指導といふことが、大軍であれ、小軍であれ、昔から一つの術であつたといふ限りにおいて正しい。だがしかし、この術を實行することの困難さが、軍隊の兵力の增加と同じ程度において增大するといふことを證明することは困難であらう。三十萬の兵をもつて完全に敗北した將軍があつた。だが、それをもつて、五萬乃至十萬の兵でなら勝利をえられるだらうとはいへない。兎も角

如何なる將帥といへども、過大な兵を委かされることに對しては苦情をいはないが、過少の兵の場合には、例外なしに、誰でも苦情をいふことだけは確かである。』

戰線の廣さは、兵數の膨脹に適應してよりも、武器の效力の增加とそれに適應せる散開編成によつて、尙ほ著しく强化された。フリードリヒの六萬五千の兵隊は、ロイテンの戰において五キロメートルの攻擊戰線に押し込められたが、一九一四年には、戰線の廣さは、その倍よりも遙かに擴大される必要があつた。しかし、尨大なる兵數とそれをも更に凌駕して擴大された戰線の廣さからして、軍集團は、以前よりもより廣い策源に據るといふ結果になつた。後方への連絡は、戰線の廣さに逆比例して短かくなり、最早や單一の線ではなくして、廣大な面をなし、大抵の場合、戰線そのものと同樣の廣さとなつた。かくてそれも亦、遙かに脆弱ではなくなつた。この後方への連絡を、包圍によつて有效に攻擊する作戰は以前とは比較にならぬ程の廣さと深さとをもたねばならなくなつた。その爲には、しかし、殆んど餘地がなかつた。何故なれば、それは大きくはならなかつたし、ロシアの廣大な曠野においてさへも、最後には、フリードリヒやナポレオンや或はモルトケのいつた意味で『作戰する』可能性はます／＼萎縮してしまつたほどに軍隊をもつて充滿してゐたからである。最後には、補給の困難が、集團をもつてする一作戰の奇襲的實行をば、如何にそれが決戰の遂行のために必要であらうとも、全く排除しなかつたとはいへ、極端に困難ならしめたような地域だけが空地として殘されたゞけであつた。だがもし決戰遂行以前に、奇襲が失敗したならば、自身の國土にある敵にとつては、その鐵道、すなはち內線の優越が當然有利になつた。この優越性は、包圍攻擊作戰の成果をば、行進を賴りとした以前の時代の對抗運動とは全く異つた風に問題とすることができた。フランス軍の北の翼に對する、シュリーフェンによつて案出された包圍作戰は、ドイツ軍隊の優越的能力により、あらゆる種類の食糧品の豐富な國において、しかも戰爭の當初にあつてはまだそう大した軍需品の必要が

增大してゐなかつた時のものであるから、失敗する筈はなかつたのだ、だが、ロシアの廣大な地域で、多くの軍勢により行はれた一九一五年秋における包圍作戰が、敵を殲滅してしまふ以前に、克服し難い補給困難に當面しなくても濟んだかどうかといふことは、依然として未解決の問題である。

何となれば、モルトケ以來、彈藥およびあらゆる種類の兵器に對する需要は、軍隊の兵數よりも、遙に多く增大してゐるからである。武器の數の增加と射擊速度の增大ならびに數多の技術的兵器とは、戰鬪のための需要をば既に戰爭開始までに恐ろしく增大させ、且つ戰爭開始後は加速度的に途方もなく膨脹させた。だが、同時に、武器の射擊距離の增加は戰鬪の繼續時間をも亦、數時間および數日から數週間に、遂には數ケ月に增大せしめた。鐵道および自動車によつて增大せしめられた供給の可能性さへも、前進する攻擊に、中絕することなく充分な武器彈藥を供給するためには、最早や殆んど充分ではなかつた。武器の需要は東部戰線における一九一五年の攻勢のために增大し、且つそればかりでなく、その後に資材戰 (Materialschlaht) に變質した西部戰線における攻擊のためには次のような風になつた――すなはち、大きな衝突の起る每に、軍隊の兵力は消盡され、そして新しい軍需品の到着と、長い戰爭によつて絞り上げられた地域においては定着せる大衆に對する給養が期待されなければならなかつたから、戰鬪行爲は一時的に停止されるに至つた。このことは敵にとつては、時の猶豫の利益と兵力の移動および地形の强化による新しい防禦準備の可能性を意味した。漸次的な防禦の期待は、武器の作用の增大によつて確かに高められ、更に擴大された。モルトケは敎へて曰く――『戰鬪はたゞ一の時期を滿たすにすぎぬ。成る程それは最も重要なる時期ではあるが、しかし戰鬪のための運動、すなはち進軍は、戰場における一軍の全生活を滿たすものである』。これは今では變つてしまつた。以前の戰爭においては、たゞ一日の會戰日の勝利の後には、稀な例外をもつて、多かれ少かれ戰鬪の行はれない數週乃至數ケ月が續き、その時には、軍の集團にとつては敵との接

觸が停止され、勝利者は、その戰果を獲得したのであつたが、世界大戰における戰鬪は、敵との直接的な接觸が一度開始されるや否や、殆んど中斷することがなかつた。ナポレオンがイエナに向つて、グナイゼナウがベルアリアンスに向つて遂行しえたような、戰はずして爲した追擊の如きは、世界大戰の時には、ヨーロツパの戰場においては、最早や再び行はれなかつた。何故なれば、武器の防禦力が、追擊軍の速度に對抗し、毎日々々新しい攻擊を餘儀なくせしめたからである。その結果、敵を擊退することは遲々として行はれ、それは『追擊』といふ誇らかな名には殆んど値ひしないものだつた。

陣地戰といふ現象は、これまで叙述された諸關係と密接な關聯を有してゐる。陣地戰は、前世紀の構築された保壘および哨兵線に、近代では一九〇四年の日露戰爭に、その先例を有してゐた。陣地戰においては、互に格鬪する對抗者の兵力が均衡狀態に陷つたといふことが表現された。一地點における陣地を强化するために多くの時間があればあるほど、そして强大な兵力をもつてする作戰により、速かに且つ深く、敵の側面および背面を衝く可能性が消失すればするほど、陣地戰の膠着狀態から再び脫する望みは益々少くなり、かくて殆んど要塞戰の形態をとつた。

そこで、クラウゼヴイツが既に可能性として述べたところの場合、すなはち海洋から海洋へ、或は中立地帶から中立地帶へ、線が眞直に延びてゐる場合が起つた。この場合、この線は、現在では、完全に且つ强力に占領されてゐたから、これを突破するには、軍隊の大集團および極めて强大な戰鬪手段によるより外に仕方がなかつた——このことはクラウゼヴイツもまだ認めなかつたところである。防禦をば、唯一の線から數十キロメートルに及ぶ深い地帶に移すと共に、かゝる企圖の困難さは、測るべからざるほどに增大し、その結果、最後に一九一八年のドイツの攻擊指令は、突破に際して採られた處置をば『敵の陣地體系を貫く蠶蝕行進』と呼んだ。それは『大抵は、敵の强大な攻勢的抵抗の下に』行はれた。だが、かゝる突破は、作戰に導くために、近代的な軍隊の兵力と射程距離に適應した幅において達成されなければならな

かつた。戰術的勝利は、最早やナポレオンやモルトケの時代におけるが如く、作戰の終了および榮冠としてその最後に立つものではなく、それは、作戰の發端と前提條件とになつた。かくてまた既に述べたところのルーデンドルフの——戰術は戰略の上位に置かれねばならなかつた、といふ文章が是認されたのである。作戰を初めて可能ならしむべき（從來の如く逆ではなく！）攻撃戰の場所は、最早やひとり或は主として戰略的觀點に從つて決定することは出來なくなつた、それは寧ろ何よりも先づ戰術的觀點から決定されなければならなかつた。しかも陣地戰においては、作戰的に形成されえたような程度の戰術的突破は、軍隊およびあらゆる種類の戰鬪手段の大量的使用にも拘らず、ますます新しく、極めて注意深く考究された戰術的および技術的處置にも拘はらず、嚴密にいへば、たゞ一度、一九一七年秋に、イタリー戰線においてのみ成功したのみであつた。その他一切の企圖は、作戰的突破とは認めることはできない。何となれば、それらのものにあつては、前方へ打ち込まれた攻撃の楔は、鐵道および自動車により急行せしめられた豫備隊が突破された個所を閉塞するのを妨げるほど强力で且つ迅速だつたことは曾つて一度もなかつたからである。それだから、陣地戰におけるこの突破攻撃は、實にしばしば强く突き込むが、その後の經過においてはいつも撃退され、敵の戰鬪力を諸部分に分裂させ、これに對し、突破した場所において内線作戰を可能にせしめるようにはならなかつた。だがそれは當然なことであつた。かゝる目標設定の外見的な見込みなさは、聯合軍でさへも、一九一八年の夏および秋に、その攻撃に際して、兵數および資材において非常に優越してゐたに拘はらず、狹く限られた目標に滿足したことの原因でもあつたゞらう。この攻撃には、作戰計畫は殆んど認められなかつた、それは寧ろ『普通の戰鬪』における撃退に歸着した。戰略は、兵集團および資材の暴力的衝突によつて取つて代はられた。

世界大戰のもたらした上述せる一切の新現象、なかんづくまた個々の會戰の繼續時間の延長とそれに相應する全死傷數

の増大との交互作用によつて、軍隊の衰耗を生じた。しかもこの衰耗は、休息、訓練および補充の問題を如何に注意深く規制しても、恢復しえなかつた。『卿が十分に有してゐる新兵は、もとより兵士の數を補充するに足るが、しかし卿の失つた兵士の質を補充するには足りない』——と既にフリードリヒは敎へてゐる。軍隊は、第一回目の衝突には、猪突的な蠻勇をもつて戰ふが、第二回にはそうではなくなり、衝突が幾度も繰返へされると完全に第一回のようには戰はなくなる。軍隊といふものは、戰鬪力を失ふことなしに幾度でも任意に使用できる將棋の駒では決してない。これは決して新しい知識ではないが、しかしそれは、世界大戰の事情によつて、極めて明瞭に闡明された。一八七〇年八月十八日の決戰において、モルトケは、活動的な二個の軍團を、豫備軍として戰線の後方に立たせて置くことができた。それは、これらの軍團が二日前に血戰をやつたからであつたが、しかも勝つことができた。世界大戰においては、そのようなことは迚も考へ得られなかつた。最後の一人といへども繼續的に使はれたのである。同一の軍團および師團が不斷に戰鬪を續行した。內線の利益は、實際に一時的には、敏速なる運動によつて、自己の兵力を幾倍化しうるが、しかし、それが繼續すると、正にそれによつてまた兵力の奔命に導き、これは有害な作用を及ぼさずには置かなかつたし、且つ最初に存在したドイツ軍隊の戰鬪價値の偉大なる優越性をます〱後退せしめた。補充が忽がせにされてゐる際の軍隊の過勞と無氣力化は、增大し行く敵の優勢に對する繼續的鬪爭において、ドイツの兵力を消散せしめた。

こゝで考察をシユリーフエンに戻そう。彼は、敵をば次ぎから次へと打破するために、最も迅速なる移動により、作戰上における自軍兵力の幾倍化を確かに欲した。だが、彼は、かゝる行動が久しきに亘る時は、軍隊の兵力が當然消耗されずにはゐないといふことをも明瞭に知つてゐた。これ彼が——就中ドイツの狀勢の下において——たゞ即戰即決のみが好望であると考へたことの一つの理由であつた。彼は、かくて根本的には、フリードリヒ、ナポレオンおよびモルトケと同

一の見解を代表した。

自から軍指揮官たることを許されなかつたシュリーフエンは、彼の作戰に關する諸見解をば、一系列の戰史研究に書き下ろした。その中でも『カンネ』は最も有名である。そればかりでなく、参謀旅行、大演習および作戰の課題に關する未發表の論議は、一の寶庫である。

元帥伯爵アルフレッド・フォン・シュリーフエン、全集二卷、二六六頁および四六〇頁。百八十枚餘の地圖および略圖附き、ベルリン、一九一三年。

エリッヒ・フォン・ファルケンハイン――『最高軍司令』(Erich von Falkenhayn:,, Die Oberste Heeresleitung") 1914—1916 Berlin 1920, 二五二頁。

エリッヒ・ルーデンドルフ――『我が戰爭の思ひ出』(Erich Ludendorff: ,,Meine Kriegserrinnerungen")Berlin 1919. 六二八頁。同じく『最高軍司令の記錄』(,,Urkunden der Obersten Heeresleitung") Berlin 1920, 七一三頁。同じく『戰爭指導と政治』(,,Kriegführung und Politik". Berlin 1922,)三四二頁。ウオルフガング・フエールスター『シュリーフエン伯と世界大戰』. Wolfgang Foerster: ,, Graf Schlieffen und der Weltkrieg",) Berlin 三〇五頁。

第六節　回顧と展望

フリードリヒの戰爭から世界大戰の終末までの百五十年間において、戰略は、驚くべき變化をなし遂げた。それは、ナポレオンおよびモルトケの用兵において、並びにシュリーフエンの戰爭準備と世界大戰中の東部戰線におけるドイツの初期の作戰において、その最大の凱歌を奏した。限られたる地域上の大軍、資材、技術は、世界大戰におけるその活動力をば、ます〳〵狹い範圍内に押し込めた。最後には、個々の地域的に分離された軍隊の代りに、連續して殆んど直線的な戰線が現はれた。これは全く未曾有の抵抗力と同時にまた彈力性を有するものであり、かくて戰略の手段をもつて、戰爭遂

行の最終且つ最高の目標たる敵の殲滅を達成することは、ますます困難になつた。とはいへ、それは、なほ個々の作戰において、大體において見れば、なかんづくドイツ軍隊に成功をもたらした。我々の敵の最後の勝利は、戰略によつて成就されたのではなくして、殘忍な優勢により、純粹な正面壓迫をもつて、その上にまた政治、經濟、宣傳の分野における非軍事的な手段によつて成就されたのであつた。

戰略的考慮、戰略的に望み多き素質、およびそれに照應せる攻擊のための集團或は重點の形成は、大戰の終結に至るまでも、一つの役割を演ずることを止めなかつたのは確かである。それについては例へば、一九一五年の夏には、ウイルナの攻擊の方がプラスニツシユ攻擊よりもヨリ効果的であつたらうといふことは、一九一八年に、イギリス軍隊をフランス軍隊から切り離すために行はれた西部戰線におけるアミアン近傍のゾンメに至る前進の意義、或は反對にドイツ軍の右翼を擊破するためにフランス軍によりベルダンから最短距離をとつてオランダ國境に對し行はれた持久的前進の意義についてと同樣、少しも疑問の餘地がありえない。以前との相違は、次の點に――すなはち、作戰的に正しいかゝる目標設定は、從前の狀態においてならば望みえたであらうような大なる成功を、最早や期待しえなくなつた。何となれば、戰術的勝利の獲得は、實に夥しき時間を必要とし、かくて、作戰的に決戰を行ふ方向への迅速なる前進に對する期待は、餘りにも少くなつたからである、といふ點にある。

例へば一九一五年のガリシアおよびポーランドにおける如き、略々五キロメートル以上には及ばぬ地の利をえた作戰をもつては、無線電信電話により、その一切の部隊の行動をいつでも統制することができ且つ自國の鐵道網を使用してゐる敵をば、封鎖し或は突破することはできない。――たゞ明白なる危險をも冒して踏み止まり、決戰を敢行する用意を自からしてゐる場合には、その事情は異なるであらう。しかもその場合にも、確保されたる交通機關によりその側面に對して

受くべき資材戰 (Material Schlacht) に對し、その攻撃者と有利な條件を同じくしてゐない。一九一四年のロッヅにおけるロシア軍の頑張り、一九一五年におけるウィルナの東方へのその反撃は、その例である。突破の際における狀態は一九一八年の西部戰線におけるドイツ軍側の如く、陣地戰狀態に對して極めて輝かしい戰術的成果を擧げ、夥しい捕虜とその他の捕獲物を得た場合においてすら、更に困難なものである。地の利は、幅と深さから見て、決戰作戰の方法には充分ではなかつた、そして戰場における道路と鐵道の缺如および打開された破口の狹さは、既に繼續的な戰術的攻勢の給養をさへ問題とし、且つ敵の反抗の增大に當面して、最後には全く停止せしめた。

用兵の消極的方面、すなはち防禦においては、防禦陣地が戰鬪行爲の終りとしてのみならず、また先見的な計畫に基いて發生する限り、依然として、戰略が防禦陣地の選擇を規定した。戰略はまた、準備陣の場所および時と豫備軍の移動をも規定し、且つそれによつて、防禦の効果的な遂行に對し、決定的な重要性を有した。だがそのことは、戰略が、その本來の分野、すなはち敵の戰鬪力を壞滅せしむべき用兵の積極的實踐において、陣地戰の開始以來殆んど發言してゐないといふことを救ふものではない。

世界大戰の開始に際しては、すべての參戰强國は、攻擊的に戰爭を遂行したが、しかし、それによつて完全な成果をえた國は一國もなかつたといふことは、戰爭終結の直後、ドイツにおいて、この行動に反對し、クラウゼヴイツに從つて、正に防禦こそ用兵のヨリ强力な形態である、といふ議論に注意を拂はしめた。だが、もし凡べてのものが防禦をするならば、その結果は、靜止となるであらう。結末に關する決定は、戰略によつて、軍事的權力手段の外部に存在した諸力に、讓渡されるであらう。

それはだが、自己の任務に自信のもてない戰略のみのなしうることである。決戰における勝利、すなはち敵の戰鬪力の

殲滅は、戰爭の一切の手段、——政治的なものだらうと、經濟的なものだらうと或は宣傳的なものだらうと、すべての手段を完全に壓倒するところの手段である。最善の宣傳は、——とクラウゼヴィツはいつてゐる——軍事的な勝利である。ケエーニヒグレツ或はセダンの後には、一切の政治的な陰影は拂拭された。それは、マルヌの退却がなかつたとしても、世界大戰において消し去られたであらう。

それ故に、軍事的勝利をば、一切に卓越する目標として成就せんとする希望を尙ほ有してゐる者は、それを得んとして努力する義務もある。かゝる希望が、世界大戰において、敵、味方ともに發端から裏切られたといふことは、この高い目標への努力を斷罪することを是認するものではなくして、先づ第一にたゞこの希望を生み出したところの間違つてゐるかも知れない見解、或はこの目標達成のために採られた恐らくは不充分な行動の再檢討を必要ならしめるのである。

この點に關しては、フリードリヒおよびモルトケの如き人もまた一時的には、攻擊よりも防禦に優位を與へるような思想を追求した——すなはち前者は、將帥としての最高功績の後、困難の壓迫の下に、後者は、參謀總長としての彼の活動の最初の年に暫らくの間、針發銃の採用後增大した步兵の防禦力を利用する意圖の下に——といふことは、興味のないことではない。その目標は、兩者の場合とも、防禦から、敵を弱めるために攻擊へ移ることであつた。それは、世界大戰におけるドイツ艦隊の行動の根抵にも存したのと同一の思想である。この思想は實行し難かつた、何故なれば、敵は攻擊的態度をも、また期待したような緊密な封鎖的態度をも採らなかつたからである。陸上においても、似たようなことが起りうる。敵がかくの如き態度をとるならば、戰爭は休止するであらう。それはしかし、自己の狀態の改善を時間に期待する者にとつてのみ堪へうることである。それの出來ない者は、それを以つて勝利をうるために尙ほ何等かの希望が存する限り、自己の銳どい武器を攻擊のために利用するより外に仕方がない。

しかし、今や陸戰における攻擊の困難さは――既に述べたように――戰術的に且つ作戰的に、世界大戰において次の理由により増大した――すなはち、決戰を行ふ作戰を立てさせるべき希望が益々減少したのである。それは、この方向への見透しが、爾來、改善される限りにおいて、尙ほ決定的に明瞭にされてはゐない。

空軍および遠距離砲の異常なる發展――それは、深く背後地（ヒンターランド）に至るまでのあらゆる行軍路および輸送線の計畫的利用をば問題とし、且つ攻擊軍をして、敵軍から遙かに離れてゐる時から既にその兵力を最小の部隊に分割することを餘儀なくせしめる――は、不意打ち的の迅速な攻擊、そしてまた從來の如き地上部隊のあらゆる作戰の見込みをば、以前よりも遙かに減少せしめた。かくて、この困難を克服すべき一つの途、――すなはち、奇襲によつて敵を壞滅し、最早や二度と決定的な反抗のできないようにするような急速な戰術的勝利をば再び獲得しえられる途が發見されなければならない。

この希望は、發動機の力で動き、最高の速度と最大の行進力とを結合せる兵團（Verbände）に向けられる。それは、敵の側面および背面への不意打ち的運動を再び可能ならしめ、なほまた、その砲擊力によつて、敵の正面への迅速なる突擊をも可能ならしめる。かくの如く迅速にして行進力あり且つ砲擊力ある裝甲車の軍隊が、戰鬪力ある航空隊に支持され、動力化された兵團に直接後續されるならば、急速且つ斷乎たる決戰、適確有効なる追擊、從つてまた地上における用兵への運動を、再び實現するといふことは可能である。

かくの如くして陸上戰略にいつか重要な意義を取り戻さしめうるであらうこの方法は、まだ實驗されてゐない。この方法が他日試みられるであらうといふことは確實だといへる。この方法を最もよく準備して進む者は、それによつて恐らくは、曾つてナポレオンやモルトケが有した如き巨大なる優越さを、敵に對して有するに至るだらう。

曾つて次の如く要約されていはれたことがある――もし一方の相手が、その組織および戰術をばよく發展させ且つその武裝を整備し、その活潑なる突擊性において敵に對し優越するならば、運動を保持し、武力手段による決戰を行ひうるための最大の前提條件の一つを確實に有してゐる』（軍事週刊紙 militär-Bochenblatt 一九三四年。四八號、一〇六五頁）

既にこの理由からしても、希望と探究とを放棄することは誤りであらう。況んや陸軍力は、その姉妹たちによつては解決されえない任務を有して居るにおいてをやである。希望は、陸上および海上の任務と同程度に課せられた空中戰略に向けられる。空中戰略がひとり敵の反抗を擊破しうる地位にあるか、それとも將來その地位に就くであらうかは、尙ほ疑問の餘地がある、そしてそれは、攻擊を受ける國の狀態、なかんづく國防上から見た地理關係に從つて變化するであらう。

しかし、將來戰の戰略は、――既に先に指摘した如く――陸上戰略、海上戰略、空中戰略をば、三部門の專門家の共同に基いてゞはなく、一人の、最高の、これら三部門のすべての上に立つ軍事指導者に指導されることによつて一つに統合されなければならぬ、といふことに就いては些かの疑問も存しない。

我々は信ずる、かくて戰略は、最早やひとりたゞ陸上戰略としてゞはないとはいへ、戰爭遂行の精神的な司令部としてそれに無條件的に相應した決定的な役割を演ずるために、再び取り上げられるであらうといふことを。

第四章　經驗と學說

第一節　概　論

こゝでは先づ第一に作戰（Operation）すなはち軍隊の運動について論ぜられるであらう。何となれば、作戰は、戰略の本來の分野をなしてゐるからである。だが作戰の準備および遂行と關係のある一切のこともまた顧慮されなければならぬ、そして就中その最終目標たる戰鬪は、既に戰術の分野に入り込んでゐるとはいへ、全くこれを除外することはできぬ。

一の作戰學說は、觀察と檢討に限られなければならぬものであつて、決して强制的な法則を樹立しようとしてはならない。作戰を如何に遂行すべきかは、個々の場合の正しい判斷において、健全なる人間理性と將帥の性質が、自由なる自己の選擇に從つて決定しなければならぬ。これが決定に當つては、整然と基礎づけられた理論も彼を助けることはできないし、尙ほ更彼を拘束してはならぬ。これに反して、經驗は、それが常にたゞ限られてゐる自分自身のものでも、また就中他の人が爲したもの、すなはち從來の戰史の硏究でも、情況の判斷と適用すべき手段の選擇に對する手掛りとして最高の效用を有するものである。戰爭の一切の經驗をば、一度は出來るだけ硏究して置いて、實際の場合に初めて打つかり、驚いたり、周章てたりすることのないようにして置くことが大切である。それにも拘はらず、戰爭といふものは、いつでも全く新しい現象に滿ち滿ちてゐて、それは――クラウゼヴィツのいつてゐる如く――『岩礁のいつぱいある未航の海であり、その岩礁は、將帥の心も感知することができず、彼の眼も曾つて見たことがないもので、今や闇夜の中でそれを避けて航行しなければならないのである。』

それ故に、以下においては、我々が作戰に際して遭遇するところの最も重要な諸現象および諸槪念を闡明する試みが爲されうるだけである。我々は、この際、國家首腦部のみを自己の上にもつか或は國家首腦部が自分自身に具現されてゐる（フリードリヒ大王、ナポレオン）最高軍司令部と、大規模な戰爭では同樣に獨立的に作戰しなければならぬ下級指揮官との間に區別をつけなければならぬ。最高指導部に就いて言はれることは、それに從屬せるものに就いてもまた適切に當

てはまる。だが、一つの差違は恐らく次の點にあるだらう――すなはち、後者は、自己の上に一の地位――それは、軍事においては、たとへヨリ高度の識見を持つて居らずとも或は持つことを要求されなくとも、同等の識見を持ち、且つその意見をば、自己の爭ふべからざる長官たるの地位によつて、無條件的に通用せしむることができるところの地位――を有してゐるといふ點に。

第二節　任務と命令

將帥が、もし同時に國家の指導者たる時には（フリードリヒ大王、ナポレオン）、自分自身に課したところの、然らざる場合には、その職にある者――最高の將帥にとつては國家の指導部がそれである――により命令として指示されたところの任務こそ、あらゆる軍事行動の基礎をなすものである。この場合、國家首腦部は、少くとも彼に專門家として意見を聽くのであるが、しかし決定的な意見を述べさせた方が更によいであらう。（政治と戰爭指導の項參照）。

任務は軍事的な目標設定を含んでゐる。この目標設定は、戰爭の目的により、自國或は敵國の政治的要求の大きさにより、且つまたこれによつて戰爭遂行のために生ずる狀態によつて規定される。それらは根本的に異りうる。最近四十年間における若干の實例に徵して見たゞけでも、一八九九年に、イギリスが、本國から四週間の航行により、傭兵および義勇兵をもつて南アフリカに侵略戰を行ひ、これに對し、南阿諸國は、國民徵兵により、イギリスの膨脹要求に對抗してその獨立を防衞した時には、それは全く異つたものであつた。日本とロシアが一九〇四年に、支那領土の一部の占有のために戰つた時もまた異つたものであつた。すなはちこの時の一國は、海を隔てゝゐるとはいへ、直接その門戶の前にあり、他の一國は、その本國の兵力源泉地から六千キロメートルも隔つて居り、たゞ一本の單線鐵道によつて繫がれてゐたのであ

つた。一九一四年、世界大戰において、ロシア、セルビヤ、フランスおよびイギリスが聯合し、共同の集中的攻擊によつて、中歐諸國（獨墺側——譯者）の脊骨を打ち挫かうとし、他方、中歐諸國は、危急存亡の戰において、同樣にたゞ壓殺に對する攻擊によつてのみ防衞することができた時にも、それは全く異つてゐた。最後にまた、フランスが、一九二三年に武裝解除されたドイツに對し、ルール領域に侵入した時も、それは別のものであつたし、また今日、イタリーが、近代の一切の成果によつて武裝された師團を、アフリカのアビシニアに進めてゐるのも、また別のものである。或る場合には、國民と國家の存立のために最後の一人までを賭することもあり、或はたゞ限られた手段だけしか用ひない限られた目標だけしか問題にならないこともある。何故なら、——この場合には、それが達成されやうと達成されまいと——國民と國家の存立には觸れないからである。第一の場合には、戰爭開始の頭初から、敵の完全なる討滅が、目標として、政治家により設定され、そのために全力を賭することを要求されるのである。第二の場合には、全く有効なる妨害をなし得ない敵に對し、多かれ少かれたゞ出來るだけ戰はずして軍事的に占取することが望まれるのである。或る時には、敵と決定的な戰鬪をする意圖がないために、或はまたその力がないために、防禦を要求されることもある。——敵をしてその努力が見込みのないものと思はせさへすれば、それで達成さるべきこと或は達成しうることは、既に成就されてゐるのである。或る場合には、國家全體が問題となるために、極度の反抗が要求され、——また或る場合には、國家の存立といふことが全く問題とならず、從つて全力を傾注するに値ひしないために、反抗も僅かばかりに限られることもある。

かくの如く、將帥が、政治家によつて課せられる任務には、——敵の討滅から、單に限られたる目標の達成と、それからまた純然たる敵の防禦或はたゞ全くの抑止に至るまで——幾多の相違があるであらう。だがしかし、將帥たるものにとつては、彼に要求されたところのものは、最小限度の任務である。彼がその任務以上のことを爲すならば、それは感謝をも

つて受入れられるであらう。それ故に、將帥自身としては、自己にとつて達成しえられると思はれるところの最高目標、すなはち、――もし何等か可能なる場合には――敵の討滅、殲滅をば、常に目標としなければならぬ。それが達成しうる否かかは、しばしば戰爭行爲そのものの經過において初めて認めしめられるのである。だが、敵の殲滅は、あらゆる本來の戰爭の目標と內容をなすものである。それ故に、かゝる目標をもてる戰爭の遂行に就いては、以下において、詳細にこれを論述するであらう。然らば、その他の一切のことは、殆んど自から明瞭になり、戰爭行爲のこの最も重要にして最も强烈なるものに比すれば、單に枝葉の問題にすぎなく見えるに至るだらう。

第三節　將帥の熟慮、意志および決斷

任務の遂行のために如何なる行動をとるべきかといふことは、その時の狀勢に從つて決められなければならぬ。それに就いて決斷を下すためには、熟慮が必要である。熟慮は、――たとへ短時間の且つ簡單なものであれ、――軍事用語を使へば、狀況判斷と呼ばれる。正しい狀況判斷は、將帥の意志と相並んで、成功の基礎をなすものである。それなしでも、偶然によつて勝利を手中に納めえられることも確かにあるが、しかしそれは稀れであり且つ分外に幸運な場合にすぎない他面において、目的に適しない決斷乃至は不正確な行動は、しばしばたゞ結局のところ、判斷の誤謬の結果生ずるのである。すなはち狀勢の認識に罪があるのだ。

既に一般的な軍事上の目標設定、かくてまた將帥が政治家によつて課せられるところの任務からして、この判斷に依存してゐるのである。狀況の判斷は、この場合には、廣く政治的および經濟的關係をも抱括してゐる。戰爭の目的を考慮して、敵ならびに自國の軍隊の兵力および活動能力が檢討されなければならぬし、また政府および國民の性質と實行能力や

好意的支持或は直接に軍事同盟者として共力しうる他の諸國家に對する連繋を熟慮すべきである。敵とそして味方自身とが、戰爭の開始に當り用ひうる兵力に就いては、また見透しがつく。だが、戰爭のヨリ以上の發展に應じて更に使用されうる手段や、今日『戰爭の潛在力』("potentiel de guerre")と呼ばれてゐる諸關係は、明瞭に認識しうる限界をば、甚だ稀れにしか有してゐない。その限界はむしろ、既にクラウゼヴィツが、ナポレオン戰爭および解放戰爭に當面して述べた如く、また我々が世界大戰において見た如く、殆んどあらゆる參戰國について見た如く、政府と國民の『精力と熱狂の中へ』消えてしまふ。

それだから、狀況の判斷に當つて、最高の地位の人々に必要なものは、見透し難いほど數多ある所與の事實と多種多様なる狀態からして、最も重要な且つ最も決定的なものをば、正しく發見する術である。政治その他の地位にある者と共同して爲すかくの如を熟慮を綜合して初めて、何時、如何にして戰爭を行ひ得られるか、或は行ひ得られないかを明瞭にすることができるのである――かくて、それもまた、戰爭の軍事的計畫に對する基礎をなしてゐる。(第五節參照)

純軍事的な點に關する狀況判斷には、既にヨリ狹い限界が附されてゐる。自國の兵力と救援手段の數的および物的な強さ、ならびに戰場の地理的狀態は、比較的狹い領域內においては、相對的價値においてゞはなく、絕對的價値において確定してゐるところの殆んど唯一のものであらう。

敵の戰鬪力と比較してみた味方の戰鬪力の活動能力は、精神的ならびに物質的な點において、全く不確實な要素である。それは多くの場合、戰鬪をしてみて初めて明瞭になるのであるが、それにしても尙ほその樣子は變化しうる。指揮官の訓練のため、平和な時において課せられる任務にあつては、大抵の場合、敵はあらゆる點で、同等の力をもつものと想定さ

れる。世界大戰勃發に際して、ドイツ軍隊の敵軍隊に對する實質的優越性に就いての我々の信頼は、正しかつたことが證明された。だが、他の諸列强は、自國の弱點に對する自己評價において、部分的には著しい誤謬を犯した。他面において、フランスの軍隊は、ドイツのマルヌ退却後には、それ以前とは全く別のものとなつた。

ところでまた、敵がその戰鬪力をば如何に使用するか、敵は自己の知悉せる戰場を如何に利用するかといふことが問題となり、かくて不明な點がまた增加する。フリードリヒ大王は、その一般原則において次の如く敎へてゐる――『我々は敵を、役所の机の上で輕蔑すべきではなく、むしろ敵の地位に身を置いてみて、我々がその地位に置かれたとしたら何をするだらうか、と自問してみなければならぬ。』と。

モルトケは、これをば、敵は我々の最も好まないことを爲すであらうと豫測せんとして、幾分異つた風に表現した。敵が他の行動をとるだらうといふ特別な理由にヨリ蓋然性がない限り、我々は、この最も困難な想定から出發しなければならない。かくて我々は、敵の地位に自己を置いてみて、敵が何を爲しうるかを明確にしなければならぬ。その際、敵軍隊の强さおよびその動員のための時間の必要と相並んで、とりわけ、行軍の場所的および時間的能力を正しく評價しえんがために、鐵道および道路網の能力を計算に入れなければならぬ。他面、今日では、敵の空軍戰鬪力が如何なる程度まで自國の動員および行軍を妨害することができるか、そしてまた敵空軍はその際には――一九〇四年に、旅順港のロシア艦隊に對して日本がなした破壞的攻撃に倣ひ――恐らくは豫め宣戰布告することなしに行動するかも知れないといふことを、充分に考慮して置かなければならぬ。

問題となる可能性が澤山あるといふことは既に、敵が如何に行動しうるかについての稍々正確に近い狀況をうることだけでも、敵の有する戰爭遂行のためのあらゆる重要な施設に對する永續的な監視とその能力に對する適切なる判斷によつ

てのみ可能であるといふことを示してゐる。この一度得られたる狀況も、常に再檢討され、補足され、是正されなければならない。かくしてのみ初めて、敵の能力の過小評價、或はそれと同樣な惡影響を及ぼしうるところの過重評價から免れうるのである。あらゆる軍隊においては、ズット以前から、この原則に從つて行動され、且つ部分的には敵方の最後の祕密をも通報せしむるために情報機關のために尨大なる手段と努力が捧げられてゐたにも拘はらず、世界大戰が始つてみると、殆んど、どの參戰國にとつても、豫想外の大きな事柄が知られずに殘つてゐた。特別に明瞭な一例を擧げれば——フランスの參謀本部は、それ自身が立てた集中計畫と同樣に、ドイツの豫備兵團（軍團および師團）が第二線に後續して來るだらうと考へてゐた。かくてフランス參謀本部は、ドイツ軍隊の大いさについて非常なる過小評價に陷り、そして設堡されたマース——ザンブル線をば、戰場の北方の境界と見做した。それは、ドイツの豫備兵團（Reserve Verbände）の戰鬪能力を過小評價し、從つてそれに對し、自己にとつて最も不利な場合を全然考慮に入れなかつた、そこで、彼等が密集して活動部隊と共に前進し來り、二つの强力な軍隊がマースおよびザムブルから北方へ現はれて來ようとは全く考へなかつたのであつた。

敵との最初の衝突は既に、多くの事柄について、なかんづくその編成について、それからまた恐らくはその戰鬪能力についても、明瞭な觀念を與へ得る。だが、その多くは、戰爭が進行中である限り、依然として模糊のうちに蔽はれてゐるのである。このことは、個々の場合において、敵がどの位の强さか、どの方面へ向ふか、何時までに、そして如何ほどの兵力をもつて一定の場所に到着するか、どこで、そしてまた如何なる狀態の下に、戰鬪を行ひうるか、等々、その他多くの事柄を判斷する時にも當てはまる。その場合、空軍の活動能力、防空および無線電信は、敵のやりそうな計畫に對する手掛りを與へうる。道路および鐵道網は、敵が如何なる能力をもつてゐるかを示めすものである。なかんづく、使用しう

る凡べての鐵道線路或は自動車用道路は、新しい敵兵力をば、國内から又は他の戰場から輸送し來り、それによつて非常に短時間のうちに狀勢を變化しうるのである。一九一四年、マルヌに向つてのドイツ軍の前進に際して爲された兵力の測定は、かゝる能力を恐らくは過小に算定してゐたのであらう。十月に、ポーランドにおいては、ヒンデンブルグ――ルーデンドルフは、かゝる能力をば豫見して、それに適應する處置をとつた。將來は、あらゆる空中偵察が行はれても、この任務は、しば〳〵更に困難になるであらう。何となれば、一夜のうちに數百キロも急速に動く、モーター化され機械化された兵團が、新しい奇襲を行ふからである。

かくて狀勢判斷は、敵を攻擊する限り、常に謎解き(なぞとき)である。適時に必要なる基礎的事實を通報することは、情報機關および偵察の仕事である。正しいものや間違つたもの、重要なものや枝葉のもの、互に相矛盾する情報から、出來るだけ適切な形相をつくりだすことこそ、指揮官の正に爲すべき重大な責任ある頭腦勞働である。フアルケンハイン (Falkenhayn) がベルダンに對して攻擊せしめた時、彼は、敵がどの位の兵數を有してゐたか、そしてその師團は如何に分割されてゐたかについて、稍々正確に知つてゐた。だが彼は、――この場合にも彼の手許に集められた情報に基きながら、――フランス軍の反抗力およびフランス國民の指揮者の有してゐた持久意志を過小評價した。

最高指揮官が戰爭計畫の樹立に當つて、その判斷を下すために、常に時間と休息とをもつならば、この判斷は、部下の者たちにとつては、戰鬪の壓迫によつて、時間的にます〳〵壓縮されなければならなくなる。最も迅速な、それ故に簡單な、だが正確な、すなはち最も本質的なるものに限つて爲される熟慮は、決斷の基礎として充分なものでなければならぬ。それどころか、一切の熟慮が殆んどたゞ潜在意識のうちで爲され、決斷が、何等認めろべき頭腦勞働なしに即刻下さ

れるようなことさへありうる。

あらゆる決斷に當り、任務と狀勢判斷と相並んで第三に發言するものがあり、これが結局のところ決定的のものである。それは即ち將帥の意志であつて、これは、將帥自身の信念と勇氣とを秤りにかけたように表現するものである。もしこの力が缺けてゐるか或は極く輕微にしか存在してゐないならば、敵の强さや行動能力に就いての考慮は、非常に危險を過重評價し、敵の出方次第になり、大膽な行爲よりも、弱氣な或は全く消極的な決斷を選ぶように成り勝ちである。危險を認識するといふことはよいが、しかしそれは、少しでも可能なる限り、その危險をば勇氣と斷行とによつて克服するためである。もちろん、危險をば豫防し或は全く回避するより外に仕方のない場合もありうる。しかもその場合でも、少くとも、心の奥底において、時と事情とがやがて狀勢を改善するであらうといふ希望を有してゐなければならぬ。もしかゝる希望を持つてゐないならば、無爲にして災禍を待受けるよりも、絕望から生れた冒險的な決斷を選ばなければならない。『自己の狀態が壓迫されてゐればゐるほど、それだけますます人は、攻勢と殲滅戰とに依らうとする。これは、七年戰爭において、大王が、多數を擁せる優勢な敵に對してとつた行動である。』――と、陸軍元帥モルトケ伯爵は批判した。

決斷を下すことは、將帥の仕事である。參謀總長は、一つの提議を受ける、そして狀勢判斷に當つては、必要に應じ、個々の問題について、助力者の助けを借り、少くとも判斷の基礎となるものを提供せしめる。これとは異つた仕方をするならば、『軍事會議』の方法である。それについては、フリードリヒ大王の後に、オイゲン親王が常に次の如く言つてゐた『もしも軍司令官が、何事かを企てることを少しも好まない時には、軍事會議をつくるより外によい方法はない。』大王は

これに附言して曰く、『それは、軍事會議において、多くの者が、無爲に贊成する場合には、ます〳〵適當してゐる』と。だから、將帥たるものは、獨立的に行動しなければならぬ。『たゞ一つの意志のみが作戰を指導すべきである』――とモルトケは教へてゐる――『もし色々な人々から影響を受けるなら、たとへ如何によい助言にせよ、この意志の明確さと斷乎さを失はしめ、彼に從屬してゐる軍の指揮は不確實となるであらう。一つの思想の首尾一貫した遂行は、その思想が幾分かでも現實の狀態に一致してゐるならば、幾つもの新しい計畫へ飛びつくよりも、ヨリ速かに目標へ導かれるであらう何となれば、後者の場合に不可避的な命令の對立は、軍隊の信頼と兵力に對して常に惡影響を及ぼすにちがひないからである。

我々がナポレオンにおいてもまた見出す如く、これに似たような原則が存在してゐる。――すなはちナポレオンは、一七九六年に、イタリーにおける彼の最初の戰勝の後、彼は總司令官の地位をケラーマンと共に分つといふ考へ方を拒否した――『余は、何人の助言をも借りることなく、戰爭を遂行した。もし余が、他の者と意見を同じくしなければならなかつたとするならば、何等いふに足るべきことを爲さなかつたのであらう。……各人はそれ〴〵自己流の戰爭の仕方をもたねばならぬ。ケラーマンは、余よりもヨリ多くの經驗を有し且つ戰爭をヨリ巧妙に行ふであらう。だが、もし二人が一緒にやるならば、我々は、極めて拙劣な戰爭を行ふだらう。』他の場合において彼はかうもいつてゐる。――『戰役の開始に當つては、前進すべきか否かを充分に熟考しなければならない。だがしかし、一度攻勢に着手したならば、出來うる限り最後までこれを貫徹しなければならぬ。』

決斷が、現實の狀勢と敵の實際の行動とに完全に一致するといふことは、もちろん稀れであらう。だから、個々の場合におけるあらゆる情報を、正しく、迅速に且つ巧みに顧慮することが重要である。

一度全體として爲されたる決定は、最も强壓的な理由がない限り、これを飜へさせてはならぬ。『そうすれば、單純なる行動は、整然と遂行され、最も確實に目標を達成するであらう』――と、モルトケの戰爭論は述べてゐる。我々が世界大戰におけるドイツの指揮振りに眼を向ける時、一方ではタンネンベルグに、他方ではグンビンネンとマルヌ退却とを考へるのである。

だがまた、一つの決斷を固執すると、極めて困難な狀態に導かれることもあるといふことは、コンラツドのボーランド=ガルシヤの最初の攻擊およびブシエジニイ（Bschesiny）に導かれた作戰、なかんづくまたタンネンベルグにおけるサムゾノフ（Samsonow）の軍隊の運命が、これを示してゐる。

そこで我々は再び正しい情勢判斷の意義に戻つて結論しよう。――それは指揮術（Führungskunst）の基礎をなすものである。たゞ幾分かでも適切なる認識の上に立つなれば、將帥の意志は最高のものを成就することができる。兩者は、車の兩輪の如きものである。

第四節　戰爭の繼續時間

攻擊を爲すものは、戰爭が何時始まるかをよく知つてゐるが、しかし、それが何時終るかは知らない。何となれば、戰爭の終結は、攻擊する者だけに依存してゐるのではないからだ。

『戰爭行爲は、――と、クラウゼヴイツは書いてゐる――地上のあらゆる出來事と同樣に、その時間を必要とする。人は八日間のうちに、徒步でウイルナからモスコーまでは行けない。それは判り切つたことだ。だが、力學において生ずる如き時間と力との交互作用は、こゝには痕跡もない。時間は、兩交戰者にとつて必要である。そして、兩者のうちどちらが

その地位に應じて、第一に時間から特別の利益を期待できるかといふことが問題となる。』そして彼は次の結論に到達する――『我々は、攻擊戰爭には如何なる斷絕も、休止點も、中間驛もないといふのではなく、かゝるものが不可避的な場合には、それは、成果をヨリ確實なものにせずして、寧ろ不確實なものにするところの一の惡と見られなければならないといふこと、然り、もし我々が嚴密に一般的眞理を保持しようと欲するならば、我々が弱さのために求めなければならない停止點からは、通常、目標への第二の突進は生じないといふこと、だが、この第二の突進が可能ならば、停止は必要ではなかつたといふこと、そして兵力にとつて元來目標が餘りに遠い場合には、それもまた依然として遠すぎるといふことを信ずる。』

この理論的考察は、あらゆる偉大なる將帥の努力と一致する。彼等は、徹頭徹尾、その戰爭を出來るだけ、一擧にすなはち出來るだけ迅速に終結せしめようと努力した。もちろんこの場合には常に攻擊戰爭が問題なので、防禦戰爭、防禦は元々、除かれてゐるのである。何故なら、防禦は、戰爭を迅速にも或は遲々とにも遂行する能力を全く有してゐないからであり、つまり敵の意志への屈從によつて戰爭を終結せしめようと用意してるからだ。敗北者は、心理的法則から、外部よりの救援によつて、むしろその狀態の改善されんことを望むものであるとクラウゼヴィツが考へた時、彼は實に、七年戰爭におけるフリードリヒ大王、なかんづくまた一八一二年のロシアの狀態を考へてゐたのである。一八六六年のオーストリアの狀態も、それから或る制限をもつて一八七〇年――七一年のフランスもまたこれに數へうるであらう。

だが世界大戰は、中歐諸國にとつては、全く別の樣相を呈した。何故なれば、その狀態は、元來、外部から何等の救援も期待しえない封鎖的要塞のそれであつたからだ。防禦する者にとつては、敵の衰頽によるにせよ、新しい同盟者の援助によるにせよ、改善への希望が存在するや否やといふことが依然決定的である。

フリードリヒ大王は、一七五六年に、迅速に終結する希望をもつちゝ、攻擊をもつて防禦戰爭を開始した。彼は、その戰爭は『短期且つ活潑』でなければならぬといふ意見であつた。『我々は、斷じて戰爭を延引させてはならぬ。長期に亘る戰爭は、漸次に、我が軍の卓越せる規律を破壞し、國の人口を減少せしめ、我が救援源泉を消盡する。』

ナポレオンは、彼の戰役をば、考へえられる最大の迅速さをもつて、攻擊により決戰に至らしめようと常に努力した。たゞ一八一三年秋の狀態のみが、彼をして、他の行動をとらしめたが、しかも彼に敗北をもたらした。

モルトケは、一八六九年に、高級指揮官に對する訓令のうちに次の如く書いた――『今日の用兵の性質は大規模の、そして迅速なる決戰への努力を特徵としてゐる。軍隊の强さ、これを給養することの困難、武裝狀態の費用過多、貿易および交通、商業および農業の中絕、そのうへに軍隊の戰鬪準備なれる組織および軍隊結集の容易性――これら一切のことは戰爭の迅速なる終結を强要する。』他面、彼は一八九〇年、帝國議會において、軍備充實の必要を論證するために、西歐および東歐に對するドイツの戰爭は、同時に七年戰爭、いな三十年戰爭にさへなりうるといふこと、何故なれば、いづれの敵も一度や二度の戰役では、自から敗北を宣言するまでに完全に討滅することはできないからだといふことを、警告的に述べてゐる。

イギリスの參戰以來、敵が束になつて脅かして來た時の如き、世界からの隔絕は、もちろんこの時にはまだ元帥には想ひ浮べられてゐなかつた。この逼迫狀態に當面して、シュリーフエンは、極めて力强く即戰即決の思想を主張し、そしてそれをば、明かに一八六九年のモルトケの說明に依賴してゐた世界に對し、次の如き、今日では最早や是認されてゐるように思へる論證をもつて明白ならしめんとした。――ダラ〱と長びく戰爭たるや『民族の存立が、商業および工業の不斷の進展に基いて居り、且つ迅速なる解決によつて、一時停止された齒車を再び動かさなければならぬような時代におい

ては不可能である。數百萬人の生活が數十億マルクの消費を必要としてゐる時には、消耗戰略を用ひてはならない』。かくて彼もまた、ドイツの當面してゐる戰爭において、時間の猶豫から利益をうることを望むような、當てにならぬ希望を起すことを戒めてゐる。彼は、だがまた、來るべきヨーロッパ戰爭が短期間のものであらうといふ意見だけをもつてゐたのでは決してなかつた。むしろ、フランス、ロシアおよびイギリスの參謀本部こそ一致してそのような意見を認めてゐたのであつた。彼等は、彼等の共同の攻擊によつて、短期間のうちに、戰爭をば、中歐諸國の完全なる敗北に終らせなければならぬと期待してゐた。敵側の政治家たちをして、我々に戰鬪を迫らしめたところのこの期待は、これが最後のものではなかつた。

第五節　戰爭計畫及び出師計畫

戰爭計畫は出師計畫（作戰計畫）に比してより包括的なものである。それは、單に軍事的戰爭遂行にのみ限られるものではなくて、特に今日の狀勢にあつては、凡ゆる戰爭上の方策と共に、政治上、軍事上、經濟上の、更にまた輿論の範圍に於ける斯る事柄の方策を同時に包括し、また相互に調和を保たしむべきものである。この計畫は國家の元首（Staatsoberhaupt）及びそれの閣僚、あるひは內閣總理大臣が專門の相談役の協力を得て、特に軍務大臣の協力のもとに、責任を以つて確定するものである。故に、若し獨逸の敗戰について、最高軍務局（Die obersten Militärbehörden）に對し、軍事的問題が論ぜられる限り彼等が刺戟を與へ挑戰的態度をとつたとしても斷じて決定的動議をなすべきではなく況やそれの責任をとるが如きことをなすべきではなかつたといふ點から、その軍務局の誤見たりしこと乃至は怠慢たりしことを非難すれば、それは明かに事態の誤認を意味するものであらう。ベルギー突破の政治的側面や更にそれを斷行するについて

の決斷は、英國が公然戰ひに加入することが如何なる全的影響を與へるであらうかとか、あるひは長期戰爭に際して國民の生計を如何に安定せしむべきか等の問題と同樣に、それは殆ど軍人の問題ではないのであつた。軍備要求の範圍や戰爭計畫の軍事的部分の基本に關してさへも最後には陸軍大臣（この稱號はその位置が實際に意味する以上のことを示して餘りあるように見えた）は責任をもたず、參謀總長の如きは尙更であつた。寧ろこれ等は總べて――そうなくてはならぬ如く――國家施政の問題であり、それは軍部に對してたゞ軍事的事項をのみを要求乃至は警告の態を以つて意思表示すれば良いのであつて、――それの影響するところに應じて――また多少とも效果的な表示を行へば足るのである。たゞ總理大臣、將軍、陸軍大臣を總て一人で兼ねてゐる時だけは（フリードリヒ大王、ナポレオン）この埒外にある。

世界大戰による經驗の賜として戰爭遂行の凡ゆる部門を總括した計畫が必要であるといふことを、初めて我々は、また同樣に我々の敵も、感得したのであつた。それ迄は本質的には軍事的諸計畫のみが戰爭計畫であると考へてゐた。將來も亦この見解が第一位を占めるであらうが、こゝでは勉めてより詳細に考察されなければならない。

大戰前には、我が國においては、軍事的戰爭計畫が、非軍事的な部署により準備された各個の方策によつて、必要に應じて補充されるといふことはなかつた。戰爭計畫は陸戰及び海戰について、所與の國法關係に適應しつゝ、他の殆んどすべての國におけると同樣、相互の了解の下にではあるが、而も完全に區別されて樹立された。戰爭行動の統一を監督することは、陸海軍の最高司令官たるカイザーの手中にあつた。

將來、陸海兩軍と同樣に廣汎な空中戰が加はるにいたれば、かゝる經驗乃至はそれに類似した經驗では到底役に立たなくなるであらう。

將來の武力戰爭遂行は、陸、海、空の戰鬪を總括統制しなければならないであらう。そこで陸、海、空軍の戰爭計畫も

亦統一的に樹立されねばならない。これがためには三つの軍の上に立つて統帥にあたる將軍が必要とならう。而して三つの軍を總て支配するのは人間一人にとつてその能力を超過せるものであるといふ非難に對しては、次のことを以て反駁せねばならぬ。即ち陸軍、海軍、更に空軍に於てその指導領域の樣々な部門を統帥することが、同樣な樣式によるより高度な指導に關して求められ、又實行されてゐるのである。勿論指導者がより上位にあればある程、又その指導者の麾下にある軍團がより擴大され、多樣化されればされる程、その指導者は『元帥』にまで至るであらうし、出來れば三部門を一つの『特殊物』に還元してしまふといふ試みに反對せねばならぬ。指導者は、各軍が何をなし得るか、從つてまたはそれらの軍に如何なる任務を與へ得るかといふ事を知らねばならない、そして任務を與へ、目標を設定する際に、相互の共同工作を規制しなければならぬ。――その實行の手段、更に協力による決戰を必要としてゐない限り、その處置の獨自性は、境界を設け、海陸乃至空中戰の指導者個々の問題となる。

戰爭計畫の樹立に際して、一國家のみならず、多少とも同樣な軍備を有せる諸國を對象とする時には極めて重大な又時には見透し難い困難が生ずる。その場合には、明らかに解決すべき主眼に缺けて居り、又その諸計畫は、從前よりもはるかに軍事的領域以外に存し、更に――敵を屈服せしめるまで同盟を保持するといふ協同の利害關係を度外視すれば――最早自國の要求とも何等關係なき顧慮によつて、その他の場合よりも遙かに多く束縛されてゐるのである。だが、共同的なこの利害についてはナカ〱一致するものではない。恐らく一の國家の戰爭目標は、他の國家のそれよりも、制限されてゐるであらう。兩者が全く同一である事は極めて稀れだ。自己の力を傾注したものが犧牲となり、しかも他のものがその成果を得るといふ事を恐れ勝ちになるだらう。

統一ある計畫および强力な統一ある最高司令部が正にかゝる戰爭において必須であるといふ事は、眞理である、がしかしこの眞理に從つて行動されたことは殆んどなかつたのである。何故なら國家は原則や理論的認識によつて行動するものではなく、利害關係によるものなるがためである。一九一四年にフランスの命令下にあるイギリスの小部隊の從屬が問題になつた時、キッチナーは、英國の軍隊は未だ曾つて他國の下に從屬したことはないといふ簡單な、だが傲然たる理由によつてそれを拒絕した。ドイツ＝オーストリー同盟が結ばれてゐた間は、兩國共にロシヤに對する戰のためにその兵力を他國の指揮下に委ねる準備がなかつた。それは我意のためではなく、獨立國の多樣な關心事を（Belange）表はせるものであつた。兎に角同盟國の戰爭に於て、同一資格にして、同等の兵力を有する强力な統一ある最高司令部が成立したことは決してない。その司令部は精々形式的存在たるに過ぎず、極めて微弱であり、妥協を强ひられた（一八一三年―一四年の聯合國、支那に於ける元帥伯爵ワルデルゼエ、世界大戰に於けるドイツとオーストリー＝ハンガリー）。同盟國の一つが、承認された指揮者である時に初めて、司令部は權威あるものとならう。それで同盟國戰爭のための共同の戰爭計畫なるものは、將來も亦、兵力の最初の行使のための一般的協定を越えることは稀れであらうし、同盟國が、共同の事柄のために、その最後の兵力を行使することに、どの程度まで同意するかは、常に疑問であらう。

軍事的戰爭計畫は爲政者がそれに與へた所の目標に從はねばならないであらう。大多數の場合、これまでは、陸戰によつてのみ、時には海戰によつて掩護されて、その目標は達成されたのであつた。又海戰のみによつては、海上からの輸入を切斷することによつて既に服從を强制する事が出來た敵に對してのみその目標が達成せられたのである。かゝる場合は、例外なのであつて、その事は後に述べられるであらう。これに反して、恐らく空中戰のみで、將來、有効な爆擊によ

つて、それが敵の心膽を寒からしめるならば――それはヨーロッパの稠密せる所では決して不可能とは思はれない――戰爭を決することができるであらう。

次の考察は先づ第一に陸戰に妥當する、とはいへ以下の文章は、海戰及び空中戰に對しても同様な妥當性を求めるものである。即ち軍事的戰爭計畫の最も重要な目標は如何なる場合にも、敵の兵力の、即ち敵の軍事的戰鬪力の殲滅であつたし、現在も同様である。何故なればこの殲滅は爾餘一切のものの最も明確な根本をなすからである。唯だその根本が達成し得られざる場合か或ひは爲政者が要求する如く、敵をして平和を求めしめることが例外的に出來ない場合にのみ第二に――その根底が兵力の殲滅と一致しない限り――敵の武力源泉、政治的および經濟的中心點の襲擊、敵領土の占領、外界との遮斷、何れかの同盟國の倒擊等の事が問題となる。一切に卓絶する最高の努力たる敵戰鬪力の討滅といふ原則によつて、ナポレオンは彼の成果をおさめ得たのである。モルトケも亦、然りであつた。一八六四年、デンマークに向けられた司令官に對する指令の內容は、戰爭計畫なるものは何を考慮すべきかを明にしてゐる。即ち敵の首都は艦隊――我々が持つてゐない處の――なくしては達し得ないといふ事、ジュツトランドを占領する事は出來るが、效果あらしめるためには永續的占領でなければならないといふこと、しかしそれは他の列强の干涉が伴つて來るといふ事、かくて、出來るだけ包圍的に攻擊し得る所のデンマーク野戰軍のみが、その目標となりうるに過ぎないといふことがそこに詳說されてゐた。

戰鬪を元々多くの敵に對して同時に遂行しなければならぬ場合は、事態は極めて困難である。その際最も有效なのは敵がその同盟國の中に弱い者も加つてゐるがために、兵力が一致した行動をとることを目標として準備を完了するそれ以前である。

列國と共に、最後までの防禦が行はれるものとすれば、クラウゼヴィッツも論究せし如く、目標の制限せられたる戰爭計

畫なるものは吾人の考察のこの部分にとつて問題となる。狀況の逼迫下に防禦しなければならぬ處では、一八六四年のデンマーク、一八九九年のボーア人のそれの如く、――外からの救援を得られざる限り――攻擊を受けてゐる要塞が元來如何に堅固なものであつたとしてもそれは既に終結に近いものであつた。しかし相手に對してその相手の計畫の實行を極めて困難ならしむることは兎に角可能であらう。地形の巧みな利用や平時に於て作戰上の見解から豫め構築してあつた設堡による補强が、斯る場合に決定的な役割を演ずる。

制限された目標を有する攻擊の諸計畫は、一八九八年の合衆國に對するスペイン、英國に對するボーア人、一九〇四年、一九一四年更に一九三二・三年の日本、あるひはルール地方へのフランスの侵入等の如く之等の點から區別することが出來る。吾人は若し一九〇四年の日露戰爭を觀察するならば、正當の處置による軍事的結果たることについて殆ど疑ないものであつた。たゞその離業たるや政治的行動にあつたにすぎない。

一般に、戰爭計畫の設定は實際に戰爭を遂行するといふ意圖は認められないものであると、いふことが出來るその計畫が純粹に防禦にのみ限定されてゐる限り、それは自明のことである。しかも――他のことが證明されない限り――凡べての攻擊計畫についてもそれは妥當する。その攻擊計畫は亦、準備することが凡べての豫測的施政の義務である如く、凡ゆる場合の準備としてのみ有効たるべきものである。

戰爭計畫に就いて當てはまることは、相當の制限の下に、小規模乃至は單純な狀況に於て戰爭計畫と一致し得るところの出師計畫（作戰計畫）にも當てはまる、また少くとも部分的に且つ一時的に區劃された一部は戰爭計畫によつて構成される。そこで我々は世界大戰について戰爭計畫の本質的要素として、次のことを認めうる、即ち西部或は東部に對する第

一の攻擊の問題（即ち先づフランスの打破、次いでロシアに對する攻擊）、艦隊の問題（英國海軍の可及的擊破、自國海岸の擁護及び出來る限りバルト海に於ける貿易の保護）、オーストリア＝ハンガリアの制壓（バルカンの敵セルビヤの第二次の行爲によるロシヤから脅されてゐる危機の解除）。また、西部に於ける目標が如何にして達成し得るか、東部にあつては如何に防禦が行はれねばならぬか、艦隊は各々如何に行動すべきか等々のことは、それによつて最後まで純粹な區分は不可能であつたとしても、解決すべき夫々の任務について定められてゐる出師計畫の領域の中に當嵌つてゐた。ベルギーを通過して進軍するといふ問題は、西部戰線にとつての戰爭計畫ならびに特に出師計畫の根本的な構成要素をなしてゐた。

戰爭計畫にあつて政治上の顧慮及び考察がなほ一つの本質的役割を演ずるものすれば、それ等は出師計畫のもとでは益々後退する。遂には爲政者がきまつてその出師計畫の影にかくれてゐるときには、も早課題を與へるのは爲政者ではなく軍事的指導であることになる。斯ふした出師計畫は根底をなす意圖と出師の目標とを分明にするであらうしまた軍隊は集中狀況を考察してそれに最も有利な如く準備するであらう。しかしひき續いて計畫を行ふものとは考へられない。何故といふに此處に於てモルトケが述た如く我々の意思に一致し、時には敵の獨立した意思に一致してゐるからである。戰鬪の利益あるひは損失は、人間の慧眼も第一の戰鬪を越えてそれ以上には豫見し得ないといふ事情をある程度まで改變して了つてゐる。大抵は人が企ててゐたことは多く實行出來なくなり、最初から期待してゐなかつたやうなことが可能になるものである。それ故に、出師計畫が敵の主力との遭遇以上に色々な確心を持ちすぎるといふ結果になることはない。變化した事態を正當に理解し、それによつて相應の豫猶を示しつゝ目的の事柄を指令しまた斷固たる實行に移る、といふことが如何にしたら軍隊の指導をなし得るかといふことの總てである。ナポレオンは更に、如何にも極端なほどの決定にまで進んでいつた、彼は決して作戰計畫を持たなかつた。出師實行にとつての計畫が既に平時にどの程度に行はれをり、また長

期戰爭の經過にあつては最高度にまで工夫され統御されてゐるとか、あるひはまた夫々の部署にある指導者に委ねられてゐるといふのがどの程度のものか、といふ點は多くその狀況によつて定められるものである。指導者が若し正當な選擇を行つてゐるとすれば、吾人は彼に對して出來るだけの自由を許してやらなくてはならないであらう、何故ならば集中、第一の運動、共通な意圖等のことを越えて出師計畫は確定され得ないからである。

一八六四年のデンマークへの出師については、モルトケ將軍は最初は自らその指導にあたらなかつたが、既に述べてきた司令官の共通の方針が作られてゐた、またその方針の實行については指令官に完全な自由が許されてゐたのである。モルトケ自身が指導した一八六六年の出師に關しては、最初の集中を越えて文章に書かれた計畫が缺けてゐた。總ては、日を追ふて明快になる事態へと進展してゐたのであつて、オーストリヤ軍に對して殲滅戰をなさんとする意思だけが確然としてゐたのである。一八七〇年のフランスに對する戰爭については、國王のもとに提出されその採可を得た出師計畫が準備されてゐた、それは敵陸軍との最初の戰鬪以上に、敵を北方に驅逐し巴里を攻略することが目標とされてゐた、しかしそれがために、前進を國境線に至るまでと定め、即ち相手との最初の會戰に至るまでに定めてゐた。それで、若し吾人が伯爵シュリーフエンの後繼者に遺した『フランスとの戰ひ』といふ回想記をみて、それが集中のことや左翼をさけ最も强力な右翼軍による包圍のこと等から踏出して了つてゐるといふ點で、その回想記を出師『計畫』であると考へたり又出師に關するある參考資料としてしか考へないとすれば、それがシュリーフエン伯爵に對して親切なものかどうかは疑しい。一九一四年には西部戰爭にも東部會戰にも文書に定められ計畫は存在しなかつた、それでも一層その計畫は、指導にあたる人々の精神の中に存在してゐたのである。西部戰爭には將軍自らその統帥にあたつてゐたが、東部戰には一度も集中が固定されず、夫々の部署の指導者に委ねられてゐた。指導者は軍隊が動員される場所からその軍隊を、その任務及狀況の進

展に應じて集合させねばならなかつた、而もそれが少數の場合にもまた充分輸送能力のある場合にも困難が生ずることがあつてはならなかつたのである。更に吾人は西部集中も亦、出來るだけ鐵道網に從つて努力しやうとするが如き固着狀態から解き離すやうにしなければならなかつた。フランス人によつて、第一の集中を超過した確定的計畫が行はれてゐたことは、衆知の如くあまり効果はなかつた。ジョッフルは外見上ナポレオンの萬軍の主の例にならつて、——到る處で着手すれば判るだらう（On s'engagera partont et on verra）といふ態度をとることを考へてゐた。オーストリー＝ハンガリー並びにロシヤは種々の場合について定められた諸計畫を備へてをり、兩者はそれを些細な點について變改するなどによつて直ちに實踐に移すことに勉めてゐたのである。出師計畫がどうして集中可能性に依存してゐるかといへば、その集中が出師計畫を開始するにあたつての根底をなすからである。即ち凡ての事が皆內部的相互關係にあるのである。

第六節　展開とその掩護

展開（Aufmarsch 曾つては集中〔Konzentration〕と呼ばれてゐた）といふのは將軍が作戰を開始するにあたつて肝要なその場所、その時刻にあつて、編制せる野戰軍（動員を見よ）動員分隊の準備體形である。戰爭の廣汎な經過のうちには、新しく準備すべき作戰は總べてその作戰に當られた部隊の新しき集中を必要とする。それで集中地乃至は集合地たる國內中部からの道は以前は多く國境に至るまで徒步行軍を以つて進まねばならなかつた。しかし前世紀の半頃より極めて遠方の場合は汽車を用ひるやうになり、現代では自動車輸送が之に代つてゐるがそれと共に船舶輸送が問題となるであらう。たゞ斯る方途の不可能なる場所や、何等かの理由から利用され得ないかあるひは境界に近いために快速部隊の要なき場所にあつては、今日もなほ徒步行進を用ひてゐる。集中運動は多く平時に於て將師により豫め確定されてゐた集中計畫

によつて行はれ、それはその將帥及び極めて限られた範圍の協力者等にのみ秘められてゐる。戰爭に際しこのために準備されてゐるところのその計畫は秘密に屬する。それで獨逸に於ては集中計畫による個々の軍分隊（Heeresteile）は『集中命令』たるその軍分隊にとつて缺くべからざる任務を有するものである。この軍分隊及個々の兵團の『派遣準備員』（Vor-ausbeförderts-Personal）は、集中地に於ける配備（Unterbringung）および給養を準備し、既に其處に駐屯せるか到着せる部隊と聯絡を行ふ。

集中計畫は出師計畫によつて定められ、またそれの成就のため決定的意義を有する。『軍隊の最初の集中に於ける錯誤は出師經過中には再び改め得ないのである』とモルトケは述べてゐる。一九一四年八年に、セルビヤに向けたオーストリア・ハンガリア軍の當初に於ける大部隊集中が、この一節の正當なることとの例を示してゐる。更にその集中は豫定地の軍隊引渡しの可能性と分離せるものではない。即ち兩者は相互作用に立つものである。出師計畫更に戰爭計畫の樣態にとつて、制限された輸送能力の制限は決定的であらう。

それで一九一四年ロシア並びにセルビヤに對するオーストリー＝ハンガリーの出師計畫はハンガリーを經、カルパチヤ山脈を越える輸送の困難に惱まねばならなかつた。それで將帥は輸送能力が正當に實現される場合、自己の計畫を如何樣にも定めることが出來る。それ故に多くの通路や鐵道は極めて重要であつて、結局は作戰上の觀點からそれを造り上げる事さへも必要である。その點でナポレオンが中部ヨーロツパを通つて建設し始めた一大軍用路が有り、又大戰前には澤山の戰略上の鐵道路があつたが、それらは特にロシアが造り上げたものであつた。

現在の輸送能力はそれを最大限に利用する事が必要である、と言ふのは集中を實施する爲の時間を出來る丈け短縮すると言ふ事が決定的な意義を有するからである。即ち作戰開始はその事に依存してゐるのである（第七節參照）。すべて部隊

はそこに有利に導くべく努力するであらう。併しある標準以上に輸送行爲が促進されない時は、先づ當初の集中開始の時を早める事によつて、敵に對し優勢なるか少くとも平衡を保ち得る如く努められるであらう。軍隊が動員を完了し行軍準備の成れる時に始めて集中を開始し得るのであり、つまりはこの動員を出來るだけ早期に開始する事が肝要なのである。戰がも早避け難い事が確定するや、動員の開始及び集中に於ける時間の延引は成果を損ふものであり――益々軍事上の狀況は不利となる。これがためには指導的立場にある爲政者も亦理解がなくてはならぬ。その勝利が集中に就て遲延した場合にも尙確なる程の優秀な兵力の場合に始めて、爲政者は政治的理由から動員命令遷延について責任をとり得るものである。

一九一四年夏期に於ける錯綜した、而かも極端に尖銳化した全體の狀況にあつては、中歐諸國にとつてその陸軍の作戰準備を最も速かに實施する事が戰爭決定の重大意義を有してゐた。彼等にとつては萬事は、遙か遠方に迄その集中を徐々に進行せしめねばならぬロシアが、全兵力を攻擊準備を完了する以前に、西部に於て出師を開始し出來るだけ遠方に迄前線を押擴げる事にかゝつてゐた。それで中歐諸國にとつては動員の決斷を遷延することは成果を容易ならぬ危機に陷れる。戰爭を回避するについて最後の可能性を造り出す爲にドイツは――總理大臣自身表明した樣に――『到底責任を負ひ難いやうな手段による』動員命令を發するが如きに立ち到つたのである。それがために、オーストリー＝ハンガリーにとつて、セルビアに向けた大部隊の指導を誤るに至り、又ロシアに向けた集中を遲延せしめ弱化せしめるに至つたと言ふ混沌たる狀態を惹起したのであつた。ロシアが大戰の爲の動員を先づ最初に開始した時に、不幸にもガリシア及び南ポーランドに於て戰ひが開始させられたことの主要原因となつたところの、全般的時間の損失が生じたのである。玆に決斷の躊躇と集中の延引とによつて蒙つた所は、再び取戾す事は困難である。來たるべき戰爭は、豫め、空軍計畫、更にまた機械

化兵團の加入によつて開始されるであらうから、將來は、極めて僅かな遲延といへども極めて重大な結果を惹起しうるであらう。

時間の利益を得んとする努力は、必然的に集中計畫に導かれ、この計畫は、輸送運動（Transportbewegung）の極めて些細な點に至るまで仕上げられ、最後には非常な膠着狀態に陷つた。

起りうべきあらゆる戰爭の場合に對して、かゝる集中計畫が立てられなければならなかつた、そして鐵道網並びに輸送すべき軍隊の兵力および構成が絕えず變化する場合には、それは殆んど每年更新されなければならなかつた。フランスにおけると同樣、ロシアにおいても、集中は、同一の方向に（ロシアは西方に向つて、フランスは東方に向つて）行はれる筈であつたから、彼等は、根本的には、全體計畫の『變形』をもつて滿足することができた。だがしかし、多くの互に相對立する集中方向が問題となつてゐたところの中歐諸國にとつては、事態は遙かに困難であつた。かくて、オーストリア・ハンガリアにおいては、種々なる場合に對し、多岐に亘り、互に錯綜した五つの集中計畫が出來てゐた。ドイツにおいてもまた、一九一三年に至るまでは、西部集中の外に、東部集中計畫が作製されてゐた。諸計畫がかくの如く固定した場合には、個々の點に至るまで極めて注意深い準備をして居つても、軍隊の適時の作戰準備を問題にすることなく、一度着手された集中から、他の集中へ移ることは、たとへ不可能でないとしても、極めて困難であつた。それ故に、ドイツ參謀本部は、一九一四年に、それまで固定してゐた鐵道集中をば、不動的なものに變形すべく着手した。參謀本部は、ヨリ大なる決斷の自由を確保し、且つ鐵道經營に現はるべき障碍にも束縛されないようにしようと欲した。ロシアに對して向けられた兵力の、既述せる如き完全に自由な集中はかゝる處置の端初を示めしたものであつた。他面において、一度開始され

た輸送運動の不充分な活動は、一九一四年に、オーストリア・ハンガリア軍に對し、重大な不利をもたらした。今日では、可動的な集中計畫は、恐らくは、以前よりも更に必要である。鐵道による輸送は、脆弱な施設に對する空襲の危險の增大により、重大な問題となりうる。鐵道輸送を如何なる程度まで自動車輸送と代へうるかは、未だ決して明かにされてはゐない。何故なら、その進路も、すなはち河川や山嶽の通路に束縛され、とりわけ渡河は空襲に對して脆弱であるからだ。一九一四年に、殆んどすべての交戰國によつて遂行されえたが如き、摩擦なき集中は、將來においては、たゞ壓倒的に優秀な空軍の存在する場合にのみ望み得ることであつて、而かもその場合においてすら絕對確實といふわけには行かないであらう。我々は、最後には出師計畫の遂行能力にまでも擴張されるかも知れない妨害を考慮に入れなければならない。優勢なる空軍をもてる國は、その敵の集中をば、空襲によつて遲延せしめるのみならず、目標を意識しつゝ、自己の欲するところに集中せしめんとするだらうといふことすらも考へ得られるのである。

既に一八七〇年に、モルトケは、集中を妨害する可能性を豫想してゐたが、それは單に早期のフランスの攻擊によつてにすぎなかつた。彼は、最後の瞬間には、國境からライン へ軍隊を後退せしめ、これによつて危險を免れたのであつた。殘りの道は徒步によつた。一九一四年には、ガリシアにおいて、コンラッドが同樣な行動をとつた。これら二つの場合において、敵との最初の衝突は、それによつて遲延されたが、しかし總計畫に對して、言ふに足る妨害は起こらなかつた。もし集中輸送にとつて決定的な地點が、遠く背後地において、空からの計畫的な攻擊により交通を遮斷されるならば、事態は根本的に異つたものとなるであらう。空中における敵の極めて猛烈な攻擊を度外視しても、その場合、たゞ極めて密な集中道路網を救ひうるにすぎないであらう。河川および山嶽の通路および豫め設けられた交叉點、そしてまた待避場所が多く存在すればするほど、敵がこれらすべてを攻擊し、それによつて全集中或はその一部分を不具にせんとする企ては

益々困難にさせられるであらう。集中の成果は、輸送の再編成の可能性を利用する手腕に懸つてゐる。

　動員および集中の防護のためには、從來は、自國の領土をば、作戰の開始まで、敵の侵入に對し防護するところの國境守備で充分であつた。尙ほそれと共に、國の內部においては、敵の偵察隊或はエーヂエントによる陰謀に對し、鐵道、とりわけその設備を直接警備するために、鐵道守備隊が設けられた。

　國境守備は、動員と集中との外に尙ほ戰爭に重要な設備および地點(例へば一九一四年における上シレジアの工業地帶、フォーゲゼンの隘路)をば、敵の攻擊に對し防護する純粹防禦のために國境に配備された微力な部隊である。中立國との國境に配置された國境守備は、決して戰鬪任務をもつものではなくして、單に交通の遮斷と監視の任務をもつにすぎない。

　國境守備は、一九一四年、ドイツにおいては『切迫しつゝある戰爭の危險』の聲明と共に、配置され、似たような方法でフランスでは『陰蔽せられたる進軍』(marche en couverture)として、ロシアにおいては、『戰爭準備時代』の部分的方策として、オーストリア・ハンガリアにおいては、『警報』に際して、配備された。ドイツにおいては、動員を行はずして遂行しえられる方策のみが採らるべきであつた。それ故に、國境守備のためには、先づ第一に、動員せざる現役部隊が使用されなければならなかつた。それは、次いで動員の決定の後には、出來るだけ速かに豫備部隊、後には後備軍(Landwehr)および國民軍(Landsturm)と交替せしめられた。國境守備は、國境附近に駐在する高級司令部の指揮の下にあつた。國境守備は、後に續く集中——それは出來る限り既に豫め準備されてゐた——に出來るだけ適合するように組織されてゐた。しかのみならず、國境守備は、動員の決定後、極めて速かに『加速度的に動員された』兵團、なかんづく騎兵團により、強化された。

敵の強暴な行動に抗し、國境守備は、少い兵力と廣大な配置によつて、極めて困難な、且つ往々にして充分に果たしえない任務をもつてゐる。かゝる行動の實例としては、世界大戰においては、リューチツヒ（Lüttich）に對するドイツ軍の突撃および上シレジアの工業地帶を防衛するためになされたロシア國境地方の占領が擧げられる。これに反し、東部戰線において氣遣はれてゐたロシア騎兵集團による侵入は、實現されなかつた。殆んどすべての交戰國は、むしろ、先づ第一に、動員と集中とを完了し、然る後に初めて運動を開始しようと努力したのであつた。しかしそれは、將來、とりわけ軍備の充實してゐない國に對しては、異つて來るであらう。そうなつた場合、敵が、快速運動兵團をもつて、いち早く、奇襲的に突進して來たら、國境守備は、更に準備された或は元來强力な陣地、なかんづく河川の背後においてのみ、その任務を果たすことができるにすぎないだらう。

今日では、國境における地上の防禦と相並んで、全國土に擴がる防空が、少くとも同樣に重要であらう。

第七節　作　戰（Operation）

（一）その本質と開始

作戰とは、目標に應じて、時間および空間を統一し、一の戰鬪行爲と關聯せる軍隊の運動の全體と解される。決戰に至るまで遂行された一の作戰、或はまたこれらの多くのものを連絡せしめられたる作戰は、『戰役』（Feldzug）と呼ばれる。作戰は、なかんづく地域の獲得或は確保が問題たる場合には、時には戰鬪が行はれなくとも、たゞ行軍および陣地の選擇によつて目標へ到達せしめることが出來る。恐らくは尙ほ計畫的に進行しつゝある集中、すなはち戰鬪力の準備陣とは反對に、作戰は、運動を示してゐて、それにあつては、我々は確實に即刻敵の獨立せる意志に出會ふのである。かくて作戰

の分野は運動戰（Bewegungskrieg）である。その困難なる行動を支配する者は、次ぎ次ぎと變る見地から行動する敵に優越するであらう。といふのは、前者は純粹な防禦に限ることができ、かくて陣地戰を行ふに至るからである。だがそれは、一切の作戰の死であり、少くともその睡眠を意味して居り、この睡眠からは、たゞ戰術的勝利によつてのみ再び呼び醒まされうるのである。

それ自身としては、國境の防護、動員、集中および作戰の開始といふ順序で、順々に進行すべきであらう。だが、實現においては、それらは、しばしば時間的に互ひに食ひ違ふものである。人は、最後の一人、況んや最後の輜重兵が近づいて來るまで待つてはゐない。殆んど常に急速に行動することが、――敵よりも急速に行動することが肝要だ。戰爭をば、自己の國においてゞはなく、出來る限り敵の國において行はんとする當然なる努力が既に、この方向へ驅り立てる、そして人は、結局のところ、全く用意を完了してゐるといふことは決してない。敵に先んずるために出來るだけ敏速に、しかも戰鬪に勝つことが出來る狀態が備はる前にではなく、といふのが目標であらねばならぬだらう。世界大戰において、ロシア軍は、フランス軍を援けるために、餘りに早く作戰を開始するの誤謬に陷つた。それは、ロシア軍にとつて不運だつた東プロシアにおける戰役の出發を、根本的に同罪ならしめた。

ドイツ側では、リエージエに對する突擊は、平時定員のまゝ國境へ急行せしめられた軍隊をもつて行はれたが、その動員は、敵國における最初の戰鬪の後に初めて完了したのであつた。かくて集中の領域を脫し、既に作戰の領域に入つたのである。ドイツ軍隊の集團の集中が八月十七日に終つた時は、ミユールハウゼンの會戰以來、既に一週間を經過してゐた、そして軍の右翼は、戰鬪を行ひつゝ、既にブリユツセルに迫つてゐた。かくの如く、すべては不斷に進行しつゝあつた。既に戰鬪が開始されてゐた一方、その背後では、集中輸送が進められ、そして本國では、更に軍隊の動員が爲されてゐた。

（二）策源と作戰線（Operationsbasis und operationslinien）

策源とは、自己の手に確實に占有された領域であり、一般的には、そこから軍需品の供給、給養、人間および武器の補充を受くべき・軍隊の兵力源泉をも含む自分の國のことである。軍隊と策源との間を繋ぐ道をその策線といふ。

策源が廣ければ廣いほど、それだけ益々軍隊は、その運動が確實となり、自由となる。策源との距離が遠ければ遠いほど、それだけ益々戰鬪力を保持することは困難となり、それだけまた延長された後方への連絡は敵の攻撃にます／＼曝されることになる。從つて、兵力をば、ます／＼多く分岐させるか、或はこの連絡を防護するために本國から更に兵隊を追送しなければならなくなる。

フリードリヒ大王の戰爭においては、戰場は廣く、兵數は少かつたので、大抵は、一個の要塞或は貯藏庫が策源をなした。軍隊の擴がりがます／＼増大して行くにつれて、その戰線の背後の全地域は策源となつた。ナポレオンは、一八〇六年に、パッソー（Passau）からライン河下流地方に達するまでの長い弓狀をなした策源に據ることができた。かくて彼は、その後方への連絡を脅かさるゝことなく、プロシアの側面へ進軍することができたのであつた。海に關する作戰にあつては、艦隊によつて支配された海洋が策源となつてゐる。（一八〇九年、スペインにおけるイギリス軍、および世界大戰におけるフランスでのイギリス軍とアメリカ軍）。かくてこの策源は、蜿延と連なつた海岸（スペイン、フランス）に對して、陸上作戰の自由を異常に有利ならしめる如き廣さを獲得する。一九一四年九月、イギリス軍は、その補給根據地をば、大なる困難なしに、海峽の港から大西洋の港に移すことができた。

軍隊の策源との確保され且つ能力ある連絡は、その戰鬪力保持の前提條件である。戰鬪力は、もしこの連絡が破壞され或は全く決定的に中斷される場合には、弛緩し且つ完全に停止しうる。後方連絡の不滿足なる能力と不充分なる確實さと

は、一八一二年に、ナポレオンをしてモスコーからの退却を餘儀なくせしめ、連絡の不十分なる能力は、一九〇四年に、ロシアの出兵を滿洲に制限せしめた。世界大戰においては、北フランスで戰鬪中のドイツ軍隊の後方の連絡が、オランダのマーストリヒト・チツペル（Maastricht-zipfel）とベルダンの要塞との間の僅か百キロメートルばかりのところに壓縮されてゐたといふことは、一の永續的な危險を意味してゐた。東プロシアにおけるドイツ軍隊にとつては、その長い、そして側面に何等の防護なき連絡の重大なる危險が、一九一四年八月二十日に、グンビンネンの會戰を中絶せしめる動機となつたのであつた。

後方連絡の移動といふものは、たゞ有利な狀態の下にのみ可能である。ナポレオンは次の如く考へた――『自軍の策線を變更するといふことは、天才の行動である。策線を失ふといふことは、それに責任ある將帥に犯罪者の烙印を捺さしめるほどの不安なる作戰である。……かゝる處置を敢へて勸むるような者は、事件が起つてその作戰の愚鈍さを明かにするや否や、第一に頭を混亂されるであらう。』廣く擴大された包圍運動および迂回運動の危險、それから大膽さは、これをもつて示されるであらう。モルトケは、彼が一八七〇年八月十八日にメツツから西方へ攻擊した時には、その迂回翼のために『最早や連絡線を後方に』有してゐなかつた。――それは、あらゆる狀態がヨリ困難な敵地においてゞあつたが、しかし、それはまた彼自身も强調した如く、唯だ一度だけのことであつた。勝利は危險を排除した。

十九世紀の後半以後、鐵道は、大軍輸送のためには唯だ後方連絡の手段としてのみ用ひられ、それは漸次、空襲に對してヨリ弱くない自動車によリ部分的に取つて代はられるように見える。

策線は、一部隊がその策源から運動するところの方向である。ナポレオンの用兵を評論して、その概念をば、十九世紀初頭に當り、戰爭に關する學說において紹介したジオミニは、敵の隊形の中央に對して進み、且つこれを突き破る軍隊

は、次いで二つの方面へ向ひ、その兵力を、或ひは右へ或ひは左へ投ずるであらうといふことから出發した。かくてその軍隊は、内線において戰ひ、その敵は、ヨリ正しくいへばその部分は、外線において戰ふことになる。内線作戰は、ジオミニの見解に從へば、それが異常に不利な兵力關係によつて均衡されない限り、それ自身としては優位にあつた。ナポレオンの勝利は、殆んど不斷に連續せる内線の利用に基いてゐた。かくて彼は次の結論に到達した――『互に相遠隔してゐる方向において、連絡なしに混亂した作戰をなすことは一の誤謬であり、それは通常、第二の誤謬を犯さしめる。派遣された縱隊は、たゞ第一日分だけの命令しか有しない。その第二日目の作戰は、本隊において爲されるところのものに依存してゐる。かくて、それは、命令を待ち受けるために時間を浪費するか、或は運を天に任せて行動するか、そのどちらかである。』そこで彼は次の如き根本原則を樹立した――一切の部隊は、常に、敵がそれらの間に割込み得ないような結束を保つてゐなければならぬ。彼は、敵を突破し、追拂ふところの集團を組織した。

かくの如く、突破は内線における戰闘であり、包圍は外線における戰闘である。

大なる作戰關係として見れば、フリードリヒ大王は七年戰爭において、オーストリアは一八六六年において、中歐諸國は世界大戰において、ドイツ軍隊は東プロシアにおいて、内線において戰つたのであつた。軍隊運動の適當なる戰場、極めて敏速なる部隊移動の可能性(完備した道路、後の鐵道、將來の自動車道路)および一切の必要なる軍需品配給の確保は、内線における有効なる戰闘のための前提條件である。その目標は、結集したる兵力をもつて、次ぎ次ぎと敵を片附けることであらねばならぬ。(シュリーフエンの計畫)。運動の最大の迅速性および短時間の、だが殲滅的な打擊をもつてしてのみ、戰勝の望みが立つのである。敵の擊退(一八一三年秋におけるナポレオン、世界大戰における中歐諸國)だけでは十分でない。それ故に、『强大なる敵の中間に少數をもつて介在してゐる者は、敵がまだ結集してゐない限り、出來るだ

け迅速にして大膽なる打擊をこれに加へるより外に、それ以上のことは何事もなしえない。もし敵をして、その計畫を統一し、その集團を結集すべく考慮する時間の餘裕を與へるならば、その協力一致せる優勢に壓倒されるであらう。正にかゝる狀勢の下においてこそ、運動の敏速さによつて、兵數の不足を補充しなければならぬ。』（ヨーク・アオン・ワルテンブルグ伯『將師としてのナポレオン』）

內線における有効な行動に對する前提條件が消滅する程度に應じて、迅速なる殲滅的打擊の努力は失敗し（一九一四年のマルヌ會戰およびグンビンネン）、戰鬪が延引せられ（一九一四年十月におけるワイクゼル中流附近での戰鬪）、更に不利が增加して、遂にはその戰鬪は、包圍された要塞守備兵の防禦に似たものとなり、もし外部からの救援がなければ、結局のところ滅亡を宣告されることになる。

以上のことからして、逆に、外線における戰鬪の有利と不利とが明かになる。一般に、戰略といふ廣い範圍においては、內線の有利が優つて居り、戰術といふ狹い範圍においては、大抵の場合、外線の有利が優つてゐるといふことができるであらう。

外線における戰鬪にとつては、一切の個々の指揮官の攻擊の喜び、獨立的行動、および平時の訓訓練が特に必要である武器の射程の增大（今日では就中また空襲によるそれ）および無線電信や航空機による敵を越えての繼續的意思疎通の可能性は、外線に於ける戰鬪にとつて有利となる。大規模の狀態においては、外界からの隔離、戰爭遂行にとつて必要なる供給の遮斷および糧道の阻絕は、これを助けて、遂には完全な武力的勝利なしにも、敵の反抗を屈服せしめることができる。（イギリスのやつたボーア戰爭、中歐諸國に對する世界戰爭）。

（三）軍隊の編成と軍隊の運動（豫備、快速運動兵團、軍騎兵）

軍隊の編成。 野戰軍（Feldheer）守備軍および、必要なる場合には、それらから尙ほ分離された補充部隊を引つくるめた陸上戰鬪力の總體としての軍隊の編成は、戰爭のために、動員によつて生じたる『戰時編成』によつて規制される。それは、命令=統帥關係を確立し、最高司令部によつてのみ變更されうるだけである。作戰上のおよび戰鬪の任務のための兵團（Verbände）と部隊（Truppen）との一時的な總括は、できるだけ戰時編成に依るべき軍隊の分割によつて生ずる。この總括は、任務の遂行に應じて、出來る限り速かに原狀に復歸されねばならぬ。戰時編成に從つて野戰軍——これについては後に述べるであらう——が、軍騎兵團（Verbände der Heereskavallerie）或はその他の快速運動部隊、必要に應じては空軍、ならびに特殊部隊（Heerestruppen）（決定的な個所における或はその他の特殊な目的に對する戰鬪力强化のための種々な特殊部隊）から成立する。世界大戰の際に、ロシア軍隊においては、戰爭の當初から、その他の軍隊では、その後漸次に組織された如く、數多の軍隊が方面軍（Heeresgruppe）に總括されることができる。軍は、先づ第一に步兵（軍團および師團）から成る、世界大戰においては、小さな軍は、『兵團』（Armeeabteiung）として配備され、一時的に組織された『軍集團』（Armeegruppen）と呼ばれた。しかし、後者の呼稱は、後には單に『集團』（Gruppe）と呼ばれ、第一にたゞ若干の師團を一の軍團司令部の下に集結するために利用された。

軍騎兵（HeereskaVallerie）は、師團から成り、これら師團のうち、多くは軍團に、（世界大戰中、ドイツ側では『高級騎兵司令官の下に）集結されうる。その他の將來出來るかも知れぬ快速運動兵團（schnell beweglicher Heereskörper）——（機械化され、動力化された）——の編成については、まだ斷定的なことはいへない。

步兵=および騎兵師團は、最も小さい部隊であつて、その構成から見て、獨立的使用に適してゐる。集中（Aufmarsch）に際し、最初の作戰における正しい見透しにあつては、場所的編成、軍隊の集合は、既存の戰時編成に適應する。何とな

れば、これは、正に戰爭の狀態に相應じて配備されるのだからである。だが、狀勢の變化と新しい任務とはまた、戰鬪力の新配備、從つて戰時編成からの繼續的逸脫を伴ふであらうし、この場合には、戰時編成は變更されねばならない。

第一回の集中において、一切の兵團が、相並んで或は部分的にはまた連續して配備されるかどうか、また快速運動部隊の位地はどこか、それは完全に或は分割されて準備さるべきか否か、それらは、狀勢と意圖とに依存してゐる。豫備軍を分離して置くといふことは、殆んど常に必要である。これに反し、軍前衛或は軍後衛（Heeresvorhut oder Heeresnachhut）は、豫め派遣された軍騎兵或は自動化および機械化部隊でなければ、近代的關係の下においては殆んど問題にならない。それらは、敵を前にして、重要な地區を手に入れることが出來るし、敵の動員および集中を妨害し、最後にはまた、今世紀の最初の十年にフランスにおいて企圖された行動の意味で、次のような目的、すなはち廣い戰線において接近し來たる敵をして旋回せしめ、その結果、敵を後續する本隊に對抗する不利な狀態に陷らしめるといふ目的をも持つものである。

軍隊の運動。 世界大戰においては、軍前衛或は軍後衛は存在しなかつた。軍隊は、廣大な、多少とも密集せる戰線において、軍團と軍團相並び、後には大抵、師團と師團と相並んで前方へ運動した。その際、軍隊は、――フランス軍隊を暫く措けば――先づ第一に、軍の兩翼による包圍、かくしてまた會戰のための集中的進軍による包圍を目標とした。その模範的な實例は、西部戰線におけるドイツ軍の初期の作戰、それに次いで、一九一四年十月――十一月のポーランドにおけるロシア軍の作戰もまたそうである。戰鬪を行はずに長時間繼續する運動（行軍）は、過去の時代の戰爭において、尙ほまた一八七〇年においても普通のことであり、且つ決定的な役割を演じたものであるが、それは世界大戰においては、僅かに敵の豫期しなかつたベルギー通過の際と東部戰線――すなはち敵のゐない廣大な場所――における若干の作戰に際して示されたゞけであつた。兎も角、軍隊は、大抵の場合、最も廣大な戰線においても、鐵道により僅かに數日間の行軍を

もつて集中されたのであつた。かくて一日もしくは數日の行軍によつて連絡がとられたから、戰鬪は從つて數日間も數週間も繼續した。その戰鬪は直ちに完全な決定を見なかつたから、運動戰は陣地戰に移行した。その時から一般に戰鬪を行はない軍隊の運動は殆んど存在しなくなつた。將來の戰爭においてもそうであるかどうかは未解決の問題である。それは正しく、中央ヨーロッパの狹隘な場所においては、武器の射擊距離が增大し、防禦地域の奥行が深くなり、更にこの二つにより條件づけられて、あらゆる攻擊が遲々として進捗しないので、自動化され且つ機械化された部隊が再び迅速にして斷乎たる決戰を可能ならしめない限り、問題である。何となれば、將來においてもまた、敵を出來る限り兩翼をもつて包圍するために、また自國を掩護するために、軍隊の集團をば、廣大な戰線に、また出來る限り密集させて國境に配備せざるを得ないだらうからだ。敵もまたそれと同じことを爲すであらうから、短い進軍の後には、世界大戰において示されたところと本質においては相似た狀態を豫想しなければならないであらう。

軍豫備（Heeresreserven）軍豫備は、一般の豫備と同樣、それの參加によつて、作戰および戰鬪の經過に影響を及ぼし得んがための部隊であつて、それの使用は、司令官の手に保留されてゐる。豫備を出來るだけ强固に保持することは、司令官の努力であらねばならぬだらうが、他面、それによつて戰線の戰鬪力は弱められる。最後の豫備をもまた適時に決定的な場所に參加せしむることとは、指揮の術であつて、且つ勝利の前提條件である。決戰が行はれる場合には、萬一の反擊に備へるために、豫備の出し惜しみをしては斷じてならない。防禦においては、從つてまた要塞においてもまた、最高司令官の手にある總豫備（Hauptreserve）と個々の分隊のための分隊豫備（Abschnittsreserve）とは區別される。後者には、世界大戰の陣地戰において逆襲のために用意された突擊部隊（Eingreifdivision）が數へられる。

豫備は、決戰を行はうとするところ或は狀勢が不分明で保證が與へられなければならぬ場所、すなはち第一に翼の背後

に、その位置をもつ。シュリーフェン伯爵は、これを、深く且つ廣い梯隊(Staffelung)における包圍のために『大隊方陣』(bataillon carré)として隨伴せしめようと欲した。將來は、空中から攻撃される危險――それからまた尙ほ單に認識される危險が、夥しく增大するので、その參加によつて、決戰を强要すべき豫備をば、出來る限り長く遠方へ引き留めて置かなければならなくなるだらう。豫備は、參戰の直前に最も迅速にそれを使用する場所へ連れて行く爲に、鐵道附近に割當てゝ置くべきか否か、或はそのためには自動車輸送の方が目的に合致してゐるか否かは、更に檢討すべきであらう。既に世界大戰は、かゝる移動のために鐵道が如何に大きな役割をもつてゐるかを明瞭に示してゐる。タンネンベルグの作戰、マヅール(Masuren)における冬期戰、東部戰線におけるロッヅ(Lods)、ゴルリス(Gorlice)、ウイルナ(Wilna)またフランデルン(Flandern)の攻勢、ベルダンの攻擊、一九一七年のカンブレエ(Cambrai)における恢復攻擊、西部戰線における一九一八年の大攻擊は、そのために當てられた攻擊部隊の鐵道による集中なしには、全く考へられない。最後の瞬間における奇襲的肉薄は、將來においては、軍豫備としての快速運動部隊(自動化され且つ機械化された部隊および軍騎兵)によつて、根本的に容易ならしめられるであらう。

軍騎兵　軍騎兵は、一の特殊な地位をとつてゐるが、それは恐らく將來においては、自動化され、機械化された部隊によつて充たされるであらう。發展は、明瞭にこの方向を示してゐる。戰場が廣大で、道路の乏しい東部戰線における狀態は、一時的には、もちろん西部戰線におけるそれと非常に異つてゐるので、軍騎兵の意義と任務とは更に詳細に檢討されねばならぬ。フリードリヒ大王およびナポレオンの時代には『重』騎兵が、戰鬪騎兵隊(Schlachten reiterei)として、戰鬪を決定した。その輝かしい實例は多々ある。『輕』(不正規)騎兵は、偵察および小さい獨立的な仕事に當てら

れた。これは明かに任務の分割であつた。その後、騎兵は、軍隊の運動に際してその位置を受けた。一八六六年のプロシア軍隊の重『豫備=騎兵』は、大抵の場合、歩兵の背後から行進した。何となれば、それは、會戰の決定を助けるべきものであつたからだ。一八七〇年の戰爭の經驗が初めて統一騎兵隊を實現せしめ、かくて根本的に兩面的な使用を招來した。世界大戰の結果は、滿足なものではなかつた。第一に、國境守備において、次に軍戰線の前で分割され、偵察勤務の部署に置かれた騎兵は、既に疲勞し切つた馬しか持たず、しかもその優秀な分子の死傷した後に、會戰に參加したのだつた。だが、フリードリヒ大王およびナポレオンの時代以來、もつと大きな變化が行はれた。當時、騎兵は、實際にその名の通りのもので、武器を手にして、馬に乘り、敵中に進んだのであつた。その後、騎兵は、武器を使用するために、馬を棄てなければならないので、騎馬歩兵(berittene Infanterie)となつたが、これは、戰鬪が始まるや否や、馬が荷物になる。だが、これにあつては、もし一般に課せられたる任務が充足さるべきだとするならば、しばしば最後の騎銃の使用のみが一切であつて、馬の保持は無であるといふことを意味する。このことは、戰鬪が最早や一日のうちに決せられなくなつて以來、ヨリ强度に示めされた。晩になると、馬は、射手を呼び戻さなければならない。何故なら、馬は、水を飲ませて貰ひ、飼料を食はせて貰ひ、もし出來るならば、敵の砲兵隊の有効な砲火の屆かないところに、泊めて貰はなければならないからだ。それ故に以前のドイツの騎兵服務規定のうちに、騎兵は、長時間繼續する戰鬪の遂行には適當でないといふ一節が含まれてゐたことは當然であつた。世界大戰前の最後の服務規定の中では、この一節は削除された。

大きな騎兵團の獨立的な使用は、世界大戰においては、そのために、戰鬪關係もまた中央ヨーロツパでは地形の關係も以前に比較して餘りにも發展してゐなかつた爲に、しばしば失望させられたにすぎなかつた。獨立して戰鬪を遂行するに足るだけの武器が極めて稀れであつた。繼續的な步兵の割當てが必要になり、その結果、全く不均等な組合せとなつた。

なかんづく、その馬のために、夜になると始終敵から離れなければならない部隊は、背進と再度の前進の空しき繰返へしで、その力を甚だしく消耗させられ、その結果、數日に亘る作戰上利用しうべき總業績において、多くの場合に結局のところ、歩兵部隊以上に出てゐなかつた。かくて、騎兵隊に期待される効用の本質的な部分は無くなつてしまつた。たゞ進路上に敵がゐない所でだけ、それは、長い間歩兵より迅速に進んだ。西部戰線においては、數多の廣い場所――その見透しのきかない背後には、鐵條網、壍濠および掘割などの危險が待ち構へてゐた――が、運動を妨げる障碍を用意してゐた。もし次のことがなければ狀態は西部戰線におけるよりも有利だつた東部戰線においては、人口が稀薄なために、宿泊所や飼料や、時にまた水の缺乏に惱まされた。巧妙な指揮により迅速な行進により、東部戰線において、深く敵の背後に達し、その結果、敵の退路を遮斷したかの如く見えた强力な騎兵は、數倍も惱まされた（クールランドおよびリトアニア、就中一九一五年のウイルナにおいて）。だが、如何なる如合にも、騎兵は、その大膽な行動の成果を收穫できるまで長く、そこを固守することができなかつた。ロシアのブヂョンヌイ騎兵隊のポーランドにおける一九二〇年の大行進は、非常に獨特な事情の下に遂行されたので、こゝで我々が考察するには適しない。

かくて、大なる騎兵團の使用には、今日、多くの點より見て、從前よりも極めて狹い限界線を引かなければならないように思はれる。部分的乃至全部的な自動化は、一の役割を演ずるであらう。機械化兵團は、騎兵團に代ることができる。だが、もし最近の戰爭における軍騎兵に對しての如く、それにも、二重の任務――すなはち、最初には軍前衛および偵察、後には決戰への參加――を課するならば、それもまた困難に當面するであらう。何となれば、それは、第二の場合に參加する時には、最早や活潑ではないからである。

軍騎兵或は將來の自動化および機械化兵團に充てられた或は充てられんとする使途に從つて、軍隊の運動における配列

が生ずる。偵察および僞裝のためには、それは、戰線の前方にあつて、多くはまた分割されなければならぬ。長驅する獨立的な——第一に外翼に期待しなければならぬような——任務のためには、宿泊および給養能力がそれを許す限り、强力に總括されて使用されなければならぬであらう。だが、これら兵團を、その必要な場所へ奇襲的に投ずるために、戰線の背後に休養せしめて置く時は、決戰に使用する場合に、最もよく準備されるであらう。多くの任務に同時に正しく應ぜしめんとする企圖は、あれこれの點において中途半端になり、從つて完全に滿たされることは稀れである。だが、かゝる企圖は、それにも拘はらず、しば〳〵僞されなければならない。といふのも、區別さるべき色々な任務に對して特殊の組織を用意するためには、兵力が充分でないからである。

(四) 偵察および警戒(僞裝)

偵察。 敵および地形に關し一切の知るべきことを確認する偵察と、敵に對する第一の防護を部隊集團に與ふべき警戒とは、互に協力し合ひ且つ補足し合ふ。それらは、しば〳〵ハツキリと區別することはできない。偵察は自由に運動するに對し、警戒は場所的に固定してゐる。

偵察は、敵に關して出來る限り完全且つ適切なる報告を與へ、これによつて將帥の決斷のための基礎を與へるべきものである。廣い意味では、その活動は平和時代に既に始つてゐる。すなはち、參謀本部の一定の部署が、情報の蒐集によつて、敵として問題となる一切の軍隊、その兵數、武裝狀態、訓練、集中および作戰能力についての出來るだけ完全な姿を描き出そうとしてゐるのである。この場合、戰時におけると同樣に、エーヂエントが一の役割を演ずる。

戰爭の勃發と共に、軍隊は、その軍事的活動の一部分として偵察を擔任する。空軍および快速部隊は、この部分に分たれる。

空中偵察は、敏速に大體における狀勢の報告を與へ、且つ敵の領地の奥深くまで飛び入ることができるが、しかし敵の前線を確認することはできない。その獲物は、それが寫眞によつて寫し出されてゐる限り、無條件的に信頼できる。その撮影は、解說のために、もちろん多くの時間を必要とし、しかも常に單なる早取寫眞にすぎない。電視が將來如何ほどの能力を發揮するかは、尙ほ見透すことはできない。敵の意企に對する推定は、敵の空軍能力の觀察もまたこれを與へうる。

地上偵察は、一般に、たゞ最前線の敵部隊に達するにすぎない。それは、敵の最前線を確認し且つその變化を繼續的に觀察し、これを報告することができる。この場合、自動車は急速に前進するが、しかしそれは道路に縛られてゐる。騎兵は遲いけれども、その代り地形に束縛されることはヨリ少い。司令部の仕事は、偵察の任務をば、偵察手段の特質に應じて割り當てることにある。司令部の必要とするところに就いて報告せしめるためには、司令部は、何を確かめることが特に重要なのかを明確に指示しなければならぬ。作戰的偵察は、第一に、敵の集中と軍隊の運動を目標とする。從つてそれは、何よりも先づ鐵道と道路とを觀察しなければならぬ。

偵察の目的は見ることである。それは、一般的には唯だ、然らざれば拒まれてゐるところの瞥見を强取するためにのみ、戰鬪と關係するのである。だがそれは、大抵の場合、たゞ敵の偵察機關に對する時にだけ成功するにすぎない。それ以上になれば、それは『强力的搜索』であつて、必要な場合には、あらゆる武器をもつた强力な兵力による攻擊である。世界大戰の陣地戰における數多の斥候の仕事がこれに屬するものであつて、それは、捕虜を收容し、彼等の證言からして、敵の狀態、兵力の分布、意圖についての推定をすることを目標としてゐる。かくて偵察或は强力的搜索のために使用される兵力の强さおよび構成は、その狀況と任務の如何により種々異つてゐる。

偵察は、その確認せるところの事が適時に司令部の手に屆いた時に初めて、その任務を果したといへるのである。こ

察機關の任務を、非常に容易ならしめた。あらゆる種類の通信手段（事情に應じ、有線或は無線電話、飛行機、自動車、傳騎、等々）によつて送られ、必要に應じては最初に情報蒐集所（Nachrichtensammel stelle）に集められ、次いで更に取次がれる報告は、司令部の決斷のための基礎を與へなければならぬ。それは、適當なる注意をもつて作成されなければならぬ。確實に認められたるもの、たゞ一方的にのみ報告されたもの、或は全くたゞの推測にすぎないものを明瞭に區別することは、決定的な重要性を有してゐる、更にそれと共に——本質的なものを省略することなく——出來るだけ簡單にすることだ。何故なれば、司令部に集まる報告の數は、しばしば多數に上ぼり、これらの互に補足し合ひ或は全く矛盾する情報の山積のうちから、迅速に適切なる姿を描き出すことができなければならぬからである。（第三節參照）。

警戒。警戒は、奇襲的攻擊に對して、味方の軍隊を防護しなければならぬ。適時に信賴しうる報告をなすところの偵察は、最善の警戒である。しかしそれはいつでも決して確實に當てにはできないのであるから、尙ほ特殊な部隊を分離することを止めることはできない。この部隊は、その戰鬪によつて、部隊の集團、すなはち本隊の計畫的な出動の時間を確實にしなければならぬ。それはすなはち、動員および集中の期間は國境防護、およびそれと並んで恒常的な防空、尙ほその外に、靜止狀態においては前哨、運動狀態においては前衛或は後衛或はまた側面掩護である。

警戒の任務は、急速に行動し、しかも戰鬪力を有する兵團の實現によつて、根本的に困難ならしめられる。將來は一部の地形（河川、沼澤、山林）——それは道路の外にあつて、それ自身既に、敵の戰車およびその他の自動車にとつて妨害物となつてゐる——は、ますます大なる重要性をもつことになるだらう。遮斷のための化學的兵器の使用もまた問題になりうる。

一般的な警戒任務は、前哨および後衛にとつては常に、防禦或は抑止的反抗によつて果たさるべきものであるが、前衛にとつては、時にはまた側面掩護にとつても、攻撃が問題となる。警戒任務が、敵の奇襲的攻撃に對する直接的防護に關する限り、この任務は第一に歩兵に歸する。個々の特殊任務（へ例ば戰線の前に存在する隘路の遮斷）に對しては、砲兵の支援を受ける。

僞　裝。僞裝は敵の偵察に對する警戒である。それは、敵の偵察機關に對する攻撃によつて攻勢的に遂行されうるし、且つ快速運動部隊の使用を要求する。だが大抵の場合、それは、守勢的で、警戒と合致する。これと相並んで、常に敵の僞瞞を目標とする手段が問題となる。（第五章參照）

（五）戰　鬪（會　戰）

あらゆる用兵の自然的な最後の目標は、敵の抵抗力の殲滅、すなはち勝利である。勝利は、たゞ戰鬪によつてのみ獲得しうるのである。それは、敵が既に先行する運動によつて、最後の決戰を斷念し且つ强者の意思に服從するような狀態に置かれてゐない場合である。がしかし、こういふ場合は、稀な例外であつて、敵が降伏しなければ、攻撃者は止めを刺す決意をするであらうといふことが些の疑ひもない場合にのみ生ずることである。

戰鬪（Kampf）は、會戰（Schlacht）の戰術的行動、ヨリ小さい狀態の戰鬪（Gefecht）、更に小さい小鬪(Scharmützel)——この場合にもまた既に決戰を行はない思想が含まれてゐる——の頂點をなしてゐる。

會戰は、數世紀の長きに亘つて、唯一の、統一的な且つ同時的な行動であつて、それは、それに先行する集中の後に、大抵は短時間のうちに展開されたものであつた。武器の遠距離作用は、この關係を變化せしめた。戰鬪は、既に數キロメートルの距離から開始される。既に敵への接近が時間と損失とを必要とする。戰鬪は長びき、數日間も數週間も續き、遂

には全く麻痺狀態に陷ることもあり、かくて陣地戰に終りうる（第六項參照）。だがそれは、そうあつてはならない。攻擊者は、そういふ狀態になるのを防止することに一切の利益を有する。

モルトケが敎へていつた次の言葉は今尙ほ正しい――『會戰は、敵の抵抗せんとする意思を打破するための大なる手段である。この上述の意圖は、大なり小なりの一切の戰鬪行爲の根柢に存在して居り、これらの戰鬪行爲は、最後には決戰においてその解決を見るべき狀勢を招來するための手段である。だが、それは、唯一の手段ではない。戰爭の多數の重要なる目的は、戰鬪を行はずしても、行軍により、陣地の選擇により、簡單にいへば作戰によつて成就されうる。……戰鬪は犧牲なしには遂行しえないし、その終末を或る程度の確實さをもつて豫見しうることは稀であるといふことは忘れてはならない。……我々は、戰爭においては、如何なる狀態の下においても、たゞ戰ふために戰ふといふことに氣を奪はれてはならぬ。何となれば、正にこゝにおいてこそ、願望をもつてゞはなく、實際に則して顧慮しなければならぬ。戰場においては、嚴格な訓練は、しばしば博識に代はるといふことは、確かに眞實である。それだから、あらゆる戰爭狀態において博識に基づくことは危險である。』だが、『戰爭の大なる目的は、戰場における敵主力の討滅によつてのみ、すなはち會戰によつて成就されうるのである。』

フリードリヒ大王は、戰爭の一般原則において次の如くいつてゐる――『會戰は、國家の運命を決定する。常に戰爭を遂行する者は、難境から解放されるためであれ、或は敵を苦境に陷れるためであれ、或はまた、然らざれば決して終りそうもない戰鬪を戰ひ拔くためであれ、かゝる決戰を行はなければならない。……將帥が戰鬪を强要されるならば、それは彼自身誤りを犯したのであり、敵によつて會戰の誇るべき法則を指定されることになる。

然らば、その會戰からは何ものをも引出しえないから、その將帥は、戰爭に負けたものと思ひ諦めるであらう。もし將

師が――とクラウゼヴィツは考へる――『講和を爲そうとしてあらゆる方法を巧妙に利用したいならば、我々は、その故をもつて彼を非難すべき何等の權利をも有しない。しかも我々は常に、戰の神に出會ふべき間道のみを行くことを意識し、それと共に、もし敵が銳利な劍を把るならば、これに向ふに禮裝用の劍をもつてすることがないように要求しなければならぬ。』

戰鬪は、戰鬪行爲の目標、種類或は意義に從つて、次の如く分れる――殲滅戰（Vernichtungsschlacht）これは最も完全な、そして――もし可能ならば―常に行はんと努力すべき形態である。攻撃戰（Angriffs-Schlacht）。これはまたその屬性の種類に從つて、突破戰、包圍戰に分れる。防禦戰（Abwehrschlacht）。世界大戰においては、兵力の不足から純粹防禦に制限されねばならなかつた。決戰。一の戰役或はまた全戰爭を決定する。

更に、世界大戰における陣地戰の特殊のものとして、資材戰（Material Schlacht）、消耗戰（Abnutzungs Schlacht）、或は肉彈戰（Ausblutungsschlacht）が行はれた。

會戰が、大規模な、全戰鬪力かかを包括する、統一的な戰鬪行爲として演ぜられるか否か、或はまた、數多の會戰と戰鬪が共に作用して結果を生ずるか否かは、その時の事情に依存してゐる。軍隊が大きくなればなるほど、後者の場合がますく頻繁に起ることになる。シュリーフエンは、フランスに對する彼の作戰計畫において、單に唯一の、同時的な、全般的な會戰のみを考へてゐたのでは決してなく、全作戰の統一によつて互に補足し合ふべき數多の個別戰鬪の可能性或は蓋然性、すなはち世界大戰における初期の會戰にも實際に示された樣な狀態をも同樣に考慮してゐたのであつた。この後に初めて戰線は、最後にマルヌ會戰中に生じ、その後は最早や常に生じた如き、唯一の、密集せる戰線に集結されたのである。

我々は、何時になつても戰鬪をなすに充分强力にはなりえない。決戰のためには、勝利か敗北かの戰ひには、最後の一人、最後の一發まで使ひ盡されなければならぬ。戰鬪の開始に當つてもまた、兵力の支出に深慮が拂はれるならば、兵力を次ぎ次ぎと漸次に補充するために戰鬪の遂行に不充分な兵力を出すよりも、大なる誤謬を犯すことが殆んどない。人は自發的に兵數の利益を捨てることもあるだらう。例へば、それはドイツ步兵の戰前の服務規律の中に模範的に述べられてゐる。同一の原則が擴大されて用兵一般にも當てはまる。

豫備（三參照）の分離は、それにも拘はらず正當である。豫備は、しかし、決戰のためには完全に使用されなければならない。相互の兵力の角逐において最後の豫備を使用することの出來るものは、勝利をうること確實である。しかし豫備の使用に就いても、『遲そすぎた！』といふ致命的な判定も下されうる。豫備の强さ、配備および使用は、注意深い考慮を必要とする。可動性は、その使用に有利である。豫備をば、その使用されるところへ適時に送ることは、指揮の術である。豫備軍の參加は、最後の切札の役割を演ずる。

戰鬪は攻擊か防禦かである。兩者は互ひに交錯しうる。一部は攻擊を行つてゐるのに、他の部分は防禦をしてゐるといふこともありうる。あらゆる戰鬪は、それが攻擊であれ、或は防禦であれ、必ずしも直接に決戰を行ひ、最後の勝利を得んと努力する必要はない。兵力の關係、時にはまたその他の事情、なかんづく政治狀態は、目標を制限し、攻擊の場合にも單に地域の獲得に止め、防禦の場合には地域の固守に止めしめることがありうる。これは、目標の制限せられたる用兵（七參照）である。或はまた單に決戰を後に延ばすために時間の餘裕をうることだけが問題となる場合もありうる。この場合には、持久戰が行はれ、その際には、攻擊と防禦とが相交替しうる。この防禦は、かくて、決戰に至るまで戰ひ拔く防禦と異つて、持久的抵抗となる。結局のところ、攻擊と防禦は、たゞ欺瞞、轉向および束縛に役立つだけだ。

以下においては、先づ第一に、たゞ眞の、すなはち決戰、勝利をえんとする戰鬪のみに就いて述べるであらう。

（1）攻擊と防禦

——兩者の本質、目標および使用——

攻擊（Angriff）は、大規模な狀態においては攻勢（Offensiv）とも呼ばれ、戰鬪によつて、敵を、少くとも擊退し、もし可能ならば殲滅するために、敵に向つて前進することである。攻擊は、一般的には强者の戰鬪形態である。防禦（Verteidigung）は、大規模の狀態においては守勢（Defensiv）とも呼ばれ、敵の攻擊を待ち受けることである。それは、一般には弱者の戰鬪形態であり、從つて先づ第一に、自衛を目的とする。

攻擊は、能動的な、積極的なものであり、かくて戰爭の根本原則である。攻擊は、敵に對して、行動の法則を指定する。だからそれは本源的のものである。一方が攻擊を行はなければ、抵抗もまた存在しないし、すなはち一般に戰爭は考へえられない。防禦は副次的のものである。たゞ陣地の選定によつてのみ、すなはち戰鬪の場所を指定することによつて、防禦は、敵の行動に影響を及ぼすだけである。兎も角、それは後手である。

クラウゼヴイツが、防禦は消極的目標をもてる戰鬪の强力な形態であり――攻擊は積極的目標を持てる戰鬪の弱い形態であるといつた時、彼は、戰術的關係から出發したのであり、この場合には、防禦者は大抵自ら選び、特別の準備を設けた陣地に防護されて據つて置り、敵を寄せつけない射擊の効力は、運動において大きな目標を達成せねばならぬ攻擊者の射擊効果よりも優れてゐる。だが、この關係は、それ以上に作戰の領域には移すことができない。兵數、武裝或は訓練、簡單にいへば戰鬪力の優越又は指揮の練達は、かの不利を相殺する。だが、就中、イニシアチヴおよびそれと密接に結合してゐる勇氣、優越感、勝たんとする意志および勝利の確信は、敵とは全く比べものにならぬ程攻擊者を助けることにな

る。しかのみならず、同様にイニシアチヴから發生し、しば〳〵正に決定的な利益――すなはち奇襲の利益が生ずる。これに反し、防禦者の方には、攻撃者が、何時、何處で、如何なる手段をもつて奇襲を行つて來るかについて、絶えざる不安が重荷となつてゐる。

モルトケは教へていつた――『戰術的守勢は、ヨリ强力な形態であり、戰略的守勢は、ヨリ効果的な形態であり、それのみが目標に導くのである。』

攻撃は、その目標、すなはち勝利による敵の戰闘力の殲滅に向つて眞直に進んで行く。防禦は、そうするに足る强さの自信がない。從つてそれは、先づ第一に、敵を疲らせて兵力を均衡させようとし、然る後にこれを反撃して攻撃に移らうとするのである。何となれば、防禦もまた攻撃によつてのみ、最後の勝利に達しうるのだからだ。しかし實際においては、しば〳〵、攻撃に際しても防禦に際しても、最後の目標を達成するためには充分ではない。攻撃者は、敵を撃退するより以上のことが出來ないことが屢々ある。この場合、攻撃者はそれをもつて單に『普通の勝利』を得るにすぎない、他方、防禦者は、大抵の場合、たゞ攻撃者がその目標を成就することを妨害しうるだけだ。この場合、防禦者は、それをもつて單に『防禦勝利』を得るにすぎない。これは、なかんづく世界大戰の陣地戰において普通だつたところの結果である。

防禦者は、たとへ最初の陣地から退却しなければならぬ時でも、たゞ自國の兵力源泉への道が依然確保されてゐさへするならば、進んで來る豫備軍と後方の防禦設備の利用とによつて、幾度でも新しい强味を加へることができるに對し、攻撃者には、その反對が生じ易い。攻撃者にとつては、戰闘において弱められた兵力を再び補充するためのあらゆる停止は、時間の損失であり、從つて不利であるが、それは防禦者にとつては利益である。攻撃者が、その出發地點から遠ざかれば遠ざかるほど、戰闘力の維持はます〳〵困難になり、いよ〳〵遠くなる本國への交通を有効に維持し、且つ確保するため

に強力なる部分がます〳〵分割されなければならなくなる。かくて攻擊は、最後には、全く停止狀態――クラウゼヴィッツの所謂攻擊の極點――に陷りうる。かくてその後には、均衡狀態（すなはち陣地戰）における相互の兵力の角逐が行はれ、また全狀勢の激變が生ずることも稀ではない（一八一二年のロシア遠征におけるナポレオン、一九一八年夏におけるドイツの西部軍）。この最高點の到來を豫感し、且つ成果を擴大することが尙ほ可能であるか否か、或は切迫せる失敗を豫防するために旣に獲得したものを確保する方が重要か否かを決定することは、將帥の任務である。

ボーア戰爭の第二部における英國軍や、一九一八年の夏および秋における聯合軍が有してゐた如き明白なる全體的優勢――それは決して單に兵數のみではなく、同樣に戰鬪價値および精神的要素についても考へられなければならない――の場合には、攻擊はもちろん旣定の事實である。攻擊を何とか敵に押しつけ、敵が攻擊して來たならば自ら反擊を加へて決戰を行はうといふ思想は、拒否さるべきである。もしイニシアチヴを放棄するなら、果して最後において自ら攻擊に出るか否かは疑問である。だが、相匹敵する總兵力の場合においても、いな劣勢の場合においてすら、攻擊は可能であり、且つ自國の領土から戰爭を遠ざけんとする自明の努力を拂ふ場合にもせよ、また徒らに待つてゐることが狀勢を敵に有利に推移せしめるような他のあらゆる場合にもせよ、それは必要でありうる。（七年戰爭におけるフリードリヒ大王、一九一四年の中歐諸國、なかんづく東部戰線におけるそれ）。かゝる場合にもまた勝利は全く可能である（一九一四年の東プロシアおよびポーランドにおける戰役）。もちろんその場合には、兵數において缺けたるところのものを、指揮の術によつて補ふといふ前提條件が必要である。かゝる方法によつて、敵の主力を潰滅することに成功するならば、決定的な兵力の均衡、いな完全なる勝利が、最後の結果として生じうる。

特に戰爭の開始當時においては、一方は自己の優勢を感じて、他方は待機が自己の狀態を惡化するために、兩軍が共に攻擊を行ふ場合が稀れでない。なかんづく世界大戰の初期は、かゝる狀態を示し、すべての國が攻擊を行ひ或は少くとも攻擊せんと企てた。殆んど全部の攻擊が膠着狀態に陷つたといふことは、しかし、それらの攻擊を企てたことが間違ひであつたといふことを證明するものではなく、どの軍においても――東プロシアにおけるドイツ軍を除けば――攻擊力および指揮の術が、その目標を達成するに足りなかつたといふことを證明するにすぎない。それにも拘はらず、これらの失敗からして、時には、攻擊が間違ひであつたといふ結論も下された。かゝる見解は、聯合軍に對しては是認されるように見える。何となれば、聯合軍側は、ロシアがその攻擊力を完全に展開するまでは、强力な防禦陣地に據つて待つてゐた時にだけしか勝つことができなかつたからだ。イギリスの封鎖を度外視しても、それまでは、時間の猶豫は彼等に味方をしてゐたのである。それにも拘はらず彼等が攻擊をしたのは、彼等がマルヌ以前から充分な力があると自信してゐたからだ。この視角から見れば、彼等の決斷もまた正しかつたのだ。しかし、相互の兵力關係に對する彼等の判斷が間違つてゐた。これに反して、中歐諸國は、全體的に見ても、また東部戰線の特殊な狀態においても、時を移さぬ即刻の攻擊によつてのみ、その狀態を好化することができたのであつた。待つてゐれば、兵力關係は不利になるばかりであつた。

最後に、一方は、攻擊をするには餘りに微力すぎると感じて攻擊を行はず、他方は、時の猶豫によつて狀態の好化を期待するために攻擊を行はないといふような場合を考察すべきであらう。これについては北海における海戰を想起せよ。その結果は、一回の決戰によつて急速に終結せしめられないところの殆んど一切の戰爭において時々見られる如く、戰爭遂行の停止である。世界大戰においてもそうであつた。そこでは、多少とも長い休止狀態が幾度も幾度も起り、その間に各自が新しい攻擊を準備したのである。しかし曾つてイギリス軍が、南アフリカにおいて、每年々々計畫的にボーア人包圍

の輪を狹めて行き、遂にこれをして抵抗を斷念しなければならぬ狀態に陷れたのは、敵を消耗させる方法であつて、それはたゞ例外的な場合、とりわけ植民地戰爭の場合においてのみ用ひられるものである。外界からの遮斷、從つて飢餓と窮乏との助けを借りるならば、戰爭の永續と費用とは決して大きすぎる負擔にはならないし、且つまた對外政策或は對內政策上の困難も豫期されえない。この場合には、血を節約して、金と時間とをその代償として支拂ふのである。世界大戰の如き戰爭は、その全體においてかゝる方法を用ひない。そこで聯合軍もまた――戰爭の本質に適應して――時間と封鎖の効果を待つことなく、自己の武力を自信し、大陸において勝利を强取すべき最も有力なる手段、すなはち攻擊を繰返へし選んだのであつた。

自明の如く、勝利が期待されるや否や、攻擊は常に行はれる。この期待が正しいか否かは、しかし、決して確實には豫見されるものではない。そして正にその故にこそ、疑はしい場合にも、戰爭の積極的要素としての攻擊に、優位を與へなければならない。防禦は、餘りにしばしば、自卑の表現でしかない。『攻擊は、兵士を鼓舞し、强力にし、且つ自信を眼醒めさせ、敵を狼狽せしめる。被攻擊者は、常に、攻擊者の力を實力以上に評價するものである』――とグナイゼナウはいつてゐる。

勝利の希望なき攻擊ですらも、恥辱に滿ちた降伏より英雄的な最期を招ねく絶望的行爲として、たゞそれ自身のために、その理由を持ちうるのである。

（２）　攻擊における行動

防禦はヨリ强い戰闘形態であり、攻擊はヨリ弱い戰闘形態と見做すべきであるから、攻擊者は、その不利を償ふための

みならず、更に勝利を戰ひとるためにも、全く充分に强力ではありえない。從つて攻擊者は、全般的に著しく優勢な場合ですらも、一般に敵戰線の一個所に向つて兵力を結集し、こゝにおいて敵の全陣地を破壞すべき主力衝突を遂行しなければならぬ。もしかゝる方法でも完全なる勝利に達せられないならば、その時には、更に部分的勝利により迂回的に完全な勝利に達すべく務めなければならぬ。攻擊のためには、兵力およびその任務の計畫的な分割が、自明の前提條件である。意志ならびに兵力展開の重點は、斷然、主力衝突が行はるべきところに置かれなければならぬ。味方の總兵力が敵に比較して少ければ少いほど、それはますく必要になり、かくてまた他の戰線はますく弱められなければならぬ。その結果、そこでは、たとへ全く持久的抵抗に限られないまでも、專ら防禦に限られるような狀態にもなりうる。その點に一つの危險が存在する。何となれば、敵がそれに氣がつけば直ぐに對抗策をとり、その兵力を同樣に移動せしめて、決戰地帶における攻擊者の兵力と同等ならしめるか、或はまたそれを弱められたる戰線に沿つて、自分の方からこれを攻擊するであろうからだ。

かくて我々は、あらゆる攻擊の第二の本質的な要求たる奇襲およびそれと直接に接合してゐる極めて迅速なる突破に到達する。兩者の一方だけでも失敗したならば、總體に優勢なる敵或は兵力等しき敵に對する攻擊は、部分的成功以上に出ることは稀れである。奇襲は、突發的な且つ迅速な、豫め準備されたる運動（鐵道および自動車による運送、自動および機械化部隊の使用）と同時に祕密保持および出來るだけまた敵の欺瞞によつて成就される。攻擊者は、時間が延びれば戰術的に防禦者に有利になるといふことを、一瞬間も忘れてはならぬ。それ故に、最も迅速に前面に進む部隊は、出來る限り攻擊の速度を早めなければならぬ。これらの部隊の困難な、だが最後の勝利にとつて第一に決定的な手段に對し、適時の支援を與へて進ましめることは、指揮官の最高の努力でなければならぬ。この點において、狀勢を夙に認識し且つこれ

が利用のために、適時の兵力を手中に有してゐるといふことは、攻撃における指揮官の最高の能力である。他のものより迅速に前面に進んだ部隊を反撃から護るための部分的行動すなはち交互の攻撃および停止は、元來、この最高の能力を放棄してゐるのである。それにも拘はらず、それは、なかんづく隘路からの脱出および渡河の際には適當である。しかし、原則的には、クラウゼヴィツは、次の如く敎へてゐる——『我々は、攻撃戰においては、當然、少しの中斷も、少しの休止點も、少しの中間驛もない、と信ずるのではなく、かゝるものが不可避的なところでは、それは、成果を確實にせずして、不確實ならしめるところの一の惡と見られなければならぬと信ずるのである。』

大體において攻撃の方向は、敵軍、すなはちクラウゼヴィツの所謂『作戰對象』に衝突しなければならぬところの道、かくて大抵の場合、敵の首都へ直通する道である。もし敵が分離して配置されてゐるならば、もちろんその時には、それらのうちのどの部分を先づ第一に攻撃すべきかといふことが問題となつて來る。この決定は、第一に、味方の兵力に依存する。味方の兵力が尙ほ非常に大であるならば、これを同等に分割することは、一般的に見て、誤りであらう。攻撃者は、むしろ、敵の如何なる部分に對して主たる打撃を與へんと欲するかを決定すべきであらう。その兵力が、避け難い必要のある副次的な任務——この場合には、もちろんその不可避性は極めて嚴密なる尺度で測られねばならぬ——を果しつゝ、敵の主力を攻撃するに足るならば、それは當然の目標である。何となれば、それが殲滅されてしまへば、他の部分は最早や全く決戰に參加できないし、また容易に片附けられ、かくて、敵の抵抗の全組織は、主力に對する勝利と共に崩壊することを期待されるからである。クラウゼヴィツは、次の如く敎へてゐる——『すべては主力決戰にかゝつて居り、それによつてあらゆる損失がもたらされるのである。かゝる主力決戰を合理的に求めるほど充分な兵力があるならば、あらゆる場合に、その他の地點で損害を受けぬように自衞することに失敗する可能性は、理由がありえない。何故ならば、この失

敗は、正にそれによつて遙に起りうべきことだからである。』

しかし兵力關係は、かゝる行動を可能ならしめないといふようなこともありうる。そうすれば、先づ第二の行動においてその際自由になつた兵力を支力に當らしめるために、主力に對しては一時的な持久戰を行ふ場合に、支力の討滅といふ迂回が問題となつて來る。世界大戰における中歐諸國の狀態は、これに對する適例である。大體において見れば、一九一四年のマルヌおよびフランデルン攻擊失敗後には、西部戰線と同時に東部戰線においても繼續的に脅威される狀態にあつて、まづ東部戰線における敵を一掃して後に、敵の主力、すなはち西部戰線における敵に對する最後の勝利をうるために、尙ほ兵力を召集すべきであつた。しかも、この場合にも、第二位の戰線の結合は、たゞに時間のみならず、兵力をも消耗せしめ、かくて遂に西部戰線において敗れねばならなかつたといふことは、依然として熟考に値ひする。

敵の戰線との關係において攻擊が持つところの方向は、次の諸形態に分類される——

(イ) 正　面　攻　擊

これは最も困難な攻擊である。何故なれば、それは、防禦準備成れる强力な戰線に對し斷乎として衝突するものであり、敵は、こゝでは大抵、他の如何なる地點におけるよりも速かにその豫備軍を使用しうるからである。しかも、それが成功した場合においてさへ、その獲物は大抵微小なものである。敵を殲滅する望みは、たゞ敵が退却の可能性を少しも有しない時にのみ存在する。しかしそれは、ヨーロツパにおける如く道路網が發達してゐるところで、とりわけ正面攻擊の場合の遲々たる前進によつては、敵が山嶽や大河を背後にしてゐる場合ですらも、稀れである。それ故に、正面攻擊は、たゞ『普通の勝利』、すなはち敵戰線の擊退に終るにすぎぬ。それにも拘はらず、正面攻擊を行ふより外に仕方のない場合があ

りうる。例へば、世界大戰において、西部および東部において戰線が、海および中立國に倚托して以來がそうだ。

正面攻擊の目標は、突破である（七參照）。それは、敵の戰線を二つに分裂せしめ、それによつてこれらの部分の側面および背面への道を自由にすべきである。それは、同時に二つの側へ旋回して入り且つ眞直に衝き進み得んがために、特に强力なそして深く編成された兵力を必要とした。そしてこのすべての兵力は、最も貴重なる時間を浪費しまいとするならば、先づ第一に密集して續き、突破口の狹路を押し分け進まねばならぬ。これから生ずる困難は明瞭である。その成果は、第一に破開された破口の廣さに依存し、また敵をして、その背後に、たとへそう堅固でないまでも新しい戰線をつくる時間を持たしめないといふことに依存してゐる。集團軍、砲兵隊の遠距離効果、鐵道および自動車は、突破の望みをば、それを常に有効に使用したナポレオン以來、著しく減少せしめた。

作戰的突破は、世界大戰においては、双方の側から、實にしば〳〵企てられた。それは、戰線が尙ほ密集して固められてゐない場合にのみ成功した。就中、一九一四年十一月におけるロツヅの東方突破（その最後の結果がビツチエニイの退却であつたといふことは、その突破とは何の關係もない）、マヅールの海邊での會戰におけるドイツ軍の南方翼に對する突破、一九一五年、ウイルナの會戰における北方翼への突破および最後に――それは最も輝かしくまた極めて特殊な例であるが――一九一七年、フリツチおよびトルマインにおいて陣地戰線から出て行つた突破がそれである。その他のすべての場合においては、ゴルリツツの場合ですらも、――作戰的に見れば！――敵戰線への侵入とはいへない。それらは擊退されてしまつたのである。驚くべく夥しい軍勢と武器とをもつて行はれたに拘はらず、一度も作戰的効果を擧げるに至らなかつた聯合軍の再三の突破企圖は、ます〳〵そうである。

（ロ）翼　攻　擊（Flügelangriff）

翼攻撃は、正面攻撃の一變種であつて、それは、敵の陣列の一翼に向けられ、かくて敵の側面に向ふ側面攻撃へ移される。かくしてそれは、大抵その戰線と同等の防備を施してない個所に當たることになる。それは、同時に敵の後方連絡を脅かし、從つて殲滅的效果に對する正當な期待をもたらす。一九一四年十一月のロッヅにおけるロシア軍に對する作戰は、マイクゼル（Meichsel）の西方の戰線において、遙に優勢な敵に對する明瞭にして且つ素晴しい側面攻擊であつた。だが、同時的な正面攻擊のための兵力が無かつたので、敵は、適當な移動によつて、最後には再び均衡を恢復することができた。敵を、戰線において、劣勢な兵力によつて釣つて置き、これを欺く計略は、この詐略が續く限りにおいてのみ效果を有するが、それは、近代の決戰の繼續時間から測ると、大抵は非常に短い、從つて不充分な時間にすぎない。

それ故に、側面攻擊もまた、それが强大な兵力をもつて遂行され、且つ同時に强力な正面攻擊を伴ふ場合においてのみ、完全な成果を擧げうるにすぎない。

かくてそれは包圍（Umfassung）になつて來る。包圍は、突破に對して、次の利益を示めしてゐる。すなはち、それは、兩側に敵を有するのではなく、一方だけであり、從つて戰鬪のためには、ヨリ少い兵力で間に合ふが、しかしヨリ以上の作戰的使用のためには、ます／＼多くの兵力を保持する。これに當てられた兵力は、元來、――敵が對峙してゐる時なら――その背後に旋回するためであれ、また――敵が退却する場合なら――その側面を襲ふか或はその退路を塞ぐためであれ、有効な方向への活動のために、自由に活動のできる地を見出すのである。だが、包圍者は常に次の點に注意しなければならぬ――すなはち、敵の翼を廣く取り圍めば圍むほど、そしてまたそれに伴ふ成功の見込みが大きければ大きいほど、それだけまた新手の敵自身によつて側面或は背後を攻擊される危險にもます／＼曝されることになる。このことは、攻擊への適時轉向および必要な場合には、目標の制限を餘儀なくされる。

他の場合には、包圍から、先づ第一に進軍によつて尙ほ深く敵の背後に至るために、戰鬪を延期させるところの迂回になる。こゝに、かゝる運動が隱されてゐるといふことは、有りそうに思へぬことである。それだけでは尙ほいまだ決戰をもたらさない。だがそれは、敵をして、恐らくは特に强力な陣地を放棄せしめることはありうる。人は、それを乘り越えて進みつゝ、かくて戰鬪のためのヨリよき條件をつくり出す。かくてこれが不可缺のものになるといふことは、しかし、極めて稀れなる例外と見做されなければならないのであつて、それは、兵力關係と作戰的狀勢の不利が、敵をして、敗北は免れえないものと思はせるような場合にのみ生ずるものである。これに反し、あらゆる迂回の場合には、決戰を遲延させる時間の餘裕が敵の對抗策を有利ならしめるといふ危險が存在する。

敵の兩翼に對する包圍或は迂回を同時に開始し、かくて封鎖(Einschliessung)およびあらゆる方面からの攻擊により、これを殲滅に、『セダン』に、至らしめるといふことは、甚だ稀れにしかない。それは、大なる總體的優勢および先行せる包圍的乃至封鎖的配備の場合には、多かれ少かれ自然に生じうる(一八一三年のライプチッヒ)。それ故に、それは、――全體的な行戰の範圍内で見れば――世界大戰中、聯合國にとつては常に目標として、目の前にちらついてゐたが、しかしその目標の附近へすらも曾つて近づけなかつた。――中歐諸國の戰爭地域は、その廣さにおいて、縮まるどころか却つて膨脹した。初期の狀勢の有利さが消失する時には(一八七〇年のメッツおよびセダン)、そしてまた自軍の優勢が減退し或は全く無に歸する場合には、困難は增大する。それにも拘はらず、包圍が成功したならば(タンネンベルグ)、それは、指揮が、要求されうる最高の能力を發揮したからである。

既に述べたように、攻擊者は、總兵力において敵と同等であるか或は劣勢である場合には、その兵力をもつて、敵の戰線の一部を攻擊するに止めなければならない。だがその場合、攻擊者は、その他の部分に對し、其處では、自軍の攻擊の

成果を再び放棄し或は凌駕されるような敗北を蒙らないだけの强さを保持し或は處置をとらなければならない。この危險は、攻擊者が決戰を求める場所での戰鬪が長引く程度に應じて、且つまた就中、攻擊翼が、包圍および更に迂回の際に多く行はれる如く、その後方連絡から遠ざかり、そして最後には敵の背後に廻り、背面において戰鬪を行ふ場合に、增大する。敵の背後におけるこの戰鬪は、常に特に頑强になる。何となれば、防禦者は――たとへそれを欲しても――最早や避けることができないから、その存立のために、死物狂ひの勇氣を振ひ起こして戰ふからだ。それを知つてゐたので、一八一三年、ライプチツヒにおいては、同盟軍は、優勢を持してゐたにも拘はらず、ナポレオンの最後の退路を塞ぐことを敢へてしなかつたのである。しかし一八七〇年には、正に敵の背後において、就中メツツにおいて、退却の可能性を奪はれた敵に對し、最も困難なる戰鬪を演じた。世界大戰においても同樣であつた。敵の背後における遮斷を完全に正しく保持することは、タンネンベルグにおいて以外では、曾つて一度も成功しなかつた。

この際、尙ほ一つ注意しなければならないことがある――包圍をし或は迂回する者は、その際自身もまた包圍され或は迂回され、次いで背後を攻擊されうる、といふことだ。包圍翼の最大の兵力および外部への深い梯隊、最も迅速なる決戰は、その對抗手段である。この兩者は、一九一四年のロツヅ（プシエシニイ）においては充分だつたが、一九一五年のマヅールおよびウイルナにおける冬期戰においては不充分だつた。包圍および迂回攻擊の成果は、全くもたらされえなかつたか或は不充分にしかもたらされえなかつた。解圍のために押し寄せて來る新手の敵部隊に對する同時的な防禦を行ひつゝ、數日に亘る決戰を戰ひ拔くための兵力はなく、しかもそこに止まつてゐるならば、大集團を遠く敵の背後において給養し、これに必要な豐富な軍需品を供給するといふ困難が再び增大するであらう。

タンネンベルグの模範的な包圍の成果は、敵の攻擊力がその以前に正面戰鬪において打破されてゐたといふことによつ

て、その本質的な部分まで說明することができる。それは既に擊破され、精神的に重大な打擊を受け、脅え切つてゐる敵であつて、それは最後には、數の上からは驚くべく少い兵力により、國境を越える退路を塞がれるに至つたのである。世界大戰の關係に對して絕えず制限された戰鬪員數および戰場の廣さの限りにおいて、またその故に、會戰は、例へば大なる包圍作戰の實行不能性の證明の如き豫見をもつてのみ使用すべきである。その正しい模範は、ロッヅが示して居り、更にマヅールにおける冬期戰が大規模に示してゐる。

兩面に對してゞはなかつたが、集團軍により敵の背後に至るまで遂行された包圍＝および迂回作戰の最も標準的な形姿は、一方においては、シュリーフエンの計畫に依據して、一九一四年八月——九月に、西部戰線で遂行された作戰、他方においては、一九一五年に、東部戰線で遂行されたウイルナ作戰が、今尙ほ依然としてこれを示してゐる。兩者とも、包圍翼の餘りに少い兵力のために失敗に終つた。戰場が大きく、戰鬪が長く續いて、敵を內線の利用から引き離すことができたといふ利益が効を奏した。大規模な西部作戰は、もし目的に合致した兵力の分割がなされてゐたら、優秀な成果を擧げえたであらう。ウイルナ作戰においては、もし軍需品に對する夥しい補給の必要と、深く敵の背後に廻り數日に亘る困難な決戰を行ふに足る・强力な兵力に對する給養とをば、出來る限り先見的に保證しえたならば、包圍＝迂回場所の缺乏と無道路とによつて、優秀な成果を期待することができたであらう。かくて、集團軍と戰鬪の長期繼續の場合には、かゝる作戰は不可能になつてしまつた、などといふことは、決していはれないのである。だが我々は、豫想される一切の困難に對しては、その最後のものに至るまで、豫めこれを明かならしめなければならぬし、且つそれら諸困難の克服のために、出來る限りのことを前以つて適時に準備して置かなければならぬ、

敵をその連絡線から押し退けるためのあらゆる攻擊に對しては、シュリーフエンの次の言葉が當てはまる。——『人は、

戰鬪に勝ちうるといふ力、自覺および信念をもたねばならぬ。それを有しないならば、むしろかゝる機動より遠ざかつてゐなければならぬ。』またモルトケは次の如く敎へてゐる――『戰爭において、大なる損失の危險を冒し、敵の殲滅を企圖するが如き會戰を計畫するのが正しいか、それとも一連のさほど決定的でない成果を積んで目標へ達するために、確實な道を辿るのが正しいかは、主として政治狀態に依存してゐる。たゞ自國の狀態が苦境にあればあるほど、それだけ攻勢に出で且つ殲滅戰に賴らうとする、といふことだけはいへる。七年戰爭において、フリードリヒ大王が、多數を擁する、非常に優勢な敵に對してとつた態度が正にそれである。』

敵を不利な狀態に陷れ、然る後にこれを襲擊するための恢復攻擊への待避は、しば〳〵推奬されるところの手段である。分離され、長い縱隊をなして隘路から出て來る敵の一部を攻擊し、他の部隊がその救援に來る前にこれを殲滅するための山嶽出口或は渡河（第八節a參照）前方の準備陣は、これに屬するものである。それ故に、こゝでは内線における作戰が問題となるのであるが、その期待は、今日の戰鬪の長期繼續と存在する山嶽＝および渡河の增大によつて、以前に比較し、減少した。それは、もし敵が戰術的に必要な注意をもつて行動するならば、完全に消滅する。同一のことは、一翼が通行困難な地形（山嶽、水）或は設堡地域に據つて、敵の進軍の側面に設けられた準備陣にも當てはまる。それだから、東部戰線においては、ロシア軍が側面から不注意に突進したので、マヅールの海を利用することもできたのであつた。西部戰線においては、メツツ要塞の利用は、フランス軍がその側を通過し、ロートリンゲンを通つて、更に東へ進む場合について考へられたものであつた。一九一四年一月に、フランス軍がやつて來た時には、しかし、我々は、そう長く待つてゐる氣にはなれなかつた。ザールスブルグにおける會戰は、本質においては、それに相應せる結果を伴つた正面會戰であ

つた。

眞の大なる成果は、敵が不注意から罠にかゝる場合にのみ成就することができるのである。次ぎに恢復攻擊を行ふため、必要もないのに待避するものは、自からイニシアチヴを放棄するものであり、そこに、かゝる行動の弱點が存在してゐる、といふことは、常に考ふべきことである。かゝる企圖が、自國において或は限られたる自軍の戰場において（世界大戰における中歐諸國）行はれるならば、その地域の放棄の決定は、實際においては、理論におけるが如くそう容易になされるものでは決してない。何となれば、それを、何時、如何なる狀態で取り返へせるか、それとも取り返へせないかは、決して確實には判らないからだ。我々は、上部アルサスへのフランス軍の侵入ならびに東プロシアへのロシア軍の侵入を防禦するために爲された派兵を想起する、イタリー軍をして、アルプスを越えて來たらしめ、而してこれに復讐の劍を加へようとしたコンラッド（Conrad）の計畫は、フアルケンハイン（Falkenhayn）によつて妨害された。

もし待避が純然たる自由意志に基づくものではなく、狀勢によつて餘儀なくされたのであるならば、問題はまた殆んど全く異つて來る。その場合に、かゝる待避から最善をなすためには、側面からの奇襲的恢復攻擊は、依然として最も有効なる手段である。ワイクゼルの退却からロッヅの作戰へのヒンデンブルグ軍の配置變更は、まことにその最適例を示すものである。

（3）　防禦における行動

攻擊におけるが如く、防禦においてもまた、勝利、すなはち敵の殲滅が、最後の目標たるべきであつて、たゞこの意味においてのみこゝでは防禦が論及される。（その他については、(6)決戰を行はざる行戰……および(7)持久戰……を參照）。

攻撃者が戰闘の場所および時間を決定し、且つその際、依然として考へ抜かれた計畫を行ふに反し、防禦者は、その計畫に關してはヨリ困難なる狀態にある。成る程、防禦者は、地形の正しい利用によつて、その配備を强力にし、攻撃を非常に困難ならしめ、更に見込みなきものたらしめることができる。だがしかし、その場合にもまた攻撃者にとつては、充分な攻撃の可能性は依然殘されてゐるのである。なかんづく、防禦者は、攻撃者が、何處で、何時、如何なる兵力をもつて攻撃を加へるだらうかといふことに就いては、いつも正確には判らない。防禦者は、敵の方策の如何に依存して居り、それが判つた時に初めて行動しうるのである。防禦者は、その兵力をば、一方では、あらゆる攻撃の可能性に對抗し、他方では、有効な防禦の後に、それと關連して、更に、勝利をもたらすべき反撃を遂行するために、十分强力なる部隊を保持する、といふ風に分割しなければならない。防禦者は、かゝる反撃をば、豫め種々ある場合について用意し、そして最後には、長く優勢を可能ならしめることなく、最大の迅速さをもつて決戰を行はなければならぬ。

それ故に、敵の攻撃を全く待つことなく、防禦をば、初めから攻撃と結びつけるといふことが問題となりうる。かゝる攻撃的（運動的或は能動的）防禦は、たゞ最も必要なる部分と共に地區に定着するが、そのためには、しかし、最も强い兵力をば、作戰のためおよび戰闘のために、平原に分離して置かなければならぬ。それは、指揮の熟練と軍隊の行動能力を最高の條件とし、且つ兵數の不足は、運動と速度とによつて補はれなければならぬ。だがそれは、とりわけ分離して進軍する敵に對する場合には、イニシアチヴを自己の手に保持し、敵に手痛き部分的敗北を蒙らしめ、最後には、敵をして最早や攻撃を遂行する力を全く有せざるに至るまでの損害を與へるといふ見透しをもつものである。一九一四年の東プロシアにおける戰役は、この種の防禦についての實例に富んでゐる。かゝる行動をとる防禦者は、迅速にして且つ決定的な成果を戰ひ取らない限り、優勢な敵に對する進軍と戰闘において、自己の兵力をもまた或は使ひ盡すかも知れないといふ

こと、そしてその時は最後に、適當なる陣地において攻擊を待ち構へることを餘儀なくされるといふことも、もちろん見逃してはならない。

防禦陣地は、敵がその側を通過行進しうるようにではなく、それを攻擊しなければならぬように設けられねばならぬ。

側面陣地すなはち、上記の要求に適應し、敵の前進方向の横に設けられた陣地の選擇は、敵の行進する方に向いた側面が確固たる倚托點によつて攻め難く、かくて敵は、その戰線に旋回し、もし包圍せんと欲するならば、逆の戰線をもつて戰ふことを餘儀なくされる限り、大なる成果に對する見透しを與へる。

だがまた陣地は、防禦者がその後方連絡を出來る限り自己の背後に保持するように設けられねばならぬ。もしそうでないならば(一八〇六年、イエナにおけるプロシア)、兩方の部分がすべてを失ふか、それからまたすべてを獲得するような狀態が生ずる。あらゆる戰鬪におけるが如く、敵の背後において生死の戰鬪が行はれる。

だが、この場合、防禦者は、疑はしい場合にはヨリ弱きものとして、甚だしい危險に曝されてゐる。敵が警戒隊を分離すれば、最後にはまたその傍を通過行進できるような風に側面陣地が設けられてゐるならば、その有望さはヨリ少い。何となれば、その時には、防禦者は、その陣地から出て、自ら攻擊に移る——すなはちその正に避けんと欲したことを爲す——か、或はまた優勢なる敵によつて決定的にその後方連絡を斷たれ、最後には殲滅されてしまはないように、最も迅速に退却を開始するか、そのいづれかを餘儀なくされるからである。

かくて、側面陣地の價値は、その他のすべての防禦陣地より多くその守備兵の戰鬪力とこれを利用する指揮術とに依存してゐるのである。

かくて、大抵の場合、防禦者は、攻擊を行ふためには自己の力は弱すぎると感ずるので——もしそう感じなければ防禦

者にはならないであらう——敵の前進に對し多かれ少かれ面と向ふところの陣地を選ぶことを餘儀なくされる。

防禦陣地が本來的にそしてまた構築によつて強くなればなるほど、それは、純粋防禦のためには、ます／＼少數の兵力しか必要としなくなり、かくて恢復攻擊において決戰を成就するために兵力はます／＼餘つて來る。だが攻擊者もまた、防禦の最も强力な地區はこれを避け、ヨリ弱いところにその兵力を集結するであらう。そこでは、先づ第一に恐らくは一翼或は兩翼において、最後には勝利のために戰鬪が行はれる。倘ほその上、兵力を適時に且つ充分にその個所へ集めるといふことは、防禦における指揮の術である。最大の効果は、防禦者がその兵力を、敵の正面に對してゞはなく、包圍をせんとして轉回し來る敵の側面に對し或は背後に對して打擊を與ふるために用ひることができた時に、擧げえられるのである。

防禦からして完全な勝利をうることは稀れである。防禦者が攻擊の壓力の下にその兵力を早く使ひ果たしたり、或は、敵が決定的突擊をなす場所と時間とを適時に知ることができず、對抗策が手遲れだつたりする危險は餘りに大きすぎるのである。それ故に、防禦は、往々にして、目指す目標すなはち殲滅的勝利をもつて終らずして——一九一六年秋のドイツ軍の指令『防禦戰』が最後の任務として規定しなければならなかつた如く——敵の單なる防禦、防禦勝利をもつて終るのである。

この場合の結果は、兵力の均衡であり、決戰を行はざる戰爭、陣地戰への變質であつて、これにあつては、結局のところ、作戰については最早や論じえられずして、戰術、物質、精神およびまた純軍事的分野以外に存する諸事情が重要となる。

陣地戰から再び實際の作戰に來るために、一九一八年のドイツ軍の指令『陣地戰における攻擊』が、その道を示す筈で

あつた。それは目指す目標へは到達せしめなかつた。それを成就することは、世界大戰においては、双方の側とも拒否されてゐた。敵の正面の撃退については、東部戰線における中歐諸國も、西部戰線における聯合國も、あらゆる努力に拘はらず、成就されなかつた。この目標が、完全に新しい兵力および戰鬪手段なしに、一般に達成しえたか否かは、最早や過ぎ去つた問題である。

（六）　決戰を行はざる行戰と陣地戰

將帥の任務は、勝利、すなち敵を殲滅することである。この目標を見失はしめるところのすべての行戰は、戰爭の變種と見做すべきものであつて、それは、その本質からして、全面的にして迅速且つ決定的な決戰に急進するものである。これは變種ではあるが、我々は、こゝで、かゝる行戰についても論及しなければならない。何となれば、それは、現實においては、まことに屢々一の役割を演ずるからである。

兵力の均衡は、無益な戰鬪の後における兩軍兵力の消耗により、將帥の意志に反して、作戰の停止および最後には決戰を行はざる行戰を生む。これは、世界大戰においては、陣地戰として現はれた。冒險は停止する。兩軍はヨリ用心深くなり、そして自己の有する一切の利益、なかんづくその占據せる土地を固守しようとして小心翼々の努力をする。而してそれは、軍隊が大きくなればなるほど、武器の遠距離作用が増大し且つ自軍の戰線の前に有効なる障碍（鐵條網）をヨリ迅速につくれるようになればなるほど、ます〳〵容易になつた。

フリードリヒ大王の設堡陣營（befestigte Lager）は、當時の作戰および戰鬪狀態に適應した陣地戰の一形態であつた。世界大戰におけるが如き、長く連結してゐる線を占領するためには、彼には兵力が缺けてゐた。それ故に、彼は、根本原則の中に次の如く書いてゐる――『余は、この場合、彼等は何事も爲しえないといふ說を固持する。何となれば、彼等は、

それを占領するために有してゐる部隊以上の土地を占めてゐるからだ。もし彼等を、多くの個所から攻撃するならば、それを奪取することは確實に出來る。從つて彼等は、その土地を守れないし、そこを防禦すべき軍隊の名譽と名聲を汚がす以上の何事もなしえない。』

この一節は、敵が、かゝる陣地を突破して、運動戰に移る兵力を有する限りにおいて、妥當性を有してゐた。だが、一九一四年には、例へば、密集せるフランス軍の國境防禦線は非常に強力で、そのためにドイツ軍は、迂廻してベルギーを通ることを餘儀なくされたほどであつた。しかし、翼が確實に倚托してゐるために、迂廻が最早や可能でないとすれば、運動戰を强要すべきこの手段もまた用ひられない。

それ故に、既に一九〇五年の滿洲における日露戰爭は、陣地戰に終つたが、この戰爭は、本質において、十年後の世界大戰と同一の特徴を示した。すなはち世界大戰においては、西部戰線は、既に一九一四年十一月において、海からスヰスの國境に至るまで膠着し、その狀態のまゝ一九一八年の九月に至るまで變らなかつた。しかし、その際もまた、最早や運動戰は行はれずして、たゞ約五百キロメートルに及ぶ長いドイツ戰線の純正面的擊退だけであつた。東部戰線においては一九一四年十二月に同一の狀勢が生じ、大觀すれば同一の現象、すなはちロシア軍の正面的擊退を結果し、最後には、黑海からバルト海に至るまでの殆んど千五百キロメートルの長い線において戰鬪が停止された。東部戰線におけるが如く、西部戰線においても、再び眞の運動戰、すなはちナポレオン或はモルトケの意味における平原での作戰に移らんとする一切の企圖は、失敗に終つた。

領土を放棄することとなしに可能だつた限りにおいて、新しく運動を起こすため、確かにあらん限りの手段が用ひられたのであつた。だが、後續する敵の側面を衝くための適切な準備陣をもつて大掛りな作戰的待避を敢行する決意は、どれも

出來なかつた。兩軍とも、直ぐに陣地戰のための武器や物資を負擔させられ、そのためにかゝる運動は、犠牲なしには代置しえず、後には再び差し迫つて使用された價値が最早や全く使用しえなくなつたほどであつた。この場合、その冒險は中歐諸國にとつては、その狹隘な戰場に當面して、敵側にとつてよりも著しく大であつた。敵は、それでなくとも、運動戰をやるだけの力がなかつた。そこでこの例に對する證據が缺けて居り、そしてそれは短時間の後には再び陣地戰へ、それも何處か他の線で、移つたらうといふ見解は、反駁することができない。

兩軍によつてとられた行動は、最早や作戰の術によつてゞはなく、單に優勢な人間の集團を正面戰線に參加せしめることによつて、なかんづくまた物資によつて決戰を强要せんと試みた。その結果は、所謂『資材戰』(Material Schlacht) になつた。資材戰は、數ケ月に亘り、目指す決戰に至ることなく、益々激烈な襲擊を繰返へした。かゝる狀態に對して如何に途方に暮れたかは、ファルケンハインが、ベルダンにおける敵をば――その場所で直接的な作戰目標を立てることとなしに――部分的攻擊および重砲兵、最重砲兵の大量的使用によつて漸次的に粉碎（消耗戰および肉彈戰）し、次いで――敵が豫備を使ひ盡して後に――他の場所で、決戰的攻擊を遂行せんとする考へに立ち至つたことに示されてゐる。ファルケンハインは、後にその敵手がゾンメおよびフランデルンでの繼續的攻擊に際して爲したと丁度同じように、敵の反抗において誤算をした。消耗は、兩方の側において、略々同程度に現はれた。最も多くの豫備を移動したものの方が依然有利だつた。かゝる種類の戰爭遂行は、既に『消耗戰』の範圍に屬してゐる。この場合、部分的攻擊によつて、恐らくはまた有効な防禦によつてすらも、かゝる事情の下に、敵をして講和へ傾かせることができる。だが、世界大戰における我々の敵の最後の勝利は、武力的成果によつてゞはなく、主として政治、兵糧攻め、精神的疲勞によつて得られたのであつた。しかも、それらの手段が、その最後の意義を獲得したのは、たゞ武力的成果が中絶したからに外ならなかつた。

會戰が期待せられたる決戰に導かれずして、消耗と衰耗に導かれたといふことは、次の如き結論を成熟せしめた――『近代的武裝をなせる軍隊は、最早や互ひに決定的に戰ふことはできない。』それは、最小の場合にも、最大の危險である。何となれば、世界大戰の資材戰時代における兵力關係は、非常に均衡されてしまつて、その結果、上記の如き一般的種類の敎へからは推論しえないほど作戰の可能性は制限された。技術の新しい手段およびそれに基ける指揮の新しい思想は、一切を再び變更することができるのである。だが、資材戰の諸經驗は、また次の問題を提起した――人間かそれとも物資か更に換言すれば、精神か或は物質か、といふ問題を。この設問には、以前と矢張り同樣に、兩方とも相並んで必要であるといふ意味で答へることができる。物質は、人間の斷乎たる戰鬪意志なくしては無價値であり、人間とその精神は、敵の物資の殲滅力の下に曝され、しかも同等の力をもつて對抗することが出來なければ存立することはできないだらう。

(七) 持久戰(hinhaltende Kriegführung) と目標を制限せられたる行戰(誘致攻擊、別働戰)

援軍の到來や中立國の干涉を待つがためにせよ、兎角してゐる中に他の場所で勝利を獲得するためにもせよ、いづれにしても時間の餘裕を得んがために、一方が、意識的に戰鬪を持久的ならしめる決意をするような場合は、世界大戰において、兩方の側の意志に反して現はれた決戰を行はざる行戰の狀態とは區別されなければならない。持久戰は、常に、優勢なる敵に對する戰鬪であるであらう。それは決して決戰を欲せず、且つもし敵がそれを欲する場合には、正にこれを避けなければならない。かゝる戰鬪は、たとへ外見的には攻擊として現はれようとも、根本においては、常に防禦である。如何なる場合にも、その目標について敵を欺き、敵を迷はすことが、差迫つた必要なのである。

持久戰が、もし攻擊的に行はれるならば、それは、大抵の場合、攻擊によつて、敵を副戰線(Nebenfront)に縛りつけ

或は正に其處に轉ぜしめんと企てることにより、敵の兵力をば、本戰（Hauptentscheidung）から遠ざけて置くためになされるのである。かゝる種類の誘致攻擊（牽制）は、副攻擊（Nebenangriff）として、實際に行はれうるし、而してまた攻擊をもつてする單なる威脅或は欺瞞に制限し、次いで陽攻—Scheinangriff—（陽動—Demonstration）に轉化する。それはなかんづく、目指す目的のために强力な砲兵力が參加する場合には、完全に遂行された攻擊と同一の効果をもちうるがしかも常に極く最初の瞬間だけである。何となれば、敵を迷はせることは、常に、敵が欺されてゐる限りにおいてのみ可能だからである。今日の會戰は長時間繼續するので、その効果も、大抵の場合、その初期にのみ限られる。それればかりでなく、武器の防禦力の向上とあらゆる攻擊の時間の必要とは、止まることを欲しない敵を、攻擊によつて抑止することを不可能同然たらしめる。幾ら遲くとも、夜になると共に、防禦者は、常に、稍々危險なしに攻擊者から離れる可能性を見出すものである。

誘致攻擊（Ablenkungsangriff）は、それが、決戰のために、兵力關係をば、少くとも一時的に有利にする場合にのみ、その目的を果たすのである。然らずんば、それは、免れがたき兵力の分散を意味する。かくて、自己の兵力使用は、敵のそれよりも少くなければならぬか、或は、本戰の際に何等かの理由からして、それでなくとも使用されえない部隊を除いて置かねばならぬ。他面、判斷のために、敵が本戰のために引き寄せえられない敵の全戰鬪力をも引き離して置かなければならぬ。大體において、トルコの侵入は、中歐諸國の立場から見れば、たとへヨリ以上の効果をもちえたとしても、第一に誘致攻擊と評價すべきである。それは、本戰戰線へ出動することのできたロシアおよびイギリスの戰鬪力をば、バルカンへの道が遮斷されてゐた限り、苟くもそこへ引き寄せられえなかつた部隊によつて束縛してゐた。敵の背後における上陸は、しばしば、海上支配に基いて、誘致攻擊として計畫された。フランスは、一八七〇年に、かゝる計畫を企圖した

のであつた。ロシアは、イギリスの援助を希望して、世界大戰に對し、それを準備した。イギリスの海軍首腦部もまた幾度か上陸計畫を考慮した。だが、かゝる企圖は、一度も充分に實行されたことはなかつた。何となれば、ヨリ詳細に考慮してみると、使用される兵力は、本戰そのものにおいてヨリよく使用されたであらうといふことが常に明かになつたからである。だが、海岸地點に對する海上戰鬪力の單なる僞行動(Scheinunternehmungen)は、甚だ僅少なる効果しか持たない。何故なれば、それは、海戰の特殊な關係においては、大抵の場合、全く短時間の砲撃に制限されなければならないからである(一九一五年のクールランドにおける戰鬪)。

戰鬪力ある部隊を敵の背後へ上陸させるために使ふことに對してと同樣に、本戰のズツト背後における誘致目的のために快速運動部隊或は航空路によつて送られる部隊ならびに空軍そのものを使用することに對しても、もしそれらのものゝ出現が彼處において敵を誘致するのでなく、戰線において恐らくは全く成すことなき決戰をもたらすのでなければ、同じ疑惑が生ずる。

世界大戰において、兩軍が陣地戰狀態に陷り、劍を交へたまゝ對立して以來、殆んどすべての攻撃は、誘致計畫を伴ひこの計畫は大抵攻撃の少し前に實行され、そして敵が本當の攻撃の行はれる場所に氣がついて、それをハツキリと知るまで續行された。それは、とりわけ渡河を强要するために常に慣用され且つ目的に合致してゐたし、現在もしてゐるところの行動と同一のものである。だが、世界大戰の陣地戰において、敵を混亂させ且つその豫備軍を早計に使用させる目標が實際に成就されたのは、極めて稀れだつた。何故なら、そのために必要だつたらうほど多數の兵力は、副次的計畫のために使ふことができなかつたからだ。しかも、致誘攻撃は、たゞかゝる方法で主要行動のために有用ならしめられ得た兵力によつて遂行された限り、失敗であつたといふことは出來ない。

小戰爭（ゲリラ戰）もまた誘致計畫の分野に屬してゐる。それは、なかんづくプロシアの義勇隊が、一八一三年に、エルベの西方でナポレオンに對して爲した如く、大戰爭の補足として、敵の背後および側面に對し、そのために特別に組織された部隊により遂行されうるのである。それは、斷乎たる決意をしてはゐるがしかし大戰爭を繼續することのできぬ國民が、敵の守備兵に對して行ふ抵抗の繼續とも考へることができる。敵が全くの微力をもつて占領してゐるか或は接近し難い地域が、かゝる小戰爭の成功のための前提條件である。（一八〇八——一二年にナポレオンに對してスペイン人が爲した如き、一八〇九年にチロル人が爲した如き、その例である）。それは、外部からの支持が全くなかつたなら、到底長期に亘つて遂行することはできないであらう。また完全な軍隊に對する戰鬪においても、成功を望むことは殆んどできないであらう。戰爭の成行に對して言ふに足るような作用を及ぼすことは、一般に、たゞ全く特殊な好條件の下においてしか望めない。兎も角も、小戰爭は、敵の補給および後方連絡を妨害しうるし、その際、時には損害を加へ且つかくの如く惱ますことにより、敵をして應酬を餘儀なくせしめることができる。最近では、多くの國々において、そのために部隊をば航空路によつて敵の背後に運ぶといふ思想が考究されてゐる。しかし、野戰に用ひうる軍隊の中のヨリ强力な部隊を小戰爭のために用ふるといふことは、大抵の場合、その他の誘致計畫と同樣に、殆んど問題にならない。それ故に、ゲリラ戰は、大抵の場合、組織された志願兵、義勇兵によつて行はれ、かくて最後には、武裝蜂起の形相を呈しうるものである。かくて、有効なゲリラ戰の可能性といふものは僅少であり、それに對する期待は、以前に比して根本的に低下してゐる。電信線に依らざる最も迅速な通信の送達は殆んど到る處において、敵の空軍およびあらゆる種類の部隊の進擊を可能ならしめる。敵もまた、ゲリラ戰を漸次に弱めさせるために、その背後を襲つて一掃するに足るほど强力になるまで、最も重要な地點および交通を確保するだけに止まることができる。漸次的な處置（南阿戰爭の末期に英國軍がなした如き、一九一八

年にウクライナで我々の爲した如き）は、その場合大抵すみやかに目標に到達せしめる。かゝる手段に對しては、たゞ降伏するよりも死を選ぶような國民大衆の場合にのみ、ゲリラ戰は望みを持ちうるだけである。

世界大戰において、中央ヨーロッパでは、前進する集團軍の殆んど隙間もない戰線は、容易に戰場の全面を覆つてしまひ、その結果、敵にとつては、この戰線の背後に部隊を送る可能性は殆んど殘つてゐなかつた。それ故に、ベルギーの義勇兵の射撃戰を除けば、戰ひつゝある野戰軍の背後においてゲリラ戰を行ふことは到底出來ない。とはいへ、總括的に見れば、イラクにおいておよびスウエズ運河に對して爲された企圖ならびに遠洋における英國の貿易に對する海戰すなはちその交通線に對する戰ひは、ゲリラ戰のうちに數へらるべきである。

持久戰が防禦において行はれるならば、敵にとつては、その土地を一歩々々漸次に爭ふことが問題だ。かゝる防禦は、短い攻撃衝突と結合するか或は持久的抵抗に限られるかである。行動の變化、敏速、活潑および奇襲、他面において自己の弱點の蔭蔽は、かゝる場合に、特に必要である。快速運動部隊はとりわけ使用されうるが、しかし大抵の場合、自由にならない。

攻撃衝突は、好い機會を利用して、部分的打撃により、敵に損害を與ふべきであるが、もしそれが不可能でなければ、少くとも眞の意圖については、敵を欺かなければならぬ。味方の戰鬪力を保持するための時間の餘裕の利益と出來るだけ僅かな土地の損失が、その目標である。

命令をする場合に、こゝでは持久戰をやるのだといふことを明言すべきか、或は明言しない方がよいかは、論議の餘地がある。それは、なかんづく、その命令を受くる者の人柄に依存してゐる。一面においては、戰ふ者が、最後には、決戰

に至るまで、從つて一度その與へられた兵力が不充分な場合には、或は潰走せしめられるかも知れないところまで、敵と嚙み合ふといふ危險があり、他面においては、持久戰の命令を受けた者が、餘りに早くその努力を止めてしまひはせぬかといふ疑念が生ずる。ドイツの大戰以前の軍隊においては、たゞ持久戰に止まるのだといふことは、大抵の場合、明言されないのが常だつた、そして、かゝる概念は、一般に命令用語としては避けられて居り、大抵、司令部の計畫および意圖を示めすに止まつてゐた。我々は、攻擊或は防禦を命令したが、これらは、必要な場合には、時間的に限られて居り、そして命令を完全に遂行するためには、割り當てられた兵力が不足してゐることが、既にその行動に、必要なる制限を與へるであらうといふことを賴みとしてゐた。

世界大戰においては、オーストリア・ハンガリア軍およびドイツの東部軍に對し、先づ第一に持久戰が、しかも解決すべき任務に關する討議および指令においてこの表現が用ひられることなく、振り當てられたのであつた。その行動は、兵力の計算および決戰は先づフランスに對し、且つ直ぐその後にロシアに對して試みられるであらうといふ知識からして自然に明瞭になつた。一九一四年十月におけるワイクゼルの戰および東プロシアにおける秋の戰は、持久戰の可能性およびまたその限界をも特に明瞭に示してゐる。

制限せられたる目標をもつ戰爭指導は、もと〳〵敵の討滅を斷念してゐるのである。純粹防禦は、常に目標の制限された戰爭指導である。何となれば、それは、敵を殲滅することではなくして、たゞ既に有するものを固守せんとするだけだからである。目標の制限せられたる攻擊は、場所的な目標、すなはち次にまた純粹防禦に移るために、一地域の奪取、一防禦陣地の獲得をもつて足れりとするものである。

（八） 勝利と敗北、退却と追撃

勝利は、戰鬪行爲の有効なる終結である。大なる殲滅的行爲、大なる勝利は、——とクラウゼヴイツはいつてゐる——精神的作用を及ぼし、この作用は、極めて流動的なものであるから、極めて容易に全隊に行き亘るものである。勝利は、自負と確信と勇氣とを與へるが、しかしそれと共にまた容易に敵を輕視せしめ勝ちである。早すぎた勝利の喜に對する反動は、決して珍しいことではない。

だが、勝利といふ言葉は、必ずしも大掛りな事ばかりをいふのではない。それは、戰爭全體、一の戰役、一の會戰の有効なる終結のみならず、いふに足りない戰鬪の場合についても、いへるのである。自ら定めたところの目標を達成した者が、勝利者と見做されるのである。だが、目標と、從つてまた標準とは、交戰者の一方と他方とでは全く異ることも有りうるから、『勝利』といふ言葉の意味も、往々にして不同である。決定的勝利もまた、その時々に決定的である事柄の如何によつてその價値の變化する概念である。

成就されうる最高のものは、殲滅的勝利（Vernichtungssieg）であつて、これは、撃破された武力要因としての敵をば、戰場から消滅せしめるものである。一八〇五年のウルム、一八七〇年のセダンは、その最も完全な形姿を示してゐる。タンネンベルグの會戰は、時に『核心勝利』(„Kernsieg")といふ名を刻された。が、それは、會戰に參加した敵の全軍隊が殲滅されたのではなくして、その核心だけであり、その翼は遁走してしまつたからである。

だが、單に敵を擊退するにすぎない戰場の奪取（普通の勝利）或は防禦における戰場の固持（防禦勝利）もまた既に勝利である。マルヌにおいてもグンビンネンにおいても、戰術的勝利は、ドイツの側にあつた。ドイツ軍は、それに關聯し

て戰場を放棄したから、戰略的勝利は敵の手に止まつた、そして同樣な狀態に當面した者は誰も、かゝる場合における勝利を全體的に要求することを忘れないであらう。戰鬪が未決定のまゝ終結した時でもまた、兩軍が共に勝つたと思ひ且つそれを世界に宣傳するといふことも全く可能である。何故なれば、兩方とも、勝利者とは、結局のところ、世界がそれを認めたところのものだといふことを知つてゐるからだ。

勝利には敗北が對立する。軍隊および物質的な戰鬪力の損失は、敗北にあつては、しば／＼最惡のものではなくして——何故ならば、攻擊者もまた損失を蒙るからだ——意氣の阻喪であり、敵には生じてゐないところの敗者の意識である。勝利の際におけると同樣、敗北の場合にもまた完全なる殲滅に至るまでは、あらゆる段階が可能である。だが、戰鬪がかくの如く極端に至るまで戰ひ拔かれることは甚だ稀れである。何故なら、その場合には、大抵兩軍とも極度の危險を冒さなければならぬだらうからだ。なかんづく、自から劣勢なりと感じ、敗北を豫期してゐる者は、最後の決戰を決して待つてはゐずして、それを免れるために、むしろ豫め退却に出るであらう。彼は、戰爭を負けたものとしてしまふ。それ故に、退却は、勝利のための一切の可能性が用ひ盡された場合にのみ、是認される、すなはち、極度の窮迫のみがその理由になる。かゝる窮迫が存在してゐるか否かといふことは、しば／＼たゞ見解の問題である。客觀的な判斷は、その時の狀勢および兩軍の意圖が正確に知られて後、後世に至つて漸く下されるのである。いな、それでも判斷を下せないことさへ屢々ある。だが、たゞ單に司令部が早計にも負けたと思つた爲だけで、實に多くの戰鬪が敗北に終つたといふことも確かである。然り、それはある、そして兩軍は殆んど同時に、退却を考へ、退却の決意をさへすることも稀れではない。それを最初に爲す者が敗者である。

だが、退却は、作戰的の總狀勢によつて、敗北したのでなくとも命令されうる。その場合、退却が、一の成果の後に行

はれるか、或は少くとも主力が戰鬪に參加せしめられない以前に行はれるならば、その退却は、既に不利な戰術的狀勢からの退却よりもヨリ確實に且つ秩序正しく行はれるであらう。一九一四年にシュタルウペエーネンにおいて軍司令官が正當にも退却を命令した時、所與の狀勢の下において同樣に正當な抗辯が、――勝利が得られるや否や――局部的指揮官によつて發せられた。退却は常に苦しいものである。

あらゆる退却の第一の目標は、當面の不利な狀態から脫することにある。だが、その背後には、ヨリ有利な條件の下において出來るだけ早く再び戰鬪を開始する用意をするといふヨリ大なる目標が存在しなければならぬ。それ故に、先づ第一に敵の突擊を妨害し、これを阻止し、これを繼續しつゝ、後退運動をば、遁走に墮せしめないようにすることが重要である。この任務を果たすものは、同時に退却を陰蔽するところの後衛である。更に、あらゆる交通路、なかんづくその工事施設の計畫的破壞は、敵の急速なる追襲を妨げることができる。それを、有効にやるには、適時の根本的な準備が必要である。

世界大戰においては、敵は、戰鬪力ある、すなはち、この場合には先づ第一に充分な武器の供給をうけてゐる部隊をもつて、鐵道の終點から百キロメートル以上も追襲することができなかつた。將來は、貨物列車の通りうる道路の終點は、決定的になりうるであらう。

退却の方向は、ヨリ以上の作戰的意圖に照應しつゝ、その後方連絡によつて推し除けられないように選ばなければならぬ。急速にあらゆる部隊は、萬一追ひ越すかも知れない追擊をば、適當な地點において迎擊し、必要なる場合には、追擊を停止せしめるために、最良の部隊をして反擊せしめなければならぬ。追擊を防ぐには、廣い戰線における退却が最善である。廣く引離されてゐればゐるほど、主たる退却方向と意圖はますますよく陰蔽される。新しい戰鬪のために適時に再

び結合させる可能性は、もちろん保證されてゐなければならぬ。その爲には、鐵道および自動車輸送が助けとなる。グンビンネンの退却――その後にはタンネンベルグの如き勝利が續いた――は、その一例である。コンラツドは、一九一四年九月に、サンを越えて西方への退却に際し、廣い戰線を布いて後退する企圖を斷念してしまつた。――その理由は明かにされてゐない。ロシアは、タンネンベルグの手痛い經驗の後には、退却作戰を充分に理解し、その最優秀の部隊をば、危險に曝された退路に置き、反擊の用意をするに至つた。（一九一四年、マヅール海附近の會戰、一九一五年、ポーランドからの退却）。

退却に對する觀點からして、追擊のための行動が明かになる。追擊は常に困難であつた。何故なれば、それは、超人間的な心身の緊張の後に、指揮官も部隊も『勝利の喜び』に耽りたい瞬間に、異常な努力、『人および馬の最後の力』までを要求するからである。かゝる狀態の下において、自分自身ならびに部隊の疲勞と休息の欲求に打ち勝つには、既に强い精神の全意力を必要とする。それ故に、模範となりうるような追擊の行はれることは稀れである。その要求はいつも繰返へし揭げられるが、實際に果たされることは殆んどない。世界大戰においては、追擊は、以前よりもヨリ困難であつた。曾つて、ベル・アリアンスの後に、參謀長グナイゼナウが數個の騎兵中隊をもつて――その際、既に述べたように、太鼓を馬に乘せ――夜を通じ敵を追擊しえたような時代は、既に過ぎ去つてしまつた。一九一四年、グンビンネンにおける騎兵第一師團の赫々たる功績は、今後は最早や存在しえないような非常に特殊な狀態の下に（前以て戰鬪に參加することなく、敵の戰線の後方十二キロメートルからの急襲によつて）行はれたのであつた。一般に、從來の戰鬪手段をもつてする眞正面からの追擊は、殆んどいふに足るべき成果を擧げえない。何となれば、それは、――もし敵が他の理由から急いでゐるならば――防禦武器の遠距離作用がある場合には、直ちに日々の漸次的な地點の戰取に移行する。そこでは尙ほ落伍兵が、

時にはまた小部隊が捕虜にされるが、しかし大部隊はたゞ新しい眞劍な戰鬪によつてのみ捕虜とすることができる。この場合、甚だ微力なる後衛に對しても、追擊者の損害、努力および困窮は、恐らくは追擊される者のそれよりも增大するであらう（一九一五年、ガリシアおよびポーランドを通つての追擊戰）。

包圍或は迂回からたやすく自然に發展するところの凌駕する（間接の）追擊は、大なる成果に對する期待を提供する。だが、その場合ですらも大抵常に被追擊者は、その追擊者よりもヨリ急速に進むといふことが明かになる。追擊者が、目的の必要とするほど急速に進みうるのは、精々のところ、敵が全くゐないか或はゐないと同然な場所においてのみである。そしてもし好運にもそういふ場合が存在したならば、その時には常に、今や旋回すべき時であるかどうかといふ問題が考慮されることになる。早すぎると、凌駕する運動の一切の利益は放棄され、遲すぎると、實際に擊破されたのでない敵に對して、餘り遠く行き過ぎた迂回と同様な危險を包藏する。これを正しく實行することが如何に困難であるかは、ロツヅの戰、マヅールにおける冬期戰、ウイナルおよびその他における戰がこれを示してゐる。

凌駕する追擊のためには、快速運動部隊が特に適してゐる。充分なる戰鬪力および豐富なる武器が、その成功のための前提條件である。何故なれば、勝利の成果は、敵の背後においてこそ最も完全に獲得されるのであるが、最も危險であり、生死の戰鬪を爲さずしては殆んど獲得できないからである。凌駕的に追擊せんと欲する者は、この點の準備をしてゐなければならぬ。

裝甲車兵團および飛行中隊の使用が正面追擊に對してもまたもう一度新しい意義を喚起するといふことは可能である。

第八節　戰場、季節、疾病

空間と時間とは共に戰爭遂行の決定的要素である。それは、地點から地點への距離の程度および時間の必要に對してのみならず、また踏破すべき或はそこで敵と遭遇する場所の特殊性に對しても、運動或は戰鬪の行はれる時間に對しても當てはまる。この關係を顧慮しない作戰計畫は、荒々しき現實においては、忽ちに危險な妄想であることが明白になる。

(一)　戰　場

自國に戰爭の苦惱を免かれしめんとする自然的な努力は、たとへそのために利益を放棄しても、戰爭を敵國において行はうとする。フリードリヒ大王は、曾つて次の如く書いた――『自國における戰爭に際しては、一切の利益は、その側にある。すなはち共處では誰でもがスパイとして役立ち、敵は、裏切られることとなしには何事もなしえない。人は勇敢に大小の別働隊を派遣することができるし、攻擊者を奇襲し且つこれに對して最も大なるものから最も小なるものに至るまで戰爭の一切の手段を用ふることができる。もし戰爭に敗るれば、その時は、農民はみな兵士となり、敵と戰ふであらう。』

このことは、あらゆる點においてゞはないが、しかも大體において、世界大戰にもまた當てはまつた。加ふるに、自國の破壞されてゐない確實に使用できる鐵道網が異常な利益となつた。この事情は、マルヌの會戰において、フランス軍に大いに役立つたが、もし彼等にしてこれを完全に利用することを理解してゐたならば、遙かに大なる利益を與へたであらう。それはまた、東プロシアにおけるドイツ軍の作戰の成功のために、なかんづくタンネンベルグ、およびその後にはまたロッヅの戰役のための再編成に際して、決定的な意義を有した。

反對に、以上の事からして、敵國において戰爭を行ふことの困難さが明瞭になる。この困難さに對して、占領した土地における兵士の全く無制限的な支配が、利益として對立するが、これは、先づ第一に、宿泊および給養の問題に對して、緩和を意味しうる。同盟國および中立國の領土內においては、これと反對に、住民に對する最も行き屆いた顧慮が必要で

あるし、行戰の目的のための國土の利用を妨げうる。

地形は、その形態（山嶽、溪谷、平野）により、森林や村落をもつて被はれることにより、河川、沼澤および荒野により、運動および戰鬪に對し、決定的な意義を有する。異つた地形の存在するだけ、それだけの異つた大隊が必要だ——といつた風のことを、フリードリヒ大王が曾つていつたことがある。地圖の製作、土地の測量が、常に第一に、往々にして專ら軍事的方面から要求されたといふこと、そして殆んど到る處において參謀本部の仕事の領域に屬するか或はそれと最も緊密な關係を有してゐることは、決して偶然ではないのである。戰場の地圖と記述とは、曾つては將帥の鞍嚢の最も價値ある內容のうちに數へられてゐた。

過去の數世紀間において、著しい進歩が行はれた結果、今日ヨーロッパにおいては、地圖は既にあらゆる下級指揮官の殆んど缺くべからざる道具となつてしまつた。だが、南西アフリカにおいては、一九〇四年には尙ほ戰爭は、先づ第一に、百萬分の一の尺度の地圖と水のある場所から水のある場所への距離數を書いた若干の道案內書きによつて行はれなければならなかつた。地形判斷は、優秀なる地圖と共に、今日においてもまた重要性を有し、世界大戰以前には、あらゆる國の參謀本部の許に絕えず現狀を報告されたのであつた。

一地方の軍事的意義は、唯だ一度だけでは確定されない。この眞理を誤認して、十九世紀の初頭に、戰略地點の概念が、カール大公によつて戰爭理論の中に入れられた。こゝで戰略地點とは、その領有が作戰のために決定的な利益を提供するように見える場所と解せられた。敵軍の兵力源泉——すなはち大抵の場合第一に敵の首都——は、もちろん常に戰略的に重要なる地點であらう。同樣に、武器、彈藥およびその他の軍需品の生產地點ならびに要塞も、必ずしも常にではないが、大抵の場合にそうである。その他の場所の意義は、高地であれ、山河或は河川であれ、鐵道或は道路の交叉點であれ、戰

爭狀況の如何によつて、もつと多くの變化をする。この點を考慮することなしに、曾つて地圖により案出された地形區に特殊の戰略的意義を賦與したとしたら（例へば一八一四年の戰役に、フランスにおいて、ラングル高地に賦與したが如く。この高地から河はライン、セーヌ、ロアールおよびローヌ、すなはち四つの海に注ぎ、それに應じてそれだけの谿路があつた）、それは、本來の目標たる敵軍を輕んずるところの間違つた敎へであつた。だが、一八六六年にも尙ほかゝる思想は、オーストリア軍の中にあつて、ためにオーストリア軍司令部は、ヨセフ市近傍の上エルベにおける防禦陣地の意義から解放されることができなかつた。

有益な軍事的地形判斷は、大抵の場合、全く決定した狀況と任務の觀點の下においてのみ可能である。それにも拘はらず、多くの地形形成および場所の戰爭遂行に對する作用に關しては、一般に妥當することが、若干は述べられる。

山嶽および山嶽戰は、常に、特殊の役割を演じたし、そして今日では、多數のよい道路の完成によつて、軍隊の運動の妨害物としての山嶽は、著しく、その重要性を喪失したとはいへ、將來も、尙ほその役割を演ずるであらう。このことは、なかんづくドイツの中間山脈およびその邊境について當てはまる。兎も角、それは行軍能力を減退せしめ、給養および宿泊を困難ならしめる。山嶽は、攻擊を妨害し或は排除しさへもする。車馬、かくてまた一切の大部隊の運動は、山嶽戰のために、充分な輜重軍獸を特に用意してゐない限り、高山においては、大抵谿谷の道に束縛されてゐる。これは、しばしば踏破困難なる高度によつて分離され、それ〴〵分離した戰場を形成する。隣接せる溪谷において戰鬪しつゝある部隊を適時に支援することは、往々にして不可能である。かくて山嶽は、防禦に便ならしめる。すなはち峽谷においては、比較的少數の兵力をもつてして、强大なる敵を防禦する可能性がある。何となれば、强大なる敵も、その優勢を發揮すること

が全然できないからだ。たゞ長期繼續する戰鬪、なかんづく陣地戰の場合にのみ、この狀態は變化する。何故なら、近代技術は、長い間には、殆んどあらゆる課題を解決してしまふからである。だが、防禦者は、殆んど常に更に數多の陣地を發見し、そこにおいて新しい抵抗を爲すことができる。それ故に、山嶽における攻擊は、大抵特に遲々として進行し、大なる作戰的效化を擧げることは稀れである。トルマイン（Tolmein）は一の例外をなしてゐる。かくて攻擊者は、山嶽を避け、或は出來る限り早く踏破しようと試みるであらう。だがその場合においてもまた、分離された諸部隊が個々の峽谷から出て來るには尙ほ困難がある。

世界大戰においては、先づ最初に南ヴォゲザンおよびカルパーテンにおける戰鬪が、山嶽戰の困難の一概念を與へた。だが、なかんづく一九一五年秋に、セルビアに對する戰役の迅速なる遂行は、殆んど道のない山嶽において狹く限られたる部隊數より以上のものゝ戰鬪力を保持することの不可能さによつて挫折した。たゞ單に其處では最早や給養をなしえなかつたゞけの理由で、師團を續々と戰線から引き上げなければならなかつた。アルメニアの國境山地においてロシア軍と戰つた際のトルコ軍にとつては、狀勢は遙に惡いものだつた。

中央ヨーロツパにおいては、アルプス山脈が最も困難な山嶽地帶である。アルプス山脈自體における行戰は、通行不可能のために、曾つては不可能と考へられてゐた。それは全く、攻擊者が容易に踏破しえないところの防壁として意義をもつのみだつた。スワアロフ（Suworow）は、一七九九年に、セント・ゴツトハルト越えに際して、その軍隊の三分の一を失つた。ナポレオンの實行力は、一八〇〇年の春に、三萬六千の兵をもつて、いひ難いほどの困難の下に、大セント・ベルンハルトを征服し、その他の一萬五千の兵は、ケニス山（Mt. Cenis）、小セント・ベルンハルト、シンプロンおよびセント・ゴツトハルトを踏破した。鐵道と道路とは、今日では、この困難を非常に輕減し、その結果、アルプス山脈も、世

界大戰においては、戰鬪領域とさへなり、啻に可成り連繫あるオーストリア・ハンガリアの防禦戰線を形成したのみならず、また大掛りの攻擊行動が效果的に遂行されもした（一九一六年五月および一九一七年九月）。

作戰的考慮においては、三國同盟が存續してゐた限り、西アルプスは、フランスに對するイタリアの攻擊に對して、一の役割を演じた。だが、狀態は非常に不利であつて、（イタリー平野から國境の頂上までは急峻な登り坂で、それから約百キロメートルはフランス領の强固な要塞を築かれた高山地帶をなしてゐて）、こゝから攻擊を行つても、效果を期待しえないほどであつた。同一の事情は、世界大戰においてもまた偶々發表された思想――イタリーを越える道を通つてフランスを攻擊しようといふ思想に對し、他の理由も加つて、反對せしめた。

大抵は山嶽と合致してゐる森林と大きな村落とは、それらによつて蔽はれてゐる地形が全く透視し難いために、重要性を有してゐる。何故なれば、それは、部隊の集合および運動を防護し、且つ――今日特に重要な空中からの偵察に對しても防護するからである。それは、戰鬪においては、防禦に好都合である。それは、攻擊を困難ならしめる。何故なら、統一的な指揮が大抵の場合直ぐに不可能になるからだ。防禦は、森林および村落をば據點として利用する。攻擊者はこれを避ける。それにもかゝはらず、世界大戰においては、なかんづく村落を奪ひ合ふために、非常な頑强さと夥しい肉彈をもつて戰鬪が行はれた。一定の場所は、設堡によつて、最高の抵抗力を與へ、かくて戰爭遂行のために高い意義を與へ得る。要塞は、作戰に決定的な影響を及ぼし得る。だが、その重要性もまた全くその時々の戰爭の狀態に依存してゐる。企圖された或は可能な作戰を顧慮して、周到に施設された要塞は、したがつて、あらゆる戰爭計畫の本質的な部分を形成する。なかんづく山嶽河川の跋渉、尙ほまたすべての國境地區、全國境は、設堡によつて、多かれ少かれ攻擊し難いように遮斷

しうる。かくて、最少の兵力で間に合はせることができ、益々多數の兵力を他の任務へ廻はすことのできるような場所がつくられる。敵は、時間と兵力の非常にかゝる攻撃を強要されるか或はその前進をば防禦者の欲する一定の方向へ轉ぜしめられるような迂回を強要される。

フリードリヒ大王の戰爭指導は、特に要塞に依存してゐた。何故なれば、それは、軍隊の維持に不可缺な倉庫を含み或は其處へ至る道、なかんづく渡河を確保し或は敵の通路を遮斷したからである。設堡陣地においては、兩軍は、しばしば數ヶ月間も對峙した。かゝる狀態は、戰爭の遂行に食糧貯藏庫が不要になり、緊密な道路網がつくられ、曾つてはたゞ僅かばかりの船橋か然らざる場合には精々渡船を賴りとしてゐた河川に多數の堅固な橋が架けられたので、ナポレオン以來、全く異つてしまつた。要塞の數は減少した。何故なれば、攻擊者は、最早やそれを目標とする必要が無くなり、これを側方に見て通過することができるようになつたからである。既にナポレオンは、大抵そのような行動をとつた。一八六六年および一八七〇—七一年の戰爭は、類似した形相を示した。作戰は、敵の軍隊がそれにしがみついてゐない限り（メッツ、セダン）、分散してゐる要塞を逸してしまつた。パリは作戰目標となつたが、それは、要塞であつたからではなくして、敵の抵抗の中心點であつたからである。

世界大戰は、部分的に異つた形相を示した。この時までに成立し、作戰計畫に從つて設けられた要塞體系（Festungssystem）——それは個々の地點ではなく、大なる場所を包括してゐる——は、運動および戰鬪に決定的な作用を有するに至つた。フランス國境の設堡は、ドイツの攻擊をして中立國から行ふの餘儀なきに立ち至らしめ、それによつて新しい敵を引受けざるをえなくさせた。ディーデンホーヘン——メッツ——ニードシュテルングの裝備は、大なるドイツの左翼旋回（Linksschwenkung）の旋回點と考へられてゐた。ベルギーおよび東部戰線における大抵は孤立してゐた敵の要塞は、攻

擊者の破壞手段の前においては、一の役割を演ずべく餘りに微力であつた。ベルギーの司令部は、ロシアのそれと同樣、それらに捉はれてゐないことを自覺してゐた。――彼等の軍隊の戰鬪力の維持は、彼等にとつては、要塞の固持よりも重要だと考へられた。

あらゆる種類の水流および沼澤地方は、排水或は凍結によつて一時的にでも渡渉しうるようにされない限りは、あらゆる攻擊運動を著しく妨害し、實にこれを停止せしめさへすることのできる障碍物として意義を有する。(一九一四年十一月におけるイゼル運河水閘の開通)。從つてそれは防禦に便宜を與へる。攻擊者は、渡渉に當つては、長い行軍縱隊をなして避けることとなしに橋を前進するためには、深さに從つて、――また出來るだけ多くの場所から渡渉を試みるためには、廣さに從つて、その兵力を分割しなければならない。防禦者は、敵兵力のこの分割をば、自己に有利に利用することができる。それ故にナポレオンは、もし可能なれば、護岸(Flussverteidigung)をば、彼岸における橋頭から攻擊的に行はんとした。

『河川は』――と彼は判斷を下してゐる――『たとへ非常に廣く且つ急流であらうとも、彼岸における進出路および攻擊再開始を準備する頭腦を有してさへ居れば、何でもない。』兩岸に亘る要塞、ウエーゼル、ケルン、コブレンツおよびマインツに倚托せるライン河の防護について、モルトケも似たような考へを有してゐた。もし彼岸に橋頭がない場合には、準備し、集結せる兵力をもつて、渡河し來る者を邀擊するために、敵をして全流線における或は少くとも一地區における渡河を自由にさせるといふことが問題となつて來る。かゝる行動はしばしば推奬されるが、しかし効果的に爲されることは甚だ稀れである。一八一三年のカツツバツハ(Katzbach)におけるブリユツヘルの勝利、それからまた一八六六年のク

ストツツア（Custozza）におけるアルブレヒト大公の勝利は、これに數へられる。だが、敵を再び撃退することは大抵成功しない（一九一四年九月における第一軍および第二軍の間のマルヌ近傍の騎兵、十月におけるイワンゴロドの會戰）、却つて敵は、少くとも固持し、次いでその後において全河川防禦をば潰滅することができる。

それ故に、恢復攻撃において勝利を强取するには微力だと感ずる者は、水利による純粋防禦を試みることによつて成功するであらう。もちろんそれにも疑問はある。何となれば、それは兵力を分散させ、且つ敵が一ヶ所において渡河に成功するや否や、全配備は大抵崩壊するであらう。フリードリヒ大王は、端的に次の如く書いてゐる――『敵の渡河を妨害することは、特に攻撃戰線が廣大なる場合、絕對に不可能である。』このことは、當時の狀態に對しては無條件的に正しい。だが、爾來、戰士の數とかゝる種類の防禦の强味が增大した結果、この一節は最早や完全には適用しえなくなつた。あらゆる地形の陣地戰において數百キロメートルに亘る戰線が立派に保持されるならば、その時初めて、戰車の時代において殆んど唯一の有効なる障碍たる河線を保持することができるのである。攻撃者の渡河は、こゝにおいて、特に困難なる事情の下に遂行するところの突破の特徵を帶び、これが成功は、たゞ幾分なりとも防禦兵力が充實してさへゐれば、殆んど望み難いものである。一九一四年十月のワイクゼル（Weichsel）におけるヒンデンブルグ軍の戰闘は、確かにそれは不充分なる兵力をもつて特殊な困難の下に試みられた河川防禦ではあつたが、かゝる例を示すものである。

河線の防禦の强さに適應しつゝ、攻撃者は、渡河の場所および時間をば、出來るだけ長く敵に知られないようにして置くことを指定される。誤導のあらゆる手段、（Schein-und Nebenunternehmungen）は、この場合必要である。一九一五年十月、セルビヤに對して行はれたマツケンゼン軍集團のドナウ渡河は、防禦準備せる敵を前にしての渡河が成功せる素晴らしい實例ではあるが、しかしまた一九一四年十月におけるロシア軍のウエクゼル渡河も敎訓的である。一九一五年八月

にけるリガ攻略のためのデュナ渡河は、既に純粋な陣地戰の分野に屬してゐる。

（二）天候と季節

天候と季節とは、行戰に對し有力な影響を及ぼすが、その影響は、今日では、高度に發達せる中央ヨーロッパ地方においては、邊僻の、交通不便な、未發達の地方におけるよりも少い。排水作業は、それを行はざれば障碍物として一の役割を演ずる沼澤地方（一九一五年、ロキトノ沼（Rokitono-sümpfe）および水流をば、通行可能にする。

他面において、旱魃および水の缺乏は、戰爭の遂行にとつて最惡の障碍である。それは、運動を全く痲痺させるか或は極めて限られたる部隊しか使用できないようにすることができる。近代技術は、この困難を克服することができる。だが、それには、時間が掛かるし勞働力と器具とを豫め支出しなければならない。一八九六―九八年、スダンにおけるキッチナーの戰役、一九〇四―〇六年、南西アフリカにおける叛徒に對する鎭壓、スウエズ運河に對する出兵、世界大戰におけるパレスチナおよびメソポタミアにおいては、單に暑熱によつてのみならず、更に旱魃と水の缺乏によつて決定的な影響を受け、最後には、前進する鐵道工事に應じてのみ可能であつた。エヂプトからパレスチナに對して作戰するために、イギリス軍は、鐵道の外に、シナイ半島の荒野を通じて水道を敷設した。なかんづく、大なる騎兵隊は、その重大なる戰鬪任務の必要に應じて緊密に集結せしめて置こうとする場合には、充分なる飲料を要求した。一九一五年夏のリトアニアおよびクールランドにおける旱魃の際には、それが時々痛感された。

東部戰線における行戰に際しては、秋雨と雪解けの結果『道が無く』なつて、作戰をば、規則的に數週間づつ痲痺させ

た。一九一六年に、ナロッチ湖（Narotsch-See）附近におけるロシア軍の攻擊は失敗に終つたが、それは單にドイツ軍の防禦によつてだけではなく、低地の沼澤にはまり込んで、人も馬も車も動けなくなつてしまつたからであつた。高山においても、雪解けは、決定的な役割を演ずる。平和時代に集積された經驗に從つて、コンラッドは、アルプス山脈における攻擊は五月末以前には不可能であると考へてゐた。ところが一九一六年に至り、彼は、早くも四月十日にそれを開始しようと欲したが、天候のために五月十五日まで延期しなければならなかつた。一九一六年二月におけるベルダンに對する攻擊もまた、天候のために、九日も遲れて開始されなければならなかつた。兩方の場合とも、そのために、奇襲できなかつた。すなはち、敵は、その準備に氣が附いて、對抗處置を採ることができたからである。

霧は一切の運動を陰蔽する。それは、なかんづく空中からの觀測を不可能にするから、軍隊の移動に役に立つ。だがしかし、それは賴みにならない味方であつて、短時間で全く不意打ちに消えてしまふこともある。他面において、それは戰鬪行爲を妨げる。

冬は、戰爭の遂行に對して、決定的な作用を有してゐる。日が短いといふことは、戰鬪行爲を著しく制限する。攻擊を決勝に至るまで遂行するためには、とりわけ北方におけるが如く晝の明るい時が數時間しかないところでは、時間が不充分である。一九一四年十一月——十二月におけるロッヅ攻擊作戰は、そのために惱まされた。或時は泥濘が、或時は積雪が、或時は氷面が、運動を妨害する。酷寒は、河川、沼澤を凍結せしめることにより、然らざれば戰爭遂行に非常なる影響を與へうるところの多くの障碍を排除もする。これは、とりわけ東部戰線において一の役割を演じ、世界大戰に當つては、時に利用されもした。他面において、結氷は、北方のバルト海においては、ロシアの海軍力をば、不凍港に據れるドイツ艦隊よりもヨリ長期間痲痺狀態に置いた。

要するに、冬は、戰鬪行爲を制限し、且つすべての軍隊は、長い作戰の後に一度休息を必要とするので、それは大抵休息のために最も適した時期である。冬期戰は稀れである。冬期を通じて決勝を求めんとする行戰は決して阻止されず、運動と戰鬪は出來る限り繼續されるとはいへ、戰爭活動の休止或は弛緩は普通のことである。一八七〇―七一年の冬には、作戰は少しも中斷せられなかつた。一八七七―七八年の露土戰爭におけるシプカ隘路（Schipka-Pasz）の決戰は、冬の最中に行はれた。世界大戰においては、とりわけ最初の冬に大規模の作戰が行はれた。――ロシアのアジア國境において、トルコ第三軍は、高山の酷寒において殆んど完全に解體した。カルパチアにおいては、ロシア軍の攻撃は、氷雪のために固着してしまつた。マヅールにおける『冬期戰』においては、酷寒と吹雪が、次いでまた露つぽい天候と泥濘がドイツ軍の迂回運動を妨害し、かくてその成果を制限した。一九一六―一七年冬期におけるルーマニアに對する作戰もまた、カルパチアにおける酷寒と氷雪およびワラヘイ（walachei）における通行出來ぬ道によつて、重大な妨害を受けた。

フリードリヒ大王は次の如く書いてゐる――『冬期出兵は、その際に突發する疾病によつても、また軍隊は常に運動を續けて居り、從つて補充も新しい補給もされず、食糧彈藥車も補充され得ない爲にも、軍隊は破滅せしめられる。世界最優の軍隊といへども、かゝる戰役には、長期に亘つて堪へえないことは確かであらう。それ故に、冬期戰は、あらゆるもののうち最惡のものとして避けられなければならない。――それにも拘はらず、軍司令官は、事情によつては、この手段を採ることを餘儀なくされることもある。余は、今世紀の如何なる將帥たちよりも多くの冬期戰を遂行した、と余は信じてゐる』。だが、『翌年の春、敵に先んじて出兵を開始する』ために、冬期は休息のために利用する方がよいであらう、――と彼は考へてゐる。

今日では大王が爲した如き『冬期設營』は最早や問題にならないとはいへ、以上のことは、今日でも尙ほ意義を有する

ところの原則である。この原則は、當時にあつては、單に必然と考へられてゐたのみならず、また事實そうであつた。かくて冬期は、若干の例外はあるが多かれ少かれ世界戰爭においてもそうであつた如く、個々の戰役に一定の限界を附するものである。

第九節　軍隊の給養と後方施設

(一) 軍隊の需要

一の軍隊をして戰鬪力を保持するための最も本質的なものは曾つては給養であつた。何となれば、會戰は稀れであり、當時の彈藥消費は、今日の尺度をもつて測れば、少量なものであつたからだ。その戰爭をば、豫め建設せる食糧貯藏庫を賴りとして行つたフリードリヒ大王は、その軍隊をば、『その敵に對して防護するより飢餓に對して防護する』方が困難であると考へた。『その結果、將師の計畫は、常に食糧問題と關聯し、その大なる計畫は、もし彼が何よりも先づ給養の確保を考慮しない場合には、英雄的な妄想に墮してしまふ。かくて、將師が給養の職務を委ねるところの人物は、腹心の人物となり、戰爭における大事、國家における重要事、一切と關係を有することになる。』大王の行戰の攻勢的傾向は、食糧貯藏庫との連絡を確保するための配慮によつて惱まされた。深く敵國に入る攻勢は、戰鬪による損失なしにも敗北に終ることがありえた。ロイテンは、速急に擊破されなければならなかつた。何故なれば、ブレスラウおよびシユワイドニツツの要塞は、その食糧貯藏庫と共に敵の手中にあつたからである。

フリードリヒ大王の主たる觀點は、その軍隊の給養の源泉たるザクセンおよびシユレジアを確保することにあつた。彼にとつては、たゞこの範圍内においてのみ、戰場における勝利が主要事だつたのである。ナポレオンは、出來る限り國外

に戰ひつゝも、食糧貯藏庫に依存しないようにした。だが、一八一二年のロシアの冬期戰においては、モスコーが焼き拂はれると共に、この行動は挫折してしまつた。

　それから半世紀後には、既に鐵道の發達が、絶えず增大する軍隊集團に對する補給の計畫的組織を可能ならしめた。モルトケは一八六〇年に次の如く書いた――『戰場においては、惡質なものを除き、如何なる給養も高價すぎるといふことはない。』だが、困難は、その調達にあるのではなくして――と彼は續けて書いてゐる――これを配給することにあるのだ。それについて何が書かれ、理論的體系において變動があらうとも、偉大なる術は、『無數の・豫め測り難い特殊な場合に、それを適用する』ことであらう。『新時代の行戰は、徵發制度により、專ら貯藏庫給養による不自由な束縛から解放されたが、しかも全然それなしに濟ませるといふことはできなかつた。』鐵道および運搬車がこれを助けたが、しかし、『この運搬車が、絶えず前進しつゝある軍隊に追付くことの出來ないことは明かであらう……會戰の必要は、突然に夥しき軍勢を一地點に結集せしめる。勝利の追擊は、一切の規則正しい給養を遙かに飛び越し、敗北は、欲しもしないし或は豫期もしなかつた道をとることを餘儀なくせしめる。こゝにおいては、如何なる理論も間に合はない、そしてすべての偶發事に對して救援方法を講ずるためには、給養を管理する職員が、高度の配慮と、迅速なる決斷と、斷乎たる意志力とを有してゐることを前提とする。』彼は、この『經理部職員』を參謀旅行に加へようと欲した。然り、彼は既に一八五九年に次の如く要求してゐる――『車に備へつけられた鍋は、行進中にも料理をすることができる。兵士は、露營に着くとその食事が用意されて居り、そこで直ちに休養することができる。』だが、この二つの要求が實現されるまでには、約半世紀を要した。

　諸部隊は、今日では約一週間分位の糧秣を、その輜重と共に自から携行してゐる。それ以上のあらゆるものは、自國に

ゐない限りは、後方から供給されなければならない。その場合には、戰爭が前進しつゝある限り、とりわけ馬鈴薯と馬の飼料として枯草が考慮される。戰爭が停止してゐる場合には、補給の要求は增大するが、しかしまたその供給は容易である。攻擊の場合には、敵の食糧品を奪取することが重要であり、退却の場合には、自軍の食糧品の返送、或はそれが不可能ならば、その破棄が重要である。

給養と共に、なかんづく彈藥、それからまた武器および裝備に對し漸次に絕えず增大する需要が生じた。この需要は、世界大戰の陣地戰のために、極めて多種多樣な軍隊需要の夥しき量に增加した。充分なる彈藥補給の困難は、作戰をば、往々にして妨害した。將來は、自動車および飛行機を、その一切の必要品、なかんづく燃料と共に供給することは、更に補給量の異常なる膨脹を伴ふことになる。

（二）戰爭領域（Kriegsgebiet）の區劃——補給と後送（Nachschub und Abschub）

野戰軍（Feldheer）の領域は、各軍について、諸部隊によつて占められる作戰領域と、その背後に位置する兵站領域——その利用は、これを委託された武官（Militärbehörde）によつて規制される——とに區別される。兵站領域の背後の領域は、一般に最早や野戰軍には屬しない。それは、自國においては本國の領域であり、攻略した敵の領土或は占領された中立國の領土においては、必要に應じて特殊な管理機關（Verwaltung）が設けられる。世界大戰においては、ベルギーおよびワルソウの總監府（Generalgouvernement）、東部戰線の總司令官の管理領域、ルーマニアの軍政がそれだ。これら領域の組織は、必要に應じ、特殊關係に應じて、變化した。一般に、それらには、それに相當する下級組織およびそれと共に文官職をもてる軍長官が就任した。この總監府は、首相の下に屬した。作戰および兵站領域の後方境界は、戰爭狀態の

如何によるものである。

兵站すなはち兵站領域において活動してゐる職務および施設の總體は、一切の必要品の補給と一切の不要品の後送によつて、作戰領域に活動してゐる部隊の戰鬪力を保持する。偶發するその他の任務は、この主要目的に從屬し且つ適合せしめられる。兵站線とは、野戰軍と本國との間において個々の軍に振り當てられた交通路（鐵道、水路、自動車路、野外軌道、街道）である。各軍は、出來る限り能力ある自己の兵站線（鐵道、將來においては恐らく自動車路）を指定される。一の中心が、成立せる補給および後送の交通をば、實際的に、種々なる交通路および交通手段に割當て、これが正しく利用されうるならば、それは、互ひに補足し合ひ、且つその用途において互ひに幾重にも重り合ふ。以前の戰爭の野戰鐵道長官の資格およびその下級組織を擴大して、全運輸の長官たらしめることは、問題となりうる。

各軍の兵站の首席には、大抵、師團長級の兵站監督官（Etappen-Inspekteur）がゐる。兵站は、軍の必要に應じて、食糧品補給のための施設（倉庫、パン製造所、家畜小屋および屠殺所）、武器、空軍、通信および自動車隊の必需品（修繕所、燃料貯藏所、補充品）、馬小屋、衛生および獸醫の必需品、被服等々を包括する。最も古くから組織されてゐた兵站守備隊は、局地的守備に就かしめられる。

兵站は、その任務に正しく應ずるため、秘密保持に妨げなき限り（奇襲の項參照）、豫期する必要につき、それからまた軍指揮の意圖についても通じてゐなければならぬ。兵站領域に存在する貯藏品は、兵站自身および住民の需要のために不可缺でない限り、常に先づ第一に軍のために利用しなければならぬ。大量の貯藏品を兵站領域に放置することは、誤りである。何となれば、退却運動の際には、大抵の場合、それらを持つて行く時間はないからである。秩序整然たる退却指導には、よく行き屆いた準備が必要である。この點において、一九一四年八月末に東プロシアにあつたドイツ軍の突然の退

却は、大なる困難に當面した。それ故に、兵站は、たゞ制限された貯藏品だけを保持し、必要に應じてのみ、新しく本國から取り寄せるのである。必要品は、本國の生產場所から蒐集地に集められ、そこで兵站により引き取られる。兵員、武器および必要に應じてはその他のものゝ輸送は、途中で停滯することなく、本國から直接に行はれる。

後送は、病人および負傷者の外には、先づ第一に破損した一切の武器、事情によつてはまた過剩な給養品、本國における必要がある場合には原料、等々について行はれる。後送さるべきものは、その場合々々によつて決定されなければならない。

兵站領域の利用および管理は、長期に亘る戰鬪の停止の際には(世界大戰における陣地戰)、ますます重要となる役割を演ずる。農業および種々の工場は、そのために設備され且つ維持される。

將來は恐らく戰鬪部隊に劣らず空襲の危險に曝されるであらうところの兵站部の責任重大なる活動は、しかし、輕視され勝ちである。だが、それなくしては、軍隊は、生存することができないのだ。後方施設は、曾つて巧妙な譬諭で表現されたやうに、消化器に等しいものだ。それは軍隊を養ふものである。それが健全なる限り、誰もそれに就いては云々したがらないが、しかし不健全になると、そんな遠慮は忽ち消えてしまひ、それは、あらゆる思考と話題の中心になる。

第五章　結　語

以上において、我々は、フリードリヒ大王から現代に至るまでの兵術の歷史的發展とその種々なる現象形態および適用形態を敍述しようと試みたのであつた。拘束的な原理は與へられえないし、また與へられてはならない。すべては、個々

の場合における適用、實際の狀勢の正しい感得、適切なる決斷、および目的を意識せる强固な意志の實行に歸着する。理論においては、兵術は非常に簡單である。だが、實踐においては、それは、最もむづかしい術の一つである。その完全なる行使に成功した少數の人々は、偉大なる將帥として、歷史の鐵の書に、千載に至るまで、その不朽の名を留むるであらう。

參考書目。

フォン・クラウゼヴィッツ――『戰爭論』(v. Clausewitz, Carl: „Vom Kriege")
フォン・コッヘンハウゼン――『統帥。二十五名將略傳』(v. Cochenhausen: „Führertum. 25 Lebensbilder von Feldherrn aller Zeiten")
デルブリュック――『政治史に現はれた兵術史』(Delbrück, Haus: „Geschichte der Kriegskunst im Rahmen der politischen Geschichte")
フリードリヒ大王――『獨譯フリードリヒ大王の諸著作』(Friedrich d.Gr.: „Die Werke Friedrichs des Groszen in deutscher übersetzung")、
フリードリヒ大王――『戰爭觀』(Friedrich d. Gr.: „Anschauungen vom Kriege")、
ヨーク・フォン・ワルテンブルグ伯――『將帥としてのナポレオン』(Graf York v. Wartenburg; „Napoleon als Feldherr")、
ジオミニー『近代戰の作戰と比較論評された七年戰爭の大戰術或は關係論、附、兵術の最も重要なる原理』(Traité de grande tactique ou relation de la guerre de sept aus, commentée et comparée aux opérations des dernierès guerres, avec un recuenil des maximes les plus importautes de l'art militaire")
カール大公――『オーストリア軍の將帥のための兵術原理』(Erzherzog Karl: „Grundsätze der Kriegskunst für die Generale der österreichischen Armee")
同上――『戰略原理』(„Grundsätze der Strategie")
參謀本部編――『モルトケの軍事著作』特に『戰術―戰略論』、『戰史研究』、『戰爭論』

ヴエルデイ・ド・ヴエルノアー『戰爭に關する研究』(v.Verdy du Vernois: „Studien über den Krieg")
リユストフ——『近代戰略戰術論』(Rüstow, Wilhelm: „Strategie u. Taktik der neuesten Zeit")
フオン・ブルーメ——『戰略、その任務と手段』(v. Blume, Wilhelm: „Strategie, ihre Aufgaben und Mittel")
フオン・シエルフ——『戰爭指導について』(v. Scherff, Wilhelm: „Von der Kriegführung")
フオン・シユリヒテイング——『現代の戰術戰略の原理』(v, Schlichting· „Taktische und stratigesche Grundsätze der Gegenwart")
フオン・フアルケンハウゼン男爵——『現代の大戰爭』(v. Falkeuhausen: „Der grosze Krieg der Jetztzeit")
同——『側面運動と集團軍』(„Flankenbewegung und Massenheer")
フオン・ベルンハルデイ『近代戰の諸要素』(v. Bernhardi, Friedrich: „Die Elemente des modernen Krieges")
同——『世界大戰後の將來の戰爭。』(„Vom Kriege der Zukunft nach den Erfahrungen des Weltkrieges")
ゴルツ——『武裝せる國民』(Frhr. v. d Goltz, Colmar: „Das Volk in Waffen")
フオン・ケーメレル——『十九世紀における戰略科學の發展』(v. Caemmerer: „Die Entwicklung der strategischen Wissenschaft in 19 Jahrh.")
シユリーフエン伯爵——『全集』、
フオン・フライターク・ローリングホーベン男爵——『近代戰における指導』(Frhr. v. Freytag-Loringhoben: „Die Führung in den neuesten Kriegen")
同——『世界大戰』(„Weltkrieg")
ルーデンドルフ——『戰爭指導と政治』(Ludendorff: „Kriegführung und Politik")
同——『全體戰爭』(„Der totale Krieg")
フエールスター——『シユリーフエン伯爵と世界大戰』Faerster, Wolfgang: „Graf Schlieffen und der Weltkrieg")
グレエーネフ——『シユリーフエン伯の遺言。世界大戰に關する作戰的研究』(Groenev, Wilhelm: „Das Testament des Grafen Schlieffen, Operative Studien über den Weltkrieg")
マルクス——『大戰における攻擊と防禦』(Marchs: „Angriff und Verteidigung in Groszen Kriege")

フォン・ゼークト――『一兵士の思ひ出』(v. Seeckt, Hans: „Gedanken eines Soldaten")

フォン・エールツエン――『自由なる將帥と束縛せられたる將帥』(v. Oertzen, Karl Ludwichi: „Der Feldherr in Freiheit und Bindung")

同――『戰爭理論の必要』(„über die NotweudigKeit einer Kriegstheorie")

同――『モルトケ元帥と參謀本部』("Generalfeldmarschall Helmuth Graf v, Moltke und der Generalstab, vom Weltkriege aus gesehen")

ゾルダン――『人類と將來の會戰』(Soldan, George: „Der Mensch und die Schalcht des Zukunft")

ロッコ・モレッタ――『明日の戰爭はどうなるか?』(Rocco Morretta: „Wie sieht der Krieg von morgen aus"?)

フォン・シエーフエル

海戰論

海戰の指導（海上戰略）

海戰の本質並びにその目的は、制海權の獲得、維持、乃至はそれのための爭闘である。制海權は戰闘に於ける決戰の結果獲得されるものであり、封鎖によつて維持される、またその制海權は多少とも防禦的意味での方策に基づいて、卑力なるものからより強力なるものに向けて駁擊されるものである。次いでこれは十字軍戰爭、商業戰爭並びに商業保護等を通じて實行されるのであつて、海軍の領域を越えて陸軍乃至空軍、更に兩者共力のもとに敵地に於ける攻擊を開始せんとする聯繫的作戰遂行に於て尖銳化せしめられるものである。

制海權の概念は容易には理解し難い。陸戰に際しては、戰爭遂行の目標即ち敵の反擊力の擊破が直接達成し得るのだが——更に敵主力の殲滅によつて敵地を完全に占領することさへも出來る——、海戰は斯る目標を直接的に達成することは難しい。浮動戰闘力の支配範圍は敵地沿岸にまでいたつてゐる、しかしそれは領地內乃至敵の編制地並びに生活力にまで押寄せることは不可能である。しかしまたその浮動戰闘力が防備した港灣を探知せるや、敵の海軍すらもそれには拮抗し難いであらう。乍併公海は誰の所屬たるものでもなく、敵國のみならず他の如何なる國家もそれを所屬としない、總べての國家の共有である。夫故に大陸に於けるが如き、領地の獲得は全く考へられないのである。廣大なる海上の永續的占領は、戰場を全大洋に延引するといふが如き、戰場を無限に膨脹するの結果となるがために大艦隊を以つてしても到底不可能であり、また効果はないのである。故に海の價値は直接的ではなく、大洋は通路たるにすぎないのである（ラッツエル「國

力の源泉たる海洋』）故に斯る通路の支配權の確保乃至は獲得が海戰の主要目的であつて、制海權は當に海路の支配權以外の何ものでもないのである。優勢なる兵力に對して、反擊のあらゆる手段を殲滅奪取すべき機會が與へられたるとき、海の獨自的價値はその機會が齎せる聯繫能力の中に存す。夫故に海戰の目的はこの聯繫の支配にあり、陸戰に於ける如き領土占領ではない。この海戰遂行の可能性は最初には殆ど現れ得ないのである。成程、大洋は通路ではある。しかし之はこの地球上に於ける最も偉大な而も最も重要な通路であつて、經濟上、軍事上並びに政治上の點で他に比ぶべきものがない。殊に、ある點では戰爭はすべて相手の兵站線に對する爭鬪である。しかしこの爭鬪は、陸戰にあつては單に相手の領土内にあり、多少とも限定せられたる領域に制限されてゐる。しかし之に反して、制海權の經濟的及政治的負擔は、何等かの爭鬪行爲が開始さるゝ以前に即刻全海洋に汎つて充當されるのである。陸上での經濟的責務は勝利乃至は領土占領の後に始めて可能なのであるが、海上にあつてはそれが直ちに宣戰と共に開始される。またそれ故に、海軍を以つてそれが諸所に推進され得る如く、世界的な戰場の膨脹や迅速にして不可豫測的なる點に、海戰の活動能力及陸戰と異なる特殊的性質等が基礎づけられる。しかし海戰遂行のためには、それによつて獲得される海路の支配權と同時にある障害や危險は免れ得ないところである。この海路は、先きに述べた如く單獨の國家のものではなく、交戰國たると中立國たるとを問はず全民族の共有せるものである。故に、海路の軍事的影響は直ちに中立範圍にまで及びそれに障害を與へるの結果となる。之がため、海戰は陸戰以上に極めて强力な政治的附加物を伴ふ、即ち陸戰の最も實際的な爭鬪行爲に於て中立地の境界を越えてゐる場合にその陸戰に見舞れてゐる中立國からの抗議を受けるといふそうした危險には初から遭遇してゐるわけである。之がため戰時國際法の大部分は之のことに關聯してゐるのである。

制海權の價値には絶對的なものは皆無である。多くは各國家にとつて、それの經濟的軍事的並びに政治的要點に應じて

多種多様である。如何なる場合にも一國家にとつての制海權の價値は斯る軍事的本質たると政治的經濟的たるとを問はず、どの程度まではその國家自身乃至それの相手國が、海上聯絡のことにかゝつてゐるか、といふ點によつて測定すべきものであらう。この依存の程度が制海權の重要性の評價の基準をなす。海上聯絡の損傷が戰爭の全般に汎つて如何なる意義を持ち得るかといふ點は、世界大戰に於いてなせる獨逸に對する食糧封鎖工作によつて明確である。またロシアについても、かの同盟國から重要な海路を悉く切斷されるが如きことがなかつたなら、恐らく容易には崩壞しなかつたであらう。潜航艇戰爭の如きは、英國の如く原料や生活材を海路輸入によつて仰がねばならぬ國家をして、奈落の淵に立たしめたものであつた。英國の同盟國としての重要性は、軍隊、軍需品、從來からの戰備品等を海を越えてその同盟國の領地まで、如何に遠くまで運搬し得たか、といふ點にかゝつてゐた。獨逸はその當時、海上からの總べての輸入品を封鎖されたがため、その殖民地を失つて了つたのだつた。獨逸戰備はバルト海に於ける海上聯絡がスウエーデンからの金屬の購入を安全ならしめてゐた間だけは正當に行ひ得たのである。

それ故に、經濟上の海上聯絡が甚しき危機乃至は障害に直面するといふことが、戰ひを決することになる場合も考へられる（英國）。他の場合には、軍事的海上聯絡の障害又は危險が亦、――例へば世界大戰に於けるアメリカの軍隊の輸送、乃至はアフリカ殖民地とを結合するに就いてのフランスの非獨立性の如きが考へられる――決定的の意義を有してゐる。たゞ一方のみが問題となることは殆どない、當事國の制海權の評價について、軍事的並びに經濟的關係が同時に參考にされるといふのが多くの場合原則であらう。海上連絡によるこの非獨立性は、それが障害を受けることによつて直ちに戰ひを決する程に重大なことである。しかしこのことは亦、例へば北アメリカ合衆國の如く海上聯絡の切斷によつて決定的障害を受けることのないやうな、經濟的に獨立せる國土の場合は左程重大なものではない。制海權の責務は、それが陸上工

作に關聯せる場合に於て先づ認め得るものである。例外なしに現今では海路からの國家の非獨立性が、ある意味では近代の大戰爭は總て海戰であらう、といふことの主要な原因をなしてゐる。フランスの海上からの輸入年平均は、鋼鐵百萬噸、小麥三百乃至五百萬噸、石炭三萬噸を算してゐたが、ごく最近の戰爭に於ては漸く石油三四百萬噸があげられるに過ぎない。

海上聯絡支配權の政治的意義は多くの場合更に重大である。しかしこのことは、多くの大陸に股つた國家にとつてのみ關係あるのである。制海權なくしては大英帝國は不可能であつたらうし、また獨逸に對抗した列强聯合諸國の政治的全世界的團結も亦、巧みに維持し得なかつたかも知れない。その他、海上聯絡の總てを獨逸から完全に切離して了つたといふことが、世界大戰に於ける獨逸國民の精神力や心理的緊張力を阻喪せしめる起因となつたのだつた（ヘルマン・シュテーゲマン、「戰爭史」）。戰爭に於て、海上聯絡の支配權を有するものは、自己の必要によつて之を開放し、また敵に對しては之を閉鎖排除する等のことを行ふ。乍併、制海權の意義は、大戰前マーハンの劃期的著作「海上權力の歷史に及ぼせる影響」の頭初に繰返し述べてゐるが如き過重評價は首肯し難い。勿論、英國や日本の如き島國にとつては制海權の結果が、戰鬪に於いて、優力な海軍力にとつて當に致命的のものとなるであらう。しかし、一國家がその陸上聯絡の增大を以つて海上聯絡の障害に代行せしめ得るならば、根本的に決戰を延引することが出來やう。先づ陸上封鎖をとうしての海上封鎖の完成が、遂に獨逸を敗北に導いたのだつた。他方また、ナポレオン一世が意圖したところの、陸地への膨大な領地侵略によつて英國制海權の重壓から回避せんとする計劃は、遂に坐礁するに至つた。吾人は、世界大戰當時にあつて中歐諸國の擴大な領地侵略も亦英國制海權の重壓から回避せんことのために、本質的に條件づけられてゐたものと、いふことが出來るであらう。甚しく昂揚せられた能力を伴つた、全大陸的交易線の進展が、將來それによつて全大陸的提携を海上聯絡障

害の場合の代償と見做すことが出來るかどうか、といふことは正しくそれに依つて定る。制海權の純粹な經濟的重壓は多く決戰を迅速ならしむるには足らないであらう、即ちその重壓は軍事的重壓によつて完成されねばならないのである。先づ敵地の占領が相手の反撃力の徹底的殲滅に導くものであり、更に敵をして滅亡に陷らしめるのである。しかしこのことのためには用兵の統一即ち陸海空軍の共力が必要である、また之に際して、その重點は大陸列强の場合は陸戰遂行にあり、島國の場合は海戰遂行の點に置かれる。また海上兵力が、優秀な武器を有せる陸上兵力に擁護せられることは至難であらう。世界大戰に於ける戰鬪の實際上の結末は、英國が獨逸に對立して出來る限り多くの聯合諸國を活潑ならしむることに成功したといふ點にかゝつてゐる。故に、一九一八年の西部歐洲諸國の勝利は一部には優れた海軍力に、また他方優れた政策にあづかるところが多いのである。制海權の意義はもとより、陸地境界をとうして相互に結合せる交戰國にとつてよりも、海によつて分たれてゐる交戰國にとつてより重大である。更に陸軍國にとつても、それが海境を有する限り、制海權を制し得る如き國が常に優越となるであらう。若し將來戰に於て陸軍戰線が硬着せる場合には、制海權を獲得せるもののみが、海上からの脅撃とか、海上での迫撃、あるひは重要海路の開設等によつて自國陸軍の戰鬪力を强化し、機動戰を續行する能力を備へることになるであらう。其故に、制海權の確保は、陸地境界によつて結ばれてゐる如き交戰國にとつても、陸戰の決定を誘引する本質的條件を構成するものであらう。(カスチック「戰術論」第一卷)

乍併制海權は、それの實踐が純然たる軍事的範圍に限定されてゐたり、海上戰利品及封鎖の權利活用が拒否されてゐるとすれば、その意義の多くは失れて了ふであらう。斯る權利の拒否を目的とし「海洋の自由」といふ概念のもとに總括されるところの努力は、數百年來存在してきたのであるが成果はみられなかつた。それで海戰が存在する限り海上戰利品の權利活用や敵國の海上貿易の遮斷は、海戰遂行の重要なる壓迫手段の一つとして、到底海戰遂行の本質から切離し得ない

のである。海上戰利品の權利の否定を支持するものは、彼が海戰に際してそれが完成に重大な意義を有するところの、壓迫手段を採用しやうといふ根本的事實を見逃してゐるのである。海上に於ける敵國所有物の沒收又は破壞は假りに敵の海軍が制海權を得ずして海路をわたらうとするとき、(コルベット「海軍戰略に於る海事上の原則」)敵國海軍に課する刑罰たるに他ならない、之が戰術上の港灣封鎖や戰略上の廣汎な海路封鎖の手段と匹敵するや否やの點はさして問題ではないのである、何故ならば封鎖と海上の商業戰遂行とは原則として同一物であるからである。まさに今日の共通せる戰爭觀によれば、軍事的戰鬪力の間の爭鬪のみならず民族又は國民相互の爭鬪が取扱れてゐるのである。敵國の財政力及經濟力を弱めるところのものは總べて直接的な制壓への一歩をなす、また海上に利害關係を有する國家に對して適用し得るところの効果的手段は、その海上の利害關係を、またそれから得られる所得物を相手から强奪して了ふことである。故に大海軍力は海上に於ける共通な又は私的の敵所有物を沒收又は破壞することによつて、敵の財政及經濟力を自己の財政力や經濟力の缺乏に逆用しそれを以つて長期に汎つて戰鬪力を强化するものである、といふ以上のことによつて海洋にあつての海軍の優勢の維持を放擲して了ふであらう、と考へることは餘りにも愚にすぎるであらう。更に極端にいへば、決戰を確保せんがために經濟的壓迫が唯一の手段として適用されるやうな場合も考へられる。

尙制海權の概念は常に相對的なものとしてのみ考察すべきである。全海洋に汎つて制海權を確保せんためには世界の總べての艦隊を合しても充分ではないであらう。それで例へば最近の戰ひにあつても、西歐諸國の制海權は獨逸巡洋艦によつて暫くは盛に脅かされてをり、バルト海にあつては獨逸によつて、マルマラ海にあつてはトルコによつて更に完全に戰爭終結にいなるまで制海權が確保されたのであつた、また最後には、英國は獨逸巡洋艦を剿滅して全海洋に汎る制海權を占有してゐながら、而も特に自國航路の中で潜水艦と絕へず鬪ひ廻らねばならないと云ふ奇怪な狀態が惹起したのであ

る。世界大戰に於ける英國の制海權は僅に海の表面に存在してゐたに過ぎなかつた。しかし、潜水艦及航空機による水中制海權及制空權の完成のためには、制海權と同樣の意味で斯ることが不可能であるといふ難點を生ずる。予は數的に優勢な潜水艦を以つてさへも、海上到る處に敵の潜水艦が出沒するのを妨ぐことは出來ない。なほ航空機の優勢なるものが三次元たる大空に於て完全に支配權を得、敵を驅逐するものとは考へ難い。それで今日制海權について論ずるならば所謂ひかへめに行はねばならない。しかしながら敵の艦船を悉く殲滅することによつて決定的海戰が終結するに至らなかつたとしても、また同樣にその時の封鎖が効果的でなかつたとしても、若しその制海權が正當な時と場所にあつて確保され得るならば、實際上はそれで完成せるわけである。この意味では、制海權は凡べての海上聯絡のみならず、夫々の目的に最重要な海路を支配することを意味してゐる。それ故にこの海路の支配は一般的にかあるひは局部的に限定され、永續的か一時的か何れかのものであり得るが、また稀れには完全明白なものであることもあらう。何故ならば相手がまだ何れかに行動能力のある戰鬪力を有してゐる間は、その相手は理論上、我々の制海權を幾らかの範圍に汎つて脅し得る狀態にあるわけだからである。海戰史に再三示されてゐる如く、如何なる場合にも二者が共々に完全に制海權を所有するといふことはないのである。寧ろ正常なる狀態といふのは支配されたる海ではなく支配されざる海である。二者の交戰國は制海權についての相互の要求を脅し合ふものである。相手の優勢さとても吾人が戰鬪力を活用することが出來、若干の艦隊か補助巡洋艦がありさへすれば、常に相手が制海權を維持するのを脅すことも出來るのである。また理論上絕對的制海權なるものが考へられないとしても、若し吾が方の海上聯絡や戰爭經過にとつて決定的意義を有する作戰等を敵が阻害せんとするのを防禦するに成功し、敵の通商上の海上聯絡や作戰等の根本的な必須要件を不能ならしむるところの目的を達成するならば、その時は實際上制海權を確保せるものとして論ずることが出來るであらう。

るひは一時的にどの部分の戰場にあつて昇華されねばならぬか、または放棄されねばならぬか等のことがらを常に考慮する必要があらう。而てまた、爆擊され暫時的な制海權の支配を以つて足れりとせず艦隊戰に於ける決戰をもつて決定的な而も永續的な制海權たらしむべきことに、より强力なるものの努力が拂れねばならないのであつて、世界大戰に於ける英國の態度とは相違するものである。また卑力なるものは制海權が戰爭の遂行に對して致命的意義を有するものとすれば、せめて局部的な暫定的制海權ぐらいは占有せんものと努力を惜しまぬであらう。

しかし制海權の程度については、支配すべき兵力の數量が決定的なものとなるのでは斷じてない、多くは之がために、運用すべき戰鬪力をそこから引き出す地理的狀況が伴つてをり、重要海路や通商路の終點並びに集結點に對する海上據點の置位が制海權の實施可能力にとつて少なからず重要點となり殆ど決定的意義を有するものたり得るのである。この點で世界大戰にあつては英國は獨逸に對し攻擊上まさに比類なき位置を占めてゐたのである。大西洋に於ける英國制海權に對する決戰は、何等大洋の據點を有せず而も常時の戰鬪力が僅少な行動半徑にあつたところの獨逸にとつてはフランス西海岸の港灣あたりから漸やく出來たぐらいのものであらう、また我が獨逸の海上攻擊置位の改修も漸やくフランス領地にあつて決定的勝利を克ち得ることが出來たにすぎなかつたのである。乍併海上攻擊の最善なる置位を回る戰鬪は既に平和的なものであらう。據點なくして制海權はなく、海軍政策なくして據點は存在しないのである。一國家にしてその製造工業及産業を通じて海上からの輸出入に依存せるものは、欲すると欲せざるとに拘はらず世界的政策をとることを餘儀なくされる（ウエーゲネル著「世界大戰に於る海上戰略」）。英國政策の大部分は數世紀來この意味の判然たる海軍政策をとつてゐるに外ならない、また他の諸海軍も、殆ど唯一の例外たる獨逸を除けば總べてこの方法を踏襲してゐる。而て一國家の「制海

權」はその政治的經濟的の海上利害關係を評價すべき程度、又それ等の保護のために使用し得る兵力等のことにかゝつてゐる。

それは吾人が陸戰遂行の概念から出發するならば極めて瞭然たるものがあらう、即ち先づそこに制海權實施の計畫をあてはめると、その制海權は他の種の計畫をとうして獲得され保證されてゐるのである。若しこのことが妥當するものとすれば、海戰用兵は主要課題の解決即ち敵艦隊の殲滅に成功したる時に始めて其他の使命に向けらるべきものであらう。しかし、海戰の性質として又戰場としての海洋の特徴として、制海權の執行は同時にそれを占有するといふことの、程度の大小によつて起る戰鬪を以つて替へられるものである。兩者の作戰樣式はその意圖及提出要件について相互に全く相異つてゐる。吾人は優先性をその兩者の何れにをくかは、海洋上、軍事上、政治、經濟及道德上の諸點からなるその戰爭の全的性質に應じてそれに當るの戰爭を考察することに依つてゐる。我々は制海權を、直接に敵艦隊に向つてではなく相手の利害關係ある海路を監視するといふやうな種々な作戰によつて實施する。從來は如何なる海戰にあつてもその作戰が直接制海權のための戰鬪に有効なるものとして、より廣い範圍に汎つてゐた。制海權實施にとつての課題は敵の侵入の阻害、海上輸送隊の保護乃至阻害、特に自國通商の擁護及敵通商の迫害等の點にめる。之からして、作戰遂行にあつては海上聯絡の攻擊並びに「巡洋艦戰爭」によるそれの防禦が第一となる。

先づ巡洋艦戰爭にあつては海戰遂行は强力な遠隔工作を利用する、即ちあらゆる地點で敵の通商を攻擊し敵の經濟的防禦力に障礙を與へるために戰場を全海洋に汎り世界的に擴大せしめるのである。次ぎに巡洋艦戰爭の遂行にあたつては貿易封鎖とは反對に制海權それ自體が絕對的條件となるわけではない。故に巡洋艦戰爭に於ては卑力なものが決戰するために、時によつて單獨の戰爭手段を選んだとしても驚くにはあたらない。また巡洋艦戰爭は背後に强力な支持が得られる場

合は長期にわたつて實行することが出來るのである。之に反して歴史上には、この後立ての必要を認識せず時には强力なる艦隊の編制を忽せにするなどの巡洋艦戰の基本的缺陷が再三繰返へされてゐる。斯ふした理由によつてフランスでは Jeune École の名のもとに純粹の巡洋艦戰爭論が普及し、一度ならず難船を免れてきたのである。巡洋艦戰爭は多くの場合第二義的攻擊として現れる、即ち第一義的攻擊が計畫されると同時に初めてその存在が明になるのである。相手の交通聯絡を侵擊するといふことと艦隊の戰鬪を賭すといふこととの間には、最後的決戰のため省られ得ないところの永久的相互作用が存在する。勿論英佛戰爭以來經濟關係の變轉と共に巡洋艦戰爭の戰略上の意義も亦變化したことは見逃し得ないであらう。今日では殆ど總ての國々が、その世界的經濟關係のために以前よりも遙に貿易戰に影響されやすくなつてゐる。それがため巡洋艦戰爭の戰略上の意義は著しく增大してゐる。しかしまた他方に近代の交通關係及通信制度の發展が巡洋艦戰爭の遂行を根本的に困難ならしめてゐる。蒸汽船や發動機船は帆船等とは異つて一定の航路に從つて航行してゐるのであつて、總べて通路は其處に集合されてをり有効に保護され得るやうになつてゐる。通信事務の高度なる發展の結果、通商巡洋艦（Handels-Kreuzer）の行動範圍が極ゆて迅速に明知されそれによつて直ちに對應策を立ることができるのである。しかし最も本質的な困難は巡洋艦は作業材料や據點から離れては存在し得ないことである。情報部をとうして直ちに困惑を招かざる程度の距離に準備地があることは殆ど存り得ない。斯ふした條件から凡ての巡洋艦戰爭にとつて二つの異つた形態が生ずる、即ち敵國通商の中心を攻擊する、殊に出發點や目的地に於て攻擊するかあるいは、自國及敵國の根據地から遠く離れた海洋の中に敵の貿易船を襲擊する。第一の形式の方がより大きい期待を示してをりまた時に多くの戰鬪力と冒險とが必要であることは明白である。しかしこの冒險も巡洋艦の第二の形式を適用する時は甚しく削滅される。而も海洋のたゞ中に於ける巡洋艦にとつては攻擊目標を認めることは甚だ稀れなものとなる。從つて防禦者の側からすれ

ば、攻撃の脅威の最も多いところは亦防禦も最も容易であるといふ法則が生ずる。もとより擴大された海上通商路の防衛は難事業であるが、またその防禦は中心點にとつては多くの場合巡洋艦を配置することのみでも滿足し得るといふことに依つて容易ならしめられてもゐるのであり、そこでは攻撃者の力に應じ事情にてらして、裝甲巡洋艦戰鬪艦あるひは一小艦隊全部を以つて戰鬪力の强化をなし得るのである。之に反して廣大な海上航路にあつては商船は自らその運命に任されるか、あるひはより强力な反撃をなす代りに夫等を軍艦の直接的保護下にある護送隊（護送船 Konvois）の中にとりまめてゆくにすぎない。斯くの如く護送隊を結成することは、若し防衛者がその商船の直接な保護にあたり、同時に攻撃者の港灣出撃（Ausfallhäfen）の封鎖をもなし得るときには、明らかに攻撃者の集中に對して、時には出航を阻害されるかも知れぬところの艦隊とも言ふことができるであらう。しかし、攻撃者が巡洋艦に對する戰鬪力を强化すればする程防衛者は之を防禦するであらうから、結局巡洋艦戰爭を通じて數的に卑力なるものがそれを免れんとすれば、早晩は艦隊の戰鬪が生ずるわけである。また現在の船舶の非常に輕快なことや迅速な通信聯絡等のために巡洋艦戰に於けるとの艦隊戰の時期は過去に於けるよりも遙に早く到來するものと思はれる。

巡洋艦戰爭の意義はそれ故に商船の障害によつて敵に與へる經濟的損失のみを目標するものでなく、寧ろ多くは牽制するといふ點なのであつて、それがために巡洋艦戰は通商保護に必要な武力を戰場から切離してゐる。若しこの巡洋艦戰が効果的に完全に行はれたならば斯ふした牽制は直接主戰場裡へ打撃を與へることが出來るのである。それで斯ふした場合には假りに決戰せんことを熱望するとしても、巡洋艦はより强力な戰鬪力相互の戰鬪に歸するのであらう。たゞ巡洋艦戰爭と艦隊の計畫との間に充分な相互作用が存在する場合にのみ、先づ第一に本源的成果を收めることを希み得るのである。それで巡洋艦戰爭は如何にも合理的存在であつて、主力の活動を大いに保護することが出來るのである。また更に、巡洋

艦戰爭に充當されるべき手段の標準は、戰爭遂行の相手やその國民の戰時の生活が何の度程に海外諸國の輸入に依據せるものか、またこの領域にあつて巡洋艦が自己の戰鬪能力を以つて脅し得ると考へられるところのその程度によつて定められる。

この關係から、巡洋艦戰爭の特質として、特に高度の發展をとげた通商航海の補助手段が、その戰爭のために利用され得ることを主張することが出來る。このことは補給整理についてのみその重大意義を有するのではない、寧ろ直接の巡洋艦戰爭遂行について適當な商船を補助巡洋艦に運用するといふことが亦承認されるのである。また一般に商船の海上耐久力が、極めて大なることが、その活動半經に於て幾多の制限を受けてゐるところの軍艦に比して特に効果的なのである。それは時により暫定的にその使用目的を擬裝することも可能である。それで成程快速ではあるが形の特異なものよりも、大いさの中位ぐらいで高速を有する平凡な商船の方が遙にその目的に叶つてゐる。尙その外觀は大體大客船の風を備へてゐるものがよいのである。補助巡洋艦の對抗策は防衛目的に備へた商船がそれにあたる。こうした武裝のやり方は英國が既に大戰前に始めてゐたものである。

しかして、補助巡洋艦や武裝商船の利用は普通の海戰に於て、新しい應用と考へられてゐたのであるが、潜水艦を利用した巡洋艦戰爭所謂潜水艦通商攻擊戰爭に於ける形態が認められてきた。

兎に角、潜水艦は强力な敵の封鎖を苦もなく突破し、またその必要燃料の僅少さや驚威的海上耐久力のため、更にまた優勢なる敵の反擊に對して適時潜水してそれを免れる等の性能を有するために、敵の致命的通商路に接近し長期間補給することも據點を求むることも要らず、そのまゝ其處に停つて敵や禁止商品を運ぶ中立國の船を差留、檢査し、時には擊沈するといふやうに「制海權」の一言を以つてなす總ての行動に對して、水上船よりも遙に有能なることを示してゐる。勿

論潜水艦は敵の積極的防備のもとでは水上艦よりも遙に危險な狀態にあるのであるが、殊にそれの非常に傷き易い潜水能力を砲彈の的中などの危機にさらすやうなことは避けなくてはならない。また少數な乘組員では巡洋艦、補助巡洋艦の如くに差押へた船舶を乘組員と共に捕虜とし味方の港まで伴つてくるといふことも容易ではない事情にある。潜水艦の特性は通商攻擊戰爭に於いてそれの行動に特殊な方法が必要であるために、國際法にもそれの規約はいまだみられないのである。今日も尙英國はこの潜水艦について、通商攻擊戰遂行の國際法上の資格を否定することに懸命になつてゐる。しかしそれが如何にあらうとも、通商攻擊戰爭に於いて潜水艦を利用することが必要に應じ軍事的な經濟的な牽制を期待する副次的戰爭計畫についてこの潜水艦は俄に決定的武器に變つたのである、また爾來之を利用することによつて、政策並びに戰爭の其他の諸問題を果すといふ結果になつたのである。つまりは、潜水艦の防禦にあつては大砲を備へた商船の殆ど一般的な武裝を招來してゐる。潜水艦、潜水艦、潜水艦囮艦(U-Bootsfallen)驅潜艇、飛行機、飛行船及モタ一ボ一ト等は、それの次第に進展せる武裝乃至武器の作用によつて、就中水雷の作用によつて防禦に携つてきたのである。海岸や特に裝備された船舶からの聽取施設は次第に効果的となり、數十萬の水雷によつて大海から海峽に至るまでの封鎖は、水雷の敷設區域を驚異的に擴大したのであつた。驅逐艦や其他海空兵力によつて直接潜水艦の攻擊に備へ且擁護されたところの、保護線に商商船航路を總括するのが、潜水艦の攻擊に對する最も有効な手段として認められてゐる。それで、帆船時代からの古い通保護方法の一つに還元することが、即ち護衛船の回生が、近代海戰の武器に備へる最良手段であることが明になつたわけであつた。このことはそれの凡ゆる缺陷にも拘らず就中時間的損失にも拘らず、潜水艦に對する戰鬪の重要な要素として認められたのである。五五〇〇の船 B. R. T. d s Weltfrachturm 千八百萬は潜水艦戰爭によつて喪失したが、一萬三千の大砲がそれ等の商船防備のためにかくされてゐたのである。また英國海軍のみでもその防備に用ひられた爆藥は五

萬五千噸に達してゐる。乍併この有力な潜水艦戰爭の効果については、その影に先づ潜水艦の効力並びに潜水艦防衛を可能ならしめた强力な二艦隊の存在してゐたことを見逃してはならない。しかし潜水艦通商攻擊戰爭によつて、二十世紀の技術による巡洋艦戰爭觀が、ある意外な現實に直面するであらう、といふ期待は眞實ではなかつた。實際上の賜は、如何なる場合にも潜水艦が水上艦の兵力をかりずして、單獨に前進したのでは、制海權を克ち得べく殆ど無能であることが立證された點である。潜水艦だけでは最も重要な海上聯絡の安全を保證し得ないのであつて、それの支配權を敵から奪取することは尙更不可能である。この潜水艦は、潜水艦防衛作戰乃至護衛線に對する獨逸水上艦兵力の前進を阻害せるこの最後的結果についてはその艦隊の優勢さに負ふところがあつた。それゆえに、敵に對し水上制海權の占有を同時に爭ひ得る場合にのみ吾人は水中の通商攻擊戰爭を決定的事態にまで誘導し得るのである。即ち海の水面上を支配するといふことが、潜水艦に抗して最も重要な海上聯絡の支配をも携持することになるわけであらう。專ら用ひられてゐる新しい戰鬪手段は、制海權を强要するものではない。十字軍戰爭についての過去の敎訓はこの戰爭形式にとつても依然としてその効顯を有してゐる。潜水艦が水上戰鬪艦隊の代りを勤めるが如きは一度たりともあり得ない、たゞ共同動作によつて始めてその決定的成果を收めることが出來るのである。戰爭遂行にあたつて、一つは水上、一つは水中、といふ如き二つの種類は存在しない。總括的戰爭遂行に於ける正當な規準のもとに二つの戰爭形式が共和されねばならないのである。この種の戰爭の中立國に對する不當な影響は、この場合考察の埒外にあるものとして算定されない。更に目を轉ずるならば、潜氷艦は過去には實行出來なかつた作戰をも可能ならしめてゐるが、またそれは意表をついて戰場を益々擴大し、戰略上の共同動作や計畫的適用手段の可能性を增大してゐる。潜水艦は卑力なるものの有力な武器であり、更に卑力なるものには常に否定されてきた攻擊の可能性を與へてゐる。聯絡の攻擊よりも、海岸線及敵領地の攻擊は遙に精神的に抗し難き吸引力を

與へてきた、しかし吾人は屢々海戰を海岸線戰爭としてのみ考へ、而もその中で戰爭の對象と作戰目標とが必しも同一物ではないときにも、その戰爭の對象を作戰目標と混同して了つてゐるのである。それで歷史上に、英國上陸の問題が氷解してゐないことも明瞭となるわけである、即ち本來の攻擊目標に並んで未だ敗走するに至らざる敵艦隊の戰略上の意義を過少評價するといふ、十字軍戰爭に於けると同樣な缺陷を繰返してゐたことによるのである。同じ誤れる見界から、屢々たゞ海濱防衛のためにあてられた兵力や海岸要塞の膨大にして貴重な設備が、第一線に於ける海岸線の防衛について大海艦隊を頼みとすることの代りとして進展せしめられてきたのであつた。この場合昔から現在に至るまで、自國の海岸線の保護のためと同樣に敵國海濱を對照とした總ゆる計畫にとつて繰返し艦隊は決定的基力となつてきたのである。しかしてその基力が攻擊を許しそれを容易ならしめてゐるのであり、それは防禦線の最も重要な要素をなしてゐる。勿論特に敵が不均衡に大きな冒險を侵さんとしてゐる時には艦隊といへども海岸線攻擊の凡ゆる計畫を阻害することが出來ないのである。故に海濱の直接的防衛のためにはある規準が不可缺であり、艦隊による間接的保護もそれを保證し得ないのであるが、而も吾人はその艦隊を自國の海濱防禦にあてなかつたならば、更にその根本的な重大問題から切り離されて了ふであらう。しかし艦隊による、遊動的に到る處に差遣し得るところの間接的保護の有利なるに對して、漠大な費用を以つてなされる直接的海岸擁護の否遊動性が如何なる不利益に關聯してゐるかといふ點は常に熟慮されねばならであらう。

制海權施行の廣汎にして重要な方途は陸軍及海軍の有繫的作戰にある。之れは、後方連絡や、多くは過重に惱み時には崩壞に苦しむ陸地の輸送方法を離れて、自國陸軍の行動のために海路による極めて能率的な輸送手段や輸送能力を利用することを可能ならしめてをり、且また敵にとつて全く豫期し得ず破壞し難い手段を以つて自國陸軍の行動を怖らく無限の範圍にまで擴大することを可能ならしめてゐるのである。しかし次にまたこの有繫的作戰は重要な島嶼乃至は海岸線を占

領せしめ、牽制を有効ならしめ、自國領土から離れた特殊な戰場との連絡を安定にし、最後には敵主力の海からの包圍を行はしめてゐるのである。勿論、部隊輸送に用ふべき海路を敵が支配してゐるときには、斯る計畫の實行は不可能である。しかし之に反して、敵の制海權が該當の作戰範圍内にあつて疑しい點があるとすれば、また少くとも計畫繼續のために局部的にしろそれが手中に收め得るものであるとすれば、常に有繫的作戰を適用することも可能である。こうした作戰から出發し軍隊の機動の自由を倍加せるところの戰略上の効力は極めて著しく、既に斯る「水陸兩樣の戰鬪力」の存在は全的戰爭遂行にとつて重要な意義をなしてゐる。もとより、こうして輸送を實行するといふのは艦隊に對し、本質的には擁護隊の安全をきする以上に重要な課題となつてゐる。何故ならばこの場合艦隊は運搬中の輸送船擁護を以つてその義務を終れるのではなく、更にその目的たる防壁を築いた海岸線に到達し、部隊の運送を開始し且また補給のことが考慮されねばならないのであつて、その義務は益々増大する。多くは全計畫と共により强力な敵の行動を算定しなければならない。それによつて輸送船の直接な隨伴掩護や先行せる陸戰隊の直接的な軍事上の援助に關する兵力が充分なのではない、寧ろ軍略上には他の凡ゆる輸送部隊から離れて敵主力の攻擊に備へた自己保護をなすべき特別な掩護艦隊が必要である。この掩護艦隊は常に、包圍攻擊をなす陸軍と同樣な態勢をとることが出來なくてはならない。それは屢々、敵の主力海軍の出發を阻害するために彼等を隈なく封鎖して了ふことが自己の計畫を極めて効果的に守ることになることがある。一般には斯ふした輸送を行ふのは今日では困難である。即ち今日では軍艦の速力が元來輸送船より高度なるがために帆船時代に比してこの輸送に對する保護の方が容易になつてゐるのである。後者は又今日では海戰や空中戰の諸種の武器によつて艦船よりもはるかに障害を受け易い。突然出帆することは大船の準備があるために却々困難であるが、又近代の偵察方法の發展のために輸送艦隊の出航やその目的が昔日に比して、極めて容易に見極められてしまふのである。如何なる場合にも有

繫的作戰なるものは、例へ數に於て劣勢にある敵に有効であるとしても、一方的にしか强力でないといふ多くの缺陷を示してゐる。計畫は大きれけば大きい程、それによつて、少くとも相手からの危險を免れるために制海權は攻擊者の占むる所でなくてはならない。故にその責任は統帥の立場にある司令官の下に存し、重點が陸にあるか海にあるかに依つて、陸上司令者か海上司令者のもとに存する。もしそれに對する部隊の行先が自國領土か、中立國乃至同盟國の領地であるとき、且又敵國海軍力の完全な封鎖乃至は充分な制海權の安定のためのその他の手段等を突破しての輸送路がもし早危險と見えない場合は、その輸送は有繫的作戰の特質を失つてゐる。而してその場合部隊の輸送の下には、掩護隊の中立的安定以外のものは何等問題とはならない。

制海權の施行は常に豫め作られた手段に應じて、その占有が極めて大きいか乃至は僅少であり、一時的か乃至は局部的であり、有限的であるか無限であるか、更に又制海權の全的獲得かが前提されてゐる。即ちそれは一般により强力なるものに歸せられてゐる。卑力なるものは、大抵は强力者に對してその制海權の無限の占有に對して鬪ひをいどむことで滿足しなければならないであらう。勿論斯ふした態度は積極的決戰に導くことは出來ない、しかし敵がまた斯る決戰を仕掛るのを阻害することが出來るであらうし、あるひは他の部分で即ち陸戰や空中戰に於て自國に有利な決戰を行ふ前に强力な海軍の重壓を受けるのを免れるために、少くともその決戰を遷延せしめることが出來るであらう。

斯ふした「上海戰略上の防禦」なるものが、まさに大軍備國に對して、その優力な海軍を著しく困難な狀態に陷らしめることが出來るのである。しかし最も强力な海軍を有するものにとつてそへも、それが聯合軍との戰鬪である場合やまた全戰線に汎つて優勢な兵力を充當し得ない場合には、斯ふした手段をとることを餘儀なくされるのである。この場合、彼は少くともある一部分で制海權を獲得するためにその個所に優勢を張らうと勉めるであらうが、同時に其他の個所ではこの

手段によつて自國防衛を巧みに保持すべく、且つまた敵國制海權の不備を的ふために多くの兵力を遺してをくやうにするであらう。海戰に於る防禦といふのは、卑力なる艦隊が自ら根據地に引上げて海上を敵にゆだねて了ふことを言ふのではない、即ち事態が有利に轉回せるときのために戰鬪準備をなすべく、戰略上あるひは戰術上の規準に基づいて決戰を回避するといふそのことを言ふのである。而てまた防禦にあつても絶えず敵に危險を感ぜしめてゐるために寸時の餘悠をも相手に與へてはならないのであつて、出來れば相手の重要な連絡線へも接近するやうに心掛るべきであらう。故に彼は防禦から更に有力な攻擊に移り得ることを示さなくてはならない、さもなければ敵は直にその卑力艦隊を無視して獨自の行動に移ることになるかも知れないのである。この戰爭形式には昔からの「現在艦隊(Fleet in being)」の名が妥當する。即ちその諸計畫を遂行するにあたつて、完全な制海權の所有を賴としてゐる所の、數において勝れたる敵に對して、決戰によつての制海權の獲得を拒避し、しかも逆襲を續ける事によつて敵に損害をあたへるあらゆる機會を捉へるといふ、かゝる艦隊がそれである。かゝる戰爭遂行の限界は極めて明白である。戰爭がいづれかに勝利を與へる事なくして、制海權の獲得が一つの前提條件であるとすれば、かゝる目標は斷じて戰略上の防衛によつて得られるものではない。「現在艦隊」の形式による戰爭遂行のあらゆる可能性のもとには、即ち弱者に對して極めて魅惑的である處の可能性に就いては、常に吾人がこの海戰の方法を如何に施行し得るかの點が考察されねばならぬ。かうした戰爭遂行はそれによつて敵に對して決戰するを妨げるべき時間的に有利であるといふ効果を持つに過ぎない。しかし自國の戰爭遂行について、時間的有利さを役立たせやうと考へない場合、或ひは又、艦隊戰による以外の何等かのある別な方法によつて、重要な決戰が遂行出來ることを希望してゐない場合は、多く極めて迅速な方法によつて戰鬪に導くことの方が良いであらう。

小戰の諸計畫はその戰略上の効果について、最後の成果を過重評價することがあつてはならない。既に經驗して來た歷

史の教訓に反して、決定的勝利の希望が小戰を通じて、卑力なる海軍力の下でいつももてはやされゐる。而もこの場合技術的發明が新しい武器をつくり上げ、それが大型戰鬪艦によるときには海上に權勢を有する敵の拔きがたかつた優勢さを漸やく克服したかの如くであつたのである。それで現在では、爆藥就中水雷があり、これが比較的小さな特殊船によつて樣々な手段を驅使しつゝ敵軍近くに運ばれるのであるが、自己の消費や冒險を成可く僅少にとゞめつゝ兵力上の事態を完全に轉換せしめるといふ期待が實現されたわけである。水雷戰（Minenkrieg）や爆擊戰についても亦、それが强力な海上兵力の諸計畫と直接關聯が保れてゐる時にのみ戰略的意義を有するものであるといふ一般的原則が妥當する。封鎖兵器としての爆擊の意義については尙他の個所で考察することにしやう。

爆擊戰と共に世界大戰では潛水艦攻擊があつた、人々はそれによつて獨逸側に局部的戰捷を期待し、更に徐々に量的强力さに於て優越せる英國艦隊に對して兵力の均衡を保たうと希んだのであつた。潛水艦を以つて新しい水雷搭載船にあてたのであつたが、それまでの水雷艇と同樣にその潛水艦に對して、それを敵が未だその對抗策を發見し得ないやうな奇計手段なりとして特に大きな期待をかけてゐた。艦船攻擊に於ける潛水艦の攻擊成果は成程このことを保證するかの如く思れた、しかし水上艦の戰術がこの新しい危險の對應策を見出し始ると共に次第にその効果が少くなつていつたといふのも、その原因は潛水艦といふ兵器の性能の中にあるのであつた。之れはまた、潛水艦が二ケ年の戰爭以來次第に通商攻擊戰に利用されるやうになり、遂には殆どそれにのみ用ひられるやうになつたことの原因でもあつた。吾人が潛水艦について英國艦隊との兵力均衡の武器たることを期待してゐたといふ點では、この新しい戰鬪手段の徒な過重評價に熱中してゐたわけであつた。戰爭の變遷は、專問智識ある者に對して、彼が潛水艦を戰鬪艦隊の列に加へ、同時にまたその潛水艦が他の艦船に代替し得るものであつて、大戰鬪艦は既にその役割を果し終へ艦隊戰の如きはユートピアにすぎないなどといふ思想

を否定する時には、それが正當なることを斷じてきた。更に最近の戰ひに於ても潛水艦は奇計型としてその成果を收め、戰爭の終局に際してさへも之に對する如何なる防禦も發明されなかつたのである。こうした間は潛水艦の防衞は武器そのものよりも强力に完成されていつた。而し之れに對して、如何なる場合にも水上艦を作成するよりも遙に早くつくることが出來るといふ點に原因があつた。もとより獨逸の潛水艦戰や火抗戰は成果を收めてをり英國の兵力に對して次第に之を獨逸據點から擊退していつた。乍併獨逸艦隊が之によつて中部及南部北海にあつて保持してゐた重大な行動の自由が適當に利用されてゐた時に限つて、重大な意義を有する戰略上の成果が收め得たのであつた。故にこの場合も萬事は小型艦戰爭と艦隊兵力との計畫の間の相互作用の如何によつてゐたのである。潛水艦は水上艦をして彼等の港灣の中に封鎖して了ふことも出來なければ、敵領地に對する作戰の實行を妨げることも出來なかつたのである。そのほか潛水艦は同じ地點に餘りに長く滯留したり躊躇逡巡したりすることが水上艦にとつて危險であるやうになつたがために、戰爭指導や易動性、集中等の活達性を增加し、又迅速なる決斷を促すに成果を有する。しかし吾人はもしこの潛水艦に行動の規約を定めて了ふならば、益々安全に機動出來るやうになるであらう。豫想を許さない不意打ちの兵力集中やその活動地帶への迅速にして意表に出た進軍は、おそらく敵の潛水艦をして全く無力ならしめるものであらう。それで戰略の原則は何等新戰法によつて汚されるところはないのである。しかし作戰施行の方法は海戰遂行の中に潛水艦を加へることによつて益々豐富になつて來てゐる。潛水艦の獨自な特性のため、就中その神出奇沒さのためにそれの行動は水上艦に比して時間的にも空間的にも廣般に汎つて擴張し得るのである。如何なる時にも又如何なる處にあつても、敵の潛水艦による抵抗を考慮してゐなければならない。潛水艦に對して、行進中の艦隊の安全や據點の安定のためには特別な手段を必要とする。潛水艦からの最善の防禦策として水上艦の速力增進はこの意味で殆ど缺くべからざるものである。敵國海岸への上陸は、潛水艦に對する

特別な防衛手段なくしてはも早不可能となつた。諸計畫に伴ふ危險は益々增加し、行動の自由は數倍の制限を受けてゐる。潜水艦防禦兵力の微少なるものは、中心をなす戰闘艦の數を犠牲にしても之を增加しなければならない。しかし潜水艦艦隊兵力との直接な戰術上の共同動作が非常な困難を示してゐるときには、海戰戰略上の遠方偵察即ち一定の海上區域を必要によつて更に遠方まで永續的に監視を行ふために、今日では最善の方法として潜水艦が用ひられる。出沒自在に敵の不意をつくことによつて實質上よりも精神上の成果に重きを置いた、急襲や不意打ちの奇襲、敵海岸の重點を突く砲撃等のためにも、潜水艦は優れた性態を持つてゐる。故に潜水艦は過去にはなし得なかつた作戰を可能ならしめてゐるのであつて、それは不意打式に戰場を擴大せしめ、更に戰略上共同工作や戰術上の利用手段の可能性を增大せしめてゐる。

しかし今日では海戰指導について如何に熟考を重ねるとしても、空軍を度外視したのでは到底完全なものは出來ないであらう。潜水艦とは反對に、我々は航空機については極く僅な戰爭經歴を持つにすぎない。夫故に海戰に於いての空軍の可能と思れる利用及戰略上の評價に關しては吾人は大部分推測や想定を賴みとしてゐるのである。航空機は一定地域に長期の間停るといふ點では艦船よりも尙一層困難である。空間的にも時間的にも固定を求める作戰には凡て適應しない。戰闘目標達成のための活動半經は極めて遠隔であるが多くの制限を受けてゐる、即ち偵察飛行の場合にはその戰闘力を犠牲にしなければならない。夫故に、吾人は大量に航空機を得られるところの海邊と、極く小數かあるひは全然得られない處との間に區別を設けねばならない。これがために例へばバルト海、北海、地中海の如き狹く限られた海上に於ける海戰は、廣大な大洋を舞臺とする海戰と比較して遙に空軍に影響されるところが多いのである。大洋では、空軍は艦船、特に航空母艦に搭載された航空機によつて活用され得るにすぎない。それで、敵の海岸線に向けた戰爭計畫の中絕を餘儀なくさせるといふ點で、空軍は海戰に於ては擴大すべき餘地を失つてゐる。また空軍は天候に左右されるがために、吾人は安心し

て何時も之に依賴してゐるわけにゆかない。若し之を賴みとしてゐるものとすれば、そのため屢々海上兵力の行動の自由が妨げられるであらう。空軍は別の部分に於て、潜水艦も及ばぬその比類ない運動の自在さの故に、陸海軍の活動範圍を超然した偵察や戰鬪を行ふことが出來るのである。大洋はもう早、海戰手段によるのみで克服されるところの障害ではなくなつてゐる。海洋によつて優位性を得てゐた島國も、既に島國であるといふことによる護りは解消して了つた。戰爭は航空機が到達し得る凡ての範圍にまで擴大される。今は「前線」といふものにも從來の如き意義は失れてゐる。吾人は、陸上に於る騎兵や、海上に於る水上艦乃至潜水艦によつてさへも到底出來なかつたやうな手段によつて、敵の背後に成果を現し得るのである。しかし制海權は僅に水面上の永續的な支配權を得てゐたにすぎなかつたのであるが、空中の完全にして効果的な占有者といふ意味からすれば制空權なるものも同樣程度にしか論じ得ない。空中に於る最も强力な兵力もこの限界から永續的に支配權を得ることが出來ないといふのは、空軍の獨自な性質によるものである。航空機の行動の自由や快走の故に、空軍は最も卑力なる敵國に對してさへも、偵察や攻擊にこの航空機の使用されるのを妨げることは出來ないのである。他方に、空中に優勢を占むるものは、もとより極めて小期間であり狹少な領域ではあるが、それが制空權を得てゐるところのその空中兵力の程度によつて隨所隨時に姿を現すことは出來るであらう。量的優位性といふことは陸戰にあつては最も容易である、海戰には既に多少困難であり、空中戰にあつては到底算定し難くなる。敵の陸、海、空の據點攻擊は特種な役割が演ぜられる。非軍事的對象も亦、空軍にとつては重要な吸引關係にある。一般的戰略の原則に應じた全課題の列に、空軍の活用を加へることは、全的指導にあたつての重要課題であらう。廣大な海上に運動の自由を得、小さな目標を與へるにすぎず又有効な方法により更に部分的には堅固なる裝甲によつて安全に擁護されてゐるがために、海上兵力に對しては、空軍の危險を餘り過重評價する必要のない間は、據點に於ける投錨のための防衛は極めて厄介なもので

あつた。故に海戰遂行は、空軍の發達によつて、少くとも從來彼等の據點にあつて如何なる敵抵抗からも安全をきしてゐられた艦船が、また同じ所でありながら、それが航空機の到達可能範圍にある場合にはその航空機の攻擊を受け多大の損害を蒙るかも知れないといふ點で、全く新しい事實に直面してゐる。故に空軍は據點に停るかあるひは作戰目標への進軍途中にある海軍力の分散に對して効力を有してゐる。爾來之に對抗するものとして制海權と共に充分な制空をも確定しなければならなくなつてゐる。もとよりその場合後者は前者に比して遙に短期間に制限されてゐる。掩護部隊攻擊による通商攻擊戰爭に於て航空機の効力が亦必ず算定されねばならない。如何なる場合にも海軍力と空軍力とは、船舶航路の安全を保つために大なる共通作戰によつて共同工作を行はねばならない。それで我々は此處にも亦兵力の共同工作から成果を期待し得るのであが、而他方には空軍が完全に缺如してゐるか、あるひはそれが單に劣勢であつてさへも自國の海上連絡の防衛のために重大なる結果をもたらすことは疑ひない。空軍に對する最善の防禦手段は、散開、分割、散在であつて、それは、船たると、大砲、工場或は油槽の何れたるとを問はない。そして我々は、このことを考慮しつゝ、武器の完成は當然の結果として部隊の散開や分散隊形を生ぜしめるものであるといふ、共通な意義を有する重大なる法則に從ふものである。次いで據地空襲の可能性や其處に保持してゐる制海權の重大な損害の可能性は、燃料補充、彈藥の受繼、機械修繕、等のための據地を追ひ拂ひ、更に沖合にまで追ひ出して了ふであらう。更に據地空襲を繰返すことは艦隊の出航を促しおそらくその意思のない戰鬪に誘込むことも考へられる。之等は凡て本來の海戰遂行の回成に寄與するところがあるであらう。それで、艦隊は地理的條件の備つたところ、即ち出來るだけ敵の基地から遠隔にあり殆ど敵空軍の戰果を恐れる必要のないやうな據地を見出すことに勉めるであらう。この故に吾人は屢々補助據地を考へてをかねばならない。この場合には艦隊諸計畫のための出發點は世界大戰よりも遙に交錯した中に置れてゐる。また吾人は戰爭の最初の一瞬に空襲が行れ

るものと考へねばならない。何故ならば各國はこうしたやり口によつて不意打ちな第一効果を占めることに腐心してゐるに相違ないからである。攻撃や防衛に於ては、空中戰の戰闘力を第一に準備しなければならない、それといふのもこの兵力が敵の集中行進を豫め混亂させるために、迅速な準備能力を有し、敏捷な活動能力を有するからである。海戰に於る航空機の効力は潜水艦と同様に戰闘に對してそれの特種性があるのみならず、偵察に對しても性能を有してゐる。それで多く將來の海軍司令官は之によつて巡洋艦偵察に接する前に、敵軍の所在地、進路、組成等について報告を受ける。それ故に空中偵察は衝撃があまり早すぎるを防ぎ、彼をして自由に處置せしめるといふ利益を有してゐる。乍併天候の變化に際し空中偵察が危險なる時には出來るだけ速に海軍力の中の之に替るべきものを以つて補充することが必要である。特に、航空機は戰闘前の戰術上の偵察に全く使用し得ない。しかし航空機の特種能力は戰略上の偵察中に存在する、即ち其處では航空機は短時間の中に大きな範圍に汎つて海上を俯瞰し敵兵力の分布や行動の觀察を可能ならしめてゐる。この艦隊の連絡はこの航空機の助力を得て昔日に比して遙に容易になつてゐる。遂には、海軍力に於て劣勢である者も少くともある限界內の海洋にあつては優勢な空軍を得ることによつてある程度の均衡を見出すことが出來るやうになつた。しかし畢竟海戰に於て有力な原動力は艦船である、何故ならば新しい戰闘手段はそれが同じ使命をより良く完成することが出來るといふときにのみ始めて古いものを凌駕するものであるからである。しかしこのことは航空機の場合には問題にならない。航空機の最善の能力は海戰の其他の戰闘兵力との共同動作によつて始めて現れるが、海軍力はそれが作戰や編制に於て、並びに個々の形態及兵力組成の構成に於て、新しい戰闘武器が巧く適應せる時にのみ有力な原動力を齎すものである。陸上に、海上に、又空中に、總ゆる空に於て敵に追隨し得る者のみが敵を征服し得るのであらう。

我々は海戰遂行の最も重要なる問題即ち制海權獲得の方策に眼を向ける以前に、豫め今日の海戰遂行に關する潜水艦及

航空機の評價のことが研究されねばならない。制海權を獲得し巧みに保持すべき最善の手段は、戰鬪に於いて敵艦隊を擊滅することである。しかし陸戰の場合は、その意思がありそれに對する戰鬪力がありさへすれば、敵軍を會戰に導くことも可能であらうが、海戰の場合は相手が之を回避しやうとし之がために廣漠たる海上に逭込んで了ふか、あるひは構築した根據地の中に保護を求めるならば之を會戰にひき込むことは殆ど不可能である。若し陸軍乃至空軍から根據地攻擊について援助を求め得ないとすれば、爆破封鎖や海邊砲臺等による防禦兵力のもとでは、自國海軍にとつて到底其處まで迫りつき難い。それがため多くより强力な艦隊も、卑力艦隊を會戰にひきだすか灣內に之を擊滅するかについて無益な勞力を費すことになるであらう。然しこの艦隊が爆擊されざる限り、優勢な艦隊にとつて制海權を完全に所有するといふことは問題ではないのである。强力な艦隊が卑力なるものを無効ならしめる唯一の手段は、この場合封鎖することにある。故に、戰爭遂行の斯る形態の運用は戰鬪力の優位性に根ざしてゐる。しかし「封鎖」といふ意味の中には、本質的な根底を流れて廣く相互に汎りあつたところの本質に於て汎く分割された戰爭遂行の各種な方法が總括されてゐる。封鎖は敵艦隊の攻擊計畫に障害を與へるか、あるひは敵の海上聯絡の切斷就中貿易の切斷を主要目的とするものである。之によつて吾人は軍事的封鎖と經濟封鎖とを區別する。先づ戰鬪艦隊が決定的役割を演ずるのであり、それが制海權獲保の第一線に立つものであるが、之に反して經濟封鎖は單に制海權運用の一形態にすぎないのである。それ故に經濟封鎖は概して巡洋艦及補助巡洋艦によつて實行される。その目的は敵國通商を挫折せしむるにある、即ち敵國並に中立國の商船に對して敵國に通ずる海路を遮斷しまたそれの利用を不可能ならしむるにある。軍事的目的が專ら封鎖にのみ向けられるが如きことは殆どないのであつて、この封鎖が巧みに行れたとしても敵國と中立國の通商についての副作用はなか〳〵免れ難いであらう。他方にまた、經濟封鎖が重要目的となることも殆どあるわけはないのであつて、多くは敵艦隊を傀儡たらしむべき戰

略上の壓迫手段としてのみ利用される。勿論如何なる狀態にあつても一國家の海上通商の遮斷は旣にそれだけで、艦隊戰の敗擈によつて齎されるより以上の損害を生來するものである。それで如何なる場合にも徹底した貿易封鎖の實行は、敵國疲弊の最も効果的方法である。この種の疲盡戰略は竟にはそれを行ふものにとつても危險となる。それがため、强力なる艦隊にとつても、この戰爭形式を賴みとするのみならず、戰略上の壓迫手段にまでそれを昇華し敵をして決戰に誘ひ込むことは、重大なことでなければならない。有利に展開した決戰のみが決定的に制海權を安定し、列强によつて承認せられ永續的處置を可能ならしめるものである。我々は次に純粹に軍事的な封鎖の考察に轉換しやう。この封鎖の形式はその追求する目的によつて極めて多種多樣である。若し自國の諸計畫の掩護のために、例へば輸送隊の擁護のために如何なる狀態にあらうとも敵艦隊をある一定時間港灣に固定せしめるといふこと、あるひは少くとも敵艦隊が自國の計畫を妨害しないやうに、適當の時に戰鬪にひきよせることが問題となるとすれば、狹小封鎖が必要である。故に狹小封鎖は局部的に又一時的に局限された制海權安定のための手段である。しかし港灣を放棄する代りに封鎖艦隊の兵力によつて戰鬪せずして、敵が出航し目的を達成しやうとするのを阻害するといふ考へもあり得るわけである。

つまりは敵を戰鬪させるといふ希みは、故意に港灣を放棄するに絕好の機會を示してやるといふ風にして實現することがるのである。之がためには封鎖の本質的な弛緩が前提となるであらう。この形式は、それが敵を戰鬪に入らせる手段として用ひられる限り、遠隔封鎖（Die weite Blockade）であり永續的制海權の決定的獲得のための準備の第一步である。封鎖選擇の規準はそれ故に戰略上の意圖に依在する。遠隔封鎖の形式を定めるには三つのことが必要である。若しその封鎖の目的が敵を港灣から誘き出すといふ點にあるものとすれば、敵に對して實際に出港しやうといふ氣持にさせる程の遠隔

に、封鎖主力の配置を行はねばならない。すると他方にはその目的は更に敵にとつての目的でもあるわけである、若し敵が實際に戰鬪するために出航するものとすれば、封鎖主力はこの目的に有利である程の遠隔に位置してゐるわけにはゆかない。竟り、封鎖にはそれが少くとも自國の兵力のために全的に効果あるやうな形式を與へる如く勉めねばならないのである。何故ならば封鎖の重點は凡て決戰といふことの前に疲弊の危機といふ點にあるからである。この危險は多くは狹小封鎖施行の場合で、遠隔封鎖の場合には少い、又狹小封鎖は特にそれの防禦として强力な而量的に豐富な兵力を必要とするは明な事實である

しかし近來の海戰遂行にあたつては、大概はゆとりのある封鎖形式が用ひられてゐる。それといふのも近代兵力の運動が非常に自由になり、通信設備の改善や、潜水艦や航空機、無線裝置等による偵察力の改良のために、出航する艦隊が必要の時に間に合はないといふやうな危險が極めて少くなつてきてゐるからである。こうしたことが理由となつて密接な狹小封鎖も、多くの場合は遠隔封鎖を以つて代用されてゐる。それで若し技能上の發達によつて遠隔封鎖の可能性が高められるならば、同時に狹小封鎖の困難や危險は益々增大することになるであらう。最近では、水雷艇や潜水艦の發達、特に爆擊や空軍の發達に伴つて一定期間の狹小封鎖の如きは殆ど不可能になつてきたと言ふことが出來る。即ち同力な相手國と決定的戰鬪を行ふ決心がなくては、現在ではこうした武器の有効圏內で長期間に汎つて有効な封鎖兵力を保持することは到底出來なくなつてきたのである。封鎖する者にとつては、自國の沿岸乃至は港灣の近くで封鎖を行ひ、兵器運用の利を占めてゐるのでなかつたならば、斯ふした武器に對して防禦するにあたつて凡ゆる不利益を蒙らなくてはならないであらう。現在海軍力の機動性が高めると共にそれの補給が著しく重大性を持つやうになつたが、特に燃料費消の甚しさは、戰鬪兵力の交代を過去に於るよりも遙に度重ねなくてはならなくしてゐるのである。故に、戰略上の目的から狹小封鎖を行

ふことが必要なときでさへも、その形式は實際には、改變された技術的事態に順應し、遠隔封鎖の形式に近いものが採用されるに相違ないのである。多くはこの兩封鎖は戰略上の事情に應じて互に流通移行されてゐる。時にはまた兩封鎖が結合して、潜水艦、航空機其他の輕兵器等によつて狹小封鎖を實施するやうな狀態になることもあるのであるが、更に事情によつては、この時に敵と遠く離れてゐる重兵力が適時到達し得るやうに、戰略的偵察の性質を帶びてゐることもある。

しかし通商封鎖にあたつては、完全には武裝してゐないところの補助巡洋艦、即ち武裝商船等が利用され、その背後を遠方にある巡洋艦艦隊が擁護してゐる。つまり、封鎖問題の解決は所謂「戰爭區域」の制定によつて行れるが、之については、この區域内で爆擊封鎖や潜水艦によつて航行に損害を蒙ることのないやうに、豫め航路についての警告が行れる。封鎖兵力によつて監視される海上の範圍は之がために著しく制限される。戰爭區域は大戰に於いて、之迄の傳統的な封鎖形式の効果が近代兵器や交通事情のために減退し始めたときに、英國によつてそれの代るべきものとして施行されたのであつた。通信部の建設、特に無線電信や暗號解讀施設の設置は、戰略的補助手段として、即ち敵國に對して安全に監視を續け得るための設備として、こうした組織が巧みに完成されてゆくであらう。水雷戰も亦近代の封鎖形式を通じて意外な重要性を持ち膨脹擴大してきたのであつた。水雷戰は先づ狹小封鎖にとつての一武器となる。敵國の據點間近に水雷封鎖することによつて敵の出航を妨げ、自國の戰鬪區域の監視を容易にすることが出來る。夫故に世界大戰に於ても北海に於る獨逸港灣の大部分は、二年間に汎つて繰返し水雷による封鎖が行はれたのであつた。しかし最後の年にはこの狹小な水雷封鎖は擴大な封鎖によつて完壁をきせられ、東部運河の封鎖によつて北海全體が封鎖され、又スコツトランドとノルウエー間の二五〇浬に汎る區域を封鎖したのであつた。之がため數十萬の水雷を費消したのであつた。この種の擴大な封鎖はダルダネルス海峽の封鎖のため地中海に布れ、オトラント、ジブラルタル海峽其他狹海に利用されてきた。こふした封鎖

形式は、封鎖の間隙や突撃地帯に、ある種の陣地戰を行ふことになつたのである。即ちその部分に對して潜水艦、航空機を始め、大艦隊に至るまでの海戰の凡ゆる戰鬪兵力を配置したのである。勿論、封鎖されたものの行動の自由を徹底的に束縛することは、斯ふした努力によつてさへも果し得ないものである。夫故に之に關する物質的費消が、との封鎖形態から得られる効果とは殆ど比較にならなかつたのである。即ち戰略上の最後的決戰を遂行するためには、封鎖することだけでは決して充分とは言へない。之は寧ろ全海軍力の完璧をきしたうへで、決定的戰鬪を目標とすべきであらう。また之が封鎖防衛や、あるひは自國の輸入、基地、輸送隊等の保護について實施すべきことかどうか、といふ點については戰略的狀勢によつて定まるのである。勿論、海戰に於て二國が同樣な手段を以つて戰鬪を意圖してゐるやうな場合は、殆どあり得ないのである。しかし陸戰に於ては、戰鬪を回避しやうとしてゐる相手との接觸が比較的簡單に而も迅速に、敵領地の奪取並に占領によつて行ふことが出來るのである、しかし之は海戰にあつては極めて困難である。之がために海戰では特別な戰略的壓迫手段が必要である、即ち敵國の生命線を脅し、終にはその艦隊を引出すことを餘儀なくさせるやうな逼迫した狀態に陷せなくてはならないのである。この壓迫手段は、その戰爭の特種性によつて多種多樣である。先づ第一には、敵國の致命的海上聯絡の襲擊であるが、之は巡洋艦戰爭の形式によるのみではなく、統帥せる全兵力を聯合して之にあたることがある。例へば、輸送隊の襲擊又は海路をわたる補充部隊の補給線反擊の如きは必ず敵の掩護兵力との接觸を誘導し、結局は戰鬪する結果になるわけである。原料や生活必需品の輸入路の攻擊も亦それが敵國にとつて戰を決すべき程の重大性のある時には、所期の成果を得ることが出來るであらう。また相手國の重要な戰略的使命を帶びてゐる島嶼や海岸綫の占領、補充部隊上陸による脅擊、特に極端な挑戰として、軍事的計畫を帶びた沿岸砲擊等も相手に對して已むなく戰鬪力を機動せしむることになるであらう。つまり敵國に決定的打擊を加へるためには、敵國に對して注意を惹くやうな攻擊目標を

與へれば良いのである。即ち危險に直面してゐるやうな樣子を示すとか、自國の聯絡狀態や、有力な掩護部隊を敵の攻擊に任せたりすることも有効なわけである。之れが成果を得るか否かは、その壓迫手段を實施するに必要な實行力と耐久力とにかゝつてゐる。もとより、萬全をきした味方の意思は、之を實行し成果を得るに不可缺な條件である。戰略的壓迫手段の本質を辨へ、相手國への影響を正當に認識するためには、偉大な洞察力が必要である。何故ならば、戰爭に際しての艦隊の戰略的結合が必ずしも、現在明であるやうに將來歷史的硏究に際しても明確なものであるとは限らないからである。若し斯ふした戰略的關係を充分考察せずに行動するならば、戰場の擴大と共に、艦隊の遭遇も全く偶然に委され、少くとも自己の豫期してゐた夫の場所で、不利な戰鬪を行はねばならないやうな狀態に立至るであらう。又時によつては豫期したやうには、全然遭遇しないことも起つて來る。「相手を發見し得る、そこまで敵を追擊して行く」といふ、即ち「自國の境界を相手國の沿岸にまで移行する」といふ概念は、思慮もなしに開戰と共に實施する攻擊の槪念に過ぎず、殆ど成果を得ることは出來ないのである。而も時によつては、味方の艦隊を何等希望のない危機に曝す結果になることもある。敵の存在位置も知らず、又それが如何に行動するかといふ見透しもなしに、吾人は戰場が擴大になれば敗退するやうな冒險をおかしてゐる。即ちそれ等が假りに解つてゐたとしても、敵に迫るためには、味方の艦戰の性能が不充分であつたり、航行範圍が擴大し、據點を失つてゐたりするために、必ずしも戰鬪を挑み得ないやうな狀態になることもあるわけである。

吾人は戰鬪が、敵國沿岸に近いよりも自國に近いことを求めてゐる、即ち水雷封鎖、潜水艦、水雷艇、モーターボート、更に空軍の聯合等の如き敵の小型兵器の有効範圍外にあり、反つて自國の之等の兵器を使用することが出來、味方の基地に近く破損せる戰艦は後退させることも出來るやうな近海の方が効果的であると考へるであらう。しかし之等は總て、敵に對する決定的戰略的束縛は何の點に存するかといふ問題について、特に詳細に硏究することが必要である。

之れと共に戰場の地理的狀況の考察が特に重要性を持つてゐる。屢々之等の支點は凡の假想的活動について示される。寧ろ敵の狀況にとつて充分な支點もその戰略上の狀態や彼のそれらしい目標によつて豫め敵に與へられてゐるところの重點から生れるものであらう。自國の前進によつて斯る重心を作り、更に上述の戰略的壓迫手段の一つ乃至は數多を運用することによつて斯るもの作ることも結好である。斯ふした方法を以つて、敵についてその行動が定められることが出來、又その中に我々の反撃を準備した一定の充分明白な方針を以つて押進めることも出來るのである。この種の機動は今日では兵力及通信送達の迅速性により、更にまた航空機による偵察の擴大や安全さの如き迅速性の倍加——一語で言へば戰略上の偵察可能性の驚威的增大によつて本質的に容易くなつてゐる。しかし敵も亦同樣の可能性を有することによつてこの利益は相殺され得ることを考へねばならない。また敵との戰略上の衝擊が正當に認識され戰略的壓迫手段によつて之が生じたものであるとすれば、決戰を避けやうとする敵を有利な條件のもとに戰鬪にひき込むことに確實に成功するであらう。スカゲルラーク以前の會戰も、全狀況が英艦隊に對して高められた活動を ratsam に想はしめるやうな瞬間に、沖合艦隊の突擊によつて敵の海岸近くまで計畫的に挑戰していつた結果であつた。その時には英國に於ても、戰鬪を有利に出發せしめることによつてバルト海の制海權を獲得するため、北海で會戰することに傾いていたのである。

戰鬪が多くの場合單獨なものとなるか、あるひは決戰に至るべき極めて迅速な可能性を示してゐるかによつて、會戰するについての當然な努力は、會戰を自己目的であると考へさせてはならないのである。「夫自體への戰鬪」といふ論說が世界大戰開始にあたつても、凡ての分散的海軍に於て多くの誤つた觀念や同樣な錯覺に導いていつた。一般にも我々の努力の目標を特に變更するつもりがない限り、その主要目標は敵艦隊にある、といふ原則を我々は高く評價しなければならない。しかしまた我々はこの原則を勝利への策略たる以上の確固たる見界から評價しやうといふ疑惑に落ちてはならないの

のである。就中海戰遂行の第一目標が、必しも敵の組織された兵力に向つた制海權爭奪戰中になくてはならないわけはないのであつて、政治上や陸軍の目的(有繋的作戰、部隊輸送保護乃至は攻擊)やあるひは經濟的目的(航路保護、連絡の安全確保)、更にまた心理的目標(敵國乃至は國盟國への心理的影響)を持つことが出來るのである。海戰遂行の目標は事變の過程にあつて、度々變化し得るものであり、更に一方の戰場から他方のそれへの重心の轉置や重要な海上連絡乃至は敵國の中心構成地に對抗するものが必要となる。次いで副次的戰爭の諸計畫は中心的戰場での決戰に効果的に準備するものでなければならない、即ちそれらでは斯る「戰略的機動」が中心的戰場に有利な、兵力分割のため、また決定戰のための、前提條件をなすのである。將に海戰戰場の甚しい擴大は迅速性に關聯してゐたが、近代の海軍力及空軍力の海上持續力はその種の戰爭遂行に新しい能力を示してゐる。故に海戰遂行は之迄の全能力を驅使しなくてはならないのである。先づ、小艦戰爭、爆破戰、巡洋艦戰及通商攻擊戰爭、更に封鎖等の諸計畫から、遠洋海軍力の大なり小なりの諸計畫に至る凡ゆる利用形の共同動作や確實な變換等によつて、決定的戰海をなすべき努力を可能にするところの戰略的根底が作られる。之が何處に於て行れるかといふことは——それも海戰の特質ではあるが——一定樣式による戰略上の効果にとつては無關係である。二つの艦が對峙した瞬間に、彼等にとつて重大意義を有する全的海上聯絡の支配權のために戰ひが始められる。最近の戰爭に於て有効に行れた海戰は、即ち決戰によつてそれまでの兵力比の顚倒をきたしたところの會戰は、ハンブルグからベルギーに至る通路に於て、ハデンからシンガボールに乃至はコンシユタツトからテームズに至る通路に於ると樣同な手段によつて決戰したもののやうである、そしてまた恰もそれ等がノルウーエ海岸に於てやあるひはドツゲル船上で、更に運河に對峙し、また大西洋に於て鬪つた如くに行れたのであらう。凡ては斯ふした會戰によつて勝負が決せられるのである。之を誘導すべき決斷は容易のものではない。海戰の戰鬪資力は船艦である、その戰鬪具は比較的損消を受け

易く又それが高價なるために極めて少數である。この戰爭具の製作やそれの代理品乃至は修補には、その一つ一つが重大な意義を有するだけに多くの費用と共に極めて多くの時間を要する。材料が複雜多岐に汎り、航海や技術上の豫備智識や長期間の特種教育をしなくては海員として役立ち得ないがために、之の訓練に相當の長い間をついやさねばならない。夫故に海員や原料の損失に際しては陸戰に於ける如く容易に補充することは出來ないのである。特に長期戰爭の際には、訓練した乘組員を持づ大戰鬪艦は到底補充し難いのは明白である。故に海戰に於て從業員と原料を高く評價するのは當然なのである。しかし斯ふした觀點から、海戰に於る補充は陸戰に於けるとは異つた規準を以つて測られねばならない。即ち海戰遂行については物質上の多くの障碍がある。それは全く異つた戰爭舞臺の性質の中に基礎づけられてゐる。公海には「地形」なるものは存在しない。之がため、實際の兵力狀態をカモフラーヂュすることには殆ど効果はない。海洋が重大である限りは防禦設備(Verteidigungsstellung)を中止するわけにはゆかない。突然現れるといふことも極めて困難なとであり、一般には大きな範圍に汎つて利用し得るにすぎない。大洋ではなく限られた戰鬪區域にあつては、外部からの完全な準備や兵力の敏速な行動性のために多くは一方からの突擊に對して即座に防禦集中が行はれる。大戰中北海に於ては、兩側の艦隊を即座に集中出來るために、極く僅少な輕兵力の合一を以つてこと足りてゐた。

企畫は總て全兵力の準備と集中とを必要とするために、海上に關する諸計畫やそれに伴ふ戰鬪行爲は陸軍に比して少くなつてゐる。又決戰の可能性も攻擊者の意志によつて避けられることもあれば、避けられないこともある。戰鬪に際しては、交戰國の海軍は豫備軍はなく殆ど全兵力がそれに集結されて了ふものである。前述したやうに陸戰にあつては、一戰鬪に失敗しても、別の戰鬪に勝利を得ることで補ふことも出來るが、歷史上にも、海戰では一度失つた戰ひを補ひ得た例はないのである。しかし如何なる海軍計畫の中でも決戰の可能性を考察しないものはない。故に海軍の指導者は、完全に行動

の自由を得てゐなくてはならない、しかしそれと共に彼の計畫は、失敗についても成功についても、その萠芽をそれ自體の中に含めてゐるのである。即ちその責任は益々重大となり、海戰遂行の適當の時期までの制禦や、その機會を逸せずとらへるためには、極めて大膽であることも必要である。しかし之を認識することは並大抵のことではない。何故ならば、海戰遂行の特徴として、事變の外觀が極めて平靜狀態にあるやうに見せるために、作戰の繼續を中絶したかのやうに裝ふてゐるからである。之に反して斯ふした關係が存續してゐることは、豫め行れた說明によつて明であらう。この關係を充分認識し、「戰略的訓練」によつて決戰に際しての有利な條件を備へることは、學問の力であり又指導者の先天的才能と想像力に屬する。而してこの時にも亦、「全的戰爭遂行の廣汎なる關聯」を忽せにすることは出來ないのである。

カステツク著「戰術論」第一卷——四卷（Castex: "Théories Stratégiques" I-IV.）
ジユリアン著「海軍戰略の諸原則」（Julian; "SomePinciples of Maritime Strategy"）
グロース著「世界大戰に現れた海戰論」（Groos, Otto: „Seekriegslehren im Lichte des Weltkriegs"）

グロース

空中戰と空中戰略

一 綜合武力に於ける航空機の役割

一、ドーウエ主義

空中戰闘力の目的に適應する戰闘內容についての近代における戰略的考察の凡ては、一九三〇年死んだイタリアの將軍ドーウエによつて戰後樹立された敎訓を通じて最も强く影響された。彼の偉大なる功績は、(彼はこれを部分的に意識してゐたにすぎないが)最初の近代的空中戰理論、即ちドーウエ主義を創り出したことである。彼の思想經路は簡單に言へば次の如くである。

世界戰爭はその戰爭に參加せる、國民の全體的綜合力を要求し、敵の物質的道德的力を破壞することに成功した國民が勝利した。陸上戰の作戰は陣地戰における火器の能力の發達の爲に、はかばかしく進まなかつた。海戰は聯合國側の艦隊の優勢によつて開戰と同時に已に決せられ、主として敵の海上と航通の妨害に向けられた。

未來戰に於ては「陸上戰、海上戰は一樣に從來と變りなく戰はれるであらう」が、空中戰は未來戰に對して新しい展望を提供する。凡そ戰爭は、全體として、考慮されねばならぬ。

綜合武力の成果が高められれば高まる程勝利への展望は擴大される。戰爭は「統一的にして、分離し得ざる全體を形成」する。

國防力の活動マキシマムは次の如く、その力のミニマムによつて達成される。言はば三つの武力から成る國防力は已に平和に於てその對應する任務に應じて動員し得る國家手段の考慮の下に決定される。この手段の最も重要なるものは航空機によつて遂行される。何故なれば、空中戰は殲滅的に機動するからである。

敵國內に襲擊を敢行する爲には、敵の戰線を突破する事が往時は絕對に必要であつたのであるが、今日の空軍時代に於ては、敵國民の全抗武力が破壞されるまでは、陸軍、海軍は最早安全なる武力ではない。未來の戰場は空軍の活動範圍によつて無限に擴大する。空軍は、地上、海上を支配し、爆彈、燒夷彈、ガス彈によつて生活資源乃至交戰國民の道德を破壞する。「工業、經濟の中心である、最も重要なる大都市に三百噸の爆彈を投ずる事に成功したならば、この地點の爆破によつて、この未曾有の負荷試驗に當面する國民はその社會的基礎を急速に破壞されるであらう。而して私は戰爭は一ケ月繼續し得ないであらうと云ふ意見であつた。」かくして空軍は今日の戰爭の性質を根本的に變革したと言へる。

空中に於ける支配が戰ひ取られるや、空中は戰爭の決定的領域となるであらう。何故なれば「空中制覇は次の如き結果――即ち一國に對する敵國の空中襲擊は放棄され、却つて敵の心臟部に對して、なん等の危險なしに空中襲擊を敢行し得るであらうし、更に軍隊と艦隊とは保證され、それらは空軍を加へて更に强化され、これに反して敵はそのため、脅威を受け、防空力を失ひ、空軍の再建は生產基礎の破壞によつて決定的に不可能にされる――を提供するであらうからである。空中に於ける制覇は空中攻擊によつて得られる。空中防禦は何等の成果をあげる事は出來ない。何故なれば、襲擊空軍の敏速性は防禦軍の應急且充分なる武力集中を妨げるからである。從つて若し遙かに强力なる而も戰鬪準備なれる空軍が、開戰時に於て、或はその以前に於て戰鬪配備につくならば次に來るものは空中攻擊であり、その制空權の獲得であらう。」

制空權は敵空軍の戰鬪力との決戰を通じて確保され、敵の空軍根據地、產業基地に對する大擧襲擊に於て、又大爆擊機

（驅逐機）の搭載武器による敵飛行機の撃退に於て、戰ひ取られる。制空權の獲得は決戰を迫る爲に「決戰地帶に於ける武力の集中」、即ち空中に於る集中を必要とする。然しこの他の地域（陸上、海上）において敵が殲滅的結果を狙ふのを阻止する爲には、この領域に於ける精力的反撃が必要である。それ故に、これに對應する任務遂行に對しては空中戰鬪力は最も効果的であり、陸軍、海軍の戰鬪力はこれに反して左程効果的ではない。制空權が獲得されるまでは、後者（陸戰、海戰）に於いては尙、豫備の空中戰鬪力は嚴存する。

ドーウエの確信するところでは、敵の海上及び陸上作戰の開始に至る前に、空中制覇は戰ひ取られる。彼の理論は、空中においては攻撃、陸上、海上に於いては防禦と云ふ原則に於て最高點に達する。

ドーウエは、彼の理論がイタリーの國防事情に適合するが、他の國家に對してはその妥當性は非常に制限される事を特に强調する。

一國の防空に關してドーウエには高い意義が附與される。然し彼は飛行機による防空に左程の効果を期待せず、却つて地上乃至艦隊による防空施設を强調した。

この思想過程は彼が主張した最高の權力組織に對應する。統一的國防省はドーウエの意味において建設される。一國の參謀總長は戰時に於ては國防の最高司令官であり、陸軍、海軍、空軍の司令官はこれに從屬せしめられる。最高司令官は全作戰を指導し、その作戰任務に對して必要なる武器を國防力に附加せしめる。內地の防空司令官は直接に政府の命令下に置かれる。

「空軍」は驅逐機と偵察機から成る。驅逐機は爆撃機と戰鬪機の長所を兼備してゐる。重要なる機關部及び座席は裝甲されてゐる。偵察機は最高速度を必要とするが、裝甲はしてゐない。故にドーウエはより速い、より操縦し易い、又より高

度な裝備をした航空機が、相手國より多く採用さるれば、その使用價値を半減するであらう戰鬪機を重要視しない。

「空中戰は制式の同型飛行機によつて行はれ得るが、二つの異種型の飛行機によつては行はれ得ない。」

ドーウェは最初彼の理論の熱烈なる贊成者を見出し、現代のクラウゼウイツと目された。從つて現代における戰爭原則は航空機によつてその適用性を失つたとまで考へられた。

他方、ドーウェの論理に立つて彼によつて基礎づけられた前提に對して透徹した批判が行はれた。

來るべき戰爭は新武器（航空機）の爲に機動戰になるか、陣地戰になるかは決定出來ないし、無條件的な空中制覇を獲得する爲には長時間を必要とするか否かは明確ではない。何故なれば、若し人が論理的解決をそれから引き出さんとするならば、通常同程度に武裝した相手國の狀態から結論せねばならぬ。そして相手國も空軍に於て反撃もするし、自國の空中勢力も亦相對的に減少もする。從つて單なる制空權でなく精々一時的な、短期間の空中支配だけが達成されるであらうことを考慮せねばならぬ。

戰略の特に重要なる要因は「時間」であらう。空軍の活動範圍に信頼が置かれるならば、常に短期間に最も効果的な戰爭終結に導き得るであらう。空中爆撃の範圍がどれだけ擴大されるか、又國民は如何なる程度の恐怖に堪え得るかは明言されないことである。

恐怖の擴大に從つて他國の意見は分裂する。

僅かの評論者のみによつてこれは是認されてゐるが、一般市民に對する空中爆撃も亦あり得るであらう。何故なれば、かゝる爆撃に必要なる力の消費は餘りに多く、又目的地以外の爆撃も亦行はれざるを得ないからであらう。

武器生産を擔當する產業に向つての爆擊は、その限られた狹い勞働地域以外には生活し得ない勞働者、又その地域に於

いてのみ働き得る勞働者階級に、この上も無く精神的な深刻なる動搖を與へる。近代戰爭は武裝せる兵員と一般市民を區別する國際法的差別は徹廢される。各大都市（ドイツは五十、フランスは十八）は軍需產業の集結する處であり、又勞働人口の貯水池でもある。

空爆は物質的破壞と生產的破壞の外に常に多少とも精神的軟化を結果する。しかし、戰爭において最も重要なる國民的任務ほその忍耐心であらう。恐慌・飢餓及びその他の缺乏は國內に於て又戰線において起る肉體的、物質的生活の破壞、それに基く絕望的自棄は、夜となく晝となく行はれる執拗なる空爆によつてもたらされる。特にこれは戰爭勃發に際し、或はその以前に於て最も効果的に作用し、その精神的打擊は日を逐ふて大となる。確かに敵國の一般市民に對する空爆は凡ゆる國際法的考慮に拘らず、敵を壓迫する點で最後的止めを刺し得るのである。凡ゆる道德的反撥力がそれによつて壞滅し去るかどうかは尙疑問であらう。この種の敵國爆擊が反抗心の硬化を來すか否か、又それが國際法に反する手段として中立國によつて徹底的に排擊されるか否か、又その國際法蹂躪に對して中立國の積極的な干涉を導くか否かは遽に決定し得ない。最も戰爭に於て必要とされる中立國を無暗に刺戟することは最も下手な政治的失策に外ならぬであらう。化學武器（ガス）に關してランジユヴアン（Langevin）は云つた。「ガスは唯、人口に對してのみ作用する。」「吾々フランス人としてはこの武器を第一に使用する事を拒絕する」と。

敵地の空軍を征服し、これを占領する事は不可能であるといふのは、ドーウエがその理論から引き出した結論であるが、この點種々批判されるであらう。これに對するデスメー（Desmet）の言は非常に論理的である。ドーウエは飛行機による空中爆擊がもたらす物質的道德的作用を通じて、一切の敵の反抗心を絕滅せんとする。それによつて陸軍、海軍は左程の反擊に遭はずして敵地を占領する事が出來るであらう。更に又決戰に導くために敵地を占領することは必ずしも必要で

はなくなるであらう、これがドーウエの根本思想と考へられるし、又考へねばならぬ。

「制空權の獲得」の中心問題について、ランジヴアンは、ドーウエ論の中に云つてゐる。「空中制覇が事實上一瞬にして獲得され、更にそれを維持し擴大し得る場合、彼の言は正當である。」しかし、これは空中に於ける絕對的優勢においてのみ可能であらう。

「急速なる全體的勝利」の獲得に必要なる、充分にして具體的な空中勢力の優越を持ち來すことは、勿論、一方では經濟の問題であり、他方國土の特殊事情に依存する。その强大なる空軍は尨大なる整備を必要とするが故に、富裕なる國家のみがそれをよくなし得るものである。然しその一つの困惑は技術の急速なる發達によつてもたらされる。即ち整備された空中艦隊は常に更新される發明のために絕えず時代遲れになり、そのため新規の尨大なる整備費が常に、必要とされるに至ることである。しかしその國土の地理的條件によつて海軍乃至陸軍を或程度縮減し得る如き國家に於てはこれに要する空軍費は左程重荷とはならないであらう。「急速なる全體的勝利」を保證する壓倒的空軍は通常存在しない。しかして、かゝる急速の勝利が克ち得られないとすれば、戰爭は擴大し、結局强大なる軍隊と强力なる艦隊を有する國民が十中八、九戰勝を克ち得るであらう。

副提督の機能も亦非常に變化した。空軍による海軍力の上述の弱化論に反對して、ハーパーは「制海權は艦船によつて行使されるのであつて、それに代る何者もない。」と、言つてゐる。

「我が空軍は、その獨自の領域のために存在する。單に海上の制覇はその任務ではない。巡洋艦の任務は航空機によつて取つて代はられると言ふ思想は誤謬である。海について何も知らない人々のみがかゝる思想を持ち得るのである。」

「我が空軍はその維持のためには、海軍に依存する。海軍の保護の下に外國から輸入される燃料なくしては航空機は充

分飛翔することは出來ないであらう。」

されぱこそ、如何なる國家も、制空權の迅速なる獲得によつてのみ、その戰爭の勝敗を決定し得ると言ふ「新戰爭理論」を受け入れなかつた。從つて、ドーウエの主張する「空中に於ては全力をあげて攻撃し、地上に於ては防禦に終始する」と言ふ見解に立つて軍事組織を計畫してゐる國家は一つも存在しない。如何なる國民にも、戰爭の勝利的決定の希望を、急速なる空中制覇にのみ置いてゐないことは以上のことから結論されるところである。現在、世界を通じて戰略的に獨立した行動を遂行し、且又相手國が全く空軍を缺ぐか、或は殆んどそれを有たぬ場合、制空權の獲得乃至奪取によつて全體的決戰に導き得る如き强力なる空中艦隊を有する國は一つも存在しない。陸軍及び海軍は往時における如く單に防禦としてでなく、攻撃的に整備されるであらうことは事實である。しかして、「空中よりの攻撃を遂行するための陸戰及び海戰における防禦」なる公式はこれ迄何處の參謀本部によつても戰略基準として採用されなかつた。

新しく生れる破壞手段によつて、空軍は戰爭の形態を變化させ、戰爭は、面の戰爭（Oberfiächenkrieg）から立體の戰爭（Raumkrieg）に變つた。しかし、相手國に自己の意志を强制する戰爭の目的は變化させる事は出來ない。それは陸戰及び海戰の手段によつてのみ獲得される。

ランジユヴアン（Langevin）は言ふ「我國の如きは陸軍及び海軍が最も必要とされ、從つて兩者に對する必要なる手段が採られねばならぬ。國土防衛の問題は、陸軍、海軍及び空軍の戰鬪力を相手國に應じて整備し、その協同作戰を確保することにある。從つてフランスに於ては、吾々は陸軍機及び海軍機の外に、獨立せる空中艦隊を必要とする。而していづれも、その自已に課せられたる任務を遂行し得る爲には、充分强力でなければならぬ。兵力比率の決定は決して容易な事ではない。それには各國の相異る經濟的・政治的・軍事的・道德的要因と密接に結びついてゐる多くの問題が存在する。」

戰爭の凡ての經驗は空中艦隊のみが戰勝を克ち得るとなすドーウエの主張を否認する。

アルマンゴー（Armengaud）は言ふ、「戰爭論を固定的原則の上に樹立すべしとなす考へは一つの夢にすぎない。全體的な國防力の擧國一致的活動あつてこそ敵を打倒することが出來るのである。」これこそ、如何なる戰爭も動搖させ得ない原則である。

ドーウエ主義に對する種々なる反對論についてはこゝでは立ち入らない。それらの理論は極めて單純なる理由から反駁される。蓋し、反對論はドーウエの多くの論作、及びその論敵との往復書信をよく知らずして爲されてゐるのが多いからである。かくて、世人はドーウエを目して、夢想家乃至空想家と見なし、その思想の論理的過程を明瞭に知悉してゐない。この點に關して、ドーネ將軍（Denain）がフランス空軍を再組織して以來一つの變化がもたらされ、フランスのヴォチエ大佐（Vauthier）は、「ドーウエ將軍の戰爭論」（ペタン將軍の序文のある）において、ドーウエ主義の全般的說明を行ふた。この本に於てヴォチエはドーウエ理論の論理性を分析し、次の如く、單にイタリーの國防事情に適合するだけでなく、全般的に適應される重要なる論駁を發展せしめた。

先づ彼は戰爭準備及び戰爭に當面して、國防力の指導原理だけでは戰勝の確實なる保證とならないこと、又陸上戰鬪力及び海上戰鬪力の轉換準備が一朝有事の際には必然に行はれること、制空權の獲得は長期に亙つて續けられ、又空中攻擊は屢々失敗すること等を指摘した。從つて陸軍、海軍の武裝が考慮されねばならぬことを強調し、空中決戰は起り得るが、起すべきでないと主張した。「より大なる強度を以て遂行される陸地攻擊は、強大なる戰車軍（又は空軍——著者）によつて掩護され、敵の防禦軍」（Deckungsarmee）の展開を不可能ならしめ、從つてその軍隊が強固なる陣地を確保する以上に、地上防禦は簡單に制壓されるであらう事は明かである。然し、これは同時にドーウエの理論の一つを粉碎

するであらう。」又地理的、經濟的關係からも、主要なる重點を陸軍乃至海軍――それは國防の主要なる要素でなければならぬ――に置くべく餘儀なくされる事があり得るであらう。又、彼は領內防空は政府に從屬させ、國防軍は軍司令官の令下に置く方が、武力の協力行動の點から一層有利であると見る見地に反對であつた。空軍の建設に關しドーウエの驅逐機(Luftkreuzer)第一主義は決定的な問題ではないやうに思はれる。他の種類の航空機もそれと同一の目的を達成し得るであらう。

ヴオチエは、ドーウエの戰爭論は在來の兵術に革命をもたらすものであると主張するが、この見解は、全體として贊成し難いのであらう。

表面的觀察を以てすれば、從來の戰爭論は今日に於ては、新式の運輸機關や、地上特に空中における發動機化された武器による時間、空間の急速なる征服の爲に根本的に變革されたかの如く見える。クラウゼウイツに從へば、「戰爭の自然法則は先づ戰鬪力の絕滅であり、然る後、該地域の占領がこれに續くであらう。何故なれば、空中に於ける最初の戰爭行動及び敵の戰鬪力の後方地空襲による制壓は已に地上の會戰が開始される以前に於て始められるからである。然し、地域の占領は空軍に歸せられ、空軍は敵の反擊を制壓し得るまで相手國に對する攻擊を敢行せねばならぬ。――故に「自然的法則」即ち敵の戰鬪力の絕滅、戰域の占領、――第一に空中の――、換言すれば敵の抗爭意志を制壓する事が依然中心となる。

戰鬪は先づ空中戰において開始される。若し空中戰が地上に最後的決戰が行はれる以前に行はれるならば、それはクラウゼウイツの言ふ如く、戰略に於ては主戰の決定は常に全行動の開始において爲されると言ふ意味において戰略的意義をもつに至る。しかし、それが空中戰鬪力奪取に際してもその Waage を維持するならば、それは唯直接的な戰爭決定の意

義を有する戰術的戰爭用具に低下するであらう。

地上又は空中における高速度化された機械力の出現は作戰活動を確かに擴大するであらう。しかし、運動の高速度によつて達成し得られ効果は、相手國側における一層敏速な一層活動的な防禦武器の反擊によつて、大部分が減殺されるであらう。戰略的立場から見れば新輸送手段、通信機械、乃至武器の活動は其自身において發達するが、又相互に發展もする。戰爭乃至戰爭手段の外的形態は變化して來たが、戰爭指導の重要原則は變化したのではない。

× × ×

ドーウエ理論に對する外國の炯眼ある批評家は、强力なる獨立空軍が戰勝の展望を擴大させるのは事實であらうが、單に空軍のみを以て、適度に武裝した相手國の反擊を絶滅せんとする希望に對してその過重評價を衝いてゐる。しかしながら、ドーウエが、空中戰の開始に際し先づ襲擊によつて優勢を獲得すべしとなす彼の主張、又空中戰の一切の問題を特に鮮明にした事は劃期的な彼の功績である。

二、列强による空軍の評價

外國におけるドーウエ主義の批判的考察は次の認識に到達した。即ち空軍の戰鬪を分離された行動として最初から評價する事は不當であり、又その行動は恐らく軍事的作戰における全體の一部を構成し、全體作戰の枠内における判斷に從つて行はれる。（アルマンゴー）。空中戰は綜合的戰爭の一部であり、又一部として殘る。全體的活動から離脱した空軍の行動は全體的綜合力を弱める剝脱を意味し、戰爭の統一的指導からの分離を意味する。

ドーウエの母國たるイタリー自身は、新らしき認識の論據に立つて、ドーウエ將軍の理論を極端に反對してゐるのは事實である。

イタリー政府の首腦は自國の綜合的武力の統一的指導の方向に强力に進んだ。それを通じて、參謀本部の首腦の任務は參謀本部、軍令部、空軍司令部が從屬する國防軍を創設することであつた。デスメ（Desmet）はこの組織を理想的解決と呼んだ。

フランスに於て一個の獨立的空軍が建設された如く、これは陸上部隊との協同作戰の下に起つた。今日、空軍爆擊隊の獨立的作戰行動を除外することなくして空軍は陸軍司令部の命令下に行動することを要求する。かくて空軍は根本的に地上の作戰との緊密なる連繫のうちに活動すべきことは明かであらう。決戰は敵軍隊の絕滅によつてのみ確保され、空軍の活動を餘りに高く評價すべきではないことをニーセー將軍（Niessel）は明かにした。しかしながらアルマンゴー將軍は、空軍は「少くとも陸軍の如く同樣に重要である」としてゐる彼にとつては强力なる爆擊空中艦隊はフランスの國土防禦の必須條件（Conditio sine qua non）であり、戰爭の當初に於て、他の作戰を促進させるために制中權の優越性を直ちに獲得すべき任務を提起する。彼は思へらく「軍事的武器の全體的展開は一擧に出動する强力なる航空機の襲擊によつて先づ阻害され、陸地及び軍隊に對して最短時間において最も痛烈な打擊を加へ得るであらう。而して先づ空中において戰勝を確保しなかつたならば、地上の勝利は不可能であらうし」國土防禦を保證する爲には如何に强力なる陸軍を以てしても不充分であり、從つて强力なる空軍は絕對に缺ぐことは不可能であらう。

「地上・海上・空中における武力は獨自の機能を有ち獨自の行動限界を有するものであつてそれが相互依存することは戰略の基礎をなすものである。その武力を結合させることが近代戰爭の本質をなすものであり、同時に技術の法則を決定するものである」（デベネー將軍）

ベルギーは本來的にフランスと同一の見解を有してゐる。

獨立せる攻擊的空軍を有するイギリスにおいて、フーラーは「空軍を以て戰爭手段の主要なるものとなし、これによつて相手國の國民的戰鬪意志を直接に絶滅し得る」と云つてゐる。「相手國の神經系統を暴露するためには」敵の空軍を絶滅する事が必要である。陸上作戰、海上作戰が或る程度以上に發展しないならば、飛行機は一般人民の抗爭意志に對し爆擊を通じて、その作戰を進展せしめ、その恐怖が戰爭の擴大を放棄せしめるまで徹底的に行はれると彼は言ふ。

フーラーは空軍の使用を長い間イギリスにおいて信奉された用兵的意味において要求したがそれは激烈なる經濟的戰爭を通じて相手國を壓殺せしめるためであつた。

アメリカと日本の兩國は他の强力なる空軍國とは反對にその國防地理的關係上、その空軍力を組織的には差當り陸軍及び海軍の補助的武力として存置させた。その爲兩國は凡ての兵科が完全に綜合した行動に於て空軍の戰略的結果を發見せんとしてゐるやうに見られた。最近において始めて米國も獨自的に作戰的任務を遂行し得る如き大空中艦隊を建設すべき計劃を立てゝゐる。

三、結　論

外國におけるこの支配的思想に對する上述の考察は、空中戰に對する見解が種々異なり、又絶えず變化して來た事を明かにしてゐる。しかしながら、次の諸點は愼重に取上げられねばならぬ重要なる觀點であると思はる。

a、戰爭及び戰爭指導の原則は空軍が戰鬪力の一つとして介入しても不變であること。

b、純粹空中戰は單に例外的に戰鬪を決定することが出來る。何故なれば、かゝる空中戰は未だ嘗て存在したことがない程の巨大なる空軍を必要とするからである。それ故に

c、强力なる陸軍及び海軍はどうしても必要であり、空軍は用兵の第三の要因として配置されねばならぬ。この三つ

の戰鬪力の使用は全軍の指導者が決定する。戰爭指導の重心をいづれに置くかはその戰爭の條件に依存するが、その地理的關係は最も重要なる役割を果すのである。

d、空軍は、戰爭の決定に最も協力し得る獨自的作戰を遂行するに適應してゐる。かくて、陸軍、海軍の戰略の外に綜合的戰爭指導の一部として空中戰略を論ぜねばならぬ。

二 外國に於ける空中戰指導の考察

一、空中戰略の概念

空中戰略とは一般的には空軍をして、その活動能力を使用し、是によつて敵の反抗を粉碎する爲に處置される「術」であると解されてゐる。從つて空軍は獨自の戰爭手段として、非常に短時間に非常に遠距離まで敵を制壓し得るのである。

二、空軍の本質と機能

空軍の特別の機能は、其高度な裝備に依存し、廣汎なる活動範圍（行動半徑）、强力なる武器の使用（特に爆藥）、異常なる快速、又對敵奇襲を可能にする。空軍は凡ゆる武器の中で、最も猛烈なる爆破力を有し、最も輕快なる活動と機能を有する武器である。從つて他の武器の及ばない地上を見、且蹂躙し得るのである。

根據地域は、空軍によつて敵の全地域に及び、その地域において最も弱點であり、且敵の防禦にとつて最も傷手とする根據地を襲擊し得るであらう。

空軍は理想的な遠距離武器として、敵の交通路や兵站線を破壞し、軍需生產を不能にし、他の如何なる武器よりも奇襲的に敵の運行、出動準備・軍の集結・及びその運送を妨害し得るであらう。

空軍が他の武器と比較して、特に勝れた上述の諸長所に對して、その弱點は、それがその地上組織に全く依存してゐる點にある。空軍は、地上軍隊によつて確保された飛行場に歸來せねばならない。もしもこれが確保されない場合は、危險は直ちに迫つて來る。又空軍が出動しない以前に、奇襲的に飛行場が爆擊された場合、重大な損害を惹き起すであらう。しかして空軍は、よく整備され、又基本的に考慮された地上組織及び通信組織に依據してゐる。又飛行は幾多の進歩がもたらされたのにも拘らず、陸軍及び海軍に於けるよりもはるかに天候に妨害される。空軍のもう一つの缺點は、高空よりの爆擊に際しては、爆擊命中率が低いこと、又投下される爆彈の消費が大なることなどである。（デスメー）

これ等の缺點を除外すれば、戰爭の開始に當つて、その裝備が完成してゐるならば、空軍は最も有力なる武器として外國において評價されてゐる。

三、空中戰略の目標の決定

陸上戰略は、先づ敵地占領の前提條件として、又敵國の屈服意志の占有質として、敵軍隊の粉碎を追求するが、空中戰略の目標は、外國に於ては今日一般に敵國防軍のそれに對應する部分即ち敵空軍の破壞に向けられることが必要とされる。空軍に附隨する特長、即ち即應性、敏速性、活動性は、その出動した飛行機を以て、敵陸軍及び海軍を、垂直に包圍し、その背面攻擊に從事せしめる。

從つて近代における空軍の戰略指導は、敵國の戰爭經濟の阻止に獨特の武器を與へた。然して、外國の戰爭理論家の規準的な見解に從つて、空軍活動が敵の軍事的手段の襲擊のみに限定しないで、敵の國防力の生命線としては益々依存される軍需據點の襲擊にまで擴大されるに至るであらう。空軍の目標は、一方において陸軍、海軍が攻擊し得ない敵の戰爭手段、他方において敵の經濟力の源泉の破壞にある。空軍は、この重要任務にのみ從事することは出來ない。綜合的戰爭指

導は戰爭の過程において、自余の國防力擁護の爲に、他の多くの任務を果す事であらう。就中、それは綜合的戰爭指導のための戰略的偵察、作戰の隱蔽、陸軍、海軍における重點援護のうちに存在する（アルマンゴー）。

四　作　戰

（イ）作戰概念

空中戰の本質は運動である。空中戰に於ては陣地戰を考へることは出來ぬ。「空中戰に於ては適當な防禦陣地もなく、自然的障害も存在しない。」（アルマンゴー）「信頼し得る空間といふものは、到底確立し得ないからである。」（バンドウプッツ）

空中戰指導に對する共作戰的基礎は、陸戰海戰に對すると同樣に、高度な考察を必要とする。空軍の根據地は飛行場である。飛行場は作戰行動の基地となり、戰略的効果を形成する。その敏速且正確なる通信網による連絡、及び陸軍、海軍の防衛による安全性は、よく整備された地上組織によつて始めて可能である。

空軍自身は、他の國防軍がその作戰根據地に依存するよりも、その作戰根據地に依存することが少ない。何故ならば、空軍は根據地を離れるや、それを防衛する必要はなくなる。その防衛は、陸軍乃至海軍に委任する。しかし、他面においては、空軍は飛行能力が許す範圍以上に、その作戰根據地から離れることは不可能である。從つてその作戰の後には必ずその基地に歸還せねばならない。從つて敵地にまで廣く行き亘つた地上組織の設備は、非常に重要な價値をもつのである。

「陸軍、海軍が敵の最前線を、威嚇地域から遠ざけておけばおく程、これらは空中防衛を援護することになる。それらが敵をその最も弱點とする地點に壓迫すればする程、獨自の空中襲撃は決定的に作用する。地上、海上、空中の諸戰鬪力を前以て協力させせないないことは誤謬であらう。陸軍と空軍は、戰鬪開始と共に、猶豫なく地上における獨自の戰線を出來

るだけ廣く擴大するか、或は少くともそれを維持するために努力せねばならぬ。」（アルマンゴー）

飛行は遠く奇襲を敢行するが、其時は恐らく强力なる敵の防禦力との衝突を來すに至るであらう。

作戰線の概念は、地上軍が飛行根據地から遠距離飛行によつて、絶へず失はれる力の損失を補給するために必要とされる線であるが、それは空中戰略によつて中斷される。空中においては、陸戰における如く封鎖は不可能である。自由なる三次元の空間は、封鎖を拒否する。

又進軍なる概念も空中戰略においては、地上戰略の意味に變更することは出來ない。空中戰鬪力は、その飛行場においてすでに進擊可能であるが、屢々、豫備飛行場を使用することによつて上述の作戰に對應して、輕飛行隊の編成や、飛行時間の短縮等を計らねばならぬ。（デスメー）敵情判斷と決心は、好適の條件を利用する場合も、或は危險なる退却を行ふ場合も、空中戰略においては、陸軍指揮官における如く、その遂行に長時間を要しない。飛行機の快速性は、空中作戰遂行の鍵であつて、それによつて敵を奇襲し得る利點を與へるが、同時にそれは敵から襲擊される缺點を生むのである。空中戰においては陸戰におけるより以上に、戰略と戰術が相互に背反するのである。

戰鬪に於ける空軍指揮官の位置に關しては、外國の見解は相互に對立してゐる。「一見解によれば、司令官の位置は、その戰鬪意志の如何に拘らず、空中においては、六、七千メートルの高度における自己の指揮する飛行編隊の一翼でなく、むしろ地上に位置せねばならぬ。地上においては、彼は一切の指揮手段、即ち通信機——それによつて偵察機を飛ばし、それによつて全編隊を指揮し得る—— ラヂオ、ステーション等を有つてゐる。」

他の見解に依れば、空軍指揮官の位置は、艦隊が出港する時、提督が軍艦に座乘する如く、空軍の大作戰においては空軍部隊と共に行動する。

前者においては、指揮官の指揮及びその統一性の確保に對して有効であるし、後者においては、飛行機搭乘と言ふ精神的影響において勝れてゐる。

斯くて「空中戰指導者」は、戰爭決定の高度の要因となり、最高の陸戰、海戰の嚮導者として、精神的具體的行動を實行せねばならぬ。

（ロ）　制空權獲得の爲の戰鬪

クラウゼウイツは、戰爭の開始期に最も重要なる意義を置いたのであるが、外國の評論家の凡ては、新戰鬪手段としての空軍によつて更に發展せられたことを主張するであらう。指揮官は、最初第一の戰鬪開始までには數週間を動員に費さねばならなが、「最も有名なる軍事的權威は凡て、未來の戰爭は大飛行編隊の空襲によつて開始されるといふ見解を持してゐる。」（メンドウブツツ）

「綜合的戰爭計畫は空軍の活動によつて決定されるが、又その戰爭計畫は空軍に對して迅速なる命令を與へるであらうし、又平和的に探知せる敵軍の展開、交通、産業基地、共他に關する報告は、その作戰の基礎とされるであらう。綜合戰爭計畫は、地上攻擊を遂行する際、空軍は敵地制壓に對し最も有効なる活動を保證するものとなした。」（アルマンゴー）

外國においては、空中作戰の開始は如何に解釋されてゐるか。

襲擊對象は、敵の空軍力によつて防衞されてゐる地上目標である。この目標を擊破することによつて始めて制空權が獲得されることは、論理的に左樣であらう。デスメーはこれに言及して曰く、「古典的戰略の規定は敵軍隊の會戰を追求し、他の目標、例へば首都の占領等によつては、兵を決して引かなかつた。しかし、世界戰爭の經驗に立脚する有力なる評論

家達は、この點に關し、獨自の見界を持ち、空中艦隊は、地上にその目標を發見すべきであつて、空中戰においてゞはないと主張してゐる。國民戰爭に於いては、凡ゆる生ける力が戰鬪に投げ込まれる。從つて物質的に又道德的に戰爭決定を持ち來る如き目標が、選擇される。空軍は必らずしも、敵の空軍勢力を追求しないであらう。空軍はその目標に基いて行動しそれによつてたゞ敵の飛行家を擊退するであらう。攻擊的敵の空中艦隊に對する戰鬪は驅逐機（Jagdfliegern）攻擊機（Fliegerabwehr-Waffen）に對向される。」モレツタは攻擊者は敵の空軍を全部的に戰鬪に引き入れ得ないと言ふ確信に立つて之を證明してゐる。空中に於いて敵軍を發見し得るか否かゞ問題であるが他方迎擊が有効でない場合空中戰鬪を避けられるであらう。

然らば攻擊的空軍は、制空權を如何にして獲得し得るか。

それには二つの途がある。第一に「敵の飛行根據地を先づ襲擊し、その巢の中で猛禽をやつつける」（デスメー）方法である。飛行根據地は、其自身すでに最も好適の目標たるために、その技術的裝備が襲擊によつて破壞される場合、使用し得なくなるであらう。世界戰爭以來飛行場の防護、又はその技術的建築において、格段の進歩がなされて來たが、飛行機が適宜に各々の準備飛行場に分散されて居ない場合「それ等に對する襲擊は、相當の損害を與へるであらう。」（アルマンゴ）「然しながら、凡ての飛行根據地を爆破することは、決して容易なことではない。」「就中、飛行根據地は非常に嚴重に防備されるであらうし、この可能性を考慮に入れねばならない。又敵は空軍基地を出來るだけ廣汎な距離に亘つて分散するであらう。しかしこの分散によつて緊密なる活動の原理は失はれ、且又敵の飛行根據地が散在する場合、之に對する果敢なる空中襲擊に對してその戰鬪力を弱めるが如き重大なる危險を招來する恐れがあるであらう。」（モレツタ）

飛行根據地に對する戰鬪は恐らく敵に損害を與へるであらうが襲擊側に於いても損失は免がれない。從つて有効な

成果は、襲撃者側にのみ常に約束されない。

飛行根據地に對する襲撃の外に、第二の方法が採られるであらう。即ちそれは「敵陸軍及び海軍の動員と集結に對する妨害活動である。」「更に廣汎なる襲撃目標は、美術建築物、鐵道交叉驛、貨物停車場、港灣、發電所等である。」(デスメー)「かゝる空襲によつて困り抜いた國家は空軍の確立を渇望するであらう。かくて空中戰鬪は始めて起る。併しながら、襲撃者がより優秀な又より多量の飛行機を有してゐるならばその相手國は問題もなく撃滅される。」(アルマンゴー)

空中戰鬪に關して、アルマンゴーは次の如く明確な考察を與へ、攻撃と防禦の展望に同等の意義を與へてゐる。

「飛行機の高速性は、攻撃に際し、爭ふ餘地のない程、重要な利益を與へ、特に奇襲の可能性を與へる。又その高速性は、或深度までは防禦よりも攻撃に優越を保證する、併し、一定の距離においては、防禦はその防空の意義を取り返へすであらう。この場合、飛行機、對空防禦砲、封鎖氣球による防禦が可能であるのに、空中襲撃の唯一の武器は飛行機のみであるからである。驅逐機はその高度な運動性の爲に、遠距離爆撃機よりもはるかに勝れてゐる。しかし、結局において、防空はそれが領内において廣く實行されるならば、多くの價値を有してゐる。

「空軍はその充分なる戰鬪力を空中に常に維持させることは不可能である。空軍は恐らく前線や後部戰線における相互の飛行監視線を通じて、警報を受けるであらう。この監視の第一線軍は更に最前線の各前哨と連絡してゐる。警報によつて始めて上昇した飛行機は、敵の襲撃を防ぐためには、餘りに手遲れの場合が屢々である。これをどうしても避けねばならぬ時は、吾々は飛行機の一定數を前以て飛行させておかねばならない。しかしそれは唯特別の場合である。かゝる場合飛行人員と飛行機は、餘りに多く必要とされるであらう。」

「空軍は諸部隊を地上に警戒準備させて居るが故に、通常二十分以內に戰鬪に參加し得る。一部隊は四十五分以內にそ

の部署に就き得るやうに待機し、その三分の一の部隊は休息するのが常である。」

「敵の襲撃は飛行機監視線から五〇キロ乃至六〇キロ離れた地點においては、何等の反撃にも遭遇しないであらう。若し出會すとすれば、精々既に飛行中である飛行機に出會ふ位であらう。一〇〇キロから一二〇キロに於いては、襲撃は同一の條件の下においてその目標に襲ひかゝることが出來る。恐らく爆撃機はその歸還において、始めて挑戰を受けるであらう。しかし襲撃空軍は、斯くして飛行機監視線を突破した瞬間から、すでに警戒にはいつた敵の空軍力に遭遇するだけである。襲撃軍は故に優位の地位に立つであらう。」

「襲撃は一〇〇キロ乃至一二〇キロから漸次强化される空軍力と戰はねばならない。恐らくその事情は不利な條件においては絶えず變るであらう。」

「上述の數字は、驅逐機、爆撃機の速度の相異によつて異る。それはたゞ一般的標準を示すに過ぎないのである。不利な天候や乃至は最も好ましき奇襲の爲に、第一線の飛行監視が役に立たない場合、それらは左程有効ではない。從つて特に危險な地域は、又特別な防空施設を設けねばならぬ。」

「夜間に於けるこの必要性は益々大きい。暗闇に際して驅逐機は地上の探照燈や、精密なる通信に束縛されてゐる。その活動は從つて範圍が制限されてゐる。一定の地域はたゞ必要數の探照燈が使用されるならば充分保護される。斯くて大多數の探照燈と、比較的に少數の飛行機が必要とされるだけである。十五キロの地域を封鎖するためには、二つの機械だけで充分である。」

「時速三〇〇キロ以上の飛行機は、精々一〇〇キロ――二〇〇キロの距離にある敵飛行機が、偶々警報開始以前に飛行中であつてもこれを追擊し得る。襲擊空軍は、その危險を避ければ避けるほど、益々その損失は大となる。夜間において

は、驅逐機は自らは暗闇の中に居て探照燈によつて照明された襲撃機を襲追する。そして敵を撃墜する迄は無慈悲的に相手を撃つのである。

雲が多くて探照燈の照明を遮ぎる場合でも、飛行機による防空は有効である。防空は探照燈の照明範圍以上の高度においては、全然無用である。最近は五千メートルまで照明される。その高度においては、爆彈の命中率は減少する。」「晝間においては、防空は驅逐機の任務である。重飛行機に對する輕防禦機の効力は、種々の優越性よりも、むしろその高速性、運動性、又斷然優れたる裝備に絶えず依存してゐる。」

「驅逐機は、通常爆撃機に對して、その高速性、旋回性において優れてゐる。蓋し、驅逐機は爆撃機よりも燃料少く、且爆彈を携行しないからである。それは地上の防空施設から爆破されること少く、却つて地上の救援を求めることが出來る。その高速性の故に、必要に應じて戰鬪を避けることも出來る。この特質は就中襲撃武器として有効性を發揮するやうに製作されたその構造によつて得られる。一般に人は、驅逐機の有する火力の優越性を認めてゐるが、一方それは大なる始動高速性と――これによつてより大なる命中率と射撃範圍が得られる――又他方その高度なる火力によつて得られるものである。驅逐機はその小型のために爆撃機よりも被害が小である。」

「驅逐機の最新型は、爆撃機よりも技術的に優越するであらう。」

「夜間の防禦は一層困難である。そのため一般にはすでに二、三の國において見らるゝ如く、單座式の代りに複座式驅逐機が採用せらるゝに至るであらうとの見解をもつてゐる。長期の警戒期間において、防禦を繼續し得るためには、二人の乘員準備禦がされねばならぬ。」

「一般的に見てよく統制された飛行機による空中防禦は、夜間でも晝間でも、餘りに多く見越される損失のために敵の

强力なる大擧襲撃を阻止するであらう。最前線の一〇〇——一二〇キロ地帶は、防空地域、即ち領內からは除外される。」「然しながら夜間においては特に脅威された地域だけは完全に守護することが出來る。然し、この目的のためには多數の探照燈が必要なのである。」

戰況の判斷　空中戰に對する利害、從つて又、戰爭一般に對する利害が中歐並に西歐諸列强の地形にあつては、如何に解釋されてゐるかこれを明示せんがために、アルマンゴーオ將軍は或る戰況を述べてゐるのであるが、その二つをこゝに引用して見よう。

1.　佛蘭西の敵は强襲によつて、北部に於てはマウボイゲ地方——サン・カンタン——ライムス——ロンキイ、中部に於てはブザンソン地方——ロン・ル・ソルニエ——サン・クロオドまで進出した。南部に於ては我々からコルシカを奪取した。又、彼ら佛蘭西の敵軍は一二〇粁の上空からの空襲により、我が警備隊を、北部工業地域、巴里地方、東部工業地域クルゾオ工業地域、リヨン地方、マルセイユ——ツーロン地帶等から擊退した。空襲は都市及び經濟生活に對する道德上の影響は別として、軍需品製造に損害を與へること甚大である。我々はもはや敵と同樣の軍需品を製造することは出來ぬ。戰爭の幸福な結末は疑はしいのである。

2.　今度は獨逸の不幸な展面を採つて見よう。この國は二つの前線戰鬪を行つてゐる。この國の陸軍の攻擊は東部國境並に西部國境に於て停止せしめられた。空襲警備隊はルール地域及びライン地方から、一二〇粁以上接近してゐる。ザクセン及びシレジエンの工業地域も同樣である。即ち彼ら警備隊は敵機により、東方並に西方から襲擊されるのである。結果は從前の如く、佛蘭西に於けると同樣であらう。若し獨逸陸軍が空襲に脅かされる自國の地域から、敵機を一定の

距離に逆襲することが出來なければ、この國の抗抵力は直ちに減少するのである。

地上組織 アルマンゴオ並にバンドブウツ將軍は、防空の必要缺くべからざる助力者として、確實に活動する地上組織を要求してゐる。

「防空警備軍、消防隊、司令部、地上情報連絡部、地上、空中航空機間情報連絡部等は、絶えず敵機に對する逆襲の處置を講ぜしめ、自國の航空機をして、正しい進路を取らしめることが出來る。なほ夜間逆襲は、幾多の探照燈による空中探照綴によつてなされる。」

「天候不良のため驅逐機(Jagdflugzeug)を使用出來ないときには領土防空は奧地に於て行はれる。この場合高射砲は爆音に向つて發砲するの外はない。」

「微細な目標に集中する高射砲の重圍は、低空からの爆彈投下を防禦し、六七千米の高度にある攻擊者に對しても徹底的損害を與へるものである。之によつては小さな目標の攻擊は中々困難であらうが、殊に認知するにも射擊するにも緻密な注意が必要である。高射砲はこの完璧な火砲準備を通じて、最前線に於る驅逐機の利用不可能が豫期されるときの代用となる。しかし、高射砲の數が狙擊すべき目標の多いのに比して僅少すぎるためにこの代用も完全な効果を持つとは言ひ得ない。」

「封鎖氣球は夜間の空中擁護の役を果してゐる。氣球や特にそれを繫ぐ針金などは暗闇の中では中々認め難いものである。針金による繫留によつては墜落か不時着は殆ど免れ難い。封鎖氣球を恐れる結果、一般に飛行機は氣球の昇り得る以上の高度を保つことになる。之の上昇高度は今日では三五〇〇米に達し、將來五千米まではなるであらう。この上空か

らでは目標を認知するのが困難であり、更に命中率は減少する。こうした結果は、封鎖氣球を頻繁に用ひる航空路に設置して之を度々轉置するならば、多くの被目標對象を安全ならしめることが出來るであらう。」（アルマンゴオ）

斯ふした多くの考察は、空襲は複雜多岐にわたり容易ならざるものであることを示し、また少なからぬ技術上、戰術上の困難や計算上のまた精神上の困難を克服しなければならぬことを示してゐる。「若し攻擊に際して之等の困難が大部分乃至は全汎にわたつて解消されるならば、この攻擊は意義を失つて了ふであらう。」（モレッタ）しかし空中戰によつて損害を受けるのは攻擊者のみではなく攻擊者と言へども之を受ける。しかして制空權を得るのはより優勢なる者である。若し之が如何なる場合にも攻擊者のもとに克ち得られるものであるとすれば、攻擊者が永續的に制空權を保持するといふことが何等意義を持たなくなる。防禦者は、新しい物質や兵員の補充により、また對空防衛の改善によつて再び優勢を占むることも出來るが、少くとも攻擊者側の勢力を制壓することが出來るのである。また防禦者とても敵地上の有效な目標に對して攻擊を企て、空中戰を有利に導く機會をもつものである。

常に空中制覇戰は、殆ど一致した諸外國の意見に從へば、略近似した兵力の場合それはいつ果るともない戰鬪に終り確然たる制空權を得ることは不可能である。

對空防備が未だ完成せず、そのため容易に敵の意表をつくことも出來るといふ理由から、戰爭の開始が戰略上の優勢を得るに特に有効であることが、屢々外國の著述家によつて述べられてゐる。從つて又、空軍は出來るだけ集合狀態にある敵の戰鬪力に向け、輸送隊や土木工作、供給源地等に對して爆擊すべきであることを述べてゐる。「若し吾人がこうした手段から敵軍の集結を遲滯させるならば、强力な攻擊は亦掩護軍の擊退を期待することが出來るのである。單に軍の集中計畫のみではなく全體の作戰計畫に對しても之を爆擊し得る。」「乍併敵國の防空が完全に組織されると共に大規模な空

襲は少くなるであらう。やがて空軍は益々陸軍や艦隊との共同動作をとるやうにしなければならなくなるであらう。即ち、吾人が若し空中戰場に於て優勢を保持しない場合、陸に海に勝利を獲得することは非常に困難であらう。」（アルマンゴ）

（八） 空軍の陸海軍との共同動作

決戰に對するこの共同動作について、アルマンゴは同様に有益な意見を述べてゐる。彼は航空機の意義を司令官や砲兵隊や戰車の眼であり又戰場の連絡であると考へ、また大戰鬪編隊による強力なる武器として評價した。若しこの空軍が戰場に於て、特に決戰地に於て優勢を占めることが出來なかつた場合その任務を完全に遂行することは不可能であらう。然して次の如き重大な戰略上の課課が空軍によつて果たされねばならぬ。

1. 敵の決戰意圖の戰略的偵察。
2. 敵飛行機の驅逐乃至は殲滅による自國作戰の陰弊、驅逐機及高射砲の覆被形成。
3. 敵空襲に對する自國軍の機動掩護。
4. 敵の防禦作戰の攪亂。

（ニ） 効果的利用

「この効果的利用は先づ敵が適時に豫備軍を補充するのを妨害する點にある。空軍は襲撃や威嚇的偵察によつて敵の豫備軍の到來するのを遲延せしめねばならない。」

「更に近代戰は、若し敗走する敵が百粁以上に亘る鐵道を使用不能に陷しめるときには、如何なる追擊もそのまゝ停滯して了ふことを明示した。」

「故に敵の退路を遮斷することが最も効果的である。即ち空軍は敵の背後に出て之を遂行する。」（アルマンゴ）

三　戰爭指導の爲めの空軍の編制

外國の著述家連は空軍編制に關する必要をその空中戰爭の中に述べてゐる。既に述べてきた如く、防禦における國防軍の總司令官の重要性を强調したが、之と共に空軍は同一の精神のもとに全體的戰爭遂行の線に向けられるのである。殆ど例外なしに吾人は、陸海兩軍に所屬する航空機や防空兵器の永續的乃至は暫定的編制即ち擠富と共に、獨立空軍が必要であることを認めてゐる。就中近代では、空中の防衛と地上に於る防禦の共同工作をなさしめ、制空權獲得のための諸努力に對して有効な觀察を爲すため、報告、通信網、地上防備等の總括的地上組織が空軍司令官の命令下に所屬するやうな統制を必要とする。しかし、陸軍と海軍とに於る空軍部隊從屬の問題は訓練及補充の點で未だ充分說明されてはゐない。またこの問題が最も有効に解決されると共に、他の防衛の飛行隊も空軍司令の下に置くべきものであるとの見解が決定的であるやうに思れる。

結語　上述の外國の觀察が正當である限り、ただ列强の戰爭のみがその正否を決定するであらう。空軍完成の諸希望も恐らくは實現するであらうが、同時にその防衛手段も亦益々多面的にまた能率的になつてゆくであらう。戰略の原則も亦こゝに存在するのである。

アルマンゴッ將軍 "Revue des Deux Mondes" 所載、「空軍と地上防禦。」
ドウブネ "Revue Militaire Suisse" 所載「近代陸軍の本質。」
ドサローネ、空軍誌所載論文。
デスメー「軍事科學報」所載の空軍に關する雜報。

ドーウエ将軍『制空』
フラー、「將來戰について」。
「萬國代表議員會調査書」における「戰爭の機械化。」
ハーバア「陸海空軍誌」三八六九號（英國）。
ランガバン、「フランス軍事報」所載の「地上防衛に於る航空機の役割」。
ロツコ・モレツタ「明日の戰爭は如何にして現れるか。」
ニーセー、「對空防備の必要」
バンドウブツツ「ベルギー軍事科學報」所載の「空軍の延長論」。

フランケ

第三篇　國防政策

國防政策

この言葉がいつ頃から獨逸用語の中に加はるやうになつたのか、既に判然と定め難いやうである。十九世紀中に防備と同列に置かれるやうな言葉が作られたのであるが、あるひはその時代に現れたものかも知れない。國防政策といふ語の中の「國防」といふのは「防備」するといふ概念がその根底をなしてをり、それは數世紀來國家の最も重要なる課題をなしてゐたのである。國家は「國防局」（マルチン・ルーテル）を設けてゐるが、不法、公安の侵害、國內での惡人、國外の敵等を「防ぐ」ため（「回避」するといふ意味から）であり、更に國家及國民の安寧に「備へる」ためである（能働的に「戰鬪」及「抗爭」のために用ひられる）。即ち之等によつて國防政策の概念規定はなされる。

概念規定・國防政策とは國家及國家の尊嚴のため他の國家に對し必要の態度を保持すべきその政策の意である。即ち領土防衛施設や、國家の防禦力昂揚のために適用せらるべき兵力並に手段の運用などがそれに相當し、更に國家の在立隆盛に關する戰鬪の指導をも含んでゐる。

A　汎論・此の政策が自國民及自國領地の點に限られてゐる限り、內部から言へば國防政策上の諸問題は外國に關するものであり、外部的には國防政策となる。不完全な手段を國家擁護にあてた國防政策なるものは之を脆弱と稱し、目的を

認識し豫見的に行はれたるものを合目的にして强力なるものと云ふ。國民の運命や國家の在立が合目的國家政策の實踐にかゝつてゐるものとすれば、その國防政策は即ち全政策の前面に存し多くはそれの特種部門と密接に結びついてゐる（外形的には、交通、經濟、財政、文化等々の諸政策がそれである）。國防政策はそれ等諸政策の決議に任されてゐるのではない、時代思潮、世界觀、自國と隣國との一時的防備狀態等にかゝつてゐる。しかし周圍の地理的事情には何等影響されるところはない。即ち假令全的にではなくまた今明日中といふわけではないとしても、自國の國防力はそれ等によつて變化せしめられるのである。故により有利に展開すべき防備狀態といふことが國防政策の最も重大な問題となつてゐる。その豫見的工作の成果を享るのは多くは次ぎに來る時代である。即ち國防政治家クロムウエルが大英帝國の基礎を作り、大クールフユルストがその手兵を以つてプロシヤの大兵力の萠芽をなしたのであつたが、國防政策上の工作なくしてはフリードリツヒ・ウキルヘルム一世といへども敵國の中にまでフリードリツヒ大王の名をとゞめることは出來なかつたであらうし、バイアンの國民皆兵義務の制定が行はれなかつたとすれば獨逸統一戰爭（di: deutschen Einigungskriegen）は起らなかつたであらう。最初のプロシヤ王が全國民を軍備にあてやうとしたその努力も、先づ第一に時代思想の點で暗礁にのりあげて了つたのである。しかし重壓に苦しめられた結果、國民は總べて個々人が祖國の防衛者でなくてはならないとの理解に目覺めたのであつた。防ぐよりも甘んじて敵の支配に屈服しやうといふ國民には如何なる國防政策も滅亡するを助ることは出來ないのである。

合目的國防政策の前提條件となるものは目的を辨へた確然たる思想であり、統一ある實際行動である。目的達成に勉める途中にあつては屢々時間的損失に伴ふ障害を克服しなければならない。熟慮百考に過ぎるのはその決斷を鈍らせる結果となる。それ故に効果的國防政策の實施には、世界歷史や國防史、戰爭史、更にその國の敎訓等によつて作られ、また國

防政策の本義と見做し得べきところの諸經驗を認識し且活用することが必要である。もとより、こうした敎訓が定める規定や手段を含み得たものと誤認するといふことは考へられるかも知れない。しかしそれがために國防政策は天才的政治家の熟練した手腕によるものとなる。

國防政策に關する責務は先づ第一に統帥の立場にある施政家と國防政策上の諸問題に參與する國務大臣乃至國家的當局者（Staatssekretäre）とが負ふものである。しかし之は、憲法制定會議や議會による憲法によれば、政府提案の議決が彼等の投票に委ねられてゐるところのその國民代表との間に責任を分つてゐる。國防政策上の規準釐定は列國に於ても國防評議會（Landes- oder Reichsverteidigungsrat.）に委任されてゐるのであるが、その中にあつては當事者側にある大臣が代表となり、國防準備の統一については統帥的立場にある國家人の方針に應じて考察される。その議長には、その國家の事情に應じて高官にある政治家やあるひは將官等が任ぜられてゐる。しかしもしこゝに軍事上の專門家の意見が充分顧みられなかつたならば、その國防政策は缺陷あるを免れない。假令官吏や將官が國家的樞要人であるといふ意味からその問題を執行しなければならないといふ點で、その國防政策について責任を負ふものであるとしても、彼等は更に國防政策の有力な助援者であるのであつて、それがために國防政策上の理解について訓陶されるところがなくてはならないのである。

國防政策家は何等國家的責任を負はず、凡ゆる種類の宣傳を通じて國防政策を促進せしめそれに努力してゐるが、また議會制度の國にあつては屢々決定的勢力を得てゐる。主權を以つて統治される國家に於ては國家觀念の保持者及それ等の團體が、特に敎育上の點から國家統治者の國防政策を支持してゐる。

B　內的國防政策とは、現在國民力の活用によつて國家の防衛準備を取扱ふものである。

1　現在國民力の利用・健全なる國民のみが有能な戰鬪員として立つことが出來るのである。故に國民の健康を促進せ

しめ、男女青年の身體を鍛錬するといふことは國家的利害に關するものである。また各個人が戰鬪員として有能であるといふこと以外に國民力の數的强力度がまた決定的重大性を持つものとすれば、勝利を得んがためには出産過剩な夫婦の保護並び奬勵が國防政策上の問題となるであらう。肉體的國防適應性と共に國防思想についての國民の心理的精神的能度が同樣に重大な役割を演じてゐる。先づ當然全體の利害を尊重し、最も困難な犧牲をも自らなす如き、全國民の運命的結束性に關する內的信念が、國防一致の必然性に對し又この認識から出發する搖ぎなき國防精神（ebrwillen）に對して個々人をしてまた全國民をして實際に武器をもつて立たしめるものである。現存國民力の增大のためには國防政策として、適當な國防宣傳並に國防教育が用ひられる。

國民の價値（Geltung）は精神的所得物によつて決定的な影響を受けるものである。夫故に國家的防衛力の强化を期待し得るやうな學問は總べて煽動あるひは支援を以つて之を促進せしめるといふことは、有能な國防政策家にとつての當然な義務でなければならない。

2　國家的國防訓練・戰鬪力あるものも、軍事的戰鬪教育を經て始めて戰鬪可能となる。これは普通には防禦力の問題である。多種多樣な諸國に於ては、この軍事的戰鬪教育は徵兵前の青年教育の中に豫め準備されてゐるが、獨逸では武裝者たる防禦軍にのみ之を行つてゐる。

防禦力が國防政策の中心的要素となる。强力にして組織あり民族的結束ある防禦軍こそ敵の侵入に對する最善の防衛である。それは一方では國に及す攻擊をして決死的離れ業ならしめ、他方には國家存續のためには避け難い戰鬪に際しての不可缺の用意ともなるのである。夫故に國防政策は少くとも、この防禦軍の養成やそれの時代的要求に適合した改造を必要とする。それの形式は、憲法とこの形式の中に表現されるべき國家觀念とに密接なる結合を有する國防憲法（Wehrver-

fassung) にその根據をおく。防禦軍が全國民と同様な世界觀や國家觀を以つて訓練されるところが多ければ、國家的振興力や精神的安定力は益々强力となり且豐富になるであらう。國防政策は全的國防法（Wehrrecht）の起草や改修に際して斯る觀點を考慮し、之によつて時代錯誤な法的見界が國防軍と國民との間に罅隙を掘返すが如きことをしないであらう。

國防憲法や、それを含む國防法令（Wehrgesetz）更にれを完成させるべき諸法律等が、軍備關係者の責務の種別、國防分科の兵力（陸、海、空軍）、陸上設堡、文化的統治と軍事的統治との間の命令權能の限界、國民各個人のその能力に從つた運用、服務義務、服務期間、軍備に關係なき國民の各種の指導に關する國家的要求、其他多くの同樣な事柄の如き領土防衛の多くの重要な問題を整定する。多くの點で範例を與へてゐるこの種の法律は、それを通じて全的國民兵や國家防衛に關する國家手段（Landesmittel）が關係せしめられてゐるのであるが、之はボンクール法に現れてゐる。國防政策は國家の國防狀態に基づいて何れの防禦分科（陸、海、空軍）に重點を置くべきかを決定しなければならない、又豫め軍事的要求についての相互の均衡を保ちつゝ、國の經濟的實行能力による裝備の完全あるひは制限について決裁を下さなければならない（軍備政策 Rüstungspolitik）。一方的な優遇を避けた國防負擔の正當な分配や、國家のために重大な犧牲を拂つてゐる軍從者の功績の推奬により、また政治的特典や適當な給養並び救濟等を通じて、國民の國防や犧牲に對す忻快の情を促すべきである。

3　國土の物的並びに空間的能力の利用・經濟的に微力であり、外國によるところ多い國家はその國防力給養の手段を見出すことは相當困難であり、又攻擊を受け之れを防禦する時にあたつて給養困難のために崩壞するといふ危險に直面しやすい。國防政策は實行力ある國防經濟の建設によつてこの危險を未然に防がねばならない。之がためには一方には國内に發見し得る原料の利用や事情に依つてはそれの增加、また榮養食料品並びに領土防衛の意義にかなつたそれの利用につい

ての盡力等が適當である。之によつて各種財源についての國防力の當座の要求が滿たされるのみならず、更に戰爭開始のために必須な物資を貯藏することさへも出來る。この國防經濟が國家的生產地を通じて作られるか乃至は全的にあるひは部分的に私人の目的によつて國家の後援奬勵の下に行れるかは、その國土の事情に應じて定る。平時國防經濟から戰時經濟への置換は亦戰爭の經驗に基づいて準備されねばならない。國民生計の安定、產業の國際的連繫からの離脫、新しい職場の用意（生產上の動員）、原料の安定（貯藏經濟）、勞働指導者及勞働者の準備（人的動員）、並びにそれの軍人としての見界からなる組織、暴利あるひは不正營業の芟除、更に經濟的戰爭指導に關する用意等々のことは凡て戰爭經濟の問題に屬するものである。

國防政策は國防區劃（Wehrraum）の活用の點に廣汎な問題を生ぜしめてゐる。即ちその中には純粹に經濟的なる觀點から離れて、地形强化（堡壘）、領土防衛に利害關係を有する交通政策上の事態、また空襲に對する防護のための住居及生產中心地の密度の緩和等の諸問題が整理される。

4　國防利害關係の保護・國防政策は形態上如何なる効果を有するかといふに、國防政策は亦有害な影響を受る以前に國家を保護すべき國家の防禦準備の課題をも有してゐるのである。

國防政策が極めて脆弱なものであるならば、國の內外に汎つて害惡を流す出版物に對し、また軍事的秘密の洩えひ、軍事並び經濟上の間牒、更にまた怠業等に對して之等を摘發したり、宣傳や敎育又は法律的處置等によつて、國防上の敵を驅逐するが如きことは到底困難であらう。

C　外的國防政策　之は一般の外交政策と特に密接な關係にあるのであるが、更にまた外交手段を以つて、それが假令自國の勢力點（殖民地、據點、通商路、其他）の防衛並びに强化のためであつたり、あるひはまた國家間の同等權の確認

乃至は國家の主權に制限を加へてゐる差別や負擔を取除くためであつたとしても、國家の尊嚴を他國家の中に保持せんことに努めるものである。

恰も殖民地の占有と同樣に自國の國防力を强化するところの經濟上及通商上の利得は、親善關係の促進や利害協定によつて遂せられる。之は特に、條約や協定又は同盟によつて平和が確定されてゐる場合である。國際的軍備制限の問題や、國際法及戰爭條規の改修問題は外的國防政策の領域に屬する。

外的國防政策は、その背後に他國に對して適當の尊敬を拂はしむべき强力なる國防力のある場合にのみ永續的効果を獲得し得るものである。防備なき國家には尊敬は拂れない。

特に國の存續を脅すものから防禦するといふ問題は、時代や自國の軍備狀態とに適應した領土防衞の存在によつて始めて完成されるものである。

國家の安全のための平和的手段が既に不充分となり、已むを得ずそれに代つて武力を用ひねばならなくなつたときに、國防政策は最も困難な決斷の前に立たされる。その場合國防政策は戰爭政策（國防政策の小概念）となり、戰爭を昇華する政策も亦一つの特徴に加へられねばならなくなる。戰爭政策となつた國防政策は戰爭を指導しなければならない（政治的戰爭指導）。その場合その國防政策は手段として國防軍を利用する。夫故に軍事的戰爭遂行は國防政策に從屬せしめられることになる。しかし國防政策は戰爭の開始や戰爭中に於ける外交手段たる國防力に對して有利な政治的事態を作らねばならず、且また國家存亡の鬪ひに於て國家及國民の凡ゆる能力や資源がその國防政策の指令下に屬さねばならぬ時には、國防政策は同時に軍事的戰爭遂行の侍女となる。これは國防政策に置かれた委任を繰返し最少の課題として考察するものであり、又政治的戰爭遂行になほ有利な結果を齎そうと勉めるものであらう。軍事的成果の有利乃至は不利に應じて

國防政策は軍事的戰爭指導に新しい問題を提出するか、あるいは戰爭の終焉に勉めねばならない。それはまた決して戰爭の遂行を放棄したり、軍事的戰爭指導の責任を回避したりすることがあつてはならない。國防政策が戰爭前に自國及同盟國とに於ける「戰爭遂行と戰爭指導との間の統一」に努力してゐたならば、全的戰爭指導は國防政策上本質的に容易ならしめられる。

外的國防政策が内的國防政策よりも上位に置かるべきかどうかといふ議論は無用である。外的國防政策は、それが强力な内的國防政策によつて護れてゐれば、それだけ容易にその目的を達成し得るであらうし、また若し外的國防政策が内的なそれを利用しなかつたならば、逆にこの政策は何等の用をなさなくなる。國防政策は、一つの意思と一つの頭とが指導すべく、二つが同時にあつて始めて完全體となるのである。

クリウゼヴキッツ著「戰爭論」(Clausewitz, C. v.: „Vom Kriege.")
コヘンハウゼン著「國防思想」一九三三年(Cochenhausen, F. v.: „Wehrgedauken." 1933.)
フエッチ著「近代國家に於ける國防力」一九三三年十一月、評論所載(Foertsch, H.: „Die Wehrmacht im neuen Staat", in Runduchau, Nov. 1933.)
ヒールル著「獨逸國防政策の基礎」一九三一年(Hierl, C.: „Die Grundlagen einer deutschen Wehrpolitik" 1931.)
ヒツトラー著「我が闘爭」一九三四年ミュンヘン(Hitler, A: „Mein Kampf", München 19'4.)
エールツエン著「國防政策の根本」(Oertzen, K. L. v.: „Grundzüge der Wehrpolitik." Hamburg 1934.)
ロツゲ著「國家的平和政策」一九三四年(Rogge, H.: „Nationale Friedensdolitik", 1934.)
シユミツト著「第二帝國の結合と瓦壞」一九三四年(Schmitt, C.: „Staatsgefüge und Zusammenbruch des zweiten Reichs," 1934)

フ ラ ン ケ

政治と戰爭指導

國防科學に於ける最も決定的な問題の一つは、戰爭指導に對して、政治家と並んで軍司令官が遂行し、否、最も巧妙に遂行しなければならぬ行動の明確な限界の問題である。この限界を決定することは、非常に困難であるが、それに對する展望は、時の經過と共に著しく變化して來た。「政治」と「戰爭指導」の概念を明確に規定することが、既に容易なことではない。「政治」と言ふ概念は、屡々間違つて表面的政治に局限されてゐる。「戰爭指導」なる言葉も亦、種々に理解されてゐる。それが單に「軍事的戰爭指導」として理解されるならば、「政治と戰略」について更に語られねばならぬ。軍事的戰爭指導は、敵及び輿論の思想的、精神的打擊、全國民乃至經濟力の總動員、同盟國の獲得、少くとも中立諸國の好意等の如き、非軍事的戰鬪手段の利用を包含するところの、全體的戰爭指導の一部をなすものである。戰爭の綜合的指導のために、政府は國家及び國家首腦の代表者として、その任務を遂行するのである。

戰爭の戰鬪部面においては、これらの諸要素が前面に押し出されるとは言へ、軍事的戰爭指導は、對內、對外政策とに關聯して來た。

此概念を明確にするために人は通常クラウゼウイツに學ぶ。彼が「戰爭は單に政治的交涉の一部であつて、決してこれと獨立した部分ではない」と言ふ場合、彼は本質的に正しい。彼の說明に從へば、戰爭は（軍事的用兵を意味し、軍隊指導 **Heer fuhrung** を意味する）その獨特の法則に從ふものでなく、却つて他の全體の一部として工夫されねばならぬ。然してその全體とは政治（國家指導）を意味する。若し戰爭が、徹底的抗敵心から戰はれる決死的戰鬪であるならば、政治

的見地は戰爭の開始と共に停止さるべきであるといふことは考へ得られる。しかし戰爭も、政治自身の發現以外の何物でもない。政治的見地が軍事的見地よりも下位に立つことは予盾してゐる。

何故なれば、政治が戰爭を發生させるからである。政治は智力であるが、戰爭は單なる手段である。決してその反對ではない。軍事的見解は政治的見透しの下においてのみ可能である。」

クラウゼヴイツは、「戰爭は他の手段を以てする政治の繼續である」と言つてゐるが、之に對し、ルーデンドルフは「戰爭は他の手段を以てする政治である」と言つた。更に彼はこの言葉を衍敷して「全政治は戰爭に奉仕せねばならぬ」と言はねばならなかつた。

この說明の中に人は、政治的指導よりも、軍事的指導に最高權を與へんとする粗暴なる通告を發見するであらう。この解釋は、その言葉の內容と一致してゐない。軍事的指導は、政治を奉仕さすべきではなくて、むしろ戰爭に奉仕すべきである。前者と後者は全く異るものである。戰爭に際して、全國民が一致して支持すべき、對內及び對外政策を獲得することこそ主要なる問題である。

(一九三五年十月に出版された)著書において、ルーデンドルフは事實上、「軍事的指導の最高權」を主張した論據の上に、「全體戰」を打立てた。彼は言ふ「すでに戰爭の本質が變化し、政治の本質も亦變つたのである。從つて、戰爭指導の政治に對する關係も亦變らねばならない。クラウゼヴィツの凡ての理論は棄てらるべきである。戰爭と政治は共に民族の生存權に對して奉仕するものであるが、就中、戰爭は民族の生命慾の最高表現に外ならない。然るが故に、政治は戰爭指導に仕へねばならぬ。」司令官は「戰爭遂行の任務において、それが果さねばならぬ命中線(Richtlinie)を政治において確定する。」「政治の全體は、そこに起り得べき諸障害を、その萌芽のうちに排除するために、戰爭に從屬するといふことは、彼

が再三確信せねばならなかつたところである。」――司令官が、戰爭において、フリードリッヒ大王やナポレオンの如く、獨裁者として、政治的、軍事的戰爭指導權を總括的に握つてゐる場合には、このことは當然の要求であるし、而も必ず實現さるべき要求である。併しこれが今日の戰爭においても、尙、可能であるか否かは、議論の餘地があるであらう。このことは單なる理論的判斷乃至概念規定によつては充分に把握され得ない。國家の指導者、政府首腦者乃至外交指導者を含む、政治家の壓力が、軍司令官に對して、その行動を制限する如きことになれば、そこに必ず摩擦が起る。若し政治と用兵が、一人の手に握られてゐなかつたならば、その人物の重要性に應じて、一方が他方を侵犯することは、凡ゆる時代の戰爭史の明示する所である。軍司令官は、諸經驗に基き、特に制限されざる獨立性を要求し、上からの政治的指導の桎梏から自由に行動することを要求する。然し政治家も亦、事件の軍事的經過において、自己の政治的見地から、或は求めらるゝまゝに、或は目的的に、廣汎に干涉することを、自分の任務なりと考へることが決して稀ではない。然し一方の側に斷然優越した人物が居なかつた場合は、大體においてある妥協に到達する。若し吾々が、種々の時代の戰爭において發見する事實上の解答を一瞥するならば、この問題を明瞭に理解することが出來よう。

將軍は往昔と異り、今日に於いては、自國が彼の勝利を待つ限り、敵を擊滅するために兵士と共に戰場には立つのは稀れである。モルトケ元帥は言ふ、「傭兵から成つた小軍隊が一城市、一地方を奪ふために、王室の目的を奉じて出陣し、戰ひ決せずして冬營するか、さもなければ、媾和するかしたのは、過去の事實である。現代の戰爭においては、全國民を武裝に向はしめそれに同憂を持たない家庭は一つもあり得ない。國家の全財政は動員され、その動員工作は間斷なく續けられ、幾新年もそれに限界を與へ得ない。」然し軍司令官は往時に於ては、政治から純然と獨立してゐた。全體としての政治狀態、同盟國、戰費を補助する國家等々への顧慮、又國家の財政力、及び賠償力、等々は用兵の規準として、屡々決定

的に作用する。然しながら、今日の戰爭の過程に於いては政治と戰爭指導は常に、互に交叉する、從つて之を分離するとは不可能である。今日の戰爭は、全國民を捲き込み、その戰鬪力技術力及び全體的產業力、經濟生活、財政力等を最も緊密に關係せしめる。戰爭指導にとつては對外政策だけでなく對內政策は最も重要なる意義を持つてゐる。一八〇六年のイエナ會戰の後に於ける如き公然たる計畫は考へることは出來ない。「王は戰爭に負けた。然して、市民の第一の義務は最早や終つた！」と。

國家首腦者が、クロムウエル、フリードリッヒ大王乃至ナポレオンの場合の如く、同時に軍事指導者である場合それは最善の解決として絕へず之まで考へられて來た。然し、凡ゆる關係に於いて、フリードリッヒ大王の如く、均整のとれた人物に對し、又ナポレオンの如く政治的、軍事的戰爭指導を一手に集中し得る如き普遍的精神に對しては、それは當時の事情においては、最も勝れた解決であつた。グヴイヨン・サン・キール元帥 (Gouvion St. Cyr) は、ナポレオンについて語つて曰く、「一八一三年極度に切迫した戰爭狀態の下において——それは最深の考慮を必要とした——每夜パリー各省の許に、カイゼルの會議室から、十七通の手紙が送られた。それには變動常なき客觀的狀勢、その下における非常に困難な財政的諸問題が、一目瞭然と且個々に亘つて詳述されてあつた」と。

世界大戰において見た如き諸事情の下においても、ナポレオンの如き天才は今日戰爭指導の凡ゆる操糸を一手に統一することが出來たであらうことは何等疑問とはならぬ。斯かる一等星は、數世紀に唯一度現はれるに過ぎない。然し、政治的、軍事的戰爭指導が、種々異つた手によつて、導かれるやそこに困難が始る。この困難は一八六六年及び一八七〇年——一八七一年の戰爭に於いて明瞭に現はれた。即ち、ビスマークとモルトケの二大人物が對立したのだ。モルトケの見解に依れば、政治は戰爭の開始と終結に決定的に影響する。然し戰爭期間においては、戰略は政治から

「完全に獨立的に取扱はれる。」戰略はその努力を新興の手段によつて到達し得る最高目標に常に向けねばならぬ。政治はその成行に應じてその要求を増し、或はその僅少なる結果に滿足するに任せる。ブルメンタール將軍は一八七〇年に次の如く言つた、「聯邦首相（ReichsKanzler）の政治は、吾々に何の役にも立たぬ」と。モルトケの立場は、之迄の説明から引き出される如く、今日既に顧みられなくなつてゐるが、當時既にビスマークによつて論難されてゐた。「思索と追憶」の中にビスマークは此問題の中に解明を與へて曰く、「目標の決定と制限は、戰爭を通じて達成さるべきものであり、それには、帝國の閣議が協力し、戰爭期間中と謂へども平時の如く一つの政治的課題として存在する。その解決の方法は、戰爭指導の方法に影響を與へずにはおかない。後者の方法と手段は、最後に得た結果を、多少とも完成するか否か、又は國土の割擴を要求するか、或はそれを放棄するか、或はその租借權を如何に長く保持するか否かといふ事に常に依存するであらう。」

一八七〇年——一八七一年の戰役遂行における、その見解における右の如き原則的相異は、摩擦を生み當時衆知の如く非常に酷しいものであつた。それらが比較的惡い結果を生まなかつたのは、王の人格に權威的に高い調停の役割が與へられた故である。ビスマークは、一八六六年の戰爭期間に、軍事的協議に出席してゐたが、一八七〇年——一八七一年の戰爭には除外された。彼は軍事的經過について充分に報告されないために、戰爭の全體的經過を見透し得ないので非常に困惑した。然しモルトケは作戰計畫乃至既に採られてゐる作戰について秘密を守ることを必要とした。

聯邦首相ビスマークは軍事的諸報告書類によつて政治的見地が充分考慮されてゐないことに非常に苦慮した。かくしてビスマークはモルトケの作戰計畫に對し、痛烈なる抗議を提出したその結果兩人の間には長い間に亙つて不和が續いた首相はセダン會戰の後、パリ進擊に反對し、シャンパーニュにある軍を同地方に駐屯する事を要求した。從つて、戰爭の終

期に際しパリー包圍の爲に進撃した事を一大失策となし、又不幸と見た。若しパリーへの進撃を止めて居たならばその國家形態に對するフランス自體の内部的抗爭はフランス自身を蝕んだであらう。パリーへの進撃は彼の意見に從くばフランスの一切の政黨を對獨防衛に對して團結させた。ビスマルクはこの點で妥當とせねばならぬ。セダン會戰の後の停戰(Stehenbleiben)は軍事的には一つの失策であつた。それは完全に撃退された敵に對して休戰し、その抵抗に對して一切の力を集中する暇を致へた。中立國に對するビスマルクの憂慮は、パリー攻圍が長びけば全く正當であつた。彼は砲撃の即刻なる開始を主張した。モルトケは先取的爆撃に反對すべき軍事的理由を擧げ、必要なる準備が完成した後砲撃を開始すべく要求した。

兩者の政治と戰略に於ける抗爭の最高頂に於てカイゼル宣言が現れた。それはパリーがその城門を開くならば、何が起るであらうかといふ問題に關聯してゐる。モルトケはプロイセンの皇太子との協議に於て、自由にされた諸勢力を以て戰爭を繼續する事を決意したが、皇太子はそれが政治的狀勢に適應するか否か就にて疑問を表した。モルトケはこれに答へて、「それは解りませぬ。唯、臣は軍事問題について苦慮致します。殿下が若し他の命令を下されるならば、臣は臣の計畫に基いて行動を決します」と云つた。この場合に於ける參謀本部の立場に對して人は贊成し得ない。政治家は軍事的に、軍人は政治的に思慮する事を知らねばならぬ。相互に完全に分離した思想はいづれも實行されない。モルトケがパリーの司令官トロシユ將軍(Trochu)と直接に提携を結んだ時、猛然たる反對が爆發した。彼はフランス一般的の軍事情勢に關する報告を利用すべく要求し、それによつてパリー開城を促進せん事を希つた。この計畫を政治的には失策であると見てゐたビスマークは大いに憤激し、自己の見識が大體に於て正當である事を强調して、二つの痛烈なる內閣命令を送つた。モルトケも亦非常に憤激して同夜直ちにカイザーに上申して、自己の職位の罷免を願ひ出た。カイザーはこの上申書を先

づ保留しその返事を遂ひに思ひ止まらせた。モルトケとビスマークとの間に行はれた論爭及びその結論はそのまゝ政治と戰略との關係を明かにした教科書である。

世界戰爭に於ては關係は全く異つてゐた。今度は、一八六六年乃至一八七〇年、一八七一年に於ける如く政治及び戰略の指導者としてかゝる優越した二人の人物は存在しなかつた。この二つの戰爭に於て若し非常に多くの簡單な、細かい關係が確立され、戰爭指導の統一性が確保されてゐたならば戰爭指揮は世界戰爭に於ては全く異つた任務の前に立つたであらう。そして我が軍隊が西部戰線に於て決戰を行ひ國境封鎖が我國民を消耗させ、又必要なる生活手段及び原料を吾々から奪ひ國内に於ては革命勢力が政治的崩壞を目ざして國民及び軍隊を顚覆せんと努力してゐた間に、チロル、上部イタリー、ウクライナ、フインランド、マケドニヤ、パレスチナ、クリム、及びヂョルヂヤの方面に於ては決定的に戰鬪を進め得たであらう。指導的政治家はこの困難なる任務の前に立つて、必要な、然かも毅然たる立場を保持して、一切の國力、一切の手段を戰爭奉仕に動員し、國民の戰鬪意志を絶えず高揚した。戰爭に勝つ爲には、祖國は軍隊によつて守られ、その戰鬪力の根源が作らねばならなかつた。國内政治の意義は隣國に對する對外政策と共に往時の戰爭時代に於けるよりも遙かに重要な意義を有つた。ビスマークならば、この課題を充分に把握してゐたであらう。然し、フオン・ベートマン、ホルウエッヒも、又その後繼者も彼には及び得なかつた。然し、戰爭の後半に於て、タンネンベルグの輝かしい大勝を博し、無條件の信頼と國民の戰勝希望をもたらした人は軍の指導に於ては彼等に匹敵し得た。この人々は宗教的熱心と全力を最高度に集中して、その戰戰を勝ち得たのだ。こゝでは強き人間が勝つたのである。軍の指導が國内の利害とは無關係にダラシなく封立するや、國内政治は戰爭の爲の不可缺の準備を放棄し、祖國は蹂躙の危險に脅かされるに至る。當時政治的陀機は誰によつても握られてゐなかつた事はルーデンドルフの論敵によつても知られてゐた。「一九一六年の夏頃、

政治はドイツに於ては正に街頭に棄てられてゐた。」

それを掴む勇氣のある人は、それを得た……。ルーデンドルフはドイツの獨裁者になつた。何故なれば、命令を發する程大膽な人は外にも居なかつたし、彼は、兎に角それを遂行する爲に常に其處に居たからである。この狀態は確かに願はしき狀態ではなく、又正常的でもなかつた。然し、戰爭に於ては單に「規準」に準據する事ではなくて、戰勝の規準に歸着することが重要である。吾々は一九一四年綜合的戰爭指導に對し不充分なる組織を以て戰爭に臨んだことは明かである。その組織は依然多く細密な關係を以てウイルヘルム一世の下に分離されてゐた。

全世界を捲き込んだあの戰爭に於て、カイザーが戰爭遂行の全體の指導權を、內政に於ても、外交に於ても、一手に握り、同時に、ホーヘンツオルレンの傳統に從つて「大元帥」として、軍事的總指揮に當り、陸上、海上の作戰を直接に指導すると云ふ事は不可能の事である。これは人間的能力を越ゆるものである。一人のビスマークも彼の味方に立たなかつた。從つて一八七〇年に於ける如く二人の大人物の間の和解問題ではない。カイザーの拒否のみを語るのは不當である。上述の諸事情は內政的には運命的に自ら作り上げられた如くに理解されてゐるが、こゝではそれ以上に結論する必要はない。內地に於ては、反對に軍事指導に於て堅持された戰勝の意志よりも、平和的和解を何等考へてゐない敵との和解主義の方が遙かに重要視された。(又それを排撃する强力なる政府もなかつた!)この重大なる損失は政治と戰略の不充分なる協力により、又相互の侵犯と等閑視によつて齎らされた。その一例は次の如きである。

戰爭は他の手段を以てする政治の繼續であるとすれば、戰爭の開始及び遂行に對する政治は、一八六四年、一八六六年又は一八七〇年に於てビスマークがそれを理解した如く有利なる前提條件を作り出すことである事を知らねばならぬ。その反對は世界戰爭の場合であつた。戰爭狀態への導入が拙劣であつた事は衆知の通りである。二十ケ國の代表者が遂にヴ

エルサイユの條約に裏書きする迄、我々と戰爭狀態になかつた國で、國名を擧げるに足るものは殆んど一つも存在しなかつた。ベルギー國の中立蹂躪に伴ふ面倒な政治的責任を當時の軍事的用兵に負はせやうとするが、これはベルギーを通過する蹂躙前進を基礎に打ち立てられた作戰計畫にとつては是非必要な前進であつた。これらの計畫は聯邦首相フォン・ベートマン・ホルウエツヒにも、內閣書記官長ヤーゴウに對しても屢々報告され、彼等に何等反對されなかつた事は明白である。特に不幸なる運命は海戰指導に於ける彼の容喙によつてベートマン・ホルウエツヒを躊かせた。大戰の第一期に於て彼の意見即ち海軍は媾和に際し特に牽制的な政治的暴力手段を保留する爲に平和回復まで消耗されてはならぬとした。又潛水艇の無制限使用の決議は——フォン・ベートマン・ホルウエツヒはこの軍事的要求に對して屈服した、——アメリカ合衆國を敵國側に廻すに至つた。これは、イギリスがUボート作戰によつて五ケ月以內に媾和を求めるに至るであらうと云ふ海軍軍令部の豫想に全く依存してゐた。指導部がこの手段に訴へることは無理ではなかつた。政治と戰略との間の不充分なる協力が生んだ結果に對する豐富な教訓實例は一九一八年八月十三日のスパア (Spaa) 會議に於て提供された。軍事的乃至政治的見解に於て必然とされる推定が過去の經驗から引き出されなかつたのは、軍事的狀勢の不充分な確認に由來した。この運命的放棄は時期尙早の休戰要求に至る迄續けられた。國會——一九一七年八月こゝで行はれた惜しむべき平和的決議によつて全世界は吾國の平和要求を擴大させた——干涉は全く邪路であつた、敵國側に於ては政治と戰略との激しい摩擦は世界大戰に於ては全く現れなかつた。フランスもイギリスもこの幸運を分ち持つた、——ドイツに於てはそれと反對であつたが——、そこでは戰爭の經過に於てクレマンソーやロイド・ジョーヂの如き人物が國家の舵を握り、彼等は國民の戰勝の意志を高揚する事を會得してゐた。ジョツフル將軍の見解では戰爭指導は全く軍司令官の任務であつた。彼は政治を障害物として排し、彼の軍隊に對し純粹な軍事問題に關しては大統領に向つてもその報告を示す事を

禁じた。この摩擦は他の理由と共に遂に將軍の罷免を見た。クレマンソーはフオツシユに向つて、自己の主張を通す事が出來た。そして、「默りなさい、私は國府を代表してゐます」と云ふことが出來た。ロイド・ジョーヂは重要なる問題に於ては軍隊を抑へた。西部戰線に於て決戰を行ふべきではないと云ふ確信の下に、重點を東部戰線に置き、ドイツに對する決戰はオーストリーに對するバルカン諸戰線に於て決すべきことを絶えず强調した。イギリス軍の總司令官及び參謀本部は兎も角、西部戰線に於ける一切の力は綜合さるべきであると云ふ彼の意圖を實現させた。參謀本部とロイド・ジョーヂとの間は永續して善くはなかつた。參謀總長ウイルソンはその思ひ出に、いつも「燕尾服」と呼ばれる外交官や政治家について全く自棄的に語つてゐる。イタリーの一軍司令官は一九一六年、削減された軍事豫算について政府と戰ひ遂に勝利した。常に利用するならば最も善き教師である歷史は、政治と戰略、或は政府首腦と軍司令官の相互關係を規定する妥當なる決定的原則は歷史から引き出さねばならぬ事を示してゐる。

兩者は次のやうに緊密に結び合はされ得るのだ。

政治は主として戰爭の發端を決定し、その後始末を行ふ。プロイセンは一八〇五年、大事な瞬間を取逃がして、一八〇六年折惡しく戰爭を始めた。一九一四年のドイツの狀態は、政治的には考へ得る最も惡い狀態であつた。それは決定的な影響を持つ軍司令官の決心の上に掛つてゐた。最大の速力と最短の距離を以て、第一の敵を打倒し然る後第二に向ふ事がその目的とされねばならなかつた。

戰爭の過程に於て軍事的顧慮が優位を占めた。その軍事的成果が決定的であつた。然し、對外乃至對內政策は戰略と共に永く並行して進まねばならぬ。同盟國、中立國への顧慮、思想的、精神的、物質的國力の全部を敵に對して差し向くべき必然性の顧慮、政治的指導の最も尖銳なる緊張を要する他の多くの諸問題の顧慮。

戰爭が終末に近づけば近づく程政治は前面に益々押し出されて來る。それは戰果に應じて平和の時期と方法を決定するであらう。政治は一九一八年の如く、早まつた休戰を急に受諾する事を許さぬ。その役割に適當する政治なくしては勝利的戰爭指導は考へられぬ。政治家と軍司令官の相互の理解及び信賴し合つた協力活動は不可缺のものである。

理論は斯く示し、歷史はかく敎へる。實際に於ては人は屢々一つの妥協點に到達する。政治家と戰略家の權限と任務は個々の場合に於ても絕えず相互に侵蝕し合ふものである。共同動作が得られない場合、より强き者が決定する解決は常にその個人に依るであらう。

オンケン「政治と戰爭指導」(Oncken, „Politik und Kriegführung" 1928)
フオン・スゼパンスキー「戰爭指導としての政治」(Szezepanski, „Politik als Kriegführung" Berlin 1926)
シユルテ「政治に於ける軍事計畫の支配」(Schulte, „Die Herrschaft der militärischen Pläne in der Politik" Süddeutsche Monatshefte, September 1924)
グレーネル「政治と戰爭指導」(Gröner, „Politik und Kriegführung" Stuttgart 1920)
フオン・ブルーメ「軍事政策論」(v. Blume, „militärpolitische Aufsätze" Berlin, 1906)
フライタツハー、ローリングホフエン「政治と戰爭指導」(Freytag-Loringhoven; „Politik und Kriegführung" Berlin 1918)
ルーデンドルフ「戰爭指導と政治」(Ludendorff, „Kriegführung und Politik "Berlin 1921)
•「全體戰」(„Der totale Krieg" München 1935)

戰爭と戰費

戰爭の決勝には、劍が決定的であるとはいへ、金もまた、その進行および終結に對して、輕視すべからざる役割を演ずる。それ故に、財政上の戰爭指導を科學的に論究することは重要である。

こゝにおいて、平和時代の財政經濟を戰時財政經濟に改編するには、如何にしたら最も目的に適つてゐるか、かくてまた、全經濟をば、支拂手段および信用に關する不安なしに、また國防意志を損傷することとなしに運行せしめうるかといふこと、國家は如何なる手段によつて戰費を支辨するかといふこと、最後に、國家は戰債の負擔による經濟の崩壞を如何にして避けうるかといふことが、問題となつて來る。問題の檢討は、戰時財政を動員能力あるように準備し、また平時經濟を戰時經濟に改編する必要を示すであらう。

以前の戰爭の巨額な戰費は、問題の重要性を明かに示してゐる。一九一六年のアメリカの評價によれば、戰費は次の如き額に達した。（單位百萬マルク、括弧內は戰爭繼續日數）

◇英佛戰爭（一七九三年――一八一五年）……………二五〇〇〇百萬マルク（八一六八日）
◇クリム戰爭（一八五四年――一八五六年）…………六一〇〇百萬マルク（七三四日）
◇合衆國の內亂（一八六一年――一八六五年）………一四八〇〇百萬マルク（二四五六日）
◇獨佛戰爭（一八七〇年――一八七一年）……………三〇六〇百萬マルク（二九八日）
◇露土戰爭（一八七七年――一八七八年）……………三八〇〇百萬マルク（三三四日）

◇米西戰爭（一八九八年、合衆國のみ）…………六六〇百萬マルク（一一〇日）
◇ボーア戰爭（一八九九年――一九〇二年）……五〇〇〇百萬マルク（九六二日）
◇日露戰爭（一九〇四年――一九〇五年）………六三五〇百萬マルク（五七六日）
◇バルカン戰爭

以上を各國別に振り分けると次の額に達する。

◇イギリス（一七九三年――一八一五年）…………八六〇〇百萬マルク
◇イギリス（一八五四年――一八五六年）…………一四〇〇百萬マルク
◇フランス（一八五四年――一八五六年）…………一三〇〇百萬マルク
◇プロシア（一七五六年――一七六三年）…………四二〇百萬マルク
◇プロシア（一八六四年）……………………五六百萬マルク
◇プロシア（一八六六年）……………………二五九百萬マルク
◇ドイツ帝國（一八七〇年――一八七一年）………一五六〇百萬マルク
◇フランス（一八七〇年――一八七一年）…………一五〇〇百萬マルク
◇イギリス（一八九九年――一九〇二年）…………四三〇〇百萬マルク
◇ロシア（一九〇四年――一九〇五年）……………三二九二百萬マルク
◇日本（一九〇四年――一九〇五年）………………三〇六〇百萬マルク

戰爭の財政は、當該國家の經濟組織の如何に從ふものである――すなはち、プロシアにおいては、フリードリヒ・ウィ

ルヘルム一世以來、國庫制度（Staatsschatz）が設けられた、すなはち戰爭の場合には、現金で支出せられるといふ規定をもつて、平時に金が蓄積された。フリードリヒ・ウイルヘルム一世は、八百七十萬ターレルを蓄積した國庫を後に遺した。フリードリヒ大王は、戰爭を行つたに拘はらず、これを五千萬ターレルとしたが、ナポレオン一世に對する戰爭の期間中に、國庫の金は全く使ひ果たされ、一八二三年以降においてそれは新に再建された。それは、一八六六年には二千百萬ターレル、一八七〇年には三千萬ターレルに達した。一八七〇年十一月十一日の法律に基き、それは、帝國軍用金（Reichskriegsschatz）として、一億二千萬金マルクの額をもつて新に設立され、一九一三年七月三日の法律に基いて、二億四千萬金マルクおよび一億二千萬銀マルクにされる筈であつた。この最後の强化は、單に心理的意義を有したにすぎなかつた。それは、戰爭勃發の際における金融の安全を保證し、且つ信用諸機關への大衆的殺倒を防ぐのを目的としてゐた。

未だ自然經濟の段階に立てる國家で、戰爭資金が存在してゐなかつたところでは、戰爭の財源は、紙幣發行の增加に求められなければならなかつた。そこでロシアは、解放戰爭、クリミヤ戰爭、露土戰爭をば、紙幣發行の增加によつて行つた。日露戰爭に至つて漸く金兌換は停止される必要がなくなつた。

西歐列强の典型、特に一八七〇――七一年の獨佛戰爭において危機の迫つた時に、フランス銀行が爲した救濟活動は、一般的兵役義務を有する大國をして、その保全のために、中央發券銀行の許への金準備の蒐積を顧慮せしむるに至つた。既に世紀の轉換期の頃に、國民軍召集（Massenaufgebot）ならびに軍事の技術的完備は、必要なる時代における中央發券銀行の信用の强度の緊張によつてのみ現金とされえられたほどの金額を要したといふことを示してゐる。たゞイギリスのみが最後までこの競爭に參加しなかつた。といふのは、イギリスには、數百萬の軍隊が存在しなかつたし、世界の最も重要な金生產地が領有されてゐたし、且つまた全世界を包括するその商業網のお蔭で、いつでも迅速に巨額の金を集める

ことができたからである。

一九一四年度末における金準備（單位十億マルク）

イングランド銀行	〇・七七五
フランス銀行	三・二八
ロシア國立銀行	三・四五
ドイツ中央銀行	一・二五
オーストリア・ハンガリア銀行	一・一〇

解放戰爭は、戰爭遂行に必要な金を調達し且つこれを長期間に亘つて返濟するために、王侯の個人的借入金に代つて國債を出現せしめた。英國の國債は、解放戰爭の終りには、約百八十億マルクに達した。この國債は、クリミヤ戰爭に至るまでには百六十一億六千萬マルクに減少せしめられたが、クリミヤ戰爭およびセポイ叛亂（Sepoy-Aufstand）によつて百六十七億六千萬マルクに增加した。それは、ボーア戰爭に至るまでには、百二十五億マルクに減少したが、ボーア戰爭によつて再び百五十四億マルクに增大した。その時から一九一四年七月に至るまでに、それは、再び百四十二億マルクに減少せしめられた。

フランスの國債は、自由戰爭（ナポレオンに對する一八一三――一五年の戰爭）の終つた時には、約十億マルクに達した。それは、ナポレオン三世の優越政策（Prestige-politik）によつて、一八七〇年までに、約百十億マルクに增加し、一九一四年には約二百七十億マルクに達した。

ドイツ帝國は、フランスの戰費賠償のお蔭で、北ドイツ同盟および聯邦の軍事公債をば、現金で償還することができ、

かくて負債のない國家として、列强に伍するに至つた。ドイツ帝國の負債は、一九一四年七月までに四十九億八千萬マルクに增大した。同時に、聯邦は約百六十億マルク、自治體および自治體聯合は七十五億マルクの公債を有するに至つた。前者は、その大部分が、鐵道の如き企業投資のために、後者は、その半分までが、瓦斯や電氣事業の如き企業投資のために、借り入れられた。

九十年代の初頭以來到る處に現はれた帝國主義は、人口の增加においてもドイツと比肩できなかつたフランスにおいては、諸外國へ金を貸附けることによつて、その全力を盡した。パリの取引所においては、外國の公債は、政府の承認なしには相場表に載せられなかつたから、政府は、自國の必要を超過する貯蓄資本を支配することができた。フランスの一統計は、一九〇八年度における國民の外國有價證券所有額をば、三百八十四億フランと計算した。その內譯は、百十億フランが、ロシアの有價證券、三十六億フランがオーストリア・ハンガリアのもの、三十億フランがエヂプトの公債、更に二十五億フランがトルコのもの、オランダ、スウイスおよびポルトガルの有價證券がそれぞれ十四億フランづつ、更にイギリスおよびベルギーの公債が各十二億五千萬フランづつ、最後に、アルゼンチン、バルカン諸國およびスペインの有價證券が各十億フランづつになつてゐた。かくの如く、世界中の殆んどすべての國々が、フランスから借金をしてゐるのに、フランスは、ドイツに對しては、いふに足るほどの長期に亘る投資をば、行はなかつた。これに反し、ドイツ工業の資本需要——それは高い利子率によつて示めされた——は、一時的に巨額なフランス資本をば、短期間ドイツに投下せしめた。一九一一年におけるモロツコ恐慌に際して、フランスの諸銀行は、政府の合圖により、ドイツに投下した十億マルクに上ぼる短期資本をば、即座に全部引上げ、その時以來、ドイツへ巨額の投資をすることを避けた。

軍事公債と相並んで、解放戰爭以來、イギリスは、軍資金をつくる (Kriegsfinanzierung) 目的をもつて、增稅を行つ

費用の三一パーセントは、租税によつて調達されたのであつた。

フランスにおいては、稅の申告に對する傳統的な反感と結びついた舊式な租稅制度が、戰時稅の賦課を禁止した。ドイツ帝國においては、帝國と聯邦との間の財政調整に際し、かゝる目的に特に適切な一般的所得稅は、元のまゝ聯邦の收入とされ、そして大なる不公正なしに增額されうるようには統一されなかつた。

一般の見方によれば、世界大戰は不可避的だと見られてゐた時、國內および外國の取引所には、賣註文が殺到した。特に有價證券所有の保護のために、一九一四年七月二十七日に、ウイーン、ブタペストおよびブリユツセルの株式取引所が、その翌日には、ペテルスブルグの株式取引所が閉ぢられた。七月三十日には、この例に倣つて、既に七月二十七日に取引の一部を停止してゐたパリの株式取引所ならびにニユーヨークの株式取引所が閉ざされた。七月三十一日には、同樣にしてベルリン株式取引所の立會が當分停止され、同日にまた――イギリス世界帝國の歷史上初めて――イギリス金融力の主要機關にして且つ國際支拂決濟の中心點たるロンドン株式取引所までも閉ぢられてしまつた。

一九一四年八月の最初の日に、一切の參戰國は、戰爭遂行のために金の現存額を保持するため、金兌換を停止した。たゞイギリスのみは、その海外における所有を顧慮して、金兌換に制限を附してこれを困難ならしめはしたが、完全に停止はしなかつた。ドイツ帝國においては、帝國議會は、一九一四年八月四日に、九十年代の初頭以來準備され且つ幾倍にも擴大された戰時財政緊急法（finanzielle Kriegsnotgesetze）をば、滿場一致で通過せしめた。これら五つの法律は、互ひに相關聯して一の全體をなすものであるが、それは、金融動員の目的を追求するものであつた。それは、ドイツ帝國銀行をば、貨幣および信用の最後の源泉として、戰爭により課せられた新しい困難な任務を果たすことのできるような狀態に

置くことを目指したものであつた。この重大な法律案の實施は、その存立のための戰鬪を餘儀なくされたドイツ帝國にとつて、非常時局によつて必要とされた强制的處置たることを示めすものであり、四十年間通用した金本位制の原則からの轉換ではあるが、しかし緊急法令によつて生じた高度の彈力性なしには、帝國銀行は、國防力の動員のために、二十二億七千萬マルクに達する必要な金を、一ヶ月の必要な期間に調達することはできなかつたであらう。

經驗によると、戰爭開始の際には、通貨に對する需要は增大し、しかも或る商品は、その價値よりズツト以下でなくては賣れないか或は全く賣れなくなるのが常であるから、プロシアの大藏省は、旣に一八四八年の不穩なる時代および一八六六年と一八七〇——七一年の戰役中に、生活必需品の經濟部門の支拂能力保持のため、貸附金庫（Darlehnskassen）を設立した。これは、在庫品および有價證券を擔保として、個人經營に短期の貸附けをなし、且つ認可された貸附額に對しては、特別の貨幣徵證たる『貸附金庫證券』を發行した。

この貸附金庫は、貸附金庫法に基き、帝國銀行と緊密な關係をもちつゝ創設された。これと以前の貸附金庫との相違は次の點にある。すなはち、この貸附金庫證券は、銀行法の保證規定に關しては、帝國金庫證券と同視され、且つ發行證券の最高限度は以前からズツト定められてゐた（一九一四年度は、一八七〇年の九千萬マルクに對し十五億マルク）。非常立法によつて、ドイツ帝國においては、國民が武器を把つた危急存亡の秋に、銀行の窓口は閉ざされる必要がなかつたし、從つて誰でも完全に支拂を受けた。パニツクの程度は、官邊の人々にとつてすらも驚くべきものであつたに拘はらず、モラトリアムの發布によつて緩和された。何故なれば、百萬の軍隊の戰鬪力は、經濟の活動に依存してゐるように見えたし、また經濟の戰時編成は、金融技術上の事件によつて妨害されてはならなかつたからだ。この決定は、例へば外國貿易の際或は敵の侵入によつて惱まされてゐる帝國の一部において、戰爭遂行の利益のために必要だつた如きところに干涉す

ることを妨害しなかつた。帝國銀行の重役の意見によれば、貸附金庫およびその他一切の緊急信用の創設の際には、主として、以前の信用懸念が正しくなかつたといふことを、廣般な信用授與によつて示めすことに懸つてゐた。

各國の對外關係においては、一切の信用の動搖は、國内商業におけるよりも、遙かに敏感であつた。信用および帳簿記入の方法による支拂の代りに、再び現金取引すなはち金での支拂が行はれるようになつた。緊急法發布により制定された、帝國金庫證券、帝國銀行券および補助貨幣の金兌換の停止は、ドイツ金貨をもつてする金塊賣買、打歩附賣買(Agio-handel)および金塊の輸出の禁止によつて補足された。帝國の戰爭資金は、帝國銀行(ライヒスバンク)に委託され、帝國銀行の金在高は一九一七年七月十五日には二十五億三千三百三十萬マルクをもつて、その最高點に達し、且つ一九一八年末には、尚ほ二十二億六千二百萬マルクに達してゐたといふ結果をもつて、國民の祖國愛に訴へられた。

既に戰爭の最初の月に、推定による戰費の豫算は、遙かに實際の費用の足許にも及ばぬものだといふことが明かになつた。すなはち實際の戰費は、戰爭の初年度において、一ケ月平均で約十七億マルク、第二年度においては二十億マルク、第三年度には三十億マルク、四年度には三十八億マルク、そして最後の五ケ月間には四十四億マルクに達した。必要資金の總計は、一九一八年十二月三十一日までに、一千四百七十三億マルクに達した。この數字は、しかし、戰爭支出以外のものを含んでゐる。といふのは、既に平時において成立してゐた陸軍、海軍および植民地に對する正規の費用が、戰時支出の勘定に移されたからである。

教授ワルター・ロツツ博士(Walter Lotz)は、ヨリ詳細なる計算に基き、總額を一千三百七十四億八百萬ドルと算定した(イギリスの戰費は一千三百十億、フランスが一千百四十億、ロシアが八百三十億、アメリカ合衆國が一千四百七十億マルク)。

戰爭遂行に必要だつた金額は、總額一千三百九十四億九千九百萬マルクが、戰時信用の形態において、立法機關によつて承認された。帝國政府は、その時々に必要な額をば、全權を委任された範圍內で、國庫證券（Schatzanweisung）の發行により、帝國銀行から借り受け、帝國銀行はまた帝國銀行で、紙幣の膨脹を避けるために、半年毎に規則正しく、所謂軍事公債を募集した。

帝國の確實な戰債總額は、一九一八年十二月三十一日までに次の如き額に達した（單位十億マルク）。

◇五分利附國庫債券（Reichsschuldverschreibung）　額面金額…………七七、七八〇四

◇五分利附國庫證券（Reichsschatzanweisung）　額面金額…………一一、三二〇三

◇四分半利附國庫證券　額面金額…………八、八八七四

合　計……………………八八、九八八一

公債は、所謂國民引受（Nationalsubskription）として、すなはち發賣することなしに、銀行團に發行される。全部の銀行、貯蓄金庫、後には郵便局までが、取次ぎをするようになつた。應募は自由意志であつた。がしかし、曾つて見なかつたような勸誘運動が展開され、且つ遊んでゐる金を出來るだけ公債應募に集中させるために、取引所における相場は官權によつて確定され、このことは戰時中を通じて行はれた。だがそれにも拘はらず、一九一六年秋以降は、所謂一時借入金（Schwebende）が增加するのを防ぐことができなかつた。この一時借入金は、一九一八年十二月三十一日には、五百五十億六千萬圓に達した。

戰爭は一九一五年中には終結するだらうといふ假定の下に、一九一六年の會計年度に對し初めて稅法案が帝國議會に提出された。――すなはち、郵稅および電信料と共に非常時の增額された國稅たる積荷證券稅、それから煙草稅の增額およ

び賣上税に轉化された收入印紙税がこれであつて、それによる收入は五億四千萬マルクであつた。

その上に尙ほ、戰時利得税法の草案が提出された。戰時税法は、個人に對しては財産增殖税、會社に對しては剩餘利得税を規定してゐた。

一九一七年の會計年度に對しては、石炭税法、人および貨物の交通の課税に關する法律、十二億五千五百萬マルクの戰時税の增額に關する法律が、新徵收を目論んで、帝國議會に提案された。戰時税とそれに對する附加から、總計四十八億八千八百萬マルクが入つた。

一九一八年の會計年度に對しては、再び飲料水——葡萄酒、三鞭酒、鑛泉水、レモナーデ、ビールに對する强度の課税コーヒーおよび茶に對する增税および火酒專賣を規定する一連の法律が、帝國議會に提案された。更に、帝國印紙法（取引所税）および手形印紙法の改正によつて、收入增加が企てられ、郵税および電信料と共に增額された帝國租税および戰時税が强化された。かくて收入は、總計四十三億八十一萬マルク程度と見積られた。この大部分は、實施が餘りに遲れた結果、戰時支出の低下に對して、新税はもはや現はれなかつた。

以上を要約して次のことを確認しうる——すなはち、戰爭においては、國際支拂決濟のために、金は、卓越した役割を演じたが、しかし、一切に卓越するその役割も、スウェーデンが金輸入を禁止した時に、一の衝擊を受けた。しかもこの金輸入禁止は、金インフレーションに對する恐怖からではなくして、英國に對する商業政策上の防衛處置として行はれたのである。すなはち、英國は、スウェーデンに對するその負債をば、金をもつて支拂ふが、中歐諸國に對する經濟戰のために使用せんとして、或る原料、特に脂肪をスウェーデンに送ることを抑留しようと欲した。戰爭軍資金の概念は、過去に屬してゐる。フランス銀行の金準備が頂點にあつた時は（一九三四年十月に百三十五億五千五百萬マルク）、戰時および

平時における經濟の需要を越えてゐた。これに反して、世界經濟に織り込まれてゐる諸國家にとつては、もし人爲的な封鎖の危險を受けまいと欲するならば、或る程度の金準備は缺くべからざるものである。

かくて、支拂手段の準備は相共に行はれなければならない。一九一四年以前の時代には、銀行法の制限的規約を一部分無効ならしめて發行された支拂手段が、世間から拒否されはしまいかといふことが非常に恐れられてゐたので、經濟界が平時において銀行券の使用に慣れることを大いに重大視してゐたものであつた。しかし、世界大戰が勃發して間もない時既に、今日の經濟界は、支拂手段の使用なしにはやつて行けないといふこと、從つてこれを拒否することは全くできないといふことが判つた。

世界大戰は、國防支出が甚だしく高められる前に勃發したのだから、かゝることとの繰返へしは不適當のように見えた。この怠慢は悲しむべきことであつた。何故なら、近代戰は、展開（Aufmarsch）のための交通手段の押收の結果および既存の貯藏品の戰時經濟への引渡しの結果、すなはち不生産的目的のための消貿の結果、財產の減少を來たしたからである。この事實は、既存の財產の幾パーセントかを特別稅として徵收することによつて、考慮された。更に、政治上の指導者が、一般物貨購買券たる『貨幣』を充分に供給するための最も簡單な手段は、直接稅の增稅である。イギリスは、この點では最も徹底的にやつたが、しかし二五パーセントといふ理論的に必要な程度まではまだナカ〳〵達しなかつた。しかのみならず、イギリスは、或る種の奢澤品に對する增稅により國庫收入を增加させ、同時に戰爭遂行のために消費を制限せんと試みた。イギリスは、租稅問題では最も徹底的なやり方をしたにも拘はらず、所謂戰時利得、すなはち、たゞ戰爭景氣によつてのみ生ずる異例な利得——しかもその利得は合法的な企業家よりも、その場限りの企業家所謂際物師(きはものし)（Schr-eber）によつて占められる——の發生を妨げることはできなかつた。

各交戰國は、戰時利得の課稅に對して、長い間、こゝに問題となるような顧慮を拂はなかつた。すなはち、兩軍に屬する强國群は以前の戰爭の例に倣つて、一九一五年末までは、決定的な金融操作を無用なものたらしむるに適した戰爭賠償金の獲得を望んでゐたのであつた。中立國、なかんづくスウエーデンが、戰時利得の課稅の問題に着手した時、イギリスおよびドイツ帝國は、輿論の壓迫に從つて、同樣にこの問題を取上げた。

戰費の調達をば、自由意志による公債の應募により、從つて國の首腦部が、それの減少を恐れてゐたドイツにおいては、この問題は、工業にとつては、稅額の全部を商品の價格に轉嫁しうるような寛大な仕方で解決された。戰時利得の後からの修正は、常に遲れるので、戰時利得の發生に對抗するには、原料の差押へ、半製品の管理、勞賃勘定の統制、爲替管理の集中化および企業者利得の制限より外に手段がなかつた。費用を公正に分割するために必要な廣般なる課稅を行ふ場合にも、將來といへども公債なしにはやつて行けないであらう。

各國から驚嘆されたドイツの規則正しい公債募集の成功は、他の場合には望ましからざる世界市場よりの閉め出しによつて可能ならしめられ、且つ大部分まで、原料および食糧貯藏が最早や補充せられえないといふ點に基いてゐたのであつた。ますく費用の多くかゝる技術の進歩と豫測し難いほど長期に亘る戰爭繼續期間とを考慮に入れゝば、事情によつては、インフレーションを招來するところの一つの或は多くの方途を全く避けることはできない。しかし、この方途は、長期に亘り、大衆に對して、眞實の經濟的な戰爭の結果を陰蔽して置くといふ利益をも提供するものである。大して過度でないインフレーションは事情によつては、經濟の恢復を促進し、且つ國內における國家の負債を輕減する。だがしかし、それは、一般的な窮乏と經濟の崩壞を防止するために、適時に行はなければならない。

戰爭が終つた時、ドイツ帝國の財政狀態は決して絕望的なものではなかつた。狀態を整備することは、もし戰勝國側が

經濟上の條理に順應することに同意したなら――そしてそれは結局のところ彼等自身の利益だつたらう――大して困難ではなかつたであらう。

參考書。カーネギー・ステイフツング――『世界大戰の經濟=および社會史』(Carnegie Stiftung: „Wirtschafts-und Sozialgeschichte des Weltkrieges")。

ヘルフエリヒ――『日露戰爭における貨幣』(Helfferich: „Das Geld im Russisch-japanischen Kriege")。

同　――『世界大戰』(„Der Weltkrieg")。

同　――『貨幣』(„Das Geld")。

クナウス――『ドイツ、イギリスおよびフランスの戰時財政』(Knaus: „Die deutsche, englische und französische Kriegsfinanzierung")。

ルードウイヒ――『戰爭遂行と貨幣』(Ludwig: „Kriegführung und Geld")。

バントレン

海軍政策

海軍政策は國防政策の一部である。之が國防政策と同一轍にあつて、國家の全政策に、特に對外政策に如何なる影響を與ふべきものであるかといふことは、海軍政策がその國家の活動に於て如何に實踐されたらいゝかといふ問題にかゝつてゐる。海軍政策は戰時のみではなく平時に於ても擁護且つ進展の意味からなる領土的海上權を基礎づけることを使命とする。またこの海軍政策が何の程度に汎つて行れ、他の利害が如何なる範圍でこの海軍政策の利害に匹敵し更に從屬することが出來るものかといふ點は、その國の海上權の意義によつて定る。英國の如く世界的帝國の國家形態を持つものにとつては、海軍政策はその國の組織や歷史的經歷によつて殆ど對外政策と同樣の意義を持つてゐる。之に反して、ヨーロッパ大陸中の諸國にとつては海軍政策を國防並びに外交政策の規準に加へることは甚だ難しい。若し吾人が陸、空、海の夫々の性質を思ひ浮べるならば此のことは直ちに明白になるであらう、即ち國防政策の第一の使命は夫等を擁護することにあるのである。大陸國の陸上及上空の境界は主として直接隣國との平時及戰時の諸關係を仲介としてゐる。之に反して「海上の隣邦」は何れかで海に面してゐる國は總て之に相當する。夫故に之等の諸國が夫々艦隊を有してゐる限り、自國の海軍政策の範圍にあるべき我々の海岸線を窺ふことも出來るわけであつて、之がために同盟國の數或は敵國の數は海軍政策にとつて當に數倍に擴大するのである。故に、海軍政策の課題は決して自國沿岸の保護を以つて事とするものではない、寧ろそれ以上に、自國沿岸を越へ海境を越へて殖民地乃至は原料供給地等の最前線にまで到る、國民の生活要素及資源の擁護をなすべきものである、といふ結論に達する。自國の利害を脅すところには總て、その權力を現すことが出來且つそ

の必然性があるといふこと、即ち艦隊の遍在は海軍政策上全世界を與へ、それがまた海軍政策をして他の國防政策の分野よりも遙に同盟國や外交政策の相手國に對して有效ならしめてゐるのである。斯うしたことから、海軍政策は國防政策との關聯によつてのみなされ得るものとなるのだが。他方に海境を有せず海軍も有しない國家は自己の進展並びて利益の損失のためにも、たゞ大陸政策を以つて滿足しなければならない。海軍力なくして國防政策は考へられないと同樣に、海軍力の進展は國防政策以外にその根底を有するものとは考へられない。大陸政策は陸軍力を賴みとするが、國防政策は海軍力に依據するものである。しかし海に面した國家や、工業並びに經濟を通じて海上からの輸出入を仰ねばならない國家であつて、國防政策を放棄して了へる等とは考へられる筈はない。「海に無關心なるものは此の世の宜なるものから閉ざされつゝ、また吾等が神の繼子なり。」(フリードリツヒ・リスト)しかしながら、前十九世紀半より二國家間の通商特に海上通商が著しく發達したために、ヨーロツパの大陸諸國に於て經濟組織に根本的變化をきたしてゐる。今日では夫等の諸國は商業、經濟、財政の諸關係や政治的關係を通じて世界的經濟と最も密接に結び付てゐるのである。こゝに現れた多くの可能性を勝手に放棄して了ふことは、假りに經濟的に有力であると考へられたとしても、その國は二流國となることは爭ひ難いであらう。

海軍政策を行ひその掌にあたらんとする者は先づ海上權の概念を把握しなくてはならない。之は一方では海上の利害關係即ち海上に於る總ての經濟的、文化的、また政治的な國民の利益を拖し、他方には海上力即ちその國民が之等の利益を擁護するために敵効力から免るべき可能力、乃至は海上を或ひはその一部を、武器を以つて制する艦隊の軍事力を含むものである。言ひ換れば、一國家の制海價値はその國の經濟上、政治上の海上利害を評價すべきその程度により、また如何なる程度の兵力が利益擁護のために天秤にかけ得るか、といふ點によつて定るのである。前者は後者なくして存續するも

のとは考へられず、兩者は相互に持ちつ持たれつの關係にある。即ち海上利害と艦隊の展開は密接な相互關係に立つのである。最初のローマ・カルタゴ戰爭に於るローマ人、十六世紀に於るオランダ、十八世紀及二十世紀初頭に於るロシヤ等がとつた如き、純粹な武力政策を目的とした艦隊は永續的ではなかつた。しかし夫れとは逆な殖民地の開發や、强力な通商艦隊及海外利害關係の進展等にとつても、戰前の獨逸海軍力は充分とは言へなかつた。戰爭勃發と共に一擊にして通商艦隊を失ひ殖民地を失つて了つた。それにも拘らず、海上利害はそれを戰爭に對して犧牲にする覺悟を以つて、平時に領土內で得てきた無限の資財を國家の全汎的兵力强化に利用するために進展せしめるといふことも合目的政策として考へられるものである。もとより之は、怖るべき急轉に際して避けることの出來ない應急策にすぎないが、特に斯ふした進展は海上に於る有力な競爭者の貪慾を、戰爭の危機に至るまで押上げるものであらう。翻つて、艦隊が海上利害の擁護を顧みず軍事的武器としてのみ現れる場合も考へられる、即ち戰爭相手國が陸上に於る地理的な、あるひは保壘による抗し難い障害の故に、生命線上にある海路乃至空路に於て遭遇するかも知れないやうなときに起るものである。勿論、斯ふした艦隊の形式が、高度に發達した通商航海や夫れに結びつく船舶及機械工業の、技術上及人員上の基礎がなくとも行ひ得るかどうかは——帝政ロシアのことが思ひ浮ぶであらう——甚だ疑しいものである。何故ならば海上價値の骨支をなすもの、即ちそれの最も自然な且つ最も健全な要素は、造船及機械製造工業や海上からの輸出入に關する實業的活動範圍を伴つたところの、航海術、海上貿易、漁業等がそれである。海外諸國との物質的精神的資財の交易について刺戟が强くなり、またそれが自國の殖民地であるか或ひは他國の原料供給地であるかといふ點や、更にまた海外に於る自國民の活動範圍及活動分野が擴大するときには、所謂制海權の骨支たるものも益々重大となるであらう。

制海權の進展は屢々自然條件を伴つてゐる、即ち第一に斯ふしたゲオポリティシュな特質を帶びてゐる。領地の狀態が

その海軍の進路を規定するに極めて本質的なものとなるのである。若しその領土に擴伸能力がなく、領地防衛についての施設及消費が僅少であるときは、即座に海洋での行動に根本的支障が起る。この點では英國はフランス及ポーランドに對して非常な有利な位置を占めてゐる。ポーランドの兵力は、その領土的獨立を維持するについて大陸軍を必要とするためにその國境の極めて僅な地域でありながら、人口的にも殆ど瘁盡を極めてゐる。フランスの制海權に對する進展は、その戰略的に有利な事情にあるにも拘らず、一途に領土征略を目標とした政策のために屢々蹉跌をきたしてきた。之等は制海權の開發にとつて何等殘すところのない力と費用の浪失であつたが、更に海洋を根氣よく巧みに運用することによつて當然得られるべき多くの資財を消滅させたのであつた。

しかし自然的事件が一國の海上價値の增大又は低下について決定的であるばかりではない。寧ろ權力を占める指導者乃至は爲政者の粗雜な、愚な政策がこの海上價値の開發をして、あるひは自然の標準以上に高めあるひは低下せしめるといふ分岐點に立つものである、即ち前者に屬するものとして、コルベール及チルピッツの名があげられる。

フランスのイギリスに對する立場は、イベリア半島によつて別れた二つの海洋に面し寧ろ不利な狀態にあつた。ブレスト及ツーロンの兩艦隊の結合はフランスの重大な戰略的問題であり、大平洋と大西洋との兩海軍力の連繫は合衆國にとつての重要問題であり、獨逸にはバルト海と北海との聯合があり、ロシアにとつてバルチック艦隊と黑海軍との結合が問題となる。しかし之に反して英國のみは島國の地理的利益から、一方には北海やバルト海にのぞむ諸國の公海への門戸を扼し、他方には大西洋に出やうとするフランスの海路を掌中に握つてゐる。獨逸及伊太利の海上戰略的事態はフランスよりも更に惡い。兩國共に直接公海に面せず、一方はズント及ベルテの如き重要な入口を、他方はジブラルタルの通路を、他國によつて占られてゐるのである。勿論かうした狀況の不利益さは、戰爭に際して始めて重大な結果を齎すものである

が、たゞ經濟的にはその貿易航海にとつて何等障害をあたへてはゐない。この關係で、北海や、バルト海、地中海、黑海等の海岸に港を持つてゐることは種々の點で更に有利であるが、尙公海から極めて遠隔あることが大陸諸國の重要な商通區域や經濟地域に接近してゐることで相殺されるために一利益を齎すわけである、殊にそれ等の港が、特に獨逸にとつて有利なことには、國內商業集結の便を持つところの、航行の出來る河川の河口に位置してゐる時には一層有利であらう。これ等の港こそが實際的な海上價値の根源である。それ故に海岸線が多いといふことは、海上航行の進展にとつて、前に記した樣な條件を備へてゐることよりも規範的であるとは言へないのである。國民が制海權の進展について惱む次ぎの原因は、氣候の嚴厲さであり、土地埋藏物の不足や、生活についての高度なる要求、人口の甚しい增加等がそれである。之等は悉くが海上への活動慾を萠えたゝせ計畫心を唆るものであるが、斯くして航海することが國內生產と外國原料との間貧の不可缺な融合を作り上げ、又海軍力を發成せしむるのである。和蘭の繁榮は彼の制海權によるものであつた、卽ち彼困さと領地の狹隘さとがそれに對する最初の動機を與へたのである。英國は航海なくしては悴滅するの外はなかつたが、和蘭とても同樣であつた。之に反してフランスにあつては、豐な埋藏物を持ち、氣候の溫順を得、滿ち足りた國內經濟と人口增加の僅少さを利して、大陸的發展をとげてきたのであつた。斯ふした關係の中には國民性との深奥な相關作用が存在してゐる。若し平時に於る廣大な海外貿易が、實際に海軍の最も重要な中樞の一つであると考へるべきであるとすれば、過去の時代に於て海上に覇を稱へてゐた國民には、通商計畫や殖民地建設は有先的立場にあるわけであらう。之は殆ど例外なしに歷史が證明してる。ローマを除いては之に反對な本質的例證は見當らない。益々多くのものを獲得するためにその領有せるものをも賭してやるやうな大膽さによつて、吾人がそれによつて活動出來るやうな或るものの產出を招來し又は前提とする如き行動をなすといふ傾向は、制海價値の構成に重大な影響を與へるところの國民的特長である。しかして

の種の最も有利な諸條件とても、統治の衝にあたる者が適當な海軍政策を通じてそれを利用することを辨へてゐない限りは何等價値はないのである。

かうした點で、クロムウエルの有名な航海行動は、大指導者乃至は爲政者がその目的を熟知して行つた、海軍政策の實際的大行爲であると稱することが出來る。それが英國の所有であらうがまた關係產出國の所有であらうが、英國及その殖民地への輸入は總て船舶によつてのみ行ふべきである、といふことを定めたこの命令は、貨物船航行に優位を占めてゐた和蘭に對抗するものであつた。クロムウエルが君主政體のもとに長く權力を占めてゐたことは英國にとつて極めて有利なことであつた。コルベールはリシユルウの政策思想を繼承する者として、驚異的な組織指導によつて實際に生產、航海、殖民地の助成を行つたが、それがため英國と和蘭とは多くの人員を費したのであつた。特にこれの成長は將來に期するところがあつたのであるが、永續しなかつた。彼は國王の知遇を失ふと共に、海軍創設のこの大計畫をさげたまゝ失墜するに至つた。

統治するといふことはその政策によつて海上權の開進についての國家的能力及根本的基礎を促進するかあるひは抑壓して了ふかすることが出來るのである。若しそれが促進することを決した時には、その政策は航海の重大性やそれと關連する利害の重要性に匹敵するやうな、戰時海軍をも開發且保持しなければならない。また後者の場合は、發展した通商航海もないのに有能な海軍を强化することが殆ど不可能である。ルイ十四世の如き獨裁君主によつてなされた純粹に軍事的な海軍の創設は、それが如何に秀れたものに見えても所詮根のない植物の如く、軈ては萎え縮んでゆくであらうといふ點は歷史上に屢々現れてゐる。海上利害に資すべき國家政策のみが海軍の前提條件となるのである。海軍力は先づ二つの要素

の結合によつてなる、即ち海上利害と艦隊である。それは廣義には軍事的及政治的力である、即ち國家がその海上權を顧んで戰時に、平時に活動をなし得るところの力である。それがため、艦隊力の程度は戰時及平時に於る保護すべき海上利害、更に想定敵國の數及兵力によつて定り、また一般的には戰略上の條件、特に自國と敵國との海上兵力の均衡に規範的な地理的條件に應じて異る。之等は總て豫測的見地に立つた政策を求めてゐるのである。何故ならば海戰の特質は、戰鬪の複雜性や訓練の困難、據地からの不可分性を伴ひ、戰爭遂行のある部分で有効な即興策も他の部分ではそれ程でもなかつたりするやうなことがあるからである。之等は特に艦隊基地問題に屬するものである。海上での國民の利害關係が廣汎にわたつてゐれば、それの保護は益々困難となり當然適當な據點の設置が必要になる。斯の如き必要は昔から大海軍力の對外政策に關する基地政策が、重要な、時には決定的な役割を演じてきたことを意味してゐる。自國艦隊基地の設置につい て可能性を失つて了つた海軍はその基地政策に替る協約政策をとることが必要である、即ちそれによつてその海軍は戰爭に際してはその協約國の基地を利用することが出來るわけである。適當な基地を持たぬ艦隊は、それが假りに戰爭に際し領土占領によつて斯ふした基地を得られるかも知れないとしても、有能な海軍力の武器とは言ひ難い、しかし別な立場から協約政策は屢々海軍政策の根本的構成要素となることがある。海軍力の効力範圍は、重要な間接的効果例へば經濟封鎖の如きを除いては、敵國の沿岸に至つて止る、しかしこの戰を決するまでに至つてゐない効力をそれ以上に發揮するためには、特種海軍の、英國のそれの如く、陸戰隊が用ひられる。故に特種海軍は常に完全な陸軍力を指令する同盟者の協力に依賴するところが多いのである。この協約政策は大海軍艦隊の遍在により、またそれが海上到る處に出沒し得るといふことによつて本質的助力を得るものである。斯の如く協約國を得やうとの努力が、昔から大海軍の對外政策を、特に英國のそれを支配してきたのであつた。吾人はこの意味から、對外政策と海軍政策は多くは同一物なのであると言ふことも出

來やう。かうした努力の結果は、對外政策に闘する國策も、大海軍の存在によつて特別な規準にまで進展せしめられ、また爲政者にはその思考が、國内にではなく全大陸に走る者——ピットを思ひ起すであらう——が現れたのであつた。ボンペウスやシーザー、更にグスタフ・ヴアザー、クラムウエル、ナポレオン等の如き人物は常に、海に境する國家にして海軍力を除いてその國力を維持することは困難である、との正當な認識から、海軍力の復興に努めてたのであつた。それで今日では、何かこの範圍での海軍力に、全ぷく的に信頼を持つたり、又勝手に自國の海軍を全く放棄して、ある「自然的要害」に頼つてゐるが如きは甚しい誤りである。歴史上には、極めて多くの國家がその制海權獲得の戰ひに敗撲を喫してゐるのが見える。吾人が之について、アテネ、カルタゴを想ひ、地中海上のイタリヤ港市、ハンザ、又和蘭及獨逸のことを想起するであらう、しかし之等の國々は大半はその海上利害の重大なるにも拘らず、その艦隊力を疲弊に委せゐたか、あるひは之の建設が餘りにも遲すきたためであつた。言換れば、目的を自覺し充分の効果を備へた海軍政策に留意しなかつたのである。若し平時に於て海軍政策と國策との間に密接な闘連を保つてゐるならば、國家存亡の有害な結末を芟除するに充分効果がなくてはならないのである。而して大陸的諸國の爲政者が國防政策にあたつて、海軍政策に對しても正當な規範を定むべきであるといふことの理解を高めるのが、昔から彼等にとつて中々困難な業であるらしく、歴史上屡々經驗してゐるのである。

大戰前の獨逸に政治と艦隊創備とが對立してゐたのは衆知のことである、しかし若しチルピッツによつて準備された範圍の艦隊設立を必須のものとして認めてゐたならば、聯合諸國に對して、獨逸に英國との協定をなすべき必要な助力を與へるやうな政策を考へたに相違なかつたのである。今日に於ても英國で、獨逸艦隊の成長は純粋に帝國主義的目標に始つてゐて、必然的根據即ち生存に必須な海上利得を確保するといふことが缺けてゐた、と主張されるとすれば之は絶對に否

定しなければならない。勿論獨逸は英國やフランスの如き大殖民地を所有してゐるわけでもなく、また大海洋に面する基地を得てゐるわけでもなかつた、しかし農業國から工業國に轉化したため、又大陸國に生活餘地を得ることが不可能であつたがために、當然他の列國と同樣な權利を以つてまた同樣な必然性を以つて海上に注意の眼を向けたものである。獨逸はこゝに可能性を得なかつたならば、國民工業の强力な成長も出來ず平溫な生活の中に社會的進步を續けることも出來なかつたのである。大部分海を渡つてくる全獨逸對外通商の價格は海軍立法の開始に際しては、百億マルクを算するにすぎなかつたが、戰爭開始に至るまでには英國輸出入の價格は殆ど二百億に達してゐた。それ故に「自然的」海軍發展の本質的根據、即ち生活に必須な海上利得の摑手といふことは獨逸側にも與へられてゐたのであつた。しかして、この利益擁護のために創られた艦隊は、その建設の質的量的點から、海上の基地を缺いてゐることを度外視しても、この建設について只防衞的性質しか論ぜられない程英國より立遲れてゐたのであつた、即ち實際斯るもの以上に帝國主義的なものであるとは到底見做し難かつたのである。事實英國の爲政者や將軍達も自國の海上力の優力を賴んで、決してこの獨逸艦隊に脅威を覺えるやうなことはなかつたのである。成程吾人は獨逸の海上防衞に對して異議を唱へたが、實際には獨逸海上利得の急速な成長を考へてゐた。勿論、この海上力の二要素の間には强力な相互關係が存在する。乍併海上利得は第一義的であり、艦隊建設は第二義である。すると英國にとつて、獨逸の經濟的强化を妨げることは平和的政策を代表する可能性を與へないわけではないか、即ち獨逸の海外通商の航行安全に反對し、艦隊建設に反對する努力は全て、不自然な前進を行はうとする準備であつたわけである。若し獨逸が英國に對する經濟的競爭者の役を放擲して了つたならば艦隊防衞について獨英協約が易々と出來上つたかも知れなかつた。かうした見解は戰爭の成行が最初から正當なものであつたことを證してゐる。英國の努力は戰爭第一日から、獨逸海軍に對する想定即ち獨逸の海上の競爭的地位を瓦壞せしめることにあつたの

である。英國は之に成功してゐる。しかし戰爭の結果は如何なる手段によつても、獨逸の一九一四年に有してゐた艦隊が必須のものであり當然のものであつたことを反論する餘地を殘してゐなかつた。反對に吾人は、戰時にあつて莫大な經濟的利害關係、特に生活必須の食料品の保護のために獨逸海軍は全く不充分であつたことを言はねばならない。その獨逸海軍が我々に對して獨逸對外政策の結果なりとして定められてゐた如くであるが、聯合諸國に對しては、一九一四年に有してゐた以上の强力な艦隊を以つてしても不充分であつたであらう。吾人は、特にバルト海の制海權を保持し、地中海、白海、その他における潜水艦及驅逐艦の活躍が、ロシヤに對して西歐諸國からの總ゆる海上供給を遮斷し、之によつてロシヤ軍の崩壞を促進させた、この海軍なるものを持つてゐたがためにあれだけの長期抵抗が兎に角可能であつたのである、之は忘れてはならないことだ。獨逸艦隊の設立にとつて生存のための必然性があつたといふことは之によつても證されねばならないのである。「獨逸は航海防衞の範圍を一歩たりとも超えるものではない。適時海上利益助成のために海上防衞をなすべきであることを刑罰を以つて定めてゐる。即ち艦隊設立の開始によつて、數十年以來既に實施され開始されてゐるべきであつたといふその怠慢を切めて補ふことが出來たのであつた。若し之が先に行れてゐたならば、我々の有効な海上防衞力の曲線は徐々上昇を辿り、英國の煽動的論議は即座に解消して了つたであらう。乍併、一八九八年及一九〇〇年の頃には實際的行動に移す資格はなかつたが不利にある隣邦諸國に對し何か奇怪な攻擊的なものと思はしめるやうなことを計畫してゐた、といふ意味でこの怠慢は恕すべきものがあつた、當然來るべきものは現れてその怠慢は補ひを得たのであつた。斯くして先づ第一歩が踏みしめられ、次いで先づ根底がつくられ、今後はも早他國の承認を待つ意志のないことを暗示した結果、英國は次第に全世界的航行防禦を高める有樣になつたのである。獨逸は確たる意志をもつて一度踏み込んだ道を、目的貫徹のためにたゞ邁進するといふ結果になつたのである。」（聯邦海軍省の記錄、平和委員會、「獨逸海

上防禦軍の發生と建設」から。)

戰爭後の大海上力に對する海軍政策の進展は、獨逸艦隊が一般的軍備競爭の本質的動機であり得なかつたことの最善の證明である。何故ならば獨逸の海上武力が喪失せるにも拘らず戰後戰勝諸國の軍備競爭は强化の度を高めてゐるのである。ベルサイユ條約の決定の中にはドイツ艦隊のみならず、ドイツの海上利益をも殲滅せんとする英國海軍政策の極めて殘忍な意志があらはれてゐた。戰時において、ドイツ商船總噸數五五〇〇萬噸が外國港灣の中に、引渡され或ひは捕獲されなかつた事は、徹小な殘部をも引渡さねばならぬ結果となつた。ドイツ植民地の强奪、靑島を除けばドイツはその中に海軍基地を設備してはゐなかつた、またドイツ海底電線の破壞、ボルトガル線のダンチツヒ包含、メーメルの略奪、之等は凡てドイツ海軍價値の意識的制限を意圖してゐる。しかして大戰に於て、ドイツが勝利を博してゐたバルト海の制海權を中絶せしめ將來各國が戰爭に際して自由にバルト海に入航し得るために、ドイツがバルト海の區域にある凡ての要塞を修理せず、又新に之を築かざることが約定されたのであつた。北シレスビツヒのデンマークへの領土分割は同じ目標を持つものである、同時にヘルゴーランドの要塞修理や、其處での港灣設備の徹底的粉碎は北海に於けるドイツの唯一の基地を强奪せるものであつた。更に殘餘の沿岸要塞はそのまゝ殘つてゐたが、しかしそれ等は戰爭終焉そのまゝの狀態を維持をせねばならなかつた。尙ドイツ海上軍の縮減狀態は更に峻烈を極めた。ドイツ艦隊は約千七百萬噸を算してをり、現在の英國乃至米國の艦隊の現狀以上のものであつたが、それ等はドイツから全く消滅した。この艦隊撤廢は、戰鬪艦四十二、戰鬪巡洋艦二十一、小巡洋艦三十四、驅逐艦及水雷艇三百二十五、潛水艦三百八十二、に至つた。更にこれにあきたらず、ドイツが保持してゐた海軍軍備の極めて僅かな殘部をも、峻烈な軍縮規定によつて律せられたのであつた。ドイツ海軍力の確立によつて、戰鬪艦八、巡洋艦八、驅逐艦及び水雷艇三十二、補充建造額の制限にあつては、戰鬪艦一萬噸、巡洋艦

六千噸、驅逐艦及び水雷艇八百噸、總人員一萬五千人の制限、武器及び彈藥の制限にあつては、全く不充分な最小限度を定められたが、之等の制限によつてドイツは列强の線外に一擲されたのであつた。それでこのベルサイユ條約の規定は、現在海軍の上昇的海軍政策を殘忍にも殲滅せんとする典型的例證となつた。

大海上力の海軍政策は平時といへども無爲に終るべきものでないことの例證は、戰後の海軍會議の經過によつて、明らかである。之は既に平時に於て思考される大海軍國相互の戰略的爭鬪に外ならない。即ち今日に於ては戰略的地位及び艦隊基地について思考されるのみではなく、大艦船のそれぞれの艦型の大いさについての決定から、潛水艦のそれに至るまでの兵力狀況に就いて思考してゐる。この會議の實際の傾向はフランス人カストオ將軍の「戰術論」の中に簡潔にのべられてゐる。即ち會議は指導的海軍國の中で、互に協定することによつて無謀な競爭をさけ、防禦を忘れたものを海上から驅逐する爲に利用されるに過ぎないといふのであつた。勿論之に對して、この海軍會議に於て、陸軍及び空軍の對立に關する、ある軍備縮小の意味での協定がなされた事は否定すべくもない。

ワシントン會議は、三大海軍國、即ち英國・米國・日本の間の海軍の激しい緊張の結果、解消するにいたつた、彼等は大戰後初めて設立された海軍力の數を之によつて定めたのであつた。一九二〇年、二一年に於ては、一九一三年、一四年に比して英國は二倍、米國は四倍、日本には五倍の數が算せられた。即ち既に次の如き時期が豫見せられてゐたのである、その時期には合衆國はその海上貿易の進展と同樣に戰爭艦隊の建設に於て、その軍力は一九一四年には英國の三倍に過ぎなかつたが、英國を追求し、屈服せしめるに至らなかつたとしても後者を凌駕してゐた。又ワシントン會議後一九二一年末に於てなされた五大海軍國の會議では、日英同盟が承認されたのみならず、合衆國の英國と北米艦隊の兵力均等要求がみとめられた。英國海軍に就いての絕對的優位性がかくの如く放棄された事の歷史的重大さは、例へ其の事が世界大戰の

海軍に及ぼせる影響を重大視しないものにとつて意外なことであつたとしても、さ程强調出來ることではない。一九一七年の春に英國がその潛水艦に就いて、合衆國に援助を求めた時その逼迫せる狀態から救ひ出すについて、どれ程の負債を負ふべきものか豫想しなかつた。之が爲ドイツ競爭國の敗北戰のために、合衆國と協定したのであつたが、それは又大洋側にある新海軍力に對して、その强化を助け、ドイツによつて地理的狀態及び突出した陸軍の維持の必要のために束縛されてゐた桎梏からまぬがれたのである。しかし日本海軍の進展も亦アメリカのそれと同樣な道をたどつて來た。戰後の經濟的重壓のために列國はその緊張せる海軍建設計畫を續けることが次第に困難になつた。しかし英國にとつてはかうした軍備競爭者の並列した速度の下では海上での且ての支配權を保持することは全く不可能となつた。それでベルサイユ條約及び聯盟規約第八條の軍備縮小協約の履行について、合衆國、英國、佛國、日本、伊國の諸國間に締結された一九二二年のワシントン會議軍縮條約や重要な海軍軍縮問題に關しての最初の自由同盟が現はれるといふ狀況の逼迫下にあつて、無力化した海軍政策と同樣に一歩も前進する所はなく、確定的軍備制限が行はれたに過ぎなかつた。之は本質的には戰鬪艦に許された三萬五千噸の總噸數制限、又最高砲徑四〇・六糎の制限（質的制限）又並びに大型戰艦總噸數を英米それ〴〵に五十二萬噸、日本三十一萬五千噸、佛國及伊國十七萬五千噸の制限（量的制限）が行はれてゐる。これに伴つてこの國々の軍備狀況は大型戰艦によつて條件づけられてゐる限り、形式上五・五・三・一、七五・一、七五の比率が定められ、之は爾後の會議の規範となつてゐた。この外大型戰艦の壽命は二十年に定められ、建艦後十年未滿のものは、この艦種新造を禁ずる旨が決議された。同じ形式によつて、航空母艦の總噸數も定められ、英米にはそれ〴〵十三萬五千噸、日本には八萬一千噸、佛伊には六萬噸となつてゐる。この艦型の艦船個々の噸數は二萬七千噸、その最高砲徑二〇、三糎が定められた。更に巡洋艦の大いさ及び砲徑は一萬噸及び二〇、三糎に限定されてゐる。又その外總噸數は驅逐艦、潛水艦、水

雷艇は共に定められてゐないのであるが、之が條約の唯一の缺陷であり、間もなくこの艦型を廻つて軍備爭ひが新しく卷起される結果となつた。潛水艦の撤廢、少くとも之を貿易船に利用することの禁止を議決せんとした英國の計畫は佛國の否認のため挫折した。之に反していはゆる太平洋四國協定によつてこの海軍の緊張狀態にある區域に、海軍政策的であり、とくに、相互的利害關係にある中立地帶を設ける事に成功したのである。これがため英國及合衆國は香港或ひはフイリツピン更にグワム及アリユーシヤン列島に要塞をきづくことを禁ぜられ、他方には日本はカロリン、ペスカドーレス、ボニン島、琉球及臺灣に要塞を施設することを放棄せねばならなかつた。それ故にワシントン條約によつて合衆國は軍備に疲れ休養を必要としてゐる英國に對しては巧に同一權を確保し、一方では希望を失ひ包圍された日本を、三・五の比率によつて度外視することを得たのであつた。又佛國は伊國と同一の一・七五といふ最低比率に穩かならざるものがあつたが、それがために陸上軍備の制限をまぬがれた事については滿足してゐた。ワシントン條約の重大な不完全さはそれが五大海軍國を含んでゐるに過ぎないといふ點にあつた。それ故に條約の締結を他の海軍國にまで擴張するために、一九二四年國際聯盟は戰鬪艦を有する凡ての國々を、但しドイツを例外として、ローマに於ける會議に招待したのであつた。しかしロシヤは凡ての非隣邦の戰艦をバルト海及黑海から遮斷するものとしても戰鬪艦四十九萬噸以上の必要はないとの議案は、ロシヤの主張によつて中絕した。ワシントン條約の缺陷の結果は戰鬪艦についての軍備爭ひを鎭壓した後に十年を出でずして、之まで制限されてゐなかつた艦型を廻つて爭ひが引起される事になつたのである。條約のかゝる缺陷を除去するために一九二七年アメリカ大統領クーリツヂはジユネーブ會議を開催したが之は三大海軍國が參加したのみにしてフランス、イタリーはそれに加つてゐなかつた。アメリカの根本思想は、戰鬪力について、五・五・三の形式を維持する事にあつたのであるが、日本の憤激的否定の結果中絕せしめられ、同時に英國と合衆國に巡洋艦問題をめぐつて險惡な對立を

引起してしまつた。此の時英國は先づ日本に組し、次いで佛國に組して、ドイツを否定し、陸上軍備について大いに讓歩を示したのである。しかし英佛提携は合衆國及イタリーの强力な反對に直面して失敗に歸したが、又英國首相が一九二九年秋にカノツサー即ちワシントンへの旅行をなせる結果遂に險惡な英米關係も調定する事を得た。しかしてその時彼は一九二七年英國がクーリッヂ會議に於て定めた巡洋艦七十から二十までを犧牲にしたのであつた。

この英米聯合の故に一九三〇年ロンドン海軍會議（Seekonferenz von London）が行はれるに至つた。之の最も重要な事項は、爾來巡洋艦、驅逐艦及潛水艦についても總噸數最高限度が定められ、更に巡洋艦噸數は英國及び合衆國が三十三萬噸、日本には二十一萬、驅逐艦噸數については英國及合衆國には十五萬噸、日本には十萬五千噸、尙潛水艦噸數は三國共通に五萬二千噸、と定められた點であつた。其他、巡洋艦について新しい概念規定がなされた。それに依れば巡洋艦を二階級に分割し、A級は上方に口徑十五・五糎砲を搭載し、B級は下方に夫れを搭載せるものたること定めた。逐逐艦は口徑十三糎以下の砲を含めて千八百五〇噸に、潛水艦は例外なしに全重量二千噸に限定し、更に商船に對する後者の使用を海戰法規定により制約してゐる。戰鬪艦に關して進水年度を向ふ五ケ年に、即ち一九三六年のワシントン條約滿了に至るまでに延長した。但しフランス及イタリーはこの年まで補充建造として七萬噸までを承認されてゐることを例外とする。この協定の弱點はフランスとイタリーとが戰鬪艦に關する規定と潛水艦の最高噸數に關する規定のみに署名したるにすぎなかつたといふ點にあつた。之れ以來、この兩國は一定船艦即ち巡洋艦、逐逐艦、潛水艦についての建艦制限に服從せず、一方で三大海軍國が一九三六年滿了までは一定の條約に服してゐたといふ特種な事態が招來した。フランスが潛水艦の建造を續けてゐた結果は、英國驅逐艦の數を以つてしても、も早之を駁擊するに不充分になつた。この外にも實際に小巡洋艦とも云ふべき所謂艇隊誘導戰艦とも言ふべき新型驅逐艦が現れて、之れによつて英國驅逐艦を益々凌駕するに至つて

ゐる。夫がため此處には既に、ヨーロッパ大陸の海軍國の利害關係は世界三大海軍國のそれと同一公式によつてはも早律し難いことが示されてゐる。それで前者は、後者が戰鬪艦についての優勢さを輕戰鬪艦にまで擴大しやうとするのに對し極力抵抗を續けてきた。乍作、英國は一九三一年ローマ條約によつてフランスとイタリーにも輕戰艦についての噸數を約文を以つて確定しやうと努力した、しかし反つて之がため再びフランスとイタリーとの對立を挑撥し先銳化せしめるに至つた、即ちフランスは英國に反して一九三六年までに八二〇〇〇噸の潜水艦を建造し大海軍國にのみ許さるべき噸數さへも遙に三萬噸を超えてゐる、またイタリーに對しては、獨逸對抗のみに十四萬噸其他殖民地擁護に十萬噸を必要とするといふ理由から全噸數二十三萬の增加を求め、之に伴ふ要求として初めて二力の基準(two powor standard)を大陸國に對しても求めてゐる。しかし獨逸はベルサイユ條約に定められた全量十四萬となつてゐるのである。またこの要求の政治的目標は、海上軍備についてのイタリーとの協定及びそれに伴ふ浮動狀態にある一般軍縮會諸に至るまでのロンドン協約の最後的決定を保持する事にあつた。次いで之は陸、海、空の軍備が非分割的なることとの重壓によつて三大海軍國に對する切札を掌中に持つ事を目的としてゐたのである。フランスのかゝる要求がなかつたならば、五大海軍國相互の海軍軍縮問題は既にその時に解決してゐたであらうし、この條約の負擔をその他列國に委任する事については殆んど支障はなかつたであらう。その他にも、ローマに於ける會議開催に際して、ワシントンで決定された船艦の定量が極端にすぎた事の認識を示してゐた。それ故にフランス及イタリーが一九三六年にいたるまでに、三〇、五糎砲を備へた二萬三千噸の戰艦を建造したといふ非難に對してあらかじめ準備されてゐたのであつた。獨自的海軍軍縮條約は、ジュネーブ以外でのみ施行されてゐたのである。これは五大海軍國のみが加はつてゐた。しかして聯盟は均衡を保ちつゝ進められた會議に於て、大海軍會議の締結が列國凡てに委任せられるやうに、更に熱心に努力したのであつた。いはゆるこの「準備せられた軍縮會議」

の成果は、一九三〇年十二月には、海軍軍備の章に自國の貴重な提案が含まれてゐる所の「從前の會議提案」を否決して了ふことになつたのであつた。先づ噸數を取扱ひ、之が個々の艦型にとつてと同樣に夫々の國にとつても凡て確定しやうとしてゐるのである。之によつて一般の個々の艦型に關する概念規定はワシントン及びロンドン條約に追隨してゐる。故にそれはベルサイユ條約の規定とは本質的に區別される。決定的な船艦統一の代りに、艦船の艦齡及び戰艦の性質をその艦齡を過ぎたものに代行せしむべき規定などを含んだ融通性のある條定が行はれたのである。商船を戰艦に轉化せしめるについても、一定の制限的規準が用意されてゐる。いはゆる「負擔能力」の問題を特殊な條目によつて取扱つてゐるが、之について再び三大海軍國とその他諸國との間に根本的對立が生じてゐる。前者等はワシントン及ロンドン條約によつて實際に施行されてゐた如き艦級による軍備制限手段が最も合理的となしてゐる。之に反して小海軍列國は總噸數による制限を妥當なりとしてゐるが、彼等はこの制限の中で特殊な戰略的運用によつて之の艦隊の設立について、必要な行動の自由を保たうと考へてゐるのである。之等の小海軍列國の代辯者として佛國が參加し、之を伊國が援助してゐるのである。故に會議提案は小海軍に對して定められた總噸數の範圍內で、或艦級から他のそれへと、移行する事の可能性を與ふべき事を用意してゐたのである。しかしてこの事は大海軍の下にあつて、それ等が廣汎な兵力の移動をさけるために、制限を設けるべきであつたのである。之等の準備工作にも拘らず、一九三二年に開催された大軍縮會議は重大な困難に直面した。

之はすでにロンドン條約において、フランス、及イタリーについて三海軍國と同樣な條約條件を認める事は不成功に終つたといふ、その事によるものであつた。それはワシントン及ロンドン條約參加者の範圍が列强の一部に過ぎなかつた事に至つてゐる。而てまた、ジュネーブ會議は列國の中の一部が平和條約の特別規定によつてそれに結びついてゐるところの軍縮制度を列國總てに充當させねばならなかつたのである。勿論この最後の難關は一九三二年十一月十一日の同一權の

形式によつて、除去されるべきものとみなされたのであつた。原則的意義は非軍縮國家のドイツ提案に對する態度にあつた。而してこの提案はベルサイユ條約の海軍軍備規定に依據せるものであり、又之は共通に認められるべきものであつた。この議案は本質的には潜水艦及航空機を廢棄するといふ事にあつたのであるが更に戰艦一萬噸、巡洋艦六千噸に制限してゐたのである。かくしてこの規定の製作者は、ドイツの動議を認めるまでには、程遠く、強いて之れの反對の立場をさへとるにいたつた。大型戰艦問題の進展の中には列國の中に、特に英國によつて個別艦噸數及び攻撃力を低下すべき傾向が認められた。英國委員の提案は大型戰艦については二萬五千噸及び砲徑三〇・五糎乃至は二萬二千噸及び砲徑二八糎に減じたが、後者は勿論巡洋艦についての個別艦噸數を定め即ちA級巡洋艦を廢除するとの前提にもとづくものであつた。之に際して重要なのは少くとも砲徑二十八糎を伴ふ點でベルサイユ條約の條件に近づいてゐるといふ事である。殘念ながらフランスの噸數二萬六千五百、砲徑三十三糎の戰闘巡洋艦「ダンケルク」の建造及びイタリーの三萬五千噸の大戰闘艦二隻建造についての懸命な努力も、中絶の餘議なきにいたつた。潜水艦問題は再び特殊な意義をもつてゐたのである。ドイツは合衆國及びイタリーに於ても支持者を得た、英國基地に到達するための潜水艦を廢棄することを動議された時に、フランスはその會議に於てこの武器に關する最も決定的な提案者の中に加はつてゐたのであつたが、彼自身世界の最も強力な潜水艦艦隊を持つてゐるのである。又潜水艦によつて卑力なるものは最良の防禦手段を見出すのである。故にイタリーも亦同時に戰闘艦を禁じられるとすれば潜水艦の廢棄を定めることを準備せねばならなかつた。次いで日本は潜水艦の廢棄を航空母艦の廢棄に變更したのであつた。かくして各國はある一定の艦型の廢棄に關する規定について、それを別のものの廢棄に移行することに努めたのであつた。フーバーの計畫はある別な前提から出發してゐた。又それによつて、戰闘艦總噸數量を三倍にし、その他階級の戰艦は四倍に定め、潜水艦についてはワシントン條約の五海軍國總てに對

して三萬五千噸づゝを定めてゐる。英國の反對提案即ちサイモンの計畫は別な方法によつて同じ効果をあげんとしたものである。即ち船艦の多様な階級を廢除する事によつて、船艦數を保持する上に三倍乃至四倍が認められてゐたのであるが、之についてはアメリカが同意しやうとしなかつたのである。大軍縮會議が延引するにしたがつて、ワシントン及びロンドン條約による次の海軍軍縮會議開催の時機が接近して來た。しかして、高度な軍備をもつた諸國にとつて、この時機以前に何等かの決定的海軍軍縮を施行しやうとの努力は次第に薄れて行つたやうである。かうした事から、小海軍國がその現狀を會議による規定にまで、設定しなければならなかつたところの、マクドナルドの計畫も最後の矛盾のために中絶を餘儀なくされたのであつた。この間にこの會議について、三大海軍國の豫備會議が又開催されたが、何等効果はなかつた。この時に現はれた困難は、兩アングロサクソン國が、その他の海軍國の上位にあるやうな、五・五・三・一、七五の比率によるものである。之については日本のみならずフランスも亦最早承認しやうとはしなかつた。日本は從來の比率維持は自國の對面及び安全保證のためにも非協定的なものであると主張し、絶對的同等化を要求したのであつた。勿論この軍縮途上にある軍備の同等化は、提案されてゐた。將來凡ての艦隊は輕巡洋艦、驅逐艦及潛水艦からなるべきものならうが、大型戰艦、航空母艦及び適宜な攻擊型態としての重巡洋艦については之を全部廢棄するか、その數及量をはなはだしく制限するかいづれかが行はれるはずであつた。如何にあらうともワシントン會議の三萬五千噸型に對する反對の結果、將來二萬噸以上の大戰艦はなくなるべきものであつた。しかし合衆國はこれまでの決定的比率變更には反對なることを主張してゐる。即ち、この比率は日本の安全保證について充分効力を有してゐる、何故ならば日本は有利な戰略的位置にあることよつて、現存の兵力比率三・五によつても既に攻擊不能の狀態にあるではないか、といふのであつた。日本はこの論議を即座に反駁した、即ちその論議の中では、その比率が先づ合衆國にとつて有効である、と主張してゐるやうなもの

であつた。日本はワシントン協定を脱退する旨を通知した、又フランスは條約の根本的變更について絶好の時期であることを主張したのであつた、之は勿論日本とは別な理由即ち獨逸が海軍國の仲に復歸することを考慮した結果なのである。もとより列國は何れも、船艦の數や量についても、又條約によつて禁ぜられたところの大平洋に於る根據地の建設についても、之迄の條約の限界を超へる意思はなかつた如く思はれるのである。

如何なる國家に對しても海軍の重要なことを說明したとて今更驚くものは在はしない、寧ろ假令今日吾人が海軍は過去のものであるとの見解が公然と行はれてゐるのを見るとしても、その海軍は尙成長の途上にあるのである。この海軍の影響が次第に將來戰の即決さを實際には緩和してゐる、また中立國は最近の戰爭に於ると同樣な海上通商の妨害に對しては、戰爭遂行力によつて將來はも早容赦しなくなるであらう、而て今日では空軍は戰爭遂行の獨自的決定的武器となる。即ち吾人は既に海軍を必要としないのである、何故ならば海軍が擁護すべき海上聯絡は空軍によつて直接に防衞され又攻擊されるからである。との以上の如き見解は當に首肯し難いものであることについて、空中戰Aの三節を參照されたい。

國際法上の抑壓は從來のやうに海軍の威力に對してさして制約を與へなくなつてゐる、特に指導的立場にある中立國通商の商品販賣區を殲滅するについて海軍を用ふることに對する中立國の異議は、今日では過去に於る程强力には實施されなくなつてゐる。海戰遂行はその壓迫手段の一つたる、敵の海上供給の遮斷を任意に放棄するわけにはゆかなくなるであらう。從來の「海洋の自由」の主張者たる合衆國が、この問題に於ては益々英國の立場に接近し、彼自身が戰爭遂行者の立場にあるときは適當に之を處理してきた、といふことは特徵的である。

若し海軍の重要性が將來にも疑ひないものとすれば、果して制約が可能なるか乃至は如何にして可能となるか、といふ問題の檢討は莫大に昇る軍備費のために已むを得ないところであらう。水雷艇及爆擊機の進展によつて、海軍の建設は本

質的に複雜化され且莫大な費用が必要となつてきた。攻擊力は防禦目標に關する支出のために置去りされ、同じ理由から生ずる個別艦の强化によつて、戰艦、巡洋艦、驅逐艦の數は海軍の戰略的且つ戰術的運用目標についての全く不利な狀態に引戾されて了つてゐる。言ひ換へれば、各國に於て海軍に關する支出は益々增大してゐるに反して、それの戰略的價値は少しも高まらず、何等安全性を助長してもゐないのである。現在では戰艦の數は二十世紀初頭の十分の一になつてゐるが、その費用は十倍に增加してゐる。巡洋艦に關しても、海戰遂行の主要な問題である海上連絡の擁護が、この保護するに適當な艦型たる巡洋艦の數の僅少なるがために次第に困難になつてゆくといふ狀態にあるのである。之を補ふには個別艦の縮少によつて初めて可能となる。ワシントン會議に定められた戰鬪艦及A級巡洋艦の大さが極端に走つてゐたが、之は當時の大海軍國の政策が如何なる武力的効果に對しても無條件に安全な大戰鬪艦を建造することにあつた、といふその政策に缺陷があつたのである。巡洋艦の使命は亦、それが不良な時には同樣に小艦を以つて代用せしめ得るところにあるのである。現在では驅逐艦さへもその目的に反して、その大いさ及戰鬪力の點で過去の小巡洋艦に達してゐる。しかし斯くの如き巨大化は如何にしても費用の增大を免れ得なかつたのである。夫故にこの問題の解決は個別艦の大さを低下せしめることの中にある、即ち之によつて海軍國は總て好轉する筈である、何故ならば斯くすることによつて、列國は再びワシントン會議の本義に基づくものとして戰略的使命を滿足した艦隊を持つことになるからである。次いで「安全性」の概念について合理的基點から再吟味しなければならない。國家は總て等しく安全なることを求めてゐる。しかし之は「海軍力の同一性」を意味してはゐない、それは各國が夫々の特殊な條件によつてその海軍を使用するものであることを無視したものであり、戰略的に不可能なことである。完全なる安全といふものはあり得ない。「合理的」安全性は多くは擁護すべき海上利害の程度を以つて基準とする。この問題を解決するについては、一般に戰鬪艦、巡洋艦、驅逐艦、潜水艦、航空機

等によつて作られる戰鬪艦隊に關連を有する、即ちその兵力は地理的條件及戰略的課題の考慮によつて、想定敵國の兵力によつて定るものである、直接に連絡擁護にあたる巡洋艦も同樣であるが、それは又その擁護すべき地域の延長度に依據してゐる。故に、吾人は之迄のワシントン及ロンドン會議を通じての各國海軍力の純然たる數的測量に替つて、戰略的測量を認めなければならないであらう。ワシントン會議の基準は合衆國が維持しやうと考へてゐた戰鬪艦の數、即十五隻といふ數であつた。爾餘の國々の戰鬪艦の數は、これと關聯せしめられた。こゝにおいて、フランスおよびイタリーは、それ〳〵三分の一づつ、すなはち五隻を認められた。この數が、これらの兩國のいづれにとつても、その海上利益を擁護するために充分でないといふことは明である。かゝる事情の下においては、英國側からも提案される如く、恐らくは、ヴェルサイユ條約に從つて認められたドイツの戰艦の數、すなはち八隻は、一般的協定のための新しい出發點となりうるであらう。この點に對して、今日では既に最早や誰も異論を挾む餘地のない前提は、いふまでもなく、かゝる協定において、ドイツは、他の海軍國が持たんと欲してゐる全艦級を同等に認められるといふことである、この場合、ドイツは、軍艦の大いさおよび大砲の口徑の低下に關するあらゆる提議を、自己の利益のために支持するであらう。

だが、たゞバルチツタ海において、ロシアおよびポーランドの艦隊に對し防禦しうるといふことは、ドイツの安全に對する要求に添うものでは決してなく、むしろ北海において、少くともフランス艦隊にも對抗できなければならない。かくて、ドイツの艦隊の勢力は、フランスのそれと大差あるべきではないといふ結論が生ずるであらう。だが、フランスおよびイタリーの戰艦の數に對する要求が、イギリス、アメリカおよび日本に對しても、從來の最高數の增加を伴ふといふことは、除外されてゐない。このことはまた、あらゆる艦級において、從來の艦型の根本的な縮小、かくてまた海軍費低下の一般的努力がその反對に轉化しないようにといふことに味方をしてゐる。要するに、我々は、疑ひもなく、ドイツの參

加によるワシントンおよびロンドン海軍會議の條約の修正に當面してゐるのであつて、この場合、我國の海軍同等權への復歸は、高度の軍備を有する國家に優勢なる制度をして、各國が歡迎する平均制に改めることについて有利なのである。之については、アドルフ・ヒツトラー總統のイニシアテイブによつて積極的に開始され、一九三五年五月二十一日の聯邦會議に於いてなした、獨逸は英國との何等かの海軍競爭に加る意思も必要もなく、又その能力もない、との彼の聲明によつて明確にされてゐる。この聲明により六月十八日に締結された獨英海軍協定は、それ故に獨英兩海軍の間に將來引續き三五・一〇〇の兵力比率を保つことを定めたのである。之は他の諸國の建艦規定に何等影響されるものではない。獨逸は、爾來英國から絕對的質的同等權を與へられることを決定した、即ちこれが英國の贊同を得てゐる限り、獨逸は將來全艦種に對して他の國と同樣戰鬪力を備へることを得たわけである。獨逸がこの協定によつて、一般的軍備平和に對する新しき重大なる貢獻者となつたことは疑ひないところであり、他の列國も亦次第に從前以上に抑制することを希むものである。之に反して若し英國が他の海軍國の軍備によつてその海軍力を增加することを餘儀なくされたときには、この協定に從つて獨逸も亦、英國と規定した兵力比內で適當に追從する權利を有してゐるわけである。故に他の海軍諸國にあつても、英獨兩國によつてなされたやうな方法によつて、終には海軍軍備制限の一般的協定を結ぶことを目標として相互に萬全を期すべきであらう。

マーハン「海上權力史論」(Mahan: ,,Influence of Sea Power upon history")
カステグ「戰略論」(Castex: "Théories stratégiques")
リチモンド「近代世界に於る海上權」(Richmond: ,,Sea Power in the Mordern World")
モキレル「海戰史概要」(Meurer: ,,Seekriegsgeschichte in Umrissen")
グロース「世界大戰から見た海戰の數理」(Groos: ,,Seekriegslehren im Lichte des Weltkrieges")

シユタンゲ「海軍軍縮史概觀」一九三四年第十卷、海軍評論所載（Stange: „Überblick über die Geschichte der Seeabrüstung". Marinerundschau 1934, Heft.10.）

グロース

思想戰

思想戰とは、國家が、世界の輿論の前に自國の名聞を立て、敵國の名聞を貶し、自國の國防力を保持し、强化し、敵國の抵抗意志を減殺せしむるために、思想的武器をもつて行ふところの戰闘をいふ。

思想戰は、時間的には、必らずしも武力戰とは一致しない。思想戰は、しばしば武力戰を惹起せしめ、且つ武器が既に收められた後にも繼續される。

A、戰闘手段

その戰闘手段は、先づ第一に、プロパガンダ（宣傳）である。宣傳は三つの目標を追求する。すなはち、先づ第一に、世界の輿論の前に、敵を不評判ならしめ、敵をして、その戰爭を見込みなきものと思ひ込ましめ、その國民を反政府感情に驅り立て、あらゆる種類の誘惑により講和締結の氣分に傾けることであり、第二に、中立諸國をして、自國の平和愛好精神と正義、敵國の平和破壞と國際法違反およびその諸國民に對する危險について確信せしめ、敵國に對して援助を與へないようにすることであり、そして第三に、自國民をして、その行動の正義に對する信念と勝利に對する確信を强化せしめ、その一切の力を、最高度に緊張せしめる任務を有してゐる。威力と戰勝とは、思想戰における最善の宣傳としての作用をする。武力による勝利は、また高度の說得力を有するものであり、世界の輿論に對する影響力は、說得よりも大である。宣傳は、戰爭を決定することはできないとはいへ策略や詭計を用ひて、戰闘を支援し、完成し、且つ成果を收めしむるための準備をする。戰爭における詭計の使用は、國際法上許されて居り、詭計により敵に對して利益を得んとする企圖

は、排斥すべきものと見るべきではない。それにも拘はらず、文明國民は、虚僞の誹謗によつて敵を貶すことをば愉むであらう。成程、判り切つたような嘘でも、無批判的な大衆には信用されはするが、しかし、嘘はすぐに露顯するものであつて、已れに出でたものは已れに返へることになり勝ちだ。それ故に、永續的な効果を有するよい宣傳は、確實なる事實に基き且つ世界の輿論に信用を確保する如き主張によつてのみ、爲されなければならぬ。それは、各國民の特質および心理狀態を顧慮し、且つ啻に敵の宣傳に對抗するのみならず、その先手を打たなければならない。上記の三大目標の一を追求する宣傳が、他の方向へ向つてゐる宣傳と一致するといふこともまた重要である。その統一的指導のためには、責任ある政治家がこれを司らなければならない。

敵國および中立國における宣傳の實行のためには、第一に、外交官が當らなければならない、外交官は、敵國および中立國の精神に就いて充分深い知識をもち、且つ長く外國に生活してゐる私人との交際をも利用しなければならぬ。軍事上の利益の保護のためには、宣傳指導部は、國防力との共力を必要とする。國際法および戰時法の權威者たちの參加もまた法的立場の有効なる擁護と敵の國際法違反の利用のために、大なる價値を有するであらう。

自國民の間における有効な宣傳のためには、第一前提として、その戰爭が强制されて止むなく爲されたものであると確信せしめることが必要である。この戰爭は、國民の名譽と生活權を擁護するものだといふことを確知せしめることのみが、國民をして献身的に戰鬪に赴かしめるのである。それ故に、政府は、これに基いて、戰爭の前途を照す光明となるべき大なる理想をば、戰爭の目標として、宣傳しなければならない。そこで理想主義の喚起が必要だ。その力は、肉體的な力の何層倍であり、『その高邁なる精神は』――アルント(Arndt)のいつてゐる如く――『神に對する信仰、祖國に對する愛と忠誠および名譽のために生死せんとする誇りに基いてゐるのである。』國民は、何のために戰ひ、苦しみ且つ死ぬべきか

ことをば、國民は、頭にしつかりと叩き込まれてゐなければならない。

宣傳は、無關心なる者、怯懦なる者、反抗的なる者の良心および義務意識への訴へとなる。國民の理解と感激とを獲得するために、政府は、思想家と詩人とを缺くことができない、そして、民族の精神的偉人の遺したものを利用するであらう。

宣傳は、國民がその政治的および軍事的指導者に對して、大なる信頼をもつてゐればゐるほど、それだけ益々永續的な効果をもつ。このことは、國家首腦部が、戰費負擔の公平なる割當てと肉體および財産について特に重い負擔を課せられてゐる國民同志に對して拂ふべき、そしてまた軍事首腦部が、作戰に當つて拂ふべき深慮と實力とに依存してゐる。なるほど宣傳は、自國の力、國防方策の卓越および大なる成功の見透しを正しく示めすものであるが、しかし、餘りにも甚だしい幻滅と信頼の低下を招來し勝ちな誇張に陷らぬよう警戒しなければならぬ。避け難い困難、戰爭の經過および危險に關する事實の説明を避け、或は全くの失敗を秘密にして置くことは、誤りであらう。眞實は、抵抗意志を弱めるものではなくして、むしろ强化するが、これに反し、信頼が裏切られた場合には、勇氣が阻喪せしめられるものである。

『武力行使』が『最も榮譽ある仕事』（グナイゼナウ）にして、且つ國民に對する最高の榮譽ある務めとなつて居り、兵士の氣風が民族性と結合してゐる國民の間に、尙武の風を促進することは、國民の大部分が、國防力の學校を卒業してゐる場合には、特にむづかしいことではない。これに反し、尙ほ訓練されてゐない國民、なかんづく自己擁護と國内經濟の保持ならびに戰爭＝および生活資料供給の全負擔をその肩に轉嫁されてゐる場合には、永續的な宣傳が必要である。彼等

をその任務の偉大さと名譽とのために感奮せしめることは、異常なる成果を擧げるものである。戰場における軍人と本國にある軍人とが一緒になつてのみ、勝利は獲得できるのである。だが、彼等の銃後には、その後援者として支援者として、全國民の犧牲的支援がなければならぬ。銃後の國民が、あらゆる種類の窮乏、愛する家族との別離や死傷を、健氣な心をもつて堪へ忍び、地上の享樂や承け繼いだ特權を放棄し、一方に貧困化する者があるのに他方に富む者があるといふようなことのない場合にのみ、戰場においても、故國においても、身分の高きも賤しきも、富めるも貧しきも、相共に一丸となり、最後まで戰ひ拔くために必要な力を生み出すであらう。宣傳の最も困難なる任務は、正に、祖國の被害、戰死者に對する悲しみ、飢餓、窮乏および疾病によつて打ち碎かれたる心をば、奮起せしむることにあるのだ。この任務には、戰爭の眞劍さを完全に理解し、毅然たる態度を持してゐる凡べての者は、その言行によつて、參加しなければならぬ。この場合、助けになるのは、徒らに熱狂する輕浮な愛國心ではなくして、耐へ忍ぶことの必要に對する理解ある言葉と共に、個々の獻身的な支持と援助こそ行動による模範的な宣傳として效果があるのである。これなくしては、窮乏の打開のために法律によつて可能なあらゆる準備をする政府も、やつて行けないであらう。

しかし、これら一切の努力の成功は、反宣傳の毒素によつて抹殺されうる。白晝の明るさを恐れるこの煽動に對する鬪爭は、國民の服從を求めんとする公然たる運動よりも多大の先見、精神の緊張および實行力を必要とする。

國民大衆を率ゐる强力な政府は、議會、新聞雜誌およびラヂオを通じて爲される分裂的な意見の發表を禁止することができるし、また國境を閉鎖し、外國との間の手紙を監督し、且つ敵の宣傳（エーテル戰）を絶滅するために敵のラヂオを妨害することも出來る。しかし、その强力な政府も、敵の宣傳ビラの投下や、不平家や厭世主義者や知つたかぶり屋や敵の手先の流布する意氣を阻喪させる噂話を根絶させることはできない。それらの發生地を摘發し、毒素の蔓延を制止する

ためには、これを監視する秘密警察の外に、害毒の傳播に對する闘爭に、義務觀念からして參加する一切の正義の士の助力を必要とする。

惡意ある者に對する嚴罰と排擊と共に、正當なる訴へに對する理解ある態度および除去し難い弊害に對する說明もまた必要である。

B、情報の獲得

敵國の强弱ならびにその意圖を知るといふことは、あらゆる戰鬪において勝利を得るために、大なる利益がある。これらの知識をば、敵國の文書、旅行者の報告の研究により、また政治地理學者、エーヂエント、中立國の探究によつて得るといふことは、賢明なる政府なら如何なる政府ともいへども怠らないであらう。間諜の仕事は、既に獲得された知識をヨリ大にするに適してゐる。一見つまらないように思はれる些細な報告も、これを寄せ集めると、しばしば全體の姿を浮び上がらせ、敵の意圖に對する適切な推測を可能ならしめる。――戰爭における情報の獲得は、それが平時から周到に用意されてゐればゐるほど、それだけますます大なる成果を擧げるものである。

これと反對に、敵に對して、情報の獲得を困難ならしめることは、極めて重要なことである。それには、單に訓練された國防官（Abwehrdienst）、敵のスパイに對する嚴罰ならびに賣國奴の死刑のみならず、全國民の訓練と、特に新聞およびラヂオをして、國防に關し何等かの推定をなしうるような報道をせしめないように深甚なる注意を拂はしめることが必要である。

C、敵の誤導

策略と詭計とは、敵をして判斷を誤らしめるためにも用ひられる。作戰に當つて、陽動あるひは誘致攻擊により、敵を

して誤つた處置を採らしめ、最も重要な個所における戰鬪力を弱化せしめ或は兵力を分散せしめる如く、軍事上、政治上および經濟上の誤つた情報によつてもまた、敵が正しい結論に達するのを抑止することができる。もちろん、敵を邪道に陷れる情報は、本當らしさをもつてゐなければならないし、且つまた極めて巧妙に、目立たぬように、適時にいろ〱な方途により、敵國へもたらされねばならない。

D、思想戰の歷史

思想戰の歷史は、古代にまで遡つてゐる。近代の發明は、初めて思想戰に完全なる意義を與へた。

『印刷術の發明以來、各國は、輿論を自國の方に獲得しようとして、あらゆる武力戰爭には、印刷をもつてする戰爭が、並行して行はれた。』(ビユツヘル)。

フリードリヒ大王は、彼のシユレジア戰爭をば、宣言をもつて開始し、最高の外交的策略の證據を示めし、且つ有名な『一スキス人のゲヌア人への手紙』の如き宣傳文書を自ら書きさへした。彼はまた、敵に關する重要な情報を獲得することも、敵を欺いて彼の眞の意圖を知らしめないことも、よく心得てゐた。

ナポレオン一世は、彼の行爲を無暗に讃美し、敵の不正不法を非難した報告書をば、ヨーロツパ中に氾濫させた。フランスの名譽といふ言葉でもつて、彼は、戰爭に倦める國民を鼓舞激勵し、ます〱新しい犧牲に赴かしめた。彼の偉大なる成功は、素晴らしく組織的な間諜網と虚僞の情報の流布とにもまた負ふところが多かつた。メツテルニツヒ公は、彼の出版活動の價値をば、『三萬の兵から成る一軍』に匹敵すると評價した、

自由戰爭においては、同盟國は、戰場へ印刷所を持つて行つて、そこで印刷をした戰場新聞を發行した。

クリミヤ戰爭以後は、イギリス人W・ラツセル(Russel)が『タイムス』に對してなした感激的な通信の結果、從軍通

信事業（Kriegskorrespondentenwesen）が發達した。

しかし、思想戰が完全なる發展を遂げたのは、漸く二十世紀の國際戰爭においてゞあつた。フランスの復讐慾とイギリスの貿易上の嫉妬が、ドイツに對する封鎖政策の原因であつた、そしてそれは、多年の宣傳によつて支援された。平和の確保とか人道的な戰爭遂行とかいふ僞信的なお喋りの背後には、平和的なドイツに對する使嗾が隱されてゐるのである。既にイギリスは、戰時法を利用して敵を陷れることを常に理解してゐた。かくて自己に有利な戰時法をつくる努力が常になされた。巡洋艦戰爭のための避難所としての中立國港灣の遮斷のために、中立國貿易の拘束および封鎖の阻害のために、目的を意識し且つ有効にそれは制定された。イギリスは、たゞ自國の優越的地位の强化にのみ役立つ戰時法の變更を、小國にも利益を均霑せしめ且つイギリスの制海權の弱化を利益とするに違ひない筈のアメリカ合衆國自身をも釣ることを理解してゐる。イギリスは、自身で召集した會議の協定に調印はするが、しかし、放恣な海上戰の排除についての信念で世界を宥め、しかも自身は拘束されないようにするために、批准はしない。そして戰時法の適用においては、その諸規定などには全く介意しない。イギリスは、エヂプトを强奪し、禁止區域における戰爭を開始し、中立國の權益を無視し、ドイツに對して假借するところなき經濟戰を遂行した。その際、イギリスは、既定の戰時禁制品法の變更をば、十一の布告によつて認めようと試み、且つその不正行爲をば、形式主義的な屁理窟、諸規定の大ザツパな解釋と事實の捻造とによつて正當化することを心得てゐた。

聯合軍の中立違反、土民兵戰爭、ロシア軍の蠻行、黑人部隊の使用、防備なきドイツの都市に對する空襲および聯合軍が爲したその他の國際法違反行爲に關する眞實の報道は禁壓されたが、その代り、ドイツは、宣傳戰において、國際法に反する平和破壞および中立違反、なかんづく『不當なる』潜航艇戰のために、猛烈な攻擊を受けた。イギリスおよびフラ

ンスは、宣傳のあらゆる手段を動員した。彼等は、パレスチナにユダヤ帝國を建設せしむるといふ約束によつて、全世界の正教を奉ずるユダヤ人を味方にした『ユダヤ人の世界同盟』(Alliance Jsraélite Universelle)、フリーメーソンの集合所たる『フランス領大東洋』(Grossorient von Frankreich)および全ヨーロッパに亘る宣傳團體『フランス同盟』は、パリからして、あらゆる國家の外交、商業、新聞に影響を與へた。藝術家や著述家や學者連が、人間の精神を欺瞞し、敵を誹謗し、その士氣を阻喪せしめ、中立國を使嗾し、自國民の敵に對する憎惡と抵抗意志を煽るために、召集された。電信電話により、ラヂオにより、驚くべきほど大量の新聞により、煽動文書によつて、惡質の噓言が、全世界に氾濫せしめられた。最も陋劣な戯畫や贋造寫眞が、廣く撒布された。新聞は、下等な誹謗罵辭をもつて埋められた。

イギリス政府は、戰爭勃發の直後に、その使嗾煽動を普及させるため、戰時宣傳事務局を設け、且つその宣傳文書を密輸出するために、オランダ、スウエーデン、ノールウエーおよびスヰスに宣傳中心を置いた。ドイツの賣國奴リヒヤールト・グレリング博士の誹謗文書『我が糾彈』は、全世界に撒布され、同じくドイツの前ロンドン大使リヒノヴスキー侯の祖國を傷ける回想錄もまたそうであつた。

イギリスは、ノースクリフ卿といふ『大衆を感動させることの名人を有してゐたのである。』(ルーデンドルフ)。彼は、『新聞といふ彈丸』の發明者にして且つまた『ドイツ人の勝たんとする意志を覆へすための大臣』(フティール)といはれてゐる。彼は、戰時宣傳の力をば、彼以前の誰よりもよく認識してゐたし、且つ通信機關の完成は、彼の願望を容れたのであつた。彼は、天賦の新聞人として、大衆の心を摑むことを知つてゐたし、その實行能力をも有し、尙ほその目的達成のためには何ものをも顧みない鋼鐵の如き意志を持つてゐた。彼はまた自分自身をドイツの思想界に置いてみることを知つてゐたし、かくて國際的な効果を有し、ドイツを敵視せしめる合言葉を作り出したが、更に彼の殲滅的な宣傳をば、適時

に――一九一八年春の敗北後におけるドイツの疲弊――行ふことをも理解してゐた。アメリカの參戰による聯合軍側の兵士および物資の無限の優越の結果ドイツの努力が見込み無くなつたこと、『戰債を負へるカイゼルの政府との平和條約締結の不可能なこと』、および『永久的な世界平和の楯であり、ドイツ國民に對して好意を寄せてゐる國際聯盟の祝福』――これこそ、ノースクリフが、疲弊せるドイツの眞向に叩き込まうとした指導的觀念であり、そしてそれこそ、十年以上の長きに亘る國際的な民主々義的および社會主義的暴行を豫め準備したものであつたのだ。同時に、全世界においてドイツに對し爲された虚僞の野蠻な宣傳は、假借するところなく繼續され、我が盟邦を背反せしめるように、大きな働きをした。『宣傳戰線の總指揮官』（ラスウエル）であり、世界民主々義の宣傳家であるウイルソンは、單にノースクリフの球を受け止めたゞけでなく、ますます新しい球を彼に送ることをも知つてゐた。彼は、アメリカをして、『海洋の自由』および『非戰鬪員の聖なる特權』のためにといふ口實で、戰爭に參加せしめた。惡評高い彼の平和提議の十四ヶ條は、古今無比なる欺瞞術の歴史的文書である。『ウイルソンは、毒素を製造し、これを熱心な宣傳家たちが動搖せる國民の血液の中に注射し、戰爭によつて打倒されるまで注入し續けた。』――アメリカの政治學の教授H・D・ラスウエルのこの言葉は、宣傳と戰爭指導との關係を明瞭に示してゐる。戰爭遂行のためには、言葉、寫眞および印刷、等々あらゆる手段のこの宣傳が使用された。飛行機や小さな氣球が、戰場およびドイツ本國に、極めて巧妙に作られたビラや文書やドイツの戰場新聞の僞造物を撒布した（聯合國側から出たものは、その總計六百五十五億九千五百萬部に達してゐる）。

　かくの如くして、戰線、ドイツ本國および中立國は使嗾煽動され、遂に軍事的成功と相關連して、ドイツの國民大衆を革命化せしめ、最も屈辱的な『媾和』條件をも承認せしめんとする宣傳目標をば達成したのであつた。イギリス政府は、その宣傳大臣に對し、彼の活動が幾度か敗北だと信ぜられた戰爭をかくの如く惠まれたる終結に導く上に、多大の貢献を

なしたといふことを證明することができた。

人はドイツの政府、および軍の指揮官に對して、戰爭の宣傳的方面においては全く何等爲すところが無かつたといふことをもつて非難を加へた。この非難は、世界大戰における政治指導については當つてゐるが、しかし、軍事指導については當つてゐない。モルトケ元帥は、戰爭勃發に際して、新聞は戰爭遂行に缺くべからざる手段であると述べて居り、ルーデンドルフ將軍は、新聞をば戰爭に勝つための援助者だと見てゐた。O・H・Lの新聞事業、戰時新聞局、高級中央檢閱局、（外務省における軍事局）の創設、新聞、寫眞、映畫およびラヂオの活潑なる活動、戰場演劇および戰場映畫、戰場および兵站新聞の設備は、ドイツの軍司令部が宣傳を重視したことの明瞭なる證據であつて、軍司令部こそは、ルーデンドルフ將軍を通じて、最初一九一七年に、以後繰返へし宣傳省創設の件を帝國政府に請求したのであつた。宣傳におけるドイツの戰爭指導の弱點は、平時において準備が不充分だつたこと――すなはち帝國議會は、一九一四年、戰爭勃發の直前においても尙ほ陸軍省の情報部設置を拒否したのであつた――、それからまた宣傳に關する動員活動が不足してゐたこと、およびドイツの國民性が、敵の爲した如き惡辣な虛僞の宣傳を忌避したこと、にあつた。兎も角、國防協會、海軍協會、全ドイツ聯盟、植民地協會、在外ドイツ人聯盟、全ドイツ學校聯合會、キツクホイゼル同盟、等々の如き私設團體は、國民の精神を奮ひ立たせるために、不斷の努力をしたのであつた。しかし、責任ある戰爭指導者たる政治家が自ら手綱を手にして居らず、統一のために配慮をしてゐない場合に、それが何の役に立つたらう！　政治家は、不用意な演説（一九一四年八月四日の帝國議會演説におけるベルギーに關する『不正』に就いての重大なる言葉！）によつて、敵の宣傳に有効な武器を與へ、戰時法の政治的宣傳のための利用を斷念することによつて、立派な武器を放棄し、かくて世界におけるドイツの名聲を低下させたのであつた。政治家は、左顧右眄することによつて、我が最も有力な武器たる潛航艇を

ば捕獲法の精神において完全に利用することを妨げ、且つ潜航艇に對する抗議が提出されるや否や、讓歩することによつて、恰もドイツが惡かつたかの如き外觀を呈せしめたのであつた。

微力なる國防に關してもまた、國防が帝國議會に依存してゐたといふことは、言譯けにはなりえない。議會制度の國家においてこそ、政治家たる者は、必要なることを顧慮するところなく遂行したのであつた。ドイツ政府には、政治家たるの洞察、意志、實行力および聯合國に對する世界人的理解が缺けてゐたのである。この場合には、たゞ最も峻嚴なる斷壓のみが、單に戰爭のサボターヂュのみならず、弱氣になることをも救ふことができたであらう。敵がドイツに向つて精神的毒素を注入して來る道は、一度も閉鎖されなかつた。もちろん、外國におけるドイツの宣傳は、殆んど効果を擧げえなかつた。海洋は遮斷され、海底電線は妨害され、外國におけるドイツの印刷物はひどく讀み難いものであつたし、無線電信隊はやつと出來たばかりであり、戰爭の場合に、ドイツを理解せる外國人に働きかける準備は等閑に附されてゐた。成程、ドイツの新聞は外國へ送られてはゐたが、しかし、それは主として、フランクフルテル・ツアイツングとかベルリナー・ターゲブラツトとかいふ左翼的國際的傾向のものやユダヤ的なものであつた。だが、戰敗の原因はたゞドイツが戰爭において宣傳を『放棄』したことにのみあるといふことは出來ない。ドイツの武力の弱化が初めて宣傳を有効ならしめるための前提となつたのであるといふノースクリフの告白は、如何に宣傳を重要視しても戰爭において決定的なものは武力的勝利であるといふことを證明するものだ。

敵の宣傳と同樣に、ドイツ本國におけるスパイの活動も大したものであつた。既に一九〇七年から戰爭開始に至るまでに、百四十三名のスパイが斷罪されたが、そのうち八十名は、フランスのためにスパイをやつてゐたのであつた。フランスのスパイ網の指導は、參謀本部の第二部によつて爲されてゐた。それは、エーヂエントをば、ヂュネーヴ、ローザンヌ、

チユーリヒおよびバーゼルに有し、マルメエー、ブレーメンおよびニユールンベルヒにあるその領事館によつて支援されてゐた。ロシアのスパィ組織は、オーストリアに對してはキエフの、ドイツに對してはウイルナの支部を有する情報局をワルソーに持つてゐた。大規模なイギリスの間諜中央部はブリユツセルにあつたが、後にはロツテルダムに置かれた。そのスパイは、中立國の水夫や勞働者としてドイツの港で働いてゐて、發見するのが困難だつた。

前參謀本部情報部長陸軍中佐ニコライは、オランダおよびデンマークは、明かにドイツに對して軍事探偵を放つてゐた！　次の如く書いてゐる――『中立諸國のうち、オランダおよびデンマークは、ドイツ人の性格に固有な正直さのために、スパイ達は、戰場からの情報に關する氣輕なお喋りからしても容易に個々の重要なことを聞けたし、それらの事柄は、寄せ集めると、祕密事項をも嗅ぎ出させた。多辯は如何ともし難かつた。尙ほまた帝國議會の無理解のために、防護力の準備に必要な金が少しも承認されなかつた。『そこで』――とニコライはいつてゐる――『危害が加へられてから初めて、防護に着手する、といふようなことになつたのだ！　その時になつて漸くお役人の怠慢に氣が附いたのだ。ドイツにおいては、軍事的必要は、最初から、官廳の反對に抗して貫徹されたばかりでなく、既存のものさへも官廳の攻擊に對して擁護しなければならなかつたのだ。』

スパイがどれだけ多數入り込んでゐたかといふことは次の數字に示されてゐる――すなはち、三ケ年のうちに、二百七十三名の賣國奴が斷罪され、ドイツの軍服を着たスパイが、ベルリンだけでも一千七百八十五名捕縛され、そのうち三百八十四名は士官級のものであつた。一ケ月に檢閱された九百萬通の郵便物の中には、暗號で書いた手紙が一千七百通もあつた。

參考書目

バシユヴイツ——『大衆の妄想、その作用と支配』(Baschwitz. K.: "Der Massenwahn, seine Wirkung u. Beherrschung")
同——『大衆妄想、ドイツ憎惡の原因と救治』(„Der Massenwahn. Ursache u. Heilung des Deutschenhasses.")。
カール・ビユツヘル——『我々の任務と日刊新聞』(Karl, Bücher: „Unsere Sache und die Tagespresse")。
エリツヒ・ルーデンドルフ——『我が戰爭の思ひ出』(Erich, Ludendorff „Meine Kriegserrinerungen.")。
W・ニコライ——『通信事業。世界大戰における新聞と國民の氣分』(W. Nicolai: „Nachrichtendienst, Presse und Volksstimmung im Weltkrieg.")
同——『祕密權力』(„Geheime Mächte")。
W・D・ラスウエル——『世界大戰における宣傳技術』(W.D. Laswell: „Propagandatechnik im Weltkrieg.")
M・ロンゲ——『戰爭スパイと產業スパイ』(M. Ronge: „Kriegs—und Industriespionage.")。
R・ストラツツ——『世界大戰』(R. Stratz: „Der Weltkrieg")。
H・テインメ——『武器なしの世界大戰』(H. Thimme: „Weltkrieg ohne Waffen")。
K・ヘツセ——『將來戰における個人と大衆』(K. Hesse: „Persönlichkeit und Masse im Zukunftkrieg.")。
K・ユストロウ——『將帥と戰爭技術』(K. Justrow: „Feldherr u. Kriegstechnik")。

フランケ・ベルトカウ

昭和十三年一月五日印刷
昭和十三年一月十日發行

定價　二圓二十錢

現代國防研究叢書（2）

ナチスの戰爭論　上卷

編譯者　國防科學研究會

發行者　東京市神田區錦町三丁目廿番地　服部英俊

印刷者　東京市神田區錦町二丁目五番地　前田宗松

發行所　東京市神田區錦町三丁目二十番地　合資會社　育生社
電話神田（25）〇六七一
振替東京一三〇五七五

株式會社文成社印刷